カバー・加藤直之

SF
726
永劫
上
グレッグ・ベア
SF
へ
2
2
ハヤカワ文庫
定価
560

ハヤカワ文庫 <SF726>

永 劫〔上〕

グレッグ・ベア

酒井昭伸訳

早川書房

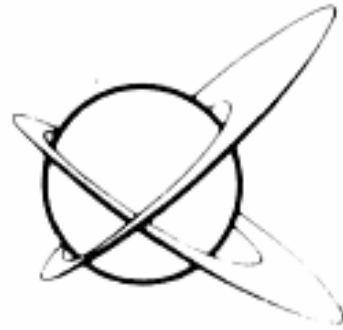
ハヤカワ文庫SF

〈SF726〉

永　劫

〔上〕

グレッグ・ベア

酒井昭伸訳

早川書房

2243

ポールとカレンに
心からの感謝と
愛をこめて

登場人物

パトリシア・ルイーサ・ヴァスケス　アメリカ人の天才物理学者。
ギャリー・ラニアー　〈ストーン〉調査隊民間人総責任者。
ジュディス・ホフマン　ジェット推進研究所の所長／ＩＳＣＣＯＭ委員長。
ローレンス・ハイネマン　〈ストーン〉民間人チーム総責任者。
ラノア・キャロルスン　〈ストーン〉科学者チーム総責任者。物理学者。
オリヴァー・ゲアハルト准将　〈ストーン〉内部守備隊指揮官。
バートラム・D・カークナー大佐　〈ストーン〉外部防衛隊指揮官。
ハインリヒ・ベレンソン大佐　〈ストーン〉ドイツ守備隊指揮官。
ジョーゼフ・リムスカヤ　ロシア系アメリカ人の数学者／物理学者。
カレン・ファーリー　中国人の理論物理学者。
ルパート・タカハシ　日系アメリカ人の物理学者。
パーヴェル・ミルスキー大佐　ソ連軍宇宙強襲機兵大隊長。のちに中将。
ヴィクトル・ガラベジャン少佐　ミルスキーの副官。

セルゲイ・アレクセイヴィッチ・プレトネフ中佐　ソ連軍重輸送船団指揮官。
I・ソスニツキー少将　ソ連軍宇宙強襲機兵の三人の将軍のひとり。
I・S・ポゴージン中佐　同隊員。
アンネンコフスキー少佐　同隊員。
ロドジェンスキー伍長　同隊員。
ヴェルゴルスキー大佐　同政治将校。
ベロジェルスキー少佐　同政治将校。
ヤズィコフ少佐　同政治将校。
プリチーキン　〈ストーン〉のソ連科学者の責任者。

オルミイ　アクシス・シティのエージェント。
シュリー・ラーム・キクラ　アクシス・シティの代理士。
コンラッド・コジェノフスキー　〈道〉の創造者。
イリン・タウル・イングル　無限ヘクサモン・ネクサスの大主教。
ティーズ・ヴァン・ハンファイス　無限ヘクサモン・ネクサスの大統領。
ヒューレイン・ラーム・セイジャ　無限ヘクサモン・ネクサス議会の議長。
オリガンド・トラー　大統領の首席補佐官。
イェイツ　ゲート開放師。
ライ・オイユ　大ゲート開放師。

プレシアント・オイユ上院議員　大ゲート開放師の娘。
ローゼン・ガードナー有体下院議員　コジェノフスキー派新ネイダー正教徒の指導者。
フラント　ネクサスの友好種族。
タルシット　ネクサスの友好種族。
ジャルト　ネクサスに敵対する種族。

永劫

〔上〕

プロローグ　四つのはじまり

1

二〇〇〇年、クリスマス・イブ／ニューヨーク・シティ

「目標は、大きく偏心した地球軌道をとりつつあるわ」とジュディス・ホフマンがいった。「近日点は約一万キロメートル、遠日点は約五十万キロメートル。三公転するたびに月のまわりを一回転する勘定ね」ディスプレイから身を引いて、ギャリー・ラニアーと交替する。しばらくのあいだ、〈ストーン〉はあいかわらず細部のはっきりしない、ベイクド・ポテトのように見えた。

オフィスの外から聞こえてくるパーティーの喧騒が、かろうじて社会的義務を思いださせる。

「こいつはとんでもない偶然の一致にちがいない」と、ラニアーはいった。

「偶然の一致じゃないわ」とホフマン。彼女がラニアーをオフィスに引っぱってきてから、まだほんの二、三分しかたっていない。ラニアーはデスクの端に腰をかけ、画面に見いっていた。長身で、短く刈った濃い黒髪は、肌色の薄いアメリカインディアンを思わせるが、じっさいにインディアンの血が混じっているわけではない。ホフマンから見ていちばんたのもしいのは、その目――おだやかだが何物をも見逃さない、はるか彼方を見ることに慣れた男の目だった。もっとも

ホフマンは、外見で人を判断するような人間ではなかった。
　彼女がラニアーをスカウトしたのは、彼から教えられるところがあったからである。なかにはラニアーを冷血だという者もいるが、ホフマンはそうでないことを知っている。この男は単に、有能で、冷静で、観察力にすぐれているだけなのだ。
　そのうえ、人の悪意にはひどく鈍感なたちなので、管理職としてはかえって非常に優秀な能力を発揮する。どんなにひどい侮辱をされようと、どんなにうるさく不平をいわれようと、どんな陰口をたたかれようと、ほとんど気づかないらしいのだ。少なくとも、表面的な反応から見るかぎり、彼が部下を判断する基準は、有能かどうかという一点につきるらしい。しかも、表面的なごまかしはきかず、嘘の裏にひそむ真実はすぐに見ぬいてしまう。ホフマンは何人かの所員について、ラニアーに対する反応を観察することにより、興味深い事実を発見していた。そして、彼のやりかたを学びとり、自分なりに身につけたのだった。
　ラニアーがホフマンの個人研究室に通されたのは、これがはじめてだ。いま、彼ははじめて、スクリーンの放つ冷たい光のもとで、室内をつぶさに観察していた。メモリー・ブロックの棚、大きななにも載っていないデスク、ありふれた事務用椅子、ディスプレイの下の小型ワードプロセッサー。
　たいていのパーティー愛好者と同じく、ラニアーもホフマンに対し、少しばかり畏怖の念をいだいていた。なにしろ、国会では顧問と呼ばれ、三人の歴代大統領のため、公式にも非公式にも、科学の専門家としての役割をになってきた女性である。彼女の制作になるビデオ番組は、〈小破滅〉から徐々に回復しはじめた一九九〇年代の世界において高い人気を獲得し、科学への興味と

探求心を復活させるうえで大いに貢献したとされている。おまけに、ジェット推進研究所の所長と、このISCCOM――国際宇宙協力委員会（インターナショナル・スペース・コーポレーション・コミッティー）の委員長を兼任。服装はいつでも非のうちどころがないが、がっしりした体格だけはどうしても隠しきれず、そのためスタイル面については、なんとなくひけめを感じているようだ。爪は短く、透明のマニキュアをていねいに塗ってあるが、エレガントとはいいがたい。化粧っけはほとんどなし。ブルネットの髪にも手入れをせず、ほうりっぱなしで、頭のまわりにこまかいカールの光背ができあがっている。

　ラニアーが彼女のサークルにはいってきたのは、ATTの子会社、衛星通信サービス（オービコム）で、広報マネジャーをしていたときのことだった。オービコム入社以前には、海軍で六年を過ごした経験もある。はじめは戦闘機、つぎに高高度給油機のパイロット。〈小破滅〉中は、フロリダ、キューバ、バミューダ上空を通る、あの有名なチャーリー・ベイカー・デルタのルートを飛び、戦争を限定させるうえで重大な役目をはたす、大西洋警戒機に給油を行なっていた。

　そして停戦後、その航空宇宙技術を活かしてもいいとの許可を海軍より得て、当時すでに世界的規模の独占衛星通信網を構築しつつあった、民間のオービコム社に入社したのである。

　異動のきっかけは、カリフォルニアはメンロー・パークにあるオービコムの本社にかかってきた、数本の電話だった。ついで、状況説明書の形で援助要請があり、ラニアーは思いもかけず、急遽、ワシントンのオービコム・ビルへ転勤となった。そこを仕切っているのがホフマンだと知ったのは、あとになってからのことである。ふたりのあいだには、ロマンスなどまったくなかったが――何度その噂を否定したことだろう――たえまない口論と予算のとりあいのつづくワシントンの雰囲気のなかで、ふたりの協力ぶりは、たしかに驚嘆に値した。

「こいつは〈ドレイク〉のとらえた映像じゃないのか」とラニアーがきいた。
「回線は同じだけれど、映像は深宇宙のもの。〈ドレイク〉はペルセウス座のジェムスターに固定されているから」
「〈ストーン〉に向けてくれる気はないのかね」
悪意のこもった笑みを浮かべて、ホフマンはかぶりをふった。「ふんぞりかえったじいさま連中は、なによりスケジュール第一だもの——二十一世紀最大のイベントが見られるといっても、向きを変えてはくれないでしょうよ」
ラニアーは片方の眉をつりあげた。彼の知るかぎり、〈ストーン〉は横長の、ただの小惑星にすぎない。べつに地球に衝突するというわけでもなさそうだ。このままでいけば、たしかに完璧な科学探査機向けの軌道をとりはするだろう。それはそれで興味深いことだが、そんなに大騒ぎするほどのこととも思えない。
「二十一世紀にはいるのは、来月からだぜ」とラニアー。
「わたしたちが忙しくなるのもそれからよ」ホフマンは彼に向きなおり、腕を組んでいった。「ギャリー、あなたといっしょに仕事をするようになってから、もうずいぶんになるわね。あなたのことは信用しているわ」
ラニアーは背筋がぞくりとするのを覚えた。今夜のパーティーで、ホフマンはずっと、考えこんでいるような顔をしていた。自分には関係ないことだと思って、知らん顔をしていたが、どうやらひとごとではなくなってきたらしい。
「〈ストーン〉について、どれだけのことを知ってる?」とホフマン。

ラニアーはちょっと考えてから答えた。「発見したのはDST。いまから八ヵ月前のことだ。全長は長軸方向で三百キロメートル、最大直径が百キロメートル。反射係数は中くらいで、おそらく構成物質は珪酸塩、核はニッケル鉄。発見当初は一種の暈をまとっていたが、のちに消滅した。その点から、一部の科学者は、〈ストーン〉が例外的に巨大な古い彗星の核ではないかと推測している。その密度の低さについてはまちまちな報告がなされていて、火星に月があったとする、むかしのシュクロフスキー説を再燃させている」
「密度の件を聞きこんだのは、どこから？」
「わすれた」
「少し安心したわ。あなたがそれ以上聞いていないなら、ほかに知ってる人はまずいないでしょう。DSTにはリーク源があったけど、それはもう封じておいたし」
「どうしてそう秘密にしたがるんだい？」
「DSTはね、コミュニティーからいっさいデータを流さないよう指示されてるの」コミュニティーというのは、科学コミュニティーのことだ。
「いったいなんでそんなことをしなきゃならない？　ここ数年、政府とコミュニティーとの関係はひどいもんだ。それがますます悪化してしまうじゃないか」
「わかってる。でも、今度ばかりはわたしも同感なの」
　もういちど、背筋を冷たいものが走りぬけた。コミュニティーと深い関係を持つホフマンが、こんなことをいうなんて……。
「すべてがシャットアウトされてるんなら、きみはどうやってそのことを知った？」

「ISCCOMのコネを通じてね。大統領の近辺にスパイを送りこんであるのよ」
「なんてこった」
「だから、お友だちのみなさんが外でパーティーを楽しんでるあいだ、あなたをあてにしていいかどうか、確認しておかなくてはならなかったわけ」
「ジュディス、ぼくはしがない二流の広報マンだぜ」
「ご謙遜。オービコムはあなたのことを社内きってのコーディネーターだと思ってるわ。ワシントンに引っぱってくるのに、三カ月もパーカーとすったもんだしたのよ。知ってる？　あなた、あやうく昇進させられるところだったんだから」
正直いって、ラニアーはこれ以上出世したくなかった。権力の塔の高みに昇れば昇るほど、ほんとうの仕事からは遠ざかっていくような気がしてしかたがないのだ。「そのかわり、ここへ引っぱってきたっていうのかい？」
「みんなはわたしのことを人形使いだと思ってるでしょう。だからね、それらしく見えるように、ちょいと糸を引いて連れてきたのよ。あなたが必要になるかもしれないと思ってね。いずれ大きな戦力になってくれると判断しないかぎり、わたしが新人をスカウトしないことは知ってるはずよ」
ラニアーはうなずいた。ホフマンのサークルの一員になることは、自己の重要性の証明なのだ。いまのいままで、自明の理として、彼は気にもかけないふりをしていたのだが——。
「〈ストーン〉発見と同じころ、超新星が観測されたのを憶えてる？」
もういちど、うなずく。あれはいくつかの雑誌で、ほんの小さくとりあげられただけだった。

当時はひどく忙しくて、そのあつかいの小ささがおかしいとも思わなかったのだが。
「あれは超新星じゃなかったの。明るさは同じくらいだけど、条件がまったくちがう。そもそも、あれを最初に発見したのはＤＳＴで、そのときは太陽系のすぐ外にある赤外線放射物体という観測結果が出ていたわ。それから二日のうちに、炎が見えるようになり、ＤＳＴは各種の原子的遷移をともなう、広い周波帯での電波輻射を観測した。炎の温度は、最初に観測された時点で百万度、ピーク時で十億度以上。そのころには、各観測衛星の核爆発探知機が——新型のＧＰＳスーパー・ヴェラよ——核反応により、熱的に励起されたガンマ線を探知していてね。そのうえ、夜空にはっきり視認できる現象として認められたため、ＤＳＴはそれをごまかすためにでたらめをでっちあげ、宇宙防衛装置による超新星発見のニュースとして流したわけ。でも、ＤＳＴにもまだ、その正体がなんだかわかっていなかったのよ」
「それで？」
「やがて炎が消え、なにもかもが静かになったあと、天のその一画に、ある物体が出現した。〈ストーン〉よ。そのころにはもう、だれもが承知していたわ——それがただの小惑星などではないことを」ビデオの映像がちらつき、チャイムが鳴った。
「さあ、これからよ。統合宇宙コマンドが〈ドレイク〉を徴発して、その向きを変えさせたの」
〈ドレイク〉というのは、軌道上に設置された、現存する最大の光学望遠鏡のことである。月面の裏半球では、さらに巨大な望遠鏡の建設も進んでいるが、現在稼働中のもので〈ドレイク〉に匹敵するものは存在しない。もちろん、国防省のヒモはいっさいなしだ。法的には、統合宇宙コマンドにそれを徴用する権利はなかったが——国家の安全が危険にさらされているとなれば話は

べつだった。

ディスプレイに、〈ストーン〉の拡大映像が現われた。あちこちに表示されているのは、数値や科学的データのグラフだ。さっきまでの映像よりも、ずっとこまかいところまでよくわかる。長軸方向の一端に巨大なクレーターがあり、それより小型のクレーターが全体にちらばっていて、緯度方向に一本、特徴のある溝が走っている。

「ありふれた小惑星のようだが」とラニアーはいったものの、自信のなさが声にも表われていた。

「そのとおりよ」とホフマン。「タイプも判明しているわ。非常に大きなメソシデライトよ。組成も確認ずみ。ところが、けさがたDSTが確認したところ、その質量の約四十パーセントが失われているというじゃない。しかも、中央部を横断する溝は晶洞に酷似しているというの。晶洞というものは、宇宙空間では成立しえないものよ。大統領はすでに、調査隊を組織すべきだというわたしの提言を受けいれたわ。これは選挙前の話だけど、新大統領にもうんといわせることができるでしょう——あいてが凡人だろうとそうでなかろうとね。手はじめに、ほんの予備行動として、二月末までに軌道間輸送機(OTV)のフライトを六回予定してあるの。六回とも、早々とこなしてしまえることは確実。そこで、科学者の調査チームが必要になってくるんだけど、その手配をあなたにお願いしたいのよ。オービコムのほうにはなんとか話をつけられると思うわ」

「しかし、どうしてそう秘密にしたがるんだ?」

「どうしてって、ギャリー、驚いたわね」彼女はラニアーに、暖かい笑顔を向けた。「異星人がやってきたときには、政府はかならず秘密にするものじゃない」

2

二〇〇一年八月／モスクワ近郊、ポドリップキ飛行場

「ミルスキー少佐、作業に身がはいらないようだな」
「宇宙服に穴があいているんです、マヤコフスキー大佐」
「おかどちがいな不満はよせ。あと十五分から二十分は、タンクにとどまっていられるはずだ」
「はい、大佐」
「さあ、気をいれていけよ。その作業は完了してもらわねばならん」
ミルスキーはまばたきをして目から汗をふりはらい、アメリカ式のドッキング・ハッチをはっきり見ようとした。水はすでに宇宙服内の膝のあたりに達していた。臀部のつなぎめから水流がはいりこんでくるのが感じられる。外の水量がどれほどなのか知るすべはない。マヤコフスキーがちゃんと心得ていてくれればいいんだが。
ミルスキーはふたつのセンサーの感知部のあいだに、湾曲した金属棒を打ちこんで楔とするよう指示されていた。的確に打ちこめる態勢をとろうとして、ブーツとグラブのL字型金具を使い、円形のハッチの縁に足首と右手をひっかける。つぎに、左手をかけた。
——（キエフの学校では、教師たちにさんざん叱られたものだ。だがもう、十九世紀の古い考え方といっしょに、連中はいなくなってしまった。連中はムキになって、おれを右利きにしようとしたが、とうとう十代のおわりごろになって、不器用な子供たちも公式に認めるべしという通

達が出たんだっけ）――

ミルスキーは棒をたたきつけた。手首と足首のフックをはずし、体を押しもどす。水は腰まできていた。

「大佐――」

「ハッチが開くまで少し時間がかかる。三分間だ」

ミルスキーは唇をかんだ。ヘルメットのなかで首をめぐらし、チームメイトたちのようすを見ようとした。一列にならんだ五つのハッチには、人影が何人かへばりついている――ふたりの要員とエフレーモワだ。オルロフはどこにいった？

あそこだ――ヘルメットをうしろへ押しやると、オルロフがタンクの水面に引っぱりあげられていくのが見えた。ウェットスーツを着た三人のダイバーに支えられて、影のなかに連れだされていく。ああ水面、愛しの水面、新鮮な空気、水の流れこんでこない場所。もはや水の流入は感じられない。水が裂け目の上まできているのだ。ハッチが開きはじめた。開閉機構のたてる機械音が聞こえる。と、三分の一開いただけで、ハッチの動きがとまった。

「とまっちまいました」呆然として、ミルスキーは報告した。ハッチをあけさえすれば訓練はおわりだとばかり思っていたのに――このハッチは故障しないはずではなかったのか。適切なやりかたでセンサーを――アメリカ式にいうなら――壊せば、ハッチは開くはずだ。アメリカの技術は、信頼性が高いのではないのか？

「棒をぬけ。突き刺す位置がずれていたんだ」

「ずれてはいません！」

「少佐――」
「わかりました。わかりましたよ！」ごついグラブのつけねで、ミルスキーはもういちど棒をたたいた。が、今度は足首と右手の手首を固定するのをわすれていた。反動で、ハッチから体が浮きあがり、命綱をたぐって体を引きもどすのに、貴重な数秒間がむだになった。フックをかける。棒を突き刺す。フックを離す。変化なし。
胸まできた水が冷たい。体の向きを変えたとたん、水が首のつなぎめからヘルメットにはいりこんだ。あやまって少し飲んでしまい、ミルスキーはむせた。ちくしょう、大佐のやつ、おれが溺れかけてるのを知ってて、ほうっておくつもりなんだ！
「指をつっこんでいじってみろ」大佐がアドバイスした。
宇宙服のグラブの指はかなり太く、少し開きかけているハッチのそばの、棒がつっこまれている隙間には、かろうじてはいるかはいらないかだ。ぐっと棒を押しつける。袖のなかは冷たい水でいっぱいになっており、指先が痺れた。もういちど、押す。
もはや宇宙服は、浮力を失っていた。体が沈みかけている。タンクの水深は三十メートル。ダイバーは三人ともオルロフに付き添っている。自力でソビエト製のハッチをなんとか刺激しないかぎり、溺死はまぬがれない。そして、いますぐ浮上しなければ――。
だが、ミルスキーは踏みとどまった。星の世界に出ることは、青年時代から夢だった。いまここでパニックを起こせば、永久に星には手がとどかなくなってしまう。ヘルメットのなかでひと声わめくと、彼は隙間のなかにグラブの先をつっこんだ。指先が宇宙服の内側の繊維と外装にぶつかり、鋭い痛みが腕を走り抜けた。

ハッチがふたたび開きはじめた。
「こじあけ完了」と大佐。
「そのかわりおれは、溺れてます!」ミルスキーが叫ぶ。手首をリングの縁にかけ、口から水を吐きだした。宇宙服の空気はもうヘルメットのネック・リングから上にしかなく、すでに空気パイプに水が流れこんで、ゴボゴボ音をたてている。
タンクの周囲でぱっと探照灯がともった。ハッチは真昼の明るさのなかで宙づりになっていた。腕と脚にだれかの手がかかり、曇ったフェイスプレートの隅から、ほかの三人のコスモナウト訓練生がぼんやりと見えた。三人はハッチの列を蹴り、ミルスキーは祖母の懐かしく暖かい胸に向かって、上へ上へと引きあげられていった。

二百人の新兵たちから離れた、別あつらえのテーブルには、極上の太いソーセージと、カーシャがならんでいた。すっぱくて水っぽくはあるが、ビールは冷たく、たっぷりあったし、オレンジもニンジンも、やわらかいキャベツの内葉もある。デザートには、大きな鉄のボウルにいっぱいはいった、作りたてのバニラ・アイスクリーム。訓練期間中、何カ月も手のとどかなかったごちそうがならび、そばには笑顔を浮かべた将校が同席している。
ディナーがおわると、エフレーモワとミルスキーは、床に半分がた埋められた黒いスチールの水槽のそばを通り、宇宙飛行士訓練センターの構内をぶらぶらと散歩した。エフレーモワはモスクワの出身で、東洋風につりあがった、すてきな目をした女性だった。ミルスキーはキエフ出身で、ドイツ人といっても充分通用する顔だちをしていた。とはいえ、キエフ出身であることには、

それなりの利点もあった。帰るべき街のない男――ロシア人なら、これにはついほだされてしまうのだ。

ふたりはほとんど口をきかなかった。おたがい、愛しあっていることは知っているが、といって関係を発展させられるわけでもなかった。エフレーモワは、宇宙強襲機兵計画に参加する、十四人の女性隊員のひとりである。女であるがゆえに、男よりもずっと忙しい。この計画に配属される以前は、防空軍のパイロットとして、ツポレフ22M爆撃訓練機と、旧式のスホーイ戦闘機の操縦訓練を受けていた。ミルスキーが軍にはいったのは、航空宇宙工学の専門学校を出てからだ。徴兵猶予が適用されたのは、じつに幸運だった。十八で徴兵されるかわりに、新工業化計画の専門家としての資格ができたのだから。

専門学校では、政治学で優秀な成績をおさめ、強いリーダーシップを発揮したため、そこを高く評価されて、入隊まもなく、東ドイツに配属され、戦闘機小隊の政治将校というやっかいな地位につけられたのち、設立されてまだ四年の、宇宙防衛軍に配属替えとなった。それまで、このような組織のことなど聞いたこともなかったが、ミルスキーにとって、これは願ってもない異動だった。彼はつねづね、コスモナウトに憧れていたからである。

エフレーモワの父は、モスクワの高級官僚だった。彼がエフレーモワを宇宙飛行士訓練計画に移したのは、モスクワの悪名高い〝青年愚連隊〟で無軌道なまねをされるより安全だろうと思ったためだ。だが、彼女は非常に有能かつ聡明であることが判明した。彼女の将来は約束されたものとなったが、それは彼女の父がのぞんだ方向とはべつのものになってしまった。

これほど氏素姓のかけはなれたふたりだから、おそらくデートする機会などは持てないだろう。

いわんや、関係を持ったり結婚したりなどは論外だ。
「見て」とエフレーモワがいった。「今夜ははっきり見えるわ」
「なにが？」とミルスキーは聞いたが、彼女のいう意味はすぐにわかった。
「あれよ」エフレーモワは頭を傾け、ミルスキーの頭にもたれかかるようにして、天を指さした。長く蒼い夏の薄暮を通し、満月のすぐ下で、小さな光点が輝いている。
「あそこに到達するのは、わたしたちよりも向こうが先ね」と、悲しげにエフレーモワ。「このごろは、いつでもそう」
「やけにペシミスティックじゃないか」
「彼らはあれをなんと呼んでるのかしら――あそこに着陸したら、あれをなんと名づけるのかしら」
「〈ポテト〉でないことはたしかだな」ミルスキーがいって、くっくっと笑った。
「そうね」エフレーモワもうなずいた。
「いつの日か――」光点をもっとはっきり見ようと、目をすがめてミルスキー。
「いつの日か、なに？」
「やつらの手からとりあげるときがくるさ」
「夢想家ね」
　翌週、飛行場の外縁にある、ふたり用の真空訓練室が内破した。その真空訓練室の片方で、エフレーモワは新型宇宙服のテストをしていた。即死だった。この事故に関しては、政治的反響が懸念されたが、やがて彼女の父も、わからずやではないことが明らかとなった。家族からやくざ

ものが出るよりは、殉教者が出たほうがまだましというものだ。
思いがけなく予定のあいた一日、ミルスキーはユーゴスラヴィアから密輸されたブランディーの瓶を手に、モスクワのとある公園を、ひとりぶらついてすごした。ブランディーの瓶は、封も切らぬままだった。
一年後、訓練はおわり、彼は昇進した。ポドリップキをあとにした彼は、スタリー・タウンで二週間をすごし、いまや宇宙関係者にとって一種の聖域となっている、ユーリ・ガガーリンの部屋を訪れた。その街から、隠密裡にモンゴリアへ飛び、そこからさらに……月へと飛んだ。
その間、彼はつねに、〈ポテト〉を見つめつづけた。いつの日か、おれはあそこへいってやるぞ――ISCOMのソ連人交替要員としてではなく。
それまでは、この国がなくなることはないだろう。

3

二〇〇四年、クリスマス・イブ／カリフォルニア州サンタバーバラ

パトリシア・ルイーサ・ヴァスケスは車のドアをあけ、シートベルトをはずした。早く家にはいって、お祭り騒ぎをはじめたくてしかたがない。この二、三日、ヴァンデンバーグで受けさせられた心理テストで、もうへとへとなのだ。
「ちょっと待った」とポール・ロペスがいった。彼女の腕に手をかけ、ダッシュボードをじっと

見つめる。カーステレオからは、ビバルディの《四季》が流れている。「家族の人たちは知りたがらないだろうと思うけど――」
「いいのよ、気にしなくたって」パトリシアはいって、黒といっても通る、濃いブラウンの髪をひとふさかきあげた。丸顔の下半分はオレンジ色のナトリウム灯に照らされ、淡いオリーブの肌がピンクに見える。彼女はポールに熱いまなざしを向け、まんなかからきちんと髪を分けようとした。そのひたむきな凝視から、ポールはいまにもとびかからんとする猫を連想した。
「みんな、気にいってくれるわ」パトリシアはポールの肩に手をかけ、その頬をなでながら、「いままでみんなに紹介したボーイフレンドのなかで、あなたはアングロ系じゃない最初の人だもの」
「ぼくがいうのは、同室に寝とまりしたことさ」
「知らないことには、傷つきようもないでしょう」
「ちょっと気おくれがしてね。きみはいつも、ご両親が古い人間だっていってるだろう」
「わたしはね、あなたをパパとママに紹介したいの。あなたにうちの家を見てほしいの」
「ぼくだってさ」
「いい、今夜持ってきたニュースを話せば、だれもわたしの処女のことなんか気にしないわよ。もしママがどのくらい真剣なのかと聞いたら、あなたに返事をさせたげる」
　ポールは渋面を作った。「そいつは楽しみだね」
　パトリシアはポールの手を引きよせ、大きな音をたてて手のひらにキスすると、ドアをあけた。
「待った」

「今度はなに?」
「やっぱり……だって、きみを愛してることは知ってるだろう?」
「ポール……」
「だから、その……」
「うちにはいって、家族と会って。きっと落ちつくから。それからね、そう心配しないの」
ふたりは車のドアをロックし、トランクをあけ、なかから食料をとりだした。パトリシアが箱をひとつ持って、玄関に歩きだす。冷たい夜気のなかで、吐く息が白い。玄関前のマットで足をぬぐうと、スクリーン・ドアを大きくあけ、それを肘で押さえたまま、大声で呼んだ。「ママァ! わたしよォ。ポールを連れてきたわ!」
リタ・ヴァスケスは娘から箱を受けとり、キッチン・テーブルの上に置いた。四十五だというのに、スタイルはやや太めという程度だが、服の趣味が悪いのが玉に瑕で、あまりファッション感覚が鋭いとはいえないパトリシアでさえ、彼女が着ている服にはいつも抵抗を覚えるほどだ。
「なあに、これは? ずいぶんていねいに包んであるけど?」両手をさしのべながら、リタがいって、娘を抱きしめた。
「ママったら、どこでこんなポリエステルの服を捜してきたのよ? こんなのって、もう何年も見たことないわよ」
「ガレージにしまいこまれてあったのを見つけたのよ。おまえが生まれる前に、とうさんが買ってくれたの。それで、ポールはどこ?」
「もうふたつ、箱を運んでもらってる」コートを脱ぎ、トウモロコシの皮のなかで湯気をたてて

いるタマーリや、ジュウジュウいっているハム、スイートポテト・パイのにおいなどをかぐ。
「うーん。わが家のにおいね」それを聞いて、リタがにっこり笑った。
リビングルームをのぞくと、アルミニウム製のツリーは、まだ裸のままだった。クリスマス・イブにツリーの飾りつけをするのが、ヴァスケス家の習慣である。薪を模したガスストーブも、暖炉で明々と燃えている。葡萄の実や蔓や葉を描いた、軒蛇腹の下の古い石膏のレリーフや、天井の下の太い木の梁を懐かしそうに見やって、パトリシアはほほえみを浮かべた。彼女はこの家で生まれたのだ。どこにいこうと、どんなに遠くへいこうと、ここが彼女の家なのだ。「ジュリアとロバートは？」
「ロバートはね、ずっとオマハの基地に詰めてるのよ」リタがキッチンから答えた。「ふたりとも、今年は帰れないんですって、三月になるとかいう話よ」
「なあんだ」がっかりして、パトリシア。キッチンにもどってきて、「じゃ、パパは？」
「テレビを見てますよ」
どっさり荷物を抱えて、ポールがキッチンにはいってきた。パトリシアが箱の片方をとりあげ、中身を移しやすいように、冷蔵庫のとなりに置いた。「おおぜいだと思って、たっぷり買いこんできたのに」
リタが箱のなかを調べながら、心配しなくてもいいのよというふうにかぶりをふって、「ちゃんと処分できますよ。おとなりのオーティスさん夫婦もくるし、いとこのエンリケともらいたてのお嫁さんもくるし。で、こちらがポール？」
「そう」

リタはポールを抱きしめた。身長差がはなはだしく、背伸びをしても、その首のうしろでかろうじて手を組みあわせられる程度だ。それから、彼の両手を握りしめ、少し離れて、じっと値踏みした。ポールがにっこり笑う。背が高く、やせぎすで、茶色の髪と白い肌をしたポールは、本物のアングロ系よりもなおアングロっぽく見えるほどだった。それでも、リタは笑顔を浮かべて彼に話しかけた。ポールもずっとほほえんだままだった。

廊下の奥にある書斎で、パトリシアはテレビの前にすわっている父親を見つけた。ヴァスケス家はけっして裕福だったことはなく、いま父親が見ているテレビも、二十五年前の型だった。立体映像を受信するときには、虹色のゴーストが出てこまるといううしろものだ。

「パパ?」薄暗いなかですわっている父親の背後に忍びより、パトリシアはそっと声をかけた。

「パティか!」レイモン・ヴァスケスが椅子の背もたれごしにふりかえり、白いものの混じった口髭を踊らせて、こぼれんばかりの笑みを浮かべた。すわったままなのは、三年前に卒中を起こし、手術をしたが完全には回復できなかったためである。パトリシアは、父親の向かいのソファにすわった。

「きょうね、ポールを連れてきたの。ジュリアがいなくて残念だわ」

「わしもだよ。だが、それが空軍というものさ」レイモンは二十年間を空軍生活に捧げ、一九九六年に退役した。パトリシアを除き、一家の者はどこかで空軍と関係を持っていた。ジュリアがロバートに出会ったのも、六年前、マーチ空軍基地のパーティーでのことだった。

「じつは、みんなにいうことがあるんだ、パパ」

「ほう? なんだい、それは?」このまえ面と向かって話したときと比べて、パパはことばがし

っかりしてるかしら？　そうみたいね。そうあってほしい。
　そこで、キッチンからリタの声がかかった。「パティ！　手伝ってちょうだい、ポールといっしょに箱から食料を出しちゃうから」
「なにを見てるの？」立ち去りがたくて、パトリシアはきいた。
「ニュースさ」
　ニュースキャスターは――本物とほとんど見分けのつかないゴーストといっしょに――ちょうど〈ストーン〉についてのニュースをはじめようとしていた。もういちど母親から声がかかったが、パトリシアはぐずぐずといすわった。
「〈ストーン〉〈派遣される要員が増加の一途をたどるにつれ、市民および科学者グループは、公開討論会の開催を要求しています。ＮＡＴＯ＝ユーロスペース共同の調査がはじまって四年めを迎えるいまも、〈ストーン〉を包むベールはあいかわらず閉ざされたままで――」
　結局、いつものくりかえしで、ニュースでもなんでもなかった。
「――ソ連当局は秘密公開要求がいれられないことについて、とくにいらだちを示しています。いっぽう、遊星協会、Ｌ５協会、恒星間友好協会その他のグループの抗議者は、ホワイトハウス、およびカリフォルニア州サニーヴェイルの、いわゆるブルー・キューブに押しかけ、軍の介入に抗議するとともに、〈ストーン〉内部の主要な発見を公開するよう要求しています」
　いかにもまじめで堅物そうな、保守的な服装をした若者がスクリーンに現われた。ホワイトハウスの前に立った彼は、激しい身ぶりをまじえていった。「あれが異星人の建造物であることはわかっているし、なかに七つの空洞が――巨大な空洞があることもわかってるんです。人間の造

ったものではありません。それぞれの空洞には、街がありますが――いずれも廃墟です――七つめの空洞にだけはありません。そこにはなにか信じられないものが――なにかとほうもないものがあるんです」
「それはなんだと思いますか?」インタヴュアーがたずねる。
抗議者は両手をはねあげて、「わかりませんが、当局はそれを公開するべきです。それがなんであれ、納税者として、われわれにはそれを知る権利がある!」
ニュースキャスターがそれに補足して、NASAと統合宇宙コマンドのスポークスマンは、コメントを避けていると述べた。
パトリシアはため息をつき、レイモンの肩に両手を置くと、そのままもみはじめた。ディナーのあいだ、パトリシアはポールが自分を見まもり、例の話をいつ切りだすのかと待っているのに気づいていたが、彼女はなかなか打ち明けようとしなかった。友人や近所の人のいる前では、どうもいいだしにくい。これは身内だけが知るべきことなのだ。しかし、いいたい気持ちは強いのに、家族の者にさえ、なかなかいう気になれなかった。
パパとママは、ポールを受けいれてくれたようだった。これはプラスになる。いずれふたりは、わたしたちの同棲のことを知るだろう――もしまだ勘づいていなければ、だが。わたしたちはもう、デートをするだけの仲ではない。女子大寮でしか見られないような、でたらめな暮らしを送っているのだ。
あまりにもたくさんの秘密と気まぐれ。きっとふたりは、わたしが思っているほど――期待しているほど?――ショックは受けないだろう。パパとママに、もう一人前の、性体験をもってても

おかしくないおとなだと考えられていると思うと、ちょっぴり気はずかしかった。友だちや顔なじみのほとんどとちがって、わたしは奥手だもの。

そのうちわたしは、ポールと結婚する。それはたしか。でも、わたしたちはまだ若いし、ポールが結婚を申しこむ気になるのは、わたしを養っていけるという確信が持ててからの——あるいは、わたしが彼を養っていけるという確信が持ててからのことだわ。そして、いくらわたしが博士号を持っていても、そうなるまでには何年もかかるはずよ。

もちろん、わたしがジュディス・ホフマンのグループからもらうお金は別扱い。あのお金は、わたしがもどってくるまで、べつの口座に振りこまれるんだから。

皿の上がすっかりきれいになると、全員がツリーのまわりに集まって、飾りつけをはじめた。パトリシアは母親に目くばせして、話があるからと伝え、ふたりでキッチンにはいると、「パパも連れてきて」とたのんだ。リタの手を借りながら、アルミニウムの松葉杖にすがって、レイモンがキッチンにはいってきた。三人は、少なくとも六十年はこの家で使われている、すりへった木のテーブルにすわった。

「じつはね、話しておかなければならないことがあるの」と、パトリシアは切りだした。

「マリアさま（マードレ・デ・ディオス）、いよいよね！」リタが手を打ち鳴らし、満面に笑みをたたえて、大喜びでいった。

「ちがうの、ママ。わたしとポールのことじゃないの」母親の顔が一瞬こわばったが、すぐにもとにもどった。

「それじゃあ、なに？」

「先週、大学に電話がかかってきたの。その内容についてはいっさいいえないけれど、わたしは

二カ月、もしかするとそれ以上、旅に出ることになったのよ。ポールもそのことは知っているけど、いまいった以上のことは彼にも話せないわ」自在ドアを通って、ポールがキッチンにはいってきた。
「その電話をかけてきたのは、何者だね?」レイモンがたずねた。
「ジュディス・ホフマンよ」
「だれ、その人?」とリタ。
「テレビによく出てる、あれか?」とレイモン。
パトリシアはうなずいて、「あの人は大統領の顧問なの。つまり、政府を代表して、わたしにある仕事をしてほしいといってきたのよ。それ以上のことは話せないわ」
「なんで、わざわざあなたを?」リタがたずねる。
「きっと、タイム・マシンでも造ってほしいんでしょうよ」ポールが口をはさんだ。彼にこういわれるたびに、パトリシアはいつも腹をたてたが、今回だけは聞き流した。
ポールに自分の仕事がわかってもらえるとは思わない。理解できる人間はほんのわずかだ――両親や友だちに、わかるはずがない。「ポールにはほかにもいろいろばかげた仮説があるんだけどね。なにがあっても、これ以上はいえないの」
「まるで貝です」とポール。「ここ二、三日、つきあいにくくてこまりますよ」
「あなたが教えろ教えろとしつこいからじゃない!」深々とため息をついて――このところ彼女は、しじゅうため息をついてばかりいる――クリーム色の天井を見あげ、それからパトリシアは、父親に目を転じた。「これはとてもおもしろい仕事なの。これからは、だれもわたしとじかに連

絡できなくなるわ。手紙なら大丈夫だけど。送り先はここよ」テーブルの向こうからメモ帳を引きよせ、APOの住所を書いた。
「あなたにとって、それは大切なことなの?」リタがきいた。
「決まっとる」横からレイモン。
だが、パトリシアにも大切かどうかはわかっていなかった。いまになっても、あれはとても尋常な計画には思えないのだ。
客たちがいとまを告げたあと、彼女はポールを連れて、夜の散歩に出かけた。三十分ほど、外灯の光をたどるようにして、ふたりは黙って歩きつづけた。「わたし、もどってくるわ。わかってるでしょう」とうとう、パトリシアがいった。
「わかってる」
「わたしの家をどうしても見てもらう必要があったの。わたしにとっては、とても大事な場所だから。ママも、パパも、あの家も」
「ああ」
「あの家がなければ、わたし、迷子になっちゃう。わたしはほとんどの時間を考えるということに割いてきたし、わたしが考えることは、たいていの人とはあまりにもかけはなれた……異質のことだもの。もし中心地点が――帰るべき場所がなければ、迷子になっちゃうわ」
「わかるよ」とポール。「とってもすてきな家だ。おとうさんもおかあさんも、好きになった」
パトリシアは立ちどまり、ポールの両手を握りしめ、腕を伸ばして彼の顔を見つめた。ポールも見つめかえす。「よかった」とパトリシア。

「ぼくもきみと家庭を作りたい」とポールがいった。「もうひとつの中心を、ぼくらふたりが帰るべき場所を」

ひどくまじめな顔でそういわれたので、パトリシアはもう少しで抱きつきそうになった。「猫の目だな」にやりと笑って、ポール。

ふたりは引きかえし、玄関のポーチでキスを交わした。それから、リタとレイモンといっしょに、コーヒーとシナモンいりココアを味わった。

「これが最後のピット・インよ」ふたりでカリフォルニア工科大学にもどる準備をしているとき、ふとパトリシアがいった。

4

浴室につづく廊下を、彼女は奥へと歩いていった。壁には、卒業写真といっしょに、《アメリカン・ジャーナル・オブ・フィジックス》の目次が、額にいれて飾られていた。彼女のはじめての論文が載った号のものだ。やがて、やはり額にはいったその号の表紙の前で立ちどまると、じっとそれを見つめた。だしぬけに、心臓が鼓動を停止し、胸のなかにぽっかりと空洞が開き、ほんの一瞬、心地よいまでの落下と喪失の感覚が宿ってから、もとにもどった。

この感じは、前にも経験したことがある。深刻なものではない。それは、自分が進もうとする道を真に見きわめたとき、いつも胸のなかに吹き抜ける、冷たい風だった。

航行暦五年一一七四日／アクシス・シティ、ネイダー

アクシス・シティの大主教、イリン・タウル・イングルは、広々とした観測泡に立って〈道(ウェイ)〉を見わたし、シティを包む青い輝きを通して、ゲートとゲートを結ぶ無数の車線を眺めた。車線全体が、絶えまない交通の流れで、まばゆく光り輝いている。大主教のうしろには、彼の補佐である影体(ゴースト)がふたりと、ヘクサモン議会の有体下院議員がひとり、立っていた。

「きみはオルミイをよく知っているか、セル・フランコ?」大主教が図話(グラフィック・スピーク)を用いて、イメージを投影(ピクト)した。

「いいえ、セル・イングル、存じません」有体下院議員が答える。「しかし、ネクサス(ネクサス)ではなかなか有名とか」

「いまが三度めの人生だ。法の規定より一回多いのは、それだけ能力がずばぬけているからだよ。いまなお肉体を持つ者としては、オルミイは当市のもっとも初期からの市民のひとりだ」大主教は語をついで、「あれは謎に満ちた人物でな。ネクサスにとってあれほど有用でなければ、とっくに市民権を剝奪されて、シティ・メモリーに引退しているところさ」大主教はスプレヤーに、彼専用に調合されたタルシットを噴霧するよう指示した。目の前の空間が、かすかな紫色に輝く牽引フィールドでキューブ状に囲まれ、霧で満たされた。イングルはフィールドにはいると、深く息を吸いこんだ。

影体たちは動かない。彼らのイメージは、声がかかるまで固定されたままなのだ。姿が見えるようにしてあるのは、シティ・メモリーにある彼らのパーソナリティがこの部屋に投影され、話を聞き、状況を見まもっていることを示すためにすぎない。

「彼はたしか、ネイダーに基盤を持っているると思っておりましたが」有体下院議員がいった。
「そのとおりだ」大主教はうなずいて、「だが、権力の座にいるのがだれであろうと、彼はヘクサモンに仕えているし、その忠誠心には疑いの余地がない。きわめて尋常ならぬ男だよ。ことば本来の意味で、タフといえる——なにしろ、大いなる変化、大いなる苦痛の時代を生きぬいてきた人間だからな。ついこのあいだまで、ジャルトの攻勢に備え、防衛準備を監督するために、1.3×9地点へいっていたが、わたしが呼びもどしておいた。帰ってきてくれたほうが、ずっと役にたってくれる。派遣するのは彼に決めた。アクシス・ネイダーも、いくのが彼では反対しようがあるまいし、スパイの役を与えるからといって非難もできまい。大統領には、例の仕事は引き受けた、あのオルミイを派遣すると伝えておいてくれ」
「承知しました」
「これで影体の知りたいことにはすべて答えたな?」
「はい」影体のひとりが答えた。もうひとりはまったく動かない。
「けっこう。では、わたしはセル・オルミイに会う」
影体たちは消え失せ、有体フランコも立ちさった。出ていくとき、フランコは首環にふれ、左の肩の上に、公用の筋であることを示す旗のイメージを出現させた。
大主教が牽引フィールドを切ると、室内にタルシットの煙が広がり、古いワインのようにきつい、混沌としたにおいが充満した。そこへ、オルミイがはいってきた。
夢想の邪魔をするまいと、彼はそっと大主教に近づいた。
「きたまえ、セル・オルミイ」と大主教はいって、観測泡のプラットフォームに向かい、階段を

登ってくるオルミイにふりむいた。「きょうは快適そうだな」
「あなたも、猊下」
「うむ。この前のターンで、家内がすばらしい忘却を味わわせてくれたのだ。第二十年に背負わされた不快な思い出をたくさん取り除いてくれたよ。あれはいい年ではなかった。終わってくれてほっとしている」
「お察しします」
「いつ結婚するつもりだね、オルミイ？」
「わが第二十一年、最初の輪廻を浄めてくれる女性が見つかったなら」
大主教は心からおかしそうに笑った。「アクシス・ネイダーに優秀な補佐がいて、その女性といい仲だと聞いたが……なんといったかな、彼女は？」
「シュリー・ラーム・キクラ」
「おお、そうそう……たしか、議会(オクサス)と先鋭的コジェノフスキー派のあいだをとりもって、摩擦を減らそうと尽力しているのだったな？」
「はい、めったにその話はしませんが」
大主教は深々とため息をつき、難しい顔をして、プラットフォームを見おろした。「ところで、きみにきてもらったわけだが。ひとつ困難な仕事をたのみたい」
「ヘクサモンにつくすのがわたしの仕事です」
「今回は必ずしもそうとはかぎるまい。ただのゲート違法交易の調査ではないからな。どうやら、外部からなにものかが〈冠毛〉に侵入したらしいのだ。もっと驚くべきことには、彼らは人間だ

という。数は多くはないが、組織だっている。彼らがどこからきたのかは、想像しても無意味だ。情報があまりにも曖昧でな。もちろん、きみには調査権と、必要な移動手段の使用権が与えられる。そのほかに必要なものについては、セル・アルゴリが与えてくれるはずだ。いいな?」

オルミイはうなずいた。「承知しました」

「よし」大主教は手すりに身をのりだし、二十キロメートル下の地表を見おろした。光の渦が、数本の道路のまわりに渦巻いている。「ゲートで渋滞がはじまったらしい。まったく、頭の痛い季節だ。全員のための月だからな」オルミイに向きなおって、「幸運を祈る。あるいは、エルドふうにいうならば、星と運命と精霊がきみに心やさしくあるように」

「ありがとうございます」

プラットフォームからおりて部屋をあとにすると、オルミイはエレベーターに乗り、中央シティのほっそりとした塔に登った。長期にわたる留守に備え、執務の手配をするためだ。

特権的な任務ではある。〈冠毛〉への帰還は、ネクサスの存亡にかかわることでないかぎり、いかなる目的であっても禁じられているのだ。オルミイ自身、もう四百年以上も〈冠毛〉にいったことはない。

その反面、当然ながら、これはひどく危険な仕事になるかもしれなかった——なにより、情報がこうも少なくては、難しい。フラントをひとり連れていけば、任務の成功率も高まるだろう。もし〈冠毛〉に人間がいるとしたら、そしてそれがシティの住人でないとしたら——どうやらそうらしいが——その者たちはどこからやってきたのか?

あまりにも乏しい情報に、彼は不安を覚えた。

二〇〇五年四月

1

旅がはじまってしばらく、パトリシア・ヴァスケスは、大型シャトルの乗客用キャビンのなかで、モニターを通し、雲に覆われた地球の輪郭を見つめていた。まもなく、彼女の移乗する番だ。シャトルの貨物室に設置されたカメラは、長いアームが貨物室から巨大な荷物をとりだし、外で待機しているＯＴＶ——軌道間輸送機——のアームに引きわたすところを映しだしている。まるで二匹の蜘蛛が、糸でぐるぐるまきにした蠅を取り引きしているようだ。引きわたしには一時間を要し、そのゆったりとした魅力的な動きは、いま自分の置かれた立場のことをしばし忘れさせてくれた。

順番がやってくると、彼女は移動バブルにはいり、懸命に冷静なふりを装って、十メートル先のＯＴＶのエアロックへと向かった。バブルは透明のプラスティックでできているので、閉所恐怖症は味わわずにすむ——それどころか、その正反対だ。シャトルの外に広がる暗黒の広大さが、

いやというほど感じられたのである。もっとも、星々までは見えない。地球の光と、すぐそばでOTV――アルミニウムの梁で覆われた、タンクと球体とプリズムの結合体――の表面に煌々と輝く照明とで、かき消されてしまっているからだ。
せまいトンネルのなかで、男性三人、女性ふたりからなるOTVのクルーたちに暖かく出迎えられ、バブルから〝孵化〟した彼女は、彼らのシートのすぐうしろのシートに連れられていった。その特等席からは、はっきりと外を臨むことができ、いまは星々のまたたかない光点がよく見えた。
モニター画面によってイメージをやわらげられることなく、じかに見た宇宙は、星をぎっしりと詰めたままからみあう、無数の廻廊のようだった。その廻廊のどれかを歩いていけば、一変したパースペクティブのなかで迷子になってしまいそうだ。
パトリシアはいまも、フロリダで支給された黒のジャンプスーツを着ていた。これに着替えたのはほんの六時間前のことなのに、もう体が汚れているような気がしてしかたがない。髪は頭の上でたばねてあるのに、ばらばらにほつれたような感じがする。自分の不安のにおいまでかぎとれるようだ。
ひとりのクルーが彼女のまわりをとびまわり、最終チェックをしながら、スレートやプロセッサーにデータを打ちこんだ。パトリシアはみなの多彩な色をした宇宙服に目をそそぎ――女は赤と青、男は緑と黒とグレイだ――この人たちの階級はなんだろう、指揮官はだれだろう、とぼんやりと思った。だれかから声なりしぐさなりの指示を受けることなく、すべてを気軽に、かつ効率的に進めていくようすは、まるで民間人のようだ。だが、彼らは民間人ではない。

ＯＴＶは、〈小破滅〉後に定められた規定により、武装こそしていないが、正規の軍用ビークルである。いまパトリシアが乗っているのは、〈ストーン〉の出現以来、地球軌道上で建造された数十機のうちの一機で、統合宇宙軍のＯＤＰ――軌道防衛プラットフォームへの運搬用として使われている従来型とは、かなりタイプがちがっている。図体もずっと大きいし、航続距離も格段に長い。条約によって、ＯＤＰへ貨物を運ぶことも許されていない。

「三分後に発進するわ」なんという名前だったか、パトリシアはもうわすれてしまったが、ＯＴＶの副パイロットの、ブロンドの女性がやってきて、そう教えてくれた。彼女はパトリシアの肩にふれると、にっこりとほほえんで、「これから三十分ほどはてんやわんや。なにか飲むとか、お手洗いにいくとかなら、いまのうちよ」

パトリシアは首をふり、ほほえみかえした。「だいじょうぶ」

「けっこう。バージン？」

パトリシアはまじまじと相手を見つめかえした。

「宇宙ははじめてかって聞いてるのよ」もうひとりの女性が説明した。そっちの名前は憶えている――母親と同じ、リタだ。

「もちろんよ」とパトリシア。「さもなければ、解体処理場に引かれていく牛みたいに、ここでじっとすわってるわけないでしょう？」

ブロンドが笑った。ついで、きれいなグリーンの目をした、ジェイムズだかジャックだかという名の男性パイロットが、肩ごしにふりかえり――その頭の向こうには、操縦窓を通して、オリオン座の剣と三つ星が見えている――「まあ、落ちつくことだよ、パトリシア」といった。たし

かにみんな、ひどく落ちついている。彼らのプロフェッショナルな落ちつきぶりは、こわいほどだ。宇宙の船乗りである彼らは、もともとは地球付近の軌道プラットフォームに配属された要員だが、いまは地球と月と〈ストーン〉間の広大な空間をとびまわっている。いっぽう、パトリシアはといえば、大学院を出たばかりの小娘にすぎず、カリフォルニアから外に出たのは、今回、シャトルに乗るためにケネディ宇宙センターのあるフロリダへやってきたのがはじめてだ。

いまごろパパとママは、サンタバーバラの家にすわって、なにをしているかしら。いったい娘が、いまどこにいると思っているだろう？　ふたりにさよならをいったのは、ほんの一週間前。ポールとの最後のひとときのことを思いだすと、いまでも胸がきゅんとなる。彼からの手紙はとどけてもらえることになっていた。その点は保障されている。APOを経由して送られてくるはずだ。けれど、彼への返信にはなんて書けばいい？　書けることは、ほとんどない。そして、彼女の宇宙滞在期間は、少なくとも二ヵ月の予定なのだ。

パトリシアは、OTVの機器のたてるさまざまなうなりに耳をかたむけた。燃料ポンプの音、正体不明の音、船室のうしろから聞こえてくる大きな泡のはじけるような音。やがて、鋭いシュッという音をたてて、姿勢制御モーターが機体をシャトルから引き離した。

OTVが回転しはじめる。回転軸は、繭状の貨物の中心近くだ。本来なら、六角形をした予備の燃料タンクが固定されているはずの位置である。一回めのエンジン点火の反動にのって、OTVはゆっくりと進みだした。あのブロンドは、まだシートにつかず、膝をまげて後部隔壁にどすんと足をつくと、プロセッサーの処理を完了した。

まもなく、全員がベルトをしめた。

二回めの点火は、十五分後に行なわれた。パトリシアは目を閉じ、シートにもたれかかって、二週間以上も前に棚上げにした問題に、ふたたび取り組みはじめた。計算の最初の段階では、これまでいちども紙など必要としたことがない。目の前を、ドイツ文字の記号の群れが行進していき、それとは別個に、十歳のとき彼女が発明した独特の記数法による記号が行進していく。BGMはなかったが——計算をするとき、彼女はいつも、ビバルディかモーツァルトをかけるのだ——にもかかわらず、彼女はいつしか、抽象思考の海に没入していた。彼女の手が音楽コインのパックと、小さなバッグのなかのスレート・ステレオ・アタッチメントに伸びた。

数分後、パトリシアは目を開いた。全員が部署についており、計器パネルを真剣な目で見つめている。彼女は少しまどろもうとした。つかのま、眠りが訪れる前に、心のなかをふたたび例の大いなる疑問がかすめすぎた。

なぜわたしが、小娘にすぎないこのわたしが、何メートルもあるはずの数学者のリストから選ばれたのだろう？　数学賞をひとつとったくらい、充分な理由にはなりそうにない。わたしよりはるかに経験豊富で地位の高い数学者は、たくさんいるんだもの……。

ホフマンはそのわけを説明してくれようとはしなかった。彼女がいったのは、ただこれだけ——「あなたは〈ストーン〉にいくの。あなたが知る必要のあることはすべてそこにあるわ。その内容は機密扱い。だから、あなたが地球にいるうちは、わたしにも状況説明する権限はないのよ。〈ストーン〉にいけば、研究することが山ほど出てくるでしょう。あなたのような精神の持ち主にとって、それはとても興味深いことのはずよ」

パトリシアが知るかぎり、〈ストーン〉にあるのがなんであれ、数学の専門知識を必要とする

ものではなさそうだったし、彼女としてもそのほうがありがたかった。
自分の才能を疑うわけではない。だが、わざわざ自分を指名してきたところからして、あの知識が必要とされているかもしれないと思うと(彼女の博士論文の題名は、『n次空間理論における非重力歪曲測地線:超常空間の視覚化と確率集合へのアプローチ』だった)、いやでも不安を抱かずにはいられない。
六年前、スタンフォード大のさる数学教授に、こういわれたことがある。――きみの研究を完全に理解できるものがいるとすれば、それは神か宇宙人だけだろうね。
闇のなかで、なかばとろとろとまどろみながら、いつしかOTVのノイズやたえず胃を上に押しつけられる感覚も忘れて、彼女は〈ストーン〉のことを考えた。関連各国は憶測を拒まないかわりに、火に薪をくべることもしない。せいぜい、去年やっと調査への参加を認められたソビエトが、彼らの研究者が見たものを暗にほのめかしているだけだ。
アマチュア天文学者たち――そして、政府のエージェントの訪問を受けていないわずかな民間のプロ天文学者たちの発表では、〈ストーン〉には緯度方向に等間隔を置いて三本の帯が走っており、両極にはそれぞれ、旋盤で削られたような、奇妙な窪みがあるという。
そのニュースに、人々は騒然となった。おそらく、史上最高のビッグ・ニュースだったろう。
そして、信じられないことに、ポールはわずかばかりの奇妙な事実を総合して、きみは〈ストーン〉にいくんだな、といいあてたのだ。「〈ストーン〉にでもいくんじゃなければ、そんなに遠いところを見る目をしてるもんか」と。
神か宇宙人。やがて、彼女はとうとう、眠りに落ちた。

目が覚めると、〈ストーン〉の姿がかいま見えた。OTVがドッキング・コースに乗って、その一端にまわりこんでいるところだったのだ。〈ストーン〉は、これまで新聞や雑誌で何度となく見てきた写真と、まったく同じ形をしていた。豆型で、直径は長さの三分の一ほど、人工的手段によってなめらかに掘りあげられた溝のあいだは、クレーターだらけになっている。いちばん太い部分の直径は九十一キロメートル、全長は二百九十二キロメートル。一見して岩とニッケルと鉄の塊だが、じつはそんなに単純なものではない存在。
「南極軸に接近中」シートにすわったままのけぞるようにふりかえって、ブロンドがいった。
「まだ聞かされていないかもしれないから、簡単に説明しておくわ。もっとも、わたしの知識も、あなたのと五十歩百歩だけどね、ハニー」意味ありげに、同僚を見やって、「まずはじめに、一介のナビゲーターにとっては重要な、いくつかの事実と推測から。〈ストーン〉が長軸を中心に自転していることに注意して。これは驚くにはあたらないわね——だれでも知ってることだから。でも、自転周期は七分前後で——」
「六・八二四分」ジェイムズだかジャックだかが訂正した。
「ということは」と、ブロンドは意に介さず、「外殻表面上で固定されていないものは、かなりの高速でふっとばされてしまうから、側面には着地できない。だから、極点につけなければならないわけよ」
「内部は物質がつまってるの？」パトリシアがたずねた。
「たっぷりとね。この何年かで、おれたちが運んだもの全部を——全員を——捨てずに残してあればだがね」ジェイムズだかジャックだかが答えた。

「〈ストーン〉の反射係数は、多数の珪酸質小惑星のそれと一致するの」とリタ。「明らかに、〈ストーン〉はかつて、小惑星帯の一員だったのよ。さ、南極が見えてきたわ」
巨大な極部クレーターの中心には、窪みがあった。〈ストーン〉自体の大きさから判断すると、かなり小さい。せいぜい深さ一キロ、直径三、四キロ程度の窪みのようだ。
〈ストーン〉の自転はやすやすと見分けがついた。やがてOTVが〈ストーン〉と速度を同調させ、自転軸に沿って接近するにつれ、クレーターはますます大きくなり、ずっとこまかいところまで識別できるようになった。パトリシアは少しも驚くことなく、クレーターの底部が、蜂の巣のように、浅い六角形の区画に区切られているのを見てとった。窪みの中心には直径百メートルほどの円形の黒点がある。穴だ。入口だ。それはどんどん大きくなってきたが、黒々とした影の濃密さはいっこうに変わらない。
OTVは穴のなかにすべりこんだ。
「回転ドックのスピードが同調するまで、五分ほど現在位置を維持しなければならない」ジェイムズだかジャックだかがいった。
「これをみんな、わたしたちがやったの?」平静な声で、パトリシアがきいた。「たったの五年間で?」
「ちがうわよ、ハニー」と、ふたたびブロンドが、「これは最初からここにあったの。〈ストーン〉の内部が中空で、七つの区画に区切られているという話は聞いているでしょう。当局はね、相当数の調査員と何千トンという資材をつぎこんで、神さまにしかわからないことを解明しようと躍起になってるの。それはたしかよ。でも、わたしたちナビゲーターが知っているのはそこま

で。それに、いいかげんな噂は伝えるな、とも通達されているしね。あなたにはそんな噂なんか、無用でしょうけど」
「ドッキング・シグナルの誘導に乗ってから、そろそろ七分になる」とジェイムズだかジャック。
「もうじき、声がはいるぞ」
無線のチャイムが鳴り、「OTV37号」と、冷静なテノールの声がいった。「現在、メインドックを回転中。秒速〇・一メートルで前進されたい」
リタがスイッチをいれると、OTVの探照灯が強烈な光芒を放ち、とてつもなく巨大な灰色の円筒の内部を部分的に照らしだした。前方に四筋の光が現われ、回転ドックのスピードが同調するにつれて、それらがわずかにゆれ動いた。「さあ、いくぞ」OTVがゆっくりと進みだした。
パトリシアはうなずき、両手でしっかりと膝をかかえこんだ。ほとんど感じられないほどのショックがあってから、エンジン音がまわりの壁じゅうに反響するなかで、OTVはドック内に静止した。前方のハッチが開き、宇宙服姿の人間が三人、ケーブルを手にしてふわふわと近づいてくると、宇宙服のスラスターを使ってOTVのまわりをとびまわり、船体をドックに固定した。
「固定完了、OTV37号」二、三分後、無線の声がいった。「〈ストーン〉へようこそ」
「サンクス」とジェイムズだかジャックだか。「船底に大荷物がひとつ。それと、前部船倉に貴重品がはいってる。丁重にあつかってくれ」
「外国産か、国産か?」
「国産品さ。カリフォルニア産の極上品だ」
パトリシアには、それがワインのことか、自分のことか、よくわからなかった。といって、た

ずねるのもためらわれた。
「そいつはいい」
「リークしてもらえるなぞなぞはもうない？　ガイドさん？」ブロンドがたずねた。
「うちの連中、五分で船底の荷物をおろしてほしいといわれてるんだがね」
「だいじょうぶよ」
「じゃ、なぞなぞをひとつ。いいかい。ワタリガラスがライティング・デスクそっくりなのは、なあぜ？」
「このやろ。あとできっちり答えてやるからな」ジェイムズだかジャックだかがいって、無線のスイッチを切り、シートを離れてふわふわ漂ってくると、パトリシアがベルトをはずすのを手伝った。「どうだい、連中、口のかたいこと」彼はパトリシアをエアロックの出入り通路に案内しながら、「あとのめんどうは、慈悲深い奥の連中が見てくれる。だから、約束してくれ。いつの日か――そう遠い話じゃないよな？――」と、ぽんと彼女の肩をたたいて、「――この件がすっかりかたづいて、ソーサリトのバーででもむかし話をする機会があったら……」いかにもばかげたイメージに、本人もにやりと笑い、「この奥でなにが起こっているのか、順序だてて話してくれないか？　余生の語り草にするからさ」
「どうしてわたしが機密を打ち明けられるなんて思うの？」パトリシアがたずねた。
「まあ、あなた、知らないの？」エアロックのなかで、リタが追いついてきて、いった。「あなたには最優先の通行権が与えられてるのよ。あなたはね、ここの共同調査隊を救うために連れられてきたの」

パトリシアが移動バブルによじのぼると、その背後でパイロットたちがエアロックの扉をしめた。エアロックの窓から見たふたりの顔には、奇妙な飢えがにじんでいた。エアロックのハッチが大きく開き、宇宙服を着たふたりの要員が手を伸ばして、OTVから移動バブルをひっぱりあげた。ドックの黒い灰色の表面にぽっかりあいた円形の入口のなかを、彼女は手で運ばれて通過した。

2

自転軸から二十五キロメートル離れた、ここ第一空洞の床では、〈ストーン〉の回転によって、十分の六Gの重力が創りだされている。ギャリー・ラニアーは、そこで日課の運動をこなしていた。低重力のおかげで、地球にいては不可能な芸当も、ここでならなんなくできる。体を前後にふり、息をすっかり吐きだしてとめ、両脚をぴんと伸ばし、平行棒やこまかな白い砂地の窪みのはるか上まで体をふりあげる。体をひねったり向きを変えたりなど、造作もない。脚を思いきり高く空中にふりあげ、半回転して向きを変えることも、やすやすとできた。

運動は、心からほかのすべてのことを——たとえわずか二、三分のあいだでも——しめだしてくれた。そして、大学で体育を教えていたころに、彼を連れもどしてくれた。

〈ストーン〉の第一空洞は、横断面で見ると、ずんぐりした短い円筒形をしている。直径は五十キロメートル、奥行きは三十キロメートル。〈ストーン〉の空洞の六つめまでは、直径のほうが

奥行きよりも大きいので、ちょうど深い谷のように見える。事実、空洞はしばしば、〝谷〟と呼ばれていた。

両の爪先をぴたりとつけ、一秒ほどその姿勢を保って、ラニアーはプラズマチューブを見あげた。いくつもの光のリングが、ほぼ真空に近い、周囲よりわずかに密度の濃いイオンガス層を貫き、自転軸にそって、いっぽうの壁面の穴から反対側の穴へと移動しているのだが、その移動スピードがあまりにも速いために、人の目には、それがひとつながりの中空の軸、またはチューブとしか見えない。ほかの空洞のものもふくめ、このプラズマチューブは、十二世紀間にわたって〈ストーン〉の内部を照らしつづけてきたものだった。

ラニアーは砂場に着地し、両手をスウェットパンツでぬぐった。運動したのはせいぜい一時間——それ以上ということはありえない。スケジュールが許すかぎり、つねに運動しようとしているのだが、なかなかその暇が持てないのだ。筋肉は、地球の重力を恋しがっている。少なくとも、薄い空気にはなんとか慣れたが。

片手で短い黒髪をすきあげ、無表情のまま、ほてりをさますために、ゆっくりと屈伸をする。もうすぐ、管理棟の小さなオフィスにもどらなくてはならない。資材を各種実験に割り振る書類にサインし、五つのせまくるしい研究室を交替で使う科学者チームを監督し、施設と中央プロセッサーの利用割り当てを組む。さらには、メモリー・ブロックと、第二空洞、第三空洞から送られてくる情報の管理……。

そして、アクセス時間が制限されているといって、しじゅう苦情をいってくるソ連チームともやりあわなくてはならない。

ラニアーは目を閉じた。そういったことなら処理できる。以前ホフマンに、あなたは頑固な管理者ねといわれたことがあるが、それを否定する気はない――人々、とりわけ頭の切れる有能な人々を管理することは、彼の得意とするところなのだ。

　だが、オフィスへもどるということは、デスクのいちばん上の引きだしにはいっている、小さな人形のもとへもどるということでもある。彼にとって、その人形は、〈ストーン〉のあらゆる特殊性を象徴するものだった。

　それは、クリスタルのブロックに収められた、おそろしくリアルな男性の立体イメージだった。高さ十二センチのブロックの基部には、きちんとしたまるっこい文字で、こういう名前が彫りこまれていた。コンラッド・コジェノフスキー。

　六百年前、〈ストーン〉の主任技師であった男。

　それがすべてのはじまりだった。あの〝図書館の悪魔〟のおかげで、おれはすっかり消耗してしまいそうだ。あのことを知って以来、日々、彼の人間性は少しずつ削りとられていき、いまでは一種の人間性崩壊寸前にまで追いこまれている。だが、その知識をどうこうするすべは――いまはまだ――ない。あのことを知っているのは、彼のほかには十人しかいないのだ。そういえば、まもなく、その十一人めが到着するんだったな。

　ラニアーはその女性に同情を覚えた。

　トレーニング・ジムは、科学者チームの囲い地（コンパウンド）から五百メートルの位置――コンパウンドと鉄条網の柵の中間地点にあった。柵の向こうへは、グリーンのバッジをつけ、さらに関係者の立ちあいがないかぎり、通行が禁じられている。

谷の床は、乾いているがほこりっぽくはない、やわらかい砂のような地層で覆われていた。ところどころ、ごくまばらに草の茂みができているが、第一空洞の大半は荒涼としている。
第一空洞にはコンパウンドがふたつあり、科学者チームが使用しているそのひとつは、古代ローマの野営テントに似ていた。建物をとりまく、土塁と浅い空堀。土塁の上部には、五メートルごとに、杭にセットされた電子センサーが設置されている。こういった安全策はすべて、空洞にストーン人がおり、危害を加えるかもしれないと考えられていたころに作られたものである。それがいまもそのままになっているのは、習慣の力と――その可能性がすっかりゼロになったわけではないからだった。
ラニアーは堀にかかった頑丈な木の橋をわたり、土塁を登って、杭の一本に設置されているリーダーにカードをふって見せた。
男性用と女性用の宿舎の前を通りすぎ、管理棟にはいると、アン・ブレイクリーのデスクを指先でとんとたたき、手をふって通りすぎる。アンはここ一年、彼の秘書兼総括アシスタントをしてくれている女性だ。彼女は椅子を回転させ、メモ・スレートに手を伸ばした。
「ギャリー――」
彼女を見ようともせず、ラニアーはかぶりをふり、そのまま階段に向かった。「まだ五分ある」
二階に登ると、オフィスのドアの照合ロックにカードをさしこみ、小さなプレートに両方の親指を押しつけて、なかにはいる。ドアは自動的に背後で閉まった。彼はスウェットパンツとシャツをぬぎ、ブルーの科学者チーム用ジャンプスーツに着替えた。

オフィス内はきちんと整えられているのに、それでも乱雑に見えた。ＯＴＶのタンクのバッフル板から作った小さなデスクのそばには、何巻もの書類スプールを収めたクロームの箱がいくつか置いてある。ほんものの本がならんだせまい吊り本棚のとなりには、警報装置つきの頑丈なプラスティック・パネルでシールされた、メモリー・ブロックのラック。壁のそこここには、地図や図表が張ってある。

大きな窓からは、コンパウンド全体が見わたせた。土と砂と茂みで覆われた谷――その不毛な大地のずっと北には、灰色にかすむ巨大な空洞の北極がそびえている。

ラニアーは軽量のディレクターズ・チェアにすわり、窓枠に足をかけた。瞳の黒い、下に隈のできた目を、はるか遠く、一時の高さに、プラズマチューブが北極の奥に消えている地点にすえる。チューブの拡散光にじゃまされて、第一空洞の極から第二空洞へと通じる、直径百メートルの連絡孔を識別することは困難だ。連絡孔は、第一空洞の大気圏から、五キロメートル上の位置にあいていた。

あと二分で、プライベート・タイムはおわる。ラニアーはスレートとプロセッサーを準備し、きょうのスケジュールに目を通し、仕事をはじめる心構えを整えた。

一本の指の爪に、泥がはさまっていた。もう一本の指で、それをほじくりだす。

いくつかの単純なことさえ説明がついたなら――あの人形、フェンスを張るのに使った鉄条網、堀にかける橋を作った木――すべてはひとつに収まるだろうに。

それは〈ストーン〉自身が説明してくれるだろう。

いまのところ、彼の手もとにある説明は、とても正気を保ってはいられないほどとんでもない

ものばかりだ。
　コムラインが鳴った。
「なんだい、アン」
「もうプライベート・タイムはおわりました、ギャリー？」
「ああ」
「侵入孔にはいってくるものがあります。OTVです」
「われらが救世主か？」
「たぶん」
　ホフマンは、この若い女性が重要な鍵となる、といった。ホフマンのことばは、ラニアーがあてにできる数少ないもののひとつだ。あのパーティーの夜以来、この四年間、ラニアーは各国首都のうちと外で行なわれる駆け引きについて、そして国家がいかにして危険を処理するかについて、いやというほど学んできた。ホフマンがいかに傑出した人物であるかもよくわかった。有能にして、尋常ならぬ直感の持ち主だ。
　だが、あのパーティーのとき、彼女はひとつだけ、とんでもない見当ちがいをしていた。〈ストーン〉の出現は、厳密にいうならば、異星人の到来を示すものではなかったのである。
　彼は二台のスレートと一台のプロセッサーをとりあげた。それから、階上におりていくと、アン・ブレイクリーのデスクのそばに立って、きいた。「ほかにはなにか？」
「いろいろです」といって、秘書はメッセージのキューブを手わたした。
　ほとんど垂直な頂上のスロープからは、たえず弱い、冷たいそよ風が吹きおろしている。とき

おり雪がふって、ところどころ、ニッケル＝鉄の壁に吹きだまりができることもある。エレベーターの入口をなす、完璧な半円形アーチは、〈ストーン〉のすべてのトンネルや保守路、連絡孔などと同じように、とてつもなく強力で効率のよい核融合トーチで削りとられたものだった。短い廊下の両側面はつるつるに磨きあげられており、そのうえからストーン人が酸で食刻したのだろう、美しい三角形のウィトマンステッテン模様が描きだされ、さらにその上からトロイ石が縦横にはめこまれている。

エレベーターは円筒形で、直径が十メートル、高さは五メートル、人員と貨物移動の両方に利用されていた。内壁には把手がならび、床には小さな窪みがうがたれている。傾斜したエレベーター孔がたどりつく先は、侵入孔をとりまく収容エリアだ。エレベーターが昇っていくにつれ、その角速度は減少し、〈ストーン〉の自転による遠心力が弱くなっていく。侵入孔の付近に到着するころには、自転によるGはわずか千分の一Gとなる。

侵入孔に到達するまでには、十分かかった。エレベーターはなめらかに減速してとまり、はいったのとは反対側のハッチが勢いよく開いて、収容エリアにいたる与圧されたトンネルが現われた。

地球から持ちこまれた二十ほどの電気トロッコのひとつに乗って、ラニアーは磁力レールぞいに、連絡孔のすぐそばまで登っていった。

トロッコがうなりをあげて停止すると、ガイドロープをたよりに、残りの道を漂っていく。

当初、侵入孔への着陸はかなりやっかいだった。当時は回転ドックに電気がきておらず、照明もほとんどなかったからである。ＯＴＶのパイロットたちは、何度も何度も技量を証明させられ

るはめとなった。ＯＴＶをあとにし、宇宙服を着て侵入孔の壁面に近づいた最初の調査隊員たちは、たいへんな勇気の持ち主だったといえる。壁面は秒速約三分の一メートルの速度で回転していた。いまでは、ドックと収容エリアの施設も改修され、作動可能な状態にもどされているので、移乗プロセスはずっと簡単になっている。

三機のドックは単純で、巨大で、効率がよかった。侵入孔内の三本の円筒は、それぞれが巨大な電気モーターの回転子のように回転し、〈ストーン〉の自転を打ち消している。メインドックの下にあるブースでは、ひとりの技師が全部のドックを制御し、ハッチの開閉をつかさどって、貨物や人員の着陸を助けていた。

収容エリアは技師チームの手で徹底的に手を加えられ、ほぼ無重力状態の作業室や機械工房が設置されていた。かさばる荷物はここで検品され、包みなおされて、エレベーターで谷の底に送りこまれるか、自転軸ぞいにとなりの空洞の連絡孔まで飛ばされるかする。ラニアーがメインドックの収容エリアに顔を出すと、技師チームの長、ローレンス・ハイネマンが、黒髪の、ほっそりした若い女性に話しかけているところだった。ふたりはガイドロープにつかまって、楕円形をした広い光の輪のなかに立っており、巨大な真空ドアが横に開いて、何本もの梁の上に乗ったＯＴＶの繭型貨物が姿を現わすところを見まもっていた。貨物に比べると、ふたりはまるで、おもちゃのようだ。

髪をクルーカットにした、短軀で筋肉質のハイネマンは、フロリダ出身の航空宇宙技術者である。こぼれんばかりの笑みをたたえ、両手をふりまわしながら、彼はその若い女性になにごとかを説明しているらしい。ラニアーが近づいていくと、ハイネマンはこちらを向き、片手で彼を指

し示して、わずかに顎をしゃくってみせた。「パトリシア、あれはギャリー・ラニアーだよ――〈ストーン〉では文民のボスにいちばん近い存在だ。ギャリー、こちらはミス・パトリシア・ルイーサ・ヴァスケス」そういうと、技師はかぶりをふり、熱っぽく、「いやはや！」といって、息を吐きだした。

ラニアーはヴァスケスと握手をかわした。小柄でかわいらしい、きゃしゃな感じの娘だ。丸顔で、絹のような髪は濃い褐色、手首はほそく、脚もほそいが、体格のわりに大きなヒップをしている。全体に、実務的ではなさそうな娘だ。大きくて正直そうな、ラニアーと同じ漆黒の目をしており、鼻は小さくつんとがって、口はぎゅっと引きむすんでいる。不安でたまらないのだろう。

「お会いできて光栄です」とラニアーはいった。それから技師に向かって、「ラリー、いままでなんの話をしてたんだ？」

ハイネマンは横目でラニアーを見やってその質問を受け流し、「パトリシア、いまのところ、おれは一介のブルー・バッジにすぎんが――聞くところによると、あんたはグリーン・バッジをもらえるそうだ。ギャリーのやつ、おれが自転軸にへばりついている者特有の、根も葉もない噂話をしたんじゃないかと心配してるんだよ。もっとも、おれはここの作業レベルのことを話していただけだ、誓ってもいい」右手を掲げ、左手を胸にあてがって、「ギャリー、おれはこのレディの論文を、五冊ほどの数学や物理の専門誌で読んだことがあるがね。これはたいへんな女性だぜ」

しかし、そういうハイネマンの顔には、ラニアーにはすぐにわかる質問が浮かんでいた。この

娘がいったい、ここでなにをするんだ？
「それは聞いてる」といってから、ラニアーは繭を指さした。「ところで、あれはなんだ？」
「やっとこさ、グリーン・バッジへの切符がきたんだよ」とハイネマン。「配送票には、チューブライダーとある。それから、つぎのOTVでは、V／STOLもくるそうだ。あと二、三時間てところか」
「それなら、包みをはいで、どれだけ手を加えなきゃならないか見てもらえるかい」
「そうだな。じゃ、会えてうれしかったよ、パトリシア」ハイネマンは立ちさりかけたが、ふと足をとめ、とまどいぎみの表情で、ゆっくりとふりかえった。「あんたが書いていることは、おれの専門てわけじゃなくて、むしろ趣味で読ませてもらってるんだがね」期待するように眉をあげてみせ、「グリーン・バッジを手にいれたら、あとでいろいろ話してもらえるかね？」
パトリシアはほほえみを浮かべ、うなずいた。すでに繭のまわりには、女王蟻に仕える働き蟻の集団のように、グレイのジャンプスーツを着た男女の群れが集まりつつあった。ハイネマンもそのなかに加わり、指示を与えはじめた。
「ミス・ヴァスケス――」ラニアーがいいかけた。
「パトリシアと呼んでくださったほうがうれしいわ。あまり堅苦しいのは苦手なんです」
「ぼくもだよ、そうできるときにはね。ぼくは科学者チームのコーディネーターをやってるんだ」
「ハイネマンさんからうかがいました。ききたいことはたくさんあるけれど……ラニアーさん、いえ、ギャリー、これは宇宙船なの？　恒星船なの？　この構造物全体が？」片手を大きくふり

動かした拍子に、つかのま、足がデッキから浮いた。
「そのとおり」おなじみの、独特の喜びを感じながら、ラニアーは答えた。ここ何年か、いっこうにとだえない驚きとショックの連続で、〈ストーン〉にはさんざんな目にあわされてきたにもかかわらず、それでも彼は、少なからず〈ストーン〉が気にいっていたのだ。
「そしてこれは、どこからきたんです?」
ラニアーはお手あげのしぐさをして、かぶりをふった。ヴァスケスはふいに、彼がひどく疲れたようすをしていることに気づき、いくぶん興奮が静まるのを覚えた。
「なにはともあれ、まずは休んで、シャワーでも浴びたいところだろう。谷の施設は――谷っていうのは空洞の床のことなんだが――なかなかのものだよ。それがすんだら、カフェテリアにきてもらって、チームの科学者の何人かと会ってもらう。話はそれからだ。いちどにひとつずつ、だよ」
ヴァスケスは鋭い目でラニアーを見つめた。その目つきは、あまり好意的ではなく、むしろ責めるようでさえあった。「なにかまずいことでもあるのかしら?」
ラニアーは眉をあげてちらりと横を見やり、「この場所が人におよぼす影響を、われわれはこう呼んでいる。麻薬の中毒状態(ストーンド)にひっかけて、〝化石化(ストーンド)〟さ。ぼくもすこしばかり〝化石化〟してる、それだけのことだよ」
彼女は収容エリアを見まわし、遠心力の強さをたしかめるように、爪先で軽く地を蹴って、数センチほど浮かびあがった。「なじみぶかいものばかりね」とパトリシア。「異星の構造物はさぞかし神秘的だろうと思っていたけれど、たいていのものは見分けがつくもの。どれも地球上の、

わたしたちが作ったものみたい」
「まあ、ハイネマンと技師チームの連中がずいぶん活躍してくれたからね」とラニアーはいった。
「ただし、先入観は捨てることだよ。さて、ついてきてくれるかい、第一空洞の床におりるから。ロープを持って。それから、もしラリーがまだいっていないなら、いわせてもらうよ。〈ストーン〉へようこそ」

3

パトリシアはエア・マットレスの上に横たわり、合成繊維のシーツがビニールにこすれて音をたてないよう、じっとしていた。汗を流してさっぱりとし、ぬくぬくと暖かく、食事も充分にとったいま——カフェテリアの食事は、申しぶんなくおいしかった——真っ暗な室内でこうしていると、あちこち歩きまわり、驚きの連続に息もつげなかったのが嘘のようだ。疲れているのに眠れない。ついさっきまで見てきたイメージが、心のなかに何度も何度もよみがえる。
幅三十キロメートルにおよぶ空洞の床、灰色と茶色がまだらになった谷の風景、そっけない岩と天然金属の壁、その両極にあいた連絡孔、そのふたつの穴のあいだに走るプラズマチューブの輝き。
谷底のエレベーター孔から出て、最初に見えた光景は、何キロにもわたって広がる、広大だが平らな、ありふれた地形だった。薄雲のかかった砂漠にも似ていた。ところが、自転軸と垂直に、

左右にいくほど、地面の湾曲は顕著になっていた。まるで、とてつもなく巨大なアーチ型の橋の下に立っているようなのだ。その橋をくぐるようにして、頭上に輝く乳色の川が流れていた——プラズマチューブだ。真北では、地面がどこまでもきれいに盛りあがり、円形の極点へとつながっている。見あげれば、魚眼レンズを通して見たようになにもかもが歪むなかで、北極点の一部はプラズマチューブにさえぎられ、その向こうで円環を閉じていた。

連なる空洞は何世紀も前に打ち捨てられていたが、〈ストーン〉はまだ生きていた。

ラニアーはほとんど質問に答えず、まず自分の目で見て、一歩ずつ〈ストーン〉の驚異を体験させていくのが〝ならわし〟なのだといった。「そうでもしなければ」と彼は語をついで、「どうしてぼくたちのいうことが信じられる？」それはたしかに一理あったが、それでも彼女はいらだった。どうしてこうも秘密めかす必要があるの？〈ストーン〉はとてつもなく大きく、驚異に満ちているけれど、でも——いままで見てきたかぎり——彼女の職業的興味を引きそうなものはひとつもない。いくら進んだものであろうと、ストレートな物理学で理解できるものばかりだ。

じっさい、状況は単純だった。ニッケル〟鉄の核を岩がくるみこむ、ばかでかい小惑星をひとつとり——原始惑星のもととなった、生成後数十億年のありふれた塊だ——それを地球をまわる軌道にのせる。なかは空洞で、七つの房にわかれ、各房は自転軸ぞいに連絡孔でつながっており、それ以外にも〝虫食い穴〟がいくつかあいていて、トンネル、通用路、資材集積所、エレベーターなどに使われている。そこへ、補給源とするために、炭素や氷などの揮発物質をふくむべつの小惑星を持ってきて、補給物資を空洞のなかに運びこむ。それを深宇宙への旅に送りだせば、さあごろうじろ！

〈ストーン〉のできあがりだ。

これまでのところ、彼女はいくつかキーになる事実をつかんでいた。各空洞の床同士は、あいだを隔てる岩塊をくりぬいた、いくつものトンネルでつながっている。トンネルの多くは、多用途の鉄道輸送システムの一部だ。第一空洞に鉄道がないのは、かつて〈ストーン〉に人が住んでいたころ、ここが倉庫区画として使われ、訪れる者があまりなかったためだろう。同じ役割は第七空洞もはたしていたらしいが、これはたしかに筋が通る――小惑星の両端は比較的ほそくなっているので、どちらかにダメージがおよんだ場合に備え、両端の空洞に同じ役割を持たせたのだろう。第一空洞の極点と宇宙空間とを隔てる地殻は、場所によっては厚さ二、三キロメートルしかないところもあるのだ。

だが、第七空洞にはどこか特殊なところがあった。ラニアーの口調からもそれは感じられたし、カフェテリアで会った人々の表情からもそれがうかがえた。それに、地球で流布していたあの噂……。

なにかしら、第七空洞には異質の、重要なものがあるのだ。

カフェテリアで紹介された三人もふくめ、これまで〈ストーン〉で出会った科学者は五人だった。まず、ロバート・スミス――長身で痩せぎすの、赤い髪の持ち主で、ふし目がちのためにいつも悲しげに見える、小惑星形成の専門家。華凌――細身でひたむきな、中国チームの上級メンバーで、プラズマ物理学者。彼はたいてい南極側の連絡孔に詰めっぱなしだという。それから、ラノア・キャロルスン――まる顔の五十歳の女性で、髪は白髪まじりのブロンド、いつも愛想がよく、官能的な表情を好んでし、笑いじわと長い睫で囲まれた目の持ち主。

キャロルスンは母親のような気づかいを見せてパトリシアを歓迎してくれた。これがあの、ノーベル賞受賞者のキャロルスン――八年前にジェムスターを発見し、その正体を部分的に解明した天体物理学者の、あのラノア・キャロルスンだと気づくまでには、しばらくかかったほどだった。

ラニアーにそれとなくほのめかされて、キャロルスンはパトリシアに、コンパウンドの女性寮の案内を引き受けた。女性寮は、四角い敷地内の北端にある、ファイバー壁でできた細長い建物だった。各室はせまくて質素だが、独特の巧妙な造りをしていて、居心地がよかった。なにもかも、軽量でコンパクトにできているのだ。建物のラウンジで、キャロルスンはさらにふたりの天文学者と引きあわせてくれた。ともにネヴァダ州エイバル・アレイ大出身の、ジャニス・ポークとベリル・ウォリスだ。ふたりは、高校の技術科の授業で出る金属カスででも作られたかのように、だらしなくカウチに寝そべっていた。ポークはパトリシアの持っている天文学者のイメージよりも、ファッション・モデルのイメージに近かった。ジャンプスーツを着ていてさえ、その美しい黒人はエレガントで近づきがたく、人を拒否するような、というようりうとんじるような顔つきをしていた。ウォリスのほうも充分に魅力的だったが、二十ポンドがところ太りすぎていて、なにかそわそわしている感じがあった。

キャロルスンは中央扉のそばに貼ってある〝交際名簿(ソーシャル・ロスター)〟を指さした。「科学者チームにはね、女性が三十名、男性が六十名いるの。夫婦できている者がふた組、婚約者のいる者四人――」

「五人よ」とパトリシアがつけくわえた。

「それから、既婚者だけれど連れあいが地球にいる者、六名。わたしもそのひとりよ。というこ

とは、独身男性にとっては分が悪いということね。でも、婚約していようとしていまいと、〝交際名簿〟に名前を載せたら、あなたも立派なゲームの対象となるわ。ある古いことわざをこふうにアレンジすると、こんなぐあいになるかしらね。〝オフィスのインク瓶にはペンをつっこむな〟。ただし、オフィスにあるのがインク瓶だけだとしたら、つっこむペンが出てくるのも避けられないけれどね。でも、その特権を濫用しなくちゃならない、ということはないのよ」キャロルスンはポークとウォリスにちらりと目をくれて、「そうでしょ、おふたりさん？」
「天国よ、ここは」スレートから顔をあげ、目を大きく開いて、ポークがあっさりといった。
「大学よりすてき」
「こまったことがあったら」と、キャロルスンはパトリシアに向かって、「わたしにおいいなさい。ここでは格が上のほうですからね——少なくとも、年ではね」
「うまくやりますわ」とパトリシアは答えた。
パトリシアは、つきあいのいいほうではない。めったなことでは男の誘いに乗らないし、乗っても深くつきあおうとはしない。もっとも、もうポールという相手がいるのだから、それはどうでもいいことだった。でも——と彼女は暗闇のなかでにんまりして——ラニアーというのは、ちょっとすてきね。心労でまいっているのが玉に瑕だけど。〈ストーン〉の全貌を目のあたりにすれば、わたしもあんなふうな、苦悩の顔つきになるのかしら。
いつのまに眠りこんでしまったのか、彼女はコムラインのチャイムの音で目を覚ました。ベッドのそばで、チャイムに反応して、穏やかな琥珀色の光がともった。まばたきして、むきだしの、

黄白色の壁を見つめる。自分がどこにいるのかは、すぐに思いだせた。じっさいここは居心地がよく、彼女はちょっぴり興奮を覚えた。ベッドの端から足をおろす。
パトリシアは冒険をしたがらないたちである。ハイキングやキャンプにいったことがないわけではないが、戸外活動というものはあまりする気にならず、せいぜい自転車に乗るくらいのものだ。半年から八ヵ月ごとに、自転車乗りの熱がぶりかえし、毎日二時間ほど、キャンパスのまわりを走りまわることはあった。が、その熱も、何週間かすると冷め、また座業の日々にもどってしまうのがつねだった。
彼女の心のなかには、そして書類の上には、しなければならないことがあまりにも多すぎた。考えるという作業はたいていのところでもできるが、足もとの不安定な小道を登っているときや、えんえんと歩きまわってくたくたに疲れているときだけは、さすがに難しい。
だが、ここでは……。
前夜しばらく、パトリシアは〈ストーン〉のことを考えてすごした。やがて、おなじみの感覚がやってきた。数学の問題をとくときに、いつも湧いてくるのと同じ情熱だ。気分が高揚してきて、脈が速くなり、彼女は少女のように頬を染めた。
ラニアーがノックしたときには、パトリシアはもう服を着て、髪に櫛をいれていた。ぱっちり覚めた目で、彼女はドアをあけた。
ラニアーのうしろには、キャロルスンも立っていた。「朝食は？」とラニアーがたずねた。ラニアーはパトリシアを見て、標準的なジッパーとボタンがついた、科学者のチーム・カラーであるブルーのジャンプスーツを着ていると、この子はずっと実務的に見えるな、と思った。

ふたりについて、パトリシアは表に出た。プラズマチューブの光は、あいかわらず淡く、清廉で、足もとにぼんやりした影しか落とさない。実験的農耕ステーションのとなりにあるカフェテリアでは、一五〇〇時から二四〇〇時の輪番者に、朝食を出しているところだった。パトリシアにとっての〝夜〟は、〝朝〟の六時から〝午後〟二時までに割り当てられていた。ラニアーは、自分の睡眠時間はめちゃくちゃさ、といった。キャロルスンはちょうど、当直をおえたところだった。

カフェテリアの一端にあるビデオ・スクリーンのまわりには、二十人の科学者が群がっていた。ラニアーがそれをのぞきに人垣に割りこんでいった隙に、ふたりの女性は席につき、キャロルスンは夕食を、パトリシアは朝食を注文した。オート・シェフがつぎつぎに料理をさしだした。料理はみんな適切な温度に保たれ、どれをとっても驚くほど美味だった。給仕ユニットのそばのタップには、こういう表示があった。〝純〈ストーン〉産の水――ぜひともおためしください。星からのH_2O!〟水はコクこそなかったが、まずくはなかった。

ラニアーがスクリーンに群がっている人々を指し示し、「フットボールだったよ」と説明した。「ハントとタンが、侵入孔のマイクロ波受信機と外部アレイに手を加えたんだ。どこかの民営会社が、特定契約者相手に信号を変調させてゲームを中継してるんだが、たまたま〈ストーン〉は、その中継衛星と同じ空域にいるんだよ。そこで、信号をもとの形にもどしたわけさ」

「それは違法じゃないの?」トレイの料理をよりわけながら、さりげなくパトリシアがきいた。

「高みにいる者の特権よ」とキャロルスン。「だれも訴えたりはしないもの」

ここでは、しぼりたてのオレンジジュースまで手にはいった。プラズマチューブの光のもとで

も、柑橘類はちゃんと育つのだ。パトリシアのパンケーキにかかったメープル・シロップも、地球産ではなく、〈ストーン〉でとれたものだということだった。ラニアーは、彼女の顔に驚きが広がるのに気づいた。
「〈ストーン〉で育たないものは、地球から最高級のものをとりよせることができるの。どのみち、ここへ持ってくるためには相当の輸送コストがかかるでしょう。だから、高級品をたのんでも、コストの総計に対する原価の割合は、ほんのちょっぴり高くなるだけなのよ。それに、少なくとも潜水艦の乗組員や月面植民者なみの食事内容は保障するようにって、当局を納得させてあるからね。好きなだけお食べなさい——その朝食で、経費はしめて二百ドルよ」
キャロルスンはいかにも人好きのする口調で、食事のあいだじゅうしゃべりつづけ、地球にいる夫の仕事の話をした。なんでも彼は、合衆国科学技術政策局に勤める数学者だということだった。ラニアーはほとんど口をきかなかった。パトリシアもラニアーにならって黙りこくったまま、だれも見ていないときを見はからって、ちらちらと横目でラニアーを観察した。インディアンふうの風貌は彼女を魅了したが、目の下の黒い隈のおかげで、何週間も眠っていないように見えた。
「——はね、とても役にたつのよ」キャロルスンがしゃべっていた。
パトリシアはきょとんとして彼女を見かえした。
「チューブの光よ」とキャロルスンはくりかえしていった。「わたしたちに必要な要素はすべてふくんでいるし、有害なものは全然ないの。あの光の下で何日寝ていても日焼けはしないし、体がビタミンDを作る助けをするのよ」
「まあ」とパトリシア。

ふいに、キャロルスンはため息をついて、「ギャリー。またよ、あなた」

ギャリーはとまどい顔で、「なんのことだい?」

「この娘を見てごらんなさい」キャロルスンは、軽量金属のテーブルを、指先でとんとんとたたいた。コンパウンドの大半の家具と同じように、このテーブルも、OTVのタンク・バッフル板から作ったものだ。「ラニアーには要注意よ。パトリシア。この人は女泣かせなんだから」

パトリシアはぽかんと口をあけて、ふたりの顔を交互に見やった。「なんのこと?」

「わたしはもう勤務からはずれるけど」と、トレイをとりあげながら、キャロルスン。「このことだけは心に刻みこんでおいてちょうだい。科学者チームの女性は、ひとり残らずギャリーに恋心をいだいてるの。でも、この人は地球に義理を通さなければならない人が――とても大切な人物が――いるのよ」キャロルスンは謎めいた笑みを浮かべると、皿洗い機のほうへ歩みさった。

ラニアーがコーヒーをひと口すすった。「さあて、彼女の読みはあたっているのかね」

「そんなこと、ぜったいないわ」

「彼女がいうのは、ぼくがアドバイザーに――ジュディス・ホフマンに責任があるということだよ」

「ホフマンさんには会ったわ」とパトリシア。

「ぼくの名前は〝交際名簿〟に載っていない。やることがありすぎて、とうていそんな時間がないからだ。それに、考慮されるべき地位というやつもあるしね」コーヒーを飲みほし、カップを置いた。

「こんなにたくさん優秀な人たちに囲まれていたら、地位なんてたいして重要な要素でもないで

しょうに」いったとたんに、パトリシアはしまったと思った。

ラニアーはテーブルの上で手を組み、パトリシアが目をそむけるまで、じっと彼女を見すえた。

「パトリシア、きみは若いし、この調査をとてもロマンティックなものに思っているかもしれない。だが、事態はこのうえなく深刻なんだ。ぼくたちは、ある協定のもとで作業している。その協定が円滑に機能するまでには何年もかかるだろう――それも、そもそも円滑にいくことがあるとしての話だよ。ここにいるのは、科学者、技師、軍の国際的混成チームであり、ここで発見される情報は、どのようなものであれ、当分のあいだは、地球上の市民ひとりひとりに伝える必要のないものばかりだ。その情報のほとんどすべてに近づける以上、きみも部分的に責任を負うことになる――ぼくと同じようにね。だから、よけいなことにかまけて、時間をむだにしないでほしい……つまり、きみも〝交際名簿〟には名前を載せないほうがいいということだ。いつかべつのとき、べつの場所でなら、ロマンスや冒険もけっこう。だが、〈ストーン〉ではそんな余裕はない」

パトリシアは膝の上でぎゅっと両手を握りしめ、身をこわばらせて、「名前を載せるつもりはないわ」といった。叱りつけられた、というわけではないのに、気持ちが動転していた。

「それがいい、それじゃあ、きみのグリーン・バッジをもらって、谷を横断するとするか」ふたりはトレイを食器洗い機にほうりこみ、カフェテリアをあとにした。ラニアーは考えこむようにしてうつむいたまま、パトリシアの数歩先を歩き、北側の土塁付近にある小さな建物へ近づいていった。建物の前に立つと、黒のジャンプスーツにグリーンのベルトをしめ、軍曹を示す赤い縞の袖章をつけた、肩幅が広く体格のいい女性がドアをあけ、ふつうのテーブルより多量のバッフ

ル板を使ったデスクの向こうにすわった。ふたりが腰をおろすと、彼女は鍵のかかった箱をあけ、緑色のバッジをひとつとりだした。片隅には〈ストーン〉の輪郭が印刷され、全体に銀色の輪の縁どりがあった。

「ここの保安規定は厳しいものでしてね、ミス・ヴァスケス」と軍曹はいった。「規則に親しむよう心がけてください。グリーンのバッジには大きな責任がかかってきます」

パトリシアは油性ペンをとってバッジに名前を書き、指紋を保安システム・コンピューターに登録するため、指先をIDスキャン・プレートに押しつけた。女軍曹はバッジをパトリシアの胸ポケットにとめて、いった。「ようこそ、わがチームへ。わたしはドリーン・カニンガム、第一空洞・科学者第一コンパウンドの警備隊長です。なにか質問または問題があれば、いつでも気軽に訪ねてきてください」

「ありがとう」とパトリシアは答えた。それから、ラニアーについて警備室をあとにし、土塁の階段を登った。

「運動をしたければ、コンパウンドの内周にランニング・コースがある。そこを進むと、第二コンパウンドだ。トレーニング・ジムはここから遠くないところにあるよ。できるときには、なるべくハードな運動をしておくことだね。低重力は人をスポイルしやすい。ほうっておけば、すっかり体がなまってしまうぞ。運動をすれば、ここの気圧にも早く慣れることができるしね」

「わたし、低重力は快適だと思うわ」幅の広い、プラスティック・シートでできたカマボコ型テントに歩いていきながら、パトリシアがいった。「体が軽くなるもの」

テントのなかには、二台の車両があった。大型雪上車に似ているが、橇ではなく、鉄のホイー

ルとスポークにはまった、六つのゴムタイヤに支えられているところがちがう。パトリシアは身をかがめて車体の下をのぞきこみ、それから体を伸ばして、いった。「ずいぶんごついのね」
「これがぼくらのトラックさ。運転は簡単だ――すぐに憶えられるよ。しかしきょうのところは、横に乗っていてくれるだけでいい。ようく目をあけておいてくれよ」
ラニアーがドアのロックをはずし、パトリシアが高いステップに足をかけるのに手を貸して、武骨なシートに押しあげた。ドアを閉める前、彼はちょっとためらって、「きみにかなりの負担を強いていることは申しわけなく思う。きみがここでどれだけ重要な人物になるかは、承知してくれていると思うが――」
「承知どころか――わたし、ここで自分がなんの役にたつのかさえ知らないのよ」
ラニアーはうなずき、ほほえんだ。
「でも、ともかくあなたのいうとおりなんでしょうね。もしわたしがそんなに重要だとすれば、馬車馬みたいに働かなくちゃならないんでしょう」
「〈ストーン〉の作業倫理になじんできたみたいだな」ラニアーはいって、運転席によじ登り、ポケットに手をつっこんで、スレートを一枚とりだした。それをパトリシアにさしだして、「うっかりしていた。たぶん、ところどころメモをとっておきたいことが出てくると思う。これは官給品だよ」
ラニアーは電気エンジンのスイッチをいれ、トラックをテントから押しだした。「まずは第二空洞にいく。第一都市があるところだ。そこで二、三時間過ごしてから、〈三十世紀特別列車〉へ案内しよう」

「それは、いくつかある列車のひとつ？」
ラニアーはうなずいて、「きょうは第三空洞はとばすことにする――きたばっかりで、あまりたてつづけに驚異を見せつけられるのもなんだからね。見たら圧倒されてしまうだろう。とりあえず、第四空洞の警備コンパウンドで休憩して、昼食を食べてから、まっすぐ第六空洞へいこう」
トラックは、東西に何キロにもわたって伸びた、金網のフェンスに近づいていた。
「いま質問するのは早すぎる？」
「いつかははじめなくちゃならないことだからね」
「コンパウンドの外にあるのは、本物の土でしょう。植物を育てられるんじゃない？」
「適度に地味も肥えてる」とラニアー。「現在、いくつかの農耕プロジェクトが進行中だ。ほとんどは第四空洞に集中しているがね。土壌の大部分は炭素質の小惑星構成物質で、あとはそれを補う元素が少々だ」
「ふうん」パトリシアはうしろをふりかえって、後方の茂みや車のたてる土ぼこりを見やった。
「〈ストーン〉の動力はまだ生きてるの？　つまり、太陽系を出ていけるの？」
「まだ生きてる」とラニアー。「太陽系を出ていけるかどうかはわからないがね」
「ずっと考えてたんだけど……もし〈ストーン〉がそうすることにしたとすると、わたしたちはここに閉じこめられたまま連れさられることになるでしょう。そうなると、農場が必要になるわよね？」
「そのために農耕プロジェクトを進めてるわけじゃない」とラニアーが答えた。パトリシアはそ

のつづきのことばを待ったが、彼は黙って前方を見つめたまま、トラックのスピードを落としはじめた。金網フェンスのゲートが目の前にせまってきたのだ。
「〈ストーン〉の駆動機関はかなり年代もので ね。技師のなかには、おしゃかになってしまったと考えている者もいる」なかば彼女に話して聞かせるように、なかば自分の思考の流れをたどるようにして、ラニアーがいった。そして、ポケットから電子キーをとりだすと、ある番号にあわせ、無線信号を送ってゲートを開いた。「まだ航法装置のことはよくわかっていないんだ。エンジンが最後にちゃんと機能したのは、〈ストーン〉を減速させて現在の軌道へ固定させたときだった。その燃料は、〈ストーン〉の外から——おもにあの深い溝からロボットによって運びこまれる、物質の塊だ。運びこまれた物質は、北端のクレーターのすぐ上にあるポイントまで輸送される。北端へは立入禁止になっているが——そのふたつめの理由はじきにわかるよ。送りこまれた塊にそこでなにが起こるのか、ぼくらにはわからない。確認が難しくてね」
「想像するしかないっていうわけね」
トラックはうなりをあげてゲートを通りぬけ、いく筋ものタイヤのあとが残る、下生えの見あたらない一帯を横切った。
「あの金網だけど——ここにくる人間はあらかじめ厳選されてるんだから、保安処置はそれだけで充分じゃないかしら。あれだけの資材をここに運んでくるには、莫大な費用がかかったでしょう。その費用で、科学機器を運んでこられたはずよ」
「あの金網は、運んできたものじゃない。あったんだ」
「金網のフェンスが？」

「おまけに、人形もね」
「なにをいってるの？」
「〈ストーン〉を造ったのは人間なんだよ。パトリシア。地球の人間なんだ」
彼女はまじまじとラニアーを見つめ、それから笑みを浮かべようとした。
「造られたのは千二百年前のことだ。少なくとも、〈ストーン〉ができてから約千二百年はたっている」
「ふうん、そう――そういうことは、ほかの人にいってちょうだい」
「これは冗談じゃないんだよ」
「まさか、からかわれにくるなんて思ってもいなかったわ」シートの上で居ずまいをただして、パトリシアは静かにいった。
「からかってるんじゃない。わざわざ、長さ八、九キロメートル分の金網を運んでくるとでも思うのかい？」
「それを信じるなら、そのまえにシャルルマーニュだかだれだかが〈ストーン〉の建造を命じたってことを信じなきゃならなくなるわ」
「だれも〈ストーン〉がぼくらの過去からきたとはいってないよ。これ以上踏みこむ前に――おねがいだ、パトリシア、がまんしてくれ。ともかく待って、見てくれ」
彼女はうなずいたが、腹のうちではかんかんだった。これは一種の入会式なんだわ。若い女性をドライブに連れていき、怖がらせ、ひどく複雑な謎に取り組ませておいて、基地に連れ帰り、笑いものにする。これできみもほんものの〈ストーン〉仲間だ、よかったよかった。

こういうことには、どうしてもがまんならない。十三歳でＵＣＬＡに入学したときでさえ、がまんできなかったほどなのだ。
「あの下生えを見てみたまえ」とラニアーがいった。「あれは草だ。あれもぼくらが持ちこんだものじゃない」
「ありふれた草のように見えるけど」
谷の横断には、三十分を要した。車は鈍い灰色の極点に近づきつつあった。前方には幅約二十メートルほどのトンネルがあり、その入口の前には、銀色をした金属製のアーチがかかっていた。谷底から入口にはいるための傾斜路だ。ラニアーは加速して傾斜路を登った。
「空気はどうやって供給してるの？」沈黙が気まずくなってきたので、パトリシアはたずねた。
ラニアーはトラックのライトをつけた。
「まんなかの三つの空洞には、地面に巨大な湖が作られているんだ。湖は浅くて、何種類かの浮き草やウォーター・ヒヤシンスや藻類などで満たされている。そのほかにも、現在特定中の植物があるがね。最大の湖は、第四空洞の内周をぐるりととりまいている。各連絡孔には、直径約三キロの通気ダクトがあって――双眼鏡があれば見えるよ。目がよければ肉眼でも見えるだろう。〈ストーン〉には、こういうシャフトやダクトが無数に走っているんだ」
パトリシアは彼の目を避けて、うなずいた。この娘はすぐに〝化石化〟しそうだな、とラニアーは思った。怒りはその最初の兆候だ。怒りと否定は、受けいれることよりもはるかにやさしい。そして、どれだけ細心に〈ストーン〉を紹介してみても、このサイクルは避けることができない。ここにいるのは、全員、根拠なしではなにも信じない手合いだ。そのだれにも、まず事実を見せ

てやる必要があった。学習と馴化がくるのは、それからだ。
トンネルにはいって六分後、車はトンネルの出口を完全にふさぐ、がっしりした金網のフェンスに出くわした。ラニアーはそのゲートを鍵であけると、第二空洞に車を乗りいれた。
トンネルから降りる傾斜路は、両側を石造りの壁ではさまれていた。傾斜路をくだったところにはまたもやゲートがあり、そのそばにはまた警備小屋があった。傾斜路の舗装をごとごと鳴らして、トラックが警備小屋に近づいていくと、黒のジャンプスーツを着た三人の海兵隊員が、小屋のそばで気をつけをした。ラニアーはブレーキをかけて車をとめ、エンジンを切り、シートからおりた。パトリシアは車に残ったまま、目の前に広がる展望に見いっていた。
傾斜路の向こうは、奥行き二キロメートルの草地になっており、ところどころに雑木材や、大きなビルの基礎部分にも似た、巨大で幅が広く、平らで背の低い、白いコンクリートの構造物があった。草地の向こうには、幅が約一キロほどの、ほそい湖だか川だかがあり、それが東西に走って、完全に空洞をひとまわりしている。川の両岸には、一対のごついコンクリートの土台があり、そのあいだには、ほそく湾曲した背の高い塔を支柱にして、吊り橋がかかっていた。
その橋の向こうに、都市があった。
快晴の日のロサンジェルス、または地球上のほかの近代的都市といっても通りそうな都市だ。ただし、超現実的なほどスケールが大きい。地球の都市より大規模で、大胆で、整然としており、建築学的により成熟している。そして、都市のそこここに、ちょうどピンポールのボードのバンパーのように、彼女がこれまで見たこともないほど巨大な建物がそびえたっていた。高さはゆうに四キロはあるだろうか。コンクリートとガラスと輝くスケールでできた、さかさまのシャンデ

リアのような外観だ。いちばん近いシャンデリア構造物の各切子面は、シャンデリア同士のあいだにあるすべての建物を合わせたのと同じくらいの大きさがある。上を見あげて、シャンデリアに似ているという印象はますます強まった。同じ形をした構造物群が、頭上はるか上の、空洞の反対側の床からも吊りさがっていたからだ。二層の大気ごしに見える、五十キロメートル彼方の都市の姿は、博物館の汚れたガラスを通して見る模型のように、異様に美しかった。

とてつもなく背の高いプレイヤー同士のテニスの試合を見るように、パトリシアの目はゆっくりと上下にゆれ動いた。

「おはようございます、ラニアーさん」先任士官がいうと、近づいてきて彼のバッジを調べた。「彼女は、新入りさん?」

ラニアーはうなずき、「パトリシア・ヴァスケスだ。無制限通行権を持つ」

「わかりました。昨日、ゲアハルト将軍から電話があって、その旨承っています」

「なにか動きは?」

「ミッチェルの調査隊が、三十度、六クリックの位置にある、Kメガにはいっています」

ラニアーは運転席にもたれかかるようにして、パトリシアに説明した。「〝メガ〟というのは、あの巨大ビルのことだよ」パトリシアは目の上に手をかざしてプラズマチューブの光をさえぎり、なんとか空洞の反対側をもっとはっきり見ようとした。公園や小さな湖や、道路網までは見分けられた――それらは、交互にならぶ同心円と、四角いブロックのなかに広がっているようだ。

ここから反対側の床までの距離は、ロングビーチからロサンジェルスまでの距離に相当する。そのとほうもないスケールにもかかわらず、都市はいかにも人間が造ったもののように見えた。

ラニアーがステップに足をかけ、先に進む前にちょっと歩いてみるかときいた。
「この都市を、なんと呼んでいるの？」パトリシアがたずねた。
「アレクサンドリアだ」
「あなたたちがつけた名前？」
ラニアーはかぶりをふって、「ちがう」
「きょうは第七空洞まで踏破する予定？」
「きみがそうしたければね」
「ここにはどのくらいとどまるつもり？」
「せいぜい二、三時間だな。先に進む前に、図書館を見ておいてもらいたい」
「図書館？」
「そうとも。ハイライトのひとつさ」
パトリシアは目をまるくして、シートの背にもたれかかった。「この都市に、人は住んでないの？」
「ぼくらのほとんどはそう考えている。ときどき人影を見たという報告はあるがね。ぼくは目の錯覚だと思う。ブージャム、と警備チームの連中は呼んでるよ。幽霊さ。いまのところ、生きたストーン人は見つかっていない」
「死んだストーン人なら見つかったの？」
「かなりの数がね。この空洞と第四空洞には、霊廟がいくつもあるんだ。アレクサンドリアの主要墓地は、二十度、十キロメートルの位置にある。座標体系はもうわかるね？」

「と思うわ。自転軸からの角度と、極からの距離によるものでしょう。でも、どこがゼロ度で、どちらの極が距離の基点？」
「ここがゼロ度さ。距離は南極から測っている」
「するとこれは、入会式じゃないのね。あなたは作り話をしていたわけじゃないのね。〈ストーン〉を造ったのは人間なんだわ」
「そのとおり」
「その人たちはどこへいったの？」
ラニアーはほほえみ、指を一本たてて左右にふった。
「わかったわ」ため息をついて、パトリシア。「待って、自分の目でたしかめろ、ね」彼女はトラックから降りて伸びをし、目をこすった。「肝がつぶれたわ」
「はじめてアレクサンドリアを見たときには、古巣にもどったような気がしたものだよ」とラニアーがいった。「ぼくはニューヨークで育ち、十五のときLAに引っ越した。半生のすべてを大都市ですごしてきたといっていい、それでも、この眺めには圧倒させられたね。この空洞だけでも、二千万の人々を住まわせることができて、なお余裕しゃくしゃくなんだから」
「〈ストーン〉が重要なのはそのため？――本格的な居住地として？」
「そうじゃない。ぼくらはべつに、分譲マンションを売りだそうってわけじゃないんだ。ここには考古学者が十五人きているが、そんなことをほのめかしでもしたら、彼らに殺されてしまうよ。二、三日おきに説明会が開かれているから――近々きみも出席できるだろう。彼らはずっと時計まわりに調査を進めている。三年前ここにきて以来、ぼくらにはなにひとつ手を触れさせようと

しない。優先指揮権を持つ警備チームの指揮官かぼくが動くときはべつだが、それでもそれなりのいいわけをしなくちゃならないしまつさ」
パトリシアが警備兵たちに会釈すると、三人とも親しみをこめて挨拶を返し、ひとりは帽子の縁に手をあてがった。そのとき、警備小屋の無線が鳴り、なにごとかをがなった。先任士官が応答する。パトリシアには喉音のことばがよく聞きとれなかったが、警備兵の答えていることばは、ロシア語のようだった。
「三人とも、どうみたって混じり気なしのアメリカ兵だけど」とパトリシア。
「そのとおり。南極の連絡孔で作業している華湊のところに、ロシア人がいるんだよ」
「海兵隊員がロシア語をしゃべるの？」
「あの海兵隊員はしゃべるのさ。それに、ほかにも三つ四つのことばは話せる。エリート中のエリートだからね」
「ここには、エリートじゃない人間っていないの？」
「凡人はいないい。そういう意味できいているのならね。凡人を置いておく余裕はないんだ。だれもがふたり分、三人分の仕事をしなきゃならないんだから」ラニアーはふたたび運転席におさまり、「きみさえよければ、そろそろ橋をわたって、図書館にいこうか」
「いつでもいいわ」とパトリシアはいって、助手席にもどった。
ラニアーがトラックを進めると、ゲートが大きく開き、背後でふたたび閉まった。
アスファルトを踏みしめて、車は四車線の橋をわたった。パトリシアはズボンのポケットに手をいれて、スレートをとりだし、キーが十個ある速記ボードを使って、メモをとりはじめた。

《天候――というよりもそれのなさ。空はしごく快晴。景観――圧倒的のひとこと。近くの地面は平らに見えるのに、地平線（いまは北に向かっている）のすぐ上から地面が内側に湾曲しはじめ、谷の側面にそってどんどん曲率が大きくなっていく。多少の靄はかかっているが、空洞の上部はかなりの細部までよく見える》

入力した内容を読みかえし、タイプミスをチェックした。スレートのタイプのしかたは高校のとき憶えたが、あれはもう何年も前のことだったし、文字は手書きのほうが好きだった。しかし〈ストーン〉では、紙は明らかに貴重品で、そうふんだんには使えないのだろう。

広い通りを進みながら、パトリシアはタイプをつづけた。《通りの幅は約五十メートル、中央に分離帯があって、もとは草か木が植えられていたあとがある。片側は二車線ずつ。植物でちゃんと成育しているものはない。園芸システムの機能が低下しているのか――それとも全然働いていないのか。道路ぞいにある店のショーウインドウは、ほとんど全部割れている。会社や店舗の応接室は、道路側に面しているようだ。ある窓には――人間そっくりのマネキンがある。首が長い。バランスはとれているが、ヌードだ》

かつては宝石店だったと思われる店の上の、看板が目にとまった。〝ケサール〟と読めた。ラテン文字だ。車が進むにつれて、その看板の反対端に、同じ名前がキリル文字でつづられているのも見えた。店によっては、東洋の表意文字――中国語や日本語の看板をかかげているものもある。そのほかにも、ラオス文字や、やや形はちがうがベトナム式ローマ字も見えた。

「なんて……ことなの」パトリシアは呆然としていった。「これじゃまるで……ＬＡじゃないの」

しかし、商店の内容やデザイン、そしていくつかウインドウ・ディスプレイにさえも、どこか奇妙なところがあった。パトリシアは目をすがめ、矛盾点を見いだそうとした。「ちょっとゆっくりやってくれる」彼女がいうと、ラニアーがトラックのスピードをゆるめた。「ここの店って、どれも古風な造りをしていない？　ＬＡにもあるでしょ、むかしのイギリスにいるような雰囲気を持たせて造ったショッピング街っていうのが。ここはわざと古めかしく造ってあるみたい」
「いままで聞いたなかで、最良の意見だな」肩をすくめて、ラニアー。「じつをいうと、ぼくはこのあたりには、あまり注意を払ったことがないんだ」
「ギャリー、さっぱりわからないわ。もし〈ストーン〉が一千年前に造られたのだとしたら、この街並みはいったいどういうこと？」
ラニアーはゆるいカーブを曲がり、道路のまんなかでトラックをとめた。それから、緑地の北端にある暗褐色の建物を指さして、いった。「あれが図書館のひとつだ――いま調査中のふたつのうちのひとつだよ。ほかの図書館は、全部閉鎖されている」
パトリシアは下唇をかみしめた。「わたし、どうかしてしまったのかしら？」
「たぶんね。ぼくもさ」
「わたしがいうのは、まるで――」パトリシアはかぶりをふった。「どうしてわたしがここにはいらなければならないの？　わたしは数学者よ。技師でも歴史家でもないのに」
「ぼくを信じたまえ、だれも気まぐれで図書館に連れてきたりしない。きみには特別な才能があるんだ。きみが研究してきた分野には、なんの現実的な価値もなかった――いまのいままではね」

「質問するのはやめにするわ」と、ため息をつきながら、パトリシア。「なにをきけばいいかっていうことすらわからないんだもの」

建物のまわりには、あちこちに電子センサーが設置されていた。金網のフェンスの上部は、外側に湾曲して先の尖がったおそろしげなワイヤーになっており、センサーやカメラがそれとなくほのめかしているものを強調している。入口の前には四人の警備兵がいて、全員がアップル――対人レーザー(アンティ・パーソネル)――を携帯し、いかめしい顔で立っていた。ラニアーとパトリシアが近づいていくと、増幅された声が響きわたった。「ラニアーさん、そこでとまってください。身元を確認させてもらいます。お連れの方はどなたです?」

「パトリシア・ヴァスケスだ」とラニアー。「所属は科学者チーム。ゲアハルト将軍からのメッセージを参照してくれ」

「わかりました。前に進んで、IDカードを提示してください」

ふたりはトラックを降り、ゲートに歩きだした。「あのさか棘とセンサーだけは、二年前、地球から持ってきたんだ」とラニアーが教えた。「あのなかにあるものの価値に気づきはじめたのが、二年前なのさ」

ふたりはIDカードを提示し、黒とグレイの制服を着た女性兵士が持っているプレートの上に、両手をのせた。身分が確認されると、囲いのなかに通された。

一階の窓は、ここでもやはり割れていた。館内には標識も案内図も見あたらなかったが、雰囲気は明らかに図書館のそれだった――ただし、やはりわざとらしい古めかしさが見受けられた。館内は暗く、荒れはてていた。

「外の警備兵は館内にはいれない。はいれるのは特別警備隊――黒とグレイの制服を着てる連中だけだ。館内には常時一名が詰めていて、モニターで監視している。さっきの声の主がそうさ」
「とても愉快ね」
「だろうな」
一列の螢光灯が、頭上でぱっとともった。天井にトラックをボルトどめし、そこから吊りさげられたものだ。つづいて、さらにいくつもの螢光灯の列がつぎつぎとついていき、一階を横切って、光の帯を形作った。その道は、建物の中央にある階段を登っていた。
「アレクサンドリアには、可搬式の発電機を四ヵ所に設置してあるんだ」光の道を歩いていきながら、ラニアーがいった。床はむきだしでほこりにまみれ、ところどころにはっきりとわかる轍があった。「この街の電力網は、ほとんど機能していない。まだ電力供給源をつきとめていないんでね。しかし、たぶんそれは独立した施設ではないだろう。〈ストーン〉自体、ひとつの予備動力を持っているらしい――超冷却バッテリーを集中させたようなものをね」
パトリシアが眉根をよせて、「バッテリー?」
「アリゾナや大アフリカ温室で使われている、百メートル・バッテリーさ」
「ああ」パトリシアは実用的な物理学にはうとかったが、それをラニアーに知られたくなくて、曖昧な返事をした。
「それ以外の点では、電気系はごくふつうだ。制御と情報の回線は光学式で、地球よりも広範なレベルで使われている。建物のなかは暗いが、それはサーキット・ブレーカー――というか、そ

の役割をはたすものが――ほとんどとりはずされていて、火災の危険性がもっとはっきりするまで、だれも新しくとりつけようとしないからさ」
「どうして窓が割れてるの？」階段を登りながら、パトリシアがたずねた。
「ガラスは時がたつともろくなり、劣化するからね。気圧の急激な変化があると、割れてしまうんだ」
「天候の変化？」
「一種のね。空洞内には、高気圧と低気圧を作る力がある。上昇気流とコリオリの力に加えて、極点付近では下降気流が吹くんだ。嵐だって起こるほどさ。空洞によっては、まれにだが雪もふる。そのほとんどはなんらかの形で制御されているらしいが、その制御装置がどこかに組みこまれた固定のものか、それとも各所に分散して作動しているいくつもの機械なのか、まだわかっていない」
二階に出ると、光の道の向こう側、影に閉ざされた通路の奥に、人間ほどの大きさの円筒が何列にもならんで、ずっと奥までつづいているのが見えた。
「この一年間、ぼくらはこの記憶バンクからデータを吸いあげつづけているんだ。プログラム言語がなじみのないものだから、なんとか読めるデータと役立つイメージを引きだせるようになったのは、つい半年前くらいからかな。そうこうするうちに、となりの空洞には、これよりはるかにでかい図書館があることがわかって、いまはそっちに全力をあげて取り組んでいるところだよ。しかし……それでもぼくは、ここのほうがいい。四階には広いハードコピー・センターがある。ぼくも以前はそこで研究していたし、これからはきみも、研究の一部をそこでしてもらうことに

なる」
「なんだか、マリア・セレステ号に乗ったみたい」
「そういうたとえをした者もいたな」とラニアー。「ともかく、ここであれ、ほかのどこかであれ、原則はこうだ。〝もとどおりにできないものには手を触れるな〟。考古学者たちは、おおざっぱな調査をおえたばかりで、まだカリカリしてる。ときにはこの原則を破らなけりゃならないときも出てくるが——必要な器材を修理したり、コンピューターを直したりする場合だよ——やりすぎはゆるされない。もし〈ストーン〉がマリア・セレステ号だとしても、それがなぜかを調べている余裕はないんだ」
　ふたりは四階に昇り、大きな部屋にはいった。そこには、小さなデスクにディスプレイと平らなグレイのパネルがついた、読み出しコンソールがぎっしりならんでいた。デスクのひとつには、最近輸送されてきたばかりのテンソル・ランプが設置され、新しい電力供給源に接続されていた。ラニアーが引っぱってきた椅子に、パトリシアは腰をおろした。
「すぐにもどってくる」といって、ラニアーは彼女をひとり残し、部屋の奥に歩いていくと、ドアの向こうに消えた。彼女はデスクのディスプレイにさわってみた。これはビデオ画面用なのかしら、マイクロフィルム用なのかしら。画面は平らで黒檀のように黒く、厚みは四分の一インチとない。
　椅子にはおかしなところがあった。シートのまんなかに小さな円筒が水平につきだしていて、すわるとどうもあたりが悪いのだ。以前は、円筒を覆うクッションでもあったのだろうか——それとも、動力がきていたときには、椅子自体がみずからクッションを作りだしていたのだろうか。

パトリシアは不安そうに、ひとけのないコンソールの列を見やり、最後にこれらを使った人々の姿を想像しようとしてみた。ラニアーがもどってきたときには、心からほっとして、思わず手が震えたほどだった。

「お化けでも出そうね」といって、パトリシアは弱々しくほほえんだ。

ラニアーは、乳色のプラスティックで綴じあわせた、小型の本をさしだした。パトリシアはぱらぱらとページをくった。紙は薄いがじょうぶだ。ことばは英語だが、字体は見慣れない形をしている——ヒゲかざりが多すぎるのだ。彼女はタイトル・ページを開き、声に出して読んだ。

『『トム・ソーヤーの冒険』——サミュエル・ラングホーン・クレメンズ著。これ、マーク・トウェインじゃない」出版年は、二一一〇年とある。彼女は本を閉じ、下に置き、ごくりと唾を飲みこんだ。

「どうだい?」ラニアーが静かにきいた。

彼女は眉をひそめて、ラニアーを見あげた。ついで、一種の理解が、ふたりのあいだを伝わった。彼女は口を開きかけ、ふたたび閉じた。

「なぜぼくがこんなに疲れた顔をしているか、きみはいつも不思議がっていたね」とラニアー。

「ええ」

「いまならわかるね?」

「この……図書館のせいね」

「ひとつにはね」

「これは未来からのものなのね——〈ストーン〉は、わたしたちの未来からきたんだわ」

「そいつはまだなんともいえない」
「でも、わたしがここに呼ばれたのはそのためでしょう……どうやって〈ストーン〉が未来からきたか、それを解き明かす手助けをするためでしょう」
「ほかにもいろいろ謎はあるんだ、同じくらいわけのわからないやつがね。そしておそらく、それはすべてひとつにつながっている」
パトリシアはふたたび本を開いた。「発行、大ジョージア・ジェネラル社、協力、ハーパーズ・オブ・ザ・パシフィック社」
ラニアーが手を伸ばして、パトリシアの手から本をとりあげた。「いまのところは、それだけわかればいい。外に出よう。少し休んでもいいし、警備詰所で二時間ほどすごしてもいいが」
「その必要はないわ」とパトリシア。「わたし、先に進みたい」ほんの二、三秒、彼女は目を閉じあわせた。ラニアーは本をもどしにまた出ていき、ややあってもどってくると、彼女の先に立って一階に降りた。
「ここから二ブロックいったところに、地下鉄の入口がある。そこまで歩くのもいいだろう。運動をすれば、頭の働きがよくなるからね」
パトリシアはラニアーのあとについて、地球のさまざまな言語の標識がついた建物群を見るとはなしに眺めながら、自分が同化の境目を通りこしたことを認識しつつ、公園の一画を横切っていった。
やがて、半月型のアーチをくぐり、折り返しになっている傾斜を伝って、地下鉄の駅に降りた。
「さっき、〈ストーン〉は未来からきたものじゃないっていっていったわね」とパトリシアがいった。

「ぼくらの未来からじゃない、といったのさ。この宇宙からきたのでもないかもしれない」
体がほてっていた。彼女は自分が泣きだそうとしているのか笑いだそうとしているのかわからず、急いでぱちぱちとまばたきした。「むちゃくちゃだわ」
「ぼくの感想も、まさにそいつさ」
ふたりは広いプラットフォームに立っていた。そばの壁には、薔薇色のガラスをいくつもならべた、大きくて平らなモザイクの装飾があった。天井からは、文字のはげた行き先表示がさがっていて、こう読めた。〝5番線、ネクサス中央方面〟、〝アレクサンドリア〟、〝6番線、サン・ファン・オルテガ方面、所用時間二十分〟。標識の近くには、やはり漆黒の平面ディスプレイがぶらさがっており、どれにもなにも映っていなかった。
パトリシアはめまいで体がかすかに震えるのを覚えた。わたしはほんとうにここにいるのかしら？　それともこれは、たちの悪い夢なのかしら？
「だんだん〝化石化〟してきたな」とラニアー。「自分をよく見つめてごらん」
「わかってるわ。ええ。たしかに、だんだん〝化石化〟してきたわね」
「ふつうは、つぎに抑鬱状態がくる。混乱、空想、抑鬱の順さ。ぼくもそれを経験してきたんだ」
「あなたも？」パトリシアは足もとの白いタイルを見おろした。
「あと五分か十分で、電車がくるだろう」とラニアーはいって、ポケットに両手をつっこみ、彼女といっしょになって床を見つめはじめた。
「わたしは順調にやってるわけね」パトリシアはとても信じられなかった。が、そのいっぽうで、

通過儀礼を受ける前よりも、いまのほうがましな気がした。彼女は持ちこたえなければならなかったのだ。「思うのだけれど、新人を教化するもっといい方法はないのかしら。このやりかたはあんまりだわ」
「ほかにもいろいろ試してみたよ」
「うまくいかなかった？」
「よくはなかった。悪くなった例もある」
トンネルの奥から、風が吹きこんできた。パトリシアは、どんな機構で地下鉄の車両が動いているのだろうと、プラットフォームの端から下をのぞきこんだ。トンネルの床はのっぺりとして、レールもガイドもいっさい見あたらなかった。
やがて、シューッという音をたてて、トンネルから巨大なアルミニウムのヤスデがとびだしてきた。鼻づらには窓がなく、輝く緑のラインが一本はいっているだけだ。車両はいきなりぴたりと停止し、穏やかなブーンという音をたてたかと思うと、ドアがいっせいにスライドして開いた。先頭の車両には、海兵隊の警備兵がひとり立っていた。ホルスターに拳銃をおさめ、レーザー・ライフルをかまえている。
「ラニアーさん」と警備兵はいって、スマートに敬礼した。
「チャーリー、こちらはパトリシア・ヴァスケス。新しいグリーン・バッジだ。パトリシア、こちらはチャールズ・ヴュルツ伍長。たぶん、これからはちょくちょく顔を合わせることになるだろう。チャーリーはこの地下鉄○号線の責任者なんだ」
「スリには指一本ふれさせません」とチャーリーはいって、にやりと笑い、パトリシアの手を握

った。
ラニアーが先に乗るようにとうながした。ざっと見たところ、車内はごくふつうの最新型高速移動システムの車両そのものだ。プラスティック・シートと金属の備品は、きちんと補修されている。車両は明らかに混雑がないことを想定して造られたもので——立った乗客のための吊り輪や手すりがないのだ——構成が広々としており、ゆったり足を伸ばして乗ることができた。車内広告もない。というより、車内には表示のたぐいがまったくなかった。
「サンフランシスコの湾岸地区高速地下鉄みたいね」とパトリシアがいった。彼女はここ何年も、バートにもLAの地下鉄にも乗ったことがなかった。
ふたりはシートに落ちついた。車体の側面には、不均等な間隔で、大きなまるい窓がならんでいた。動きだしているという感覚は少しもなかったのに、窓の外を見ると、駅はもうかすんで見えた。ついで、窓外が真っ暗になり、見えるのはつぎつぎに閃いてかすめとぶ、垂直の白いバーだけとなった。
「それほど極端に未来的というわけでもないのね」とパトリシア。「ちゃんと、どれがなんだかわかるもの。わたしはいつも、未来はいまとまるっきりちがってて、なにも見分けがつかないだろうと思っていたわ。だってここは、一千年も未来のものなんでしょう？　なのに、建物もあるし、地下鉄もあるなんて——つまりわたしがいいたいのは、なぜ物質転送機がないのかっていうことよ」
「アレクサンドリアとこの地下鉄システムは、〈ストーン〉のほかの部分よりうんと古めかしい。ほかの空洞にいって、いろいろこまかく見てまわれば、われわれとここの技術の大きな差に気が

つくよ。それに……」とラニアーはことばを切って、「考慮すべき歴史というものもある。遅延、ハンディキャップ——そして、遺物ということもね」
「それは近々わかるといううんでしょう」
「そのとおり。いま、電車の動きが感じられるかい？　加速感があるかい？」
パトリシアは眉をひそめた。「ないわ。でもゆっくり発進したのだとしたら——」
「この電車は四Gで加速するんだよ」
「待って」パトリシアは窓に向きなおり、とびさる白いバーを見つめてから、難しい顔になっていった。「アレクサンドリアは……この街の造りはおかしいわ」
ラニアーは辛抱強く彼女を見つめた。この娘はかなり切れ者らしいが、いろいろな点であまりにも若い。まるで女学生のように、自分の常識を貫こうとしてやっきになっている。
「〈ストーン〉は加速したり減速したりしなければならないでしょう？　この電車だってそうよ。でも、いま、動いている感覚は全然ない……とすれば、その力を打ち消すために、それに湖や池の水が外へとびださないように、空洞の床は傾いていなければならないはずよ。いっぽうの壁面高くにね。加速のショックを防ぐためよ。それを打ち消すためには、通路も傾斜していなければならないわ」
「空洞には、加速を打ち消すための設備はまったくないんだ」ラニアーが答えた。
「すると、〈ストーン〉はゆっくり加速するわけ？」
ラニアーはかぶりをふった。
「加速を打ち消すなんらかの方法があるの？」

「第六空洞にね。しかし、それもまた大きな絵の一部にすぎない」
「なにもかも自分で解明しろというの」
「可能なかぎりね」
「テストってわけ？」
「ちがう」ラニアーは語気を強めて、「アドバイザーは、きみがわれわれの力になってくれるといった。それを疑うつもりはない。かりにこれがテストだとしても、きみはなかなかよくやっているほうだ」もっともこれは、腹蔵ない意見とはいいかねた。
トンネルの壁がうしろにとびさり、電車は光のなかにとびだした。下のほうに水面が見えた。少なくとも、時速二、三百キロメートルは出ているだろう。「高架線には三本のレールがあって、磁力で車両を走らせているんだよ」
「ははあん」パトリシアは注意を海に向けた。波立ちながらどこまでも広がる青灰色の水は、北極点を背にしてただよう霧のなかに消えている。灰色の広がりの上には空洞のアーチが湾曲し、はるか北西と北東には霧の土手の両端があって、三時の高さには海岸線が見えている。
電車から七キロほどのところには——その下部のかなりのところまで白い霧で覆われているが——まっすぐにそびえたつ塔の、六角形の頂上部が見えていた。高さは五十キロ、幅はその半分はありそうだ。そのほんの一キロほど向こうに、またべつの塔がそびえ、これは霧に隠されておらず、ほそくまるい塔門の上に載っているようすがよくわかった。
霧は急速に近づいてきて、あっと思ったときには、電車は地上を走っていた。プラズマチューブの——多少は青みがかった——光を浴びて、おおむね立派に繁茂しているらしい松林が、下方

をかすめさっていく。

「第四空洞は、いちばん近い呼び方をすると、レクリエーションの中心地なんだ」とラニアーが説明した。「そしてもちろん、貯水池と空気浄化システムの拠点でもある。ここには四つの島が点在していて、それぞれが異なった棲息環境を持っていてね。水中にもいろいろな棲息環境があるんだ。たとえば、珊瑚礁、真水の池、河川システム、といったぐあいだよ。リゾート地、野性生物の保護区、水中牧場としての働きも持っていて——すべては未制御の状態にもどっているから、多少は野性化しているが、それでも豊饒な地ではある」

電車は減速し、かすかなうなりとともに、高架線上のプラットフォームにすべりこんだ。電車が停止すると、黒のジャンプスーツを着た警備兵が、車両のそばまで駆けよってきた。ラニアーが立ちあがったので、パトリシアもあとにつづいてドアまでいった。以前と同じく、ドアは音もなく開いた。

森、水、土——すべてのにおいが、たちまち鼻孔に押しよせてきた。

「じゃあまた、チャーリー」とラニアー。チャーリーはさっと敬礼し、ふたりが降りたあと、戸口で気をつけの姿勢をとった。

プラットフォームの警備兵のひとりが進みでて、パトリシアのバッジをチェックし、「サマー・キャンプへようこそ、ミス・ヴァスケス」といった。パトリシアはプラットフォームの手すりから下を見おろした。地上からは約六メートルある。プラットフォームのまわりは、第一空洞にあったのとそっくりの、ファイバーボード製の建物と土塁からなるコンパウンドでとりかこまれていたが、あそこよりもずっと大きな温室があった。農耕ラボラトリーだ。

コンパウンドで作業している人間は、黒とグレイの制服を着ているものもふくめ、黒とカーキ、黒とグリーンと、とりあわせはまちまちだが、全員黒のまじった服を着ていた。
「これはみんな、警備部隊？」と、プラットフォームの階段を降りていきながらパトリシアがきくと、ラニアーがうなずいた。
「ここにも小規模な科学者グループはいるし、〈ストーン〉にいる人間が休暇や自由時間をとるときは——まあ、そうそうとれるもんじゃないが——ここで土に親しんでもらうようにしている。この空洞は戦略ポイントなんだよ。ここでは〈ストーン〉でも比較的居住に適する部分で、この向こうの空洞からは機能一点ばりになる」
「たとえば、推進システム？」
「それもあるし、第七空洞というやつもある。ともかく、ここならしばらくのんびりできるだろうし、いままで見てきたことを消化する余裕も持てるだろう」
「それはどうかしらね」とパトリシアはいった。
　ラニアーは彼女を、コンパウンドのカフェテリアへ案内していった。
　いろいろな点で、ここのカフェテリアは第一空洞のカフェテリアと少しずつちがっていた。ふたりはイギリス人と西ドイツ人の軍人のいるテーブルにすわった。ラニアーはパトリシアを、ドイツ守備隊の指揮官、ハインリヒ・ベレンソン大佐に紹介した。「いまから一週間後、彼は第七空洞警備隊の指揮をとることになっているんだ」
　ベレンソンは西ドイツ宇宙軍の大佐で、砂色の髪とそばかすだらけの顔を持ち、背はラニアーと同じくらいだったが、ずっとがっしりしていた。一見、ドイツ人というよりはアイルランド人

のように見える。そのドイツ人らしくない名前といい、洗練されたものごしといい、いかにも国際人であるようにパトリシアには思えた。その態度は親しげではあったが、少しよそよそしかった。

パトリシアはサラダを注文してから——農耕ラボでとりたての、新鮮な野菜を使ったサラダだ——まわりの男女の顔を見まわした。みんながみんな、グリーン・バッジをつけているわけではない。

「ここのバッジ・システムはどうなってるの?」とパトリシアはラニアーにたずねた。ベレンソンが、痛いところをつかれでもしたかのように、にやりと笑ってかぶりをふった。

「レッド・バッジがはいれるのは、第一空洞の侵入孔まででね」とラニアーが説明した。「ほとんどは支援の技術者たちだ。ブルー・バッジは、第六、第七空洞を除いて〈ストーン〉内のどこにでもいけるが、第一空洞以外ではそれなりの人間の付き添いを受け、特殊な義務をはたさなければならない。グリーン・バッジはどの空洞にでもいけるが、つねに保安チェックを受ける必要がある」

「わたしもここにきて三年以上になるがね」と横からベレンソンが、「グリーンをもらったのは、ほんの三カ月前だよ」彼はパトリシアのバッジにちらりと目をくれ、意味ありげにうなずいた。

「幸い、わたしには抜け道があった。自分自身が自分の付き添いであると考えればいいわけさ」

ラニアーがにやりと笑って、「事態がいままでどおりスムーズに運んでくれていることに、感謝するとしよう」

「アーメン」とベレンソン。「掛け値なしの混乱を目のあたりにするのは、気が重いよ」

「グリーン・バッジのなかにも、通行権に関して三つのレベルがあってね。いちばん低いのはレベル1で——指定の機密エリアにははいれない。レベル2は職務上の目的に応じて限定的な通行が許される——警備兵がつけているグリーン・バッジは、レベル2のものだ。ぼくらがつけているのはレベル3のバッジさ」

「わたしはレベル2になる予定だ」とベレンソンがいった。

地下鉄にもどる途中、パトリシアがたずねた。「レベル2ということは、あの人はわたしたちが〈ストーン〉について知っていることを全部は教えてもらえない、ということ?」

「第七空洞にいけば、知らなければならないことがたくさんあるさ」

「でも、図書館のことは知らないままでしょう」

「ああ」

パトリシアは身が引きしまるのを覚えた。あの図書館の存在さえ知らないベレンソンが、それでも重荷に感じるほどの、どんな秘密がここにはあるのだろう。

宇宙服を着た四人の兵士が、長く優雅なジャンプをくりかえしながら、月面を走っている。彼らの足もとを照らすのは、星明かりと三日月形の地球の光だけだ。ミルスキーは大岩の上から白いヘルメットだけをつきだして、四人の姿を見まもっていた。右手に持った懐中電灯を、後方にいる部隊の同志たちに向ける。同志たちは、何百万年もむかし、ころがる岩で抉られた、小峡谷にひそんでいた。四人が所定の位置につくと、彼は懐中電灯を三回点滅させた。

目標は——月面基地掩蔽壕のモックアップだ——大岩から百メートル向こうに横たわっている。

いま、防御側の四人はエアロックにたどりついた。ミルスキーはＡＫＶ297——オートマチック真空対応カラシニコフ弾丸発射式小銃——をかまえ、エアロックのハッチに向けた。

ハッチが開きはじめると、ミルスキーはライフルの照準をわずかにあげ、ハッチのシグナル・ランプのそばにある、十字型の目標に狙いを定めた。片方の指で、ライフル側面のトリガーを押しさげる。ライフルが三回、反動で動くのが感じられた。火薬の燃えるほそい筋が銃口からはきだされ、闇のなかでつかのまのきらめきを発した。ドアが開ききると同時に、標的はプラスティックの破片となってとびちった。

教官が防御側の四人の番号を読みあげ、寝ころがれと命令するのが聞こえた。「おまえたちのエアロックも使用不能となった」と教官は簡潔にいった。それから、「みごとだったぞ、中佐……昇進の資格ありだ」

ミルスキーと三人の同志は、モックアップに近づいていった。防御側の兵士たちは、ハッチの外の大地にじっと横たわっている。動いているのは、彼らが背中に背負った生命維持装置のディスプレイの数字だけだ。ミルスキーはかがみこみ、バイザーをとおして、彼らのひとりにウインクしてみせた。その男は少しもおもしろくなさそうな顔で、にらみかえした。

「二時方向をふりかえってください、同志中佐」部下のひとりがいった。ミルスキーはふりかえり、伍長のがっちり防護された腕と指の指す方向を見やった。

〈ポテト〉——はっきり楕円形とわかる強烈な光点が、月の地平線の向こうに昇ろうとしていた。

まるで星々が人生のすべてのようだ——みんなはいつも、彼を評してそういう。三年前、最初にそれを指摘したのは、エフレーモワだった。

「ああ、見える」とミルスキー。
「われわれの訓練も、あれのためではないのですか、同志中佐？」
ミルスキーは返事をしなかった。そのとき、教官が割りこんできて、むだ話はやめろと命じた。
「星に耳ありさ、伍長」とミルスキーは部下にいった。「目標を制圧し、時間内に基地に帰って、もっと政治理論を学ぶとしよう」伍長はミルスキーの視線を受けとめ、顔をしかめたが、それ以上はなにもいわなかった。
四時間後、本物の基地にもどると、勝利者側の吊り寝袋の列のあいだを教官がやってきて、ひとりひとりと握手し、暖かく勝利をねぎらい、故郷からの手紙を手わたしてまわった。どこか辺境の党支部長からの文書も手紙に数えるなら、全員が手紙を受けとった。教官は、最後にミルスキーの寝袋のそばで立ちどまった。
「きみへの手紙は一通だけだ、同志……大佐」と彼はいって、厳重に封印され、テープどめされた、分厚い封書をミルスキーにさしだした。ミルスキーはそれを受けとり、じっと見つめ、それから教官に目を転じた。
「あけてみたまえ」
ミルスキーはていねいに封を切り、折りたたまれた五枚の書類をとりだした。「昇進通知ですね」あまりうれしそうなようすを見せないようにして、ミルスキーはいった。
「それから、きみへの命令書もはいっている。同志大佐」と教官はいった。「諸君、昇進なった同志、パーヴィル・ミルスキー大佐の任地がどこか、知りたくはないかね？」
「どこです？」何人かがきいた。

「地球へもどれと書いてある」
「地球へもどる！」教官がオウムがえしに、「これはなんとしたことだ――この二年で四どめの月面訓練にやってきたきみが？　むざむざ地球へもどれというのか？」
全員がにやにや笑いながら、彼を見つめている。
「任地はインド洋です」とミルスキーがいった。「大隊長として、最後の訓練をするために」
「インド洋へ！」指で床を指し示しながら――地球を表わすしぐさだ――教官は大声でいうと、両手をあげて天を仰ぎ、天井に向かってうなずいた。
全員が歓声をあげ、いっせいに拍手を送った。
「ついにきみは、念願の星々を手にいれることになりそうだな、同志大佐」と教官はいって、力強くミルスキーの手を握った。

4

第四空洞の風景が、列車の窓外を猛烈な速さでとびすぎていく。スピードでかすんではっきりとは見えないが、丘の多い地形や、小さな湖、花崗岩らしい岩の露頭などが広がっているようだ。
「この鉄道は第六空洞までしか通じていない。ターミナルに着いたら、ジョーゼフ・リムスカヤほか、中国チームの何人かと合流する予定だ」
「リムスカヤ？　ＵＣＬＡにそんな名前の教授がいたけど」

「リムスカヤがいるから、きみが呼ばれたのさ。彼がきみを推薦したんだ」
「でも、あの人は数学・統計局にはいるとかで、大学をやめたのよ」
「それでワシントンにきて働いているうちに、アドバイザーと会ったというわけさ」
リムスカヤはかつて、UCLAの特殊数学セミナーの教授だった。パトリシアはリムスカヤがそれほど好きではなかった。背が高いくせにずんぐりとして、こわい赤髭をたくわえ、地声が大きく、独断的で、政治学の教授であると同時に、統計学と情報理論のエキスパートでもある。厳格な数学者ではあるが、パトリシアの見るところ、真に価値ある研究に必要な洞察力を欠いているあたり、典型的な学士院会員と思えたものだ。厳格で、高飛車で、想像力に欠ける、厳しい教師。
「なぜ彼がここにいるの?」
「アドバイザーが役にたつと思ったからさ」
「彼の専門は人口増減の統計理論よ。むしろ社会学の範疇だわ」
「そのとおりだよ」とラニアー。
「それなら——」
ラニアーの顔にいらだちが浮かんだ。「考えてもみたまえ、パトリシア。ストーン人はどこにいってしまった? 彼らはなぜ、どこかに消えたんだ? それに、どうやって?」
「わからないわ」パトリシアは静かに答えた。
「ぼくらにもわからない。いまはまだね。リムスカヤは社会学班のチーフだ。その答えは、彼らが解いてくれるかもしれない」

「どうしていちいちそんなまわりくどい答え方をするのよ」
「きみが質問しなければ、ぼくもこんないいかたはしない」
パトリシアはしばらく黙りこんだが、「質問しない、という保障はできかねるわ」といった。
「ただ、わたしが単純な質問をしているのに、そんなもってまわったいいかたはやめて」
ラニアーは眉をつりあげ、うなずいた。「どうか、好きでやっているとは思わないでほしい」
とすると、この人にもストレスがあるんだわ、とパトリシアは思った。それはわたしも同じ。ただ、この人にはそれに慣れるだけの時間があったということでしかない。ただし、あの図書館みたいなものに……そして、〈ストーン〉そのものに慣れることができるとしたら、だけどね。そうなったら、きっとまた……。

パトリシアはふいに、第七空洞には黒板の迷路が待っていて、そこにはさまよえる数学者がうようよしており、なにかとてつもないひとつの問題にとりくんでいるというイメージを抱いた。彼らの上には、神のように、巨大なスクリーンからアドバイザーが辛抱強く見まもっている。ラニアーはその化身（アヴァターラ）というわけだ。
「リムスカヤは、半分ロシア人の血を引いていてね」ラニアーがつづけた。「彼のおばあさんは未亡人となって合衆国に移民してきた。そして入国書類に記載されるとき、あやまって息子の姓に、リムスカヤという女性名が使われたのさ。リムスカヤ自身、ロシア語を母国語のように話せる。ときどき、ロシア人とわれわれの通訳をしてくれることもあるよ」

列車のうなりがかんだかくなり、気がつくと彼らは、第五空洞につづくトンネルにとびこんでいた。ほどなくトンネルの向こうに現われた第五空洞は、これまで見てきた空洞よりも暗かった。

平らな灰色の雲の天蓋が、空洞上方の大気を押し隠し、プラズマチューブの半分を断ち切っている。雲の下には、いかにもワグナー的な、荒涼たる山脈の連なり。無煙炭の赤鉄鉱をまぜたような、暗い虹を映す、ぎざぎざの塊だ。山と山は錆色の峡谷で隔てられ、その峡谷を断ち切る滝は、水銀のような川に流れこんでいる。空洞の床の中央にいくにつれて、山々は目を見はるほど異様な形となり、アーチ、巨大なでこぼこの立方体、先端の欠けたピラミッド、段々をなす不規則な石版の土手、といった形を形成していた。
「ここはいったい、なに?」パトリシアがきいた。
「一種の採掘場だと考えられている。ここにいる地質学者のうちのふたりは——ロバート・スミスには会ったね、彼もそのひとりなんだが——各空洞が掘りぬかれたとき、第五空洞だけは未完成のまま残されたんじゃないかと考えている。原材料を採掘するために、残しておいたらしい。そして、ストーン人はそれを利用した。これはその傷跡というんだ」
「むかしのホラー・ムービーのファンには、垂涎の場所ね」とパトリシア。「ドラキュラ城は、そこらにない?」
第六空洞へのトンネルを通るわずかな時間のあいだ、ふたりはなにも話さなかった。やがて電車のうなりが低くなり、トンネルの闇が薄れてくると、ラニアーが立ちあがった。「さあ、終点だ」
ターミナルの下層部は、洞穴のような構造で、赤みがかったコンクリートの無彩色の石板と、黒と灰色の小惑星岩とで造られていた。かつて延々と長い列を作ってならんでいた者があったかのように、プラットフォームにはかすかな線のあとがあった。

「ここはかつて、工事用の駅だったんだ」とラニアーがいった。「第六空洞掘削のとき、ここは作業拠点となっていた。たぶん、六百年ほどむかしのことだ」
「〈ストーン〉が打ち捨てられてから、どのくらいになるの？」
「五世紀さ」
ふたりは傾斜路を登って、大部分が厚い透明パネルで造られた建物にはいっていった。パネルの向こうには、第六空洞の荘厳な眺めが一望できた。
谷の床には、巨大だが稼働していない、機械のようなものが連なっている。円筒形、立方体、垂直に積み重ねられた円盤。まるでばかでかい回路板のようだ。ターミナル・ビルのすぐ外には、はるか向こうの壁まで、球形タンクの列がずらりとならんでいた。彼方の壁は少なくとも高さ百メートルはあり、タンクの直径もその半分はある。ターミナルの、彼らがいるレベルから下には、いっぽうに球形タンク群、もういっぽうにそれと平行に横倒しの円筒の列がならんでおり、それにはさまれた形で、巨大な峡谷があって、きらめく水をいっぱいにたたえていた。水中にはパイプが何本も潜りこみ、そのそばには大きなポンプがあった。そのすべてを覆って、厚く真っ黒な雲が無数の塊をなして浮かんでおり、雨のカーテンや風混じりの雪を降らせている。どこかから、たえまない脈動が、聞こえるというよりも肌で感じとれた。山が動くような、はるかな海底が鳴動するような、可聴域外の振動だ。
ある角度を見あげたとき、雲と雲の層のはざまに、ぼんやりと空洞の反対側の床が見えた。そこにも、正体不明の機械の絨毯が、でこぼこをなして広がっていた。
「この空洞内には、動く機械がまったくないんだ。例外はあの大型ポンプだけだが、それも多く

はない」とラニアーが説明した。「ここの建設者たちは、備わった天候サイクルに依存していたようだ。雨が降って、機器を冷却し、その水は峡谷を流れて浅い池に流れこみ、蒸発し、気化熱で温度をさげ、大気維持システムがその熱を排出する。こまかい仕組みはいまだに定かではないがね」

「なんのためにそんなことをするの?」

「〈ストーン〉が最初に設計されたとき、第六空洞もまた都市になるはずだったらしい。いっぽう、建造者たちは、〈ストーン〉が〇・〇三Gでしか加速できないように設定していた。ところが、〈ストーン〉の出発準備が整う直前になって――それに、大がかりな掘削が完了する直前になって――〈ストーン〉をその動力の限界まで加速する方法が見つかった。その方法は複雑で高くつくものだったが、それで〈ストーン〉が得られる融通性を考えると、採用せずにはいられなかった。そこで、第六空洞には選択的慣性吸収機構が設置された。いま目のあたりにしているあれのごく一部が、かつてのそれだったのさ」ラニアーはガラスの向こうに広がる展望に顎をしゃくってみせ、「どの空洞の床も傾いていないのはそのためだし、池や川に氾濫を防ぐ堤防がないのもそのためだ。そんなものはいらないんだよ。第六空洞が選択的に〈ストーン〉内のいかなる物体の慣性をも吸収するんだ。マクロ的に見れば、それは船全体の加速と減速をも打ち消す。ミクロ的には、列車の慣性効果を打ち消すわけだ。その働きはひとりでに調整されている。もっとも、〝脳〟にあたるものはまだ見つかっていないがね」

雨が透明な屋根を打ち、吹き抜けの上の四十五度の斜面を流れ落ちた。ラニアーはことばを切り、天井を覆う雨粒や小流を見あげた。

「そのとき以来、吸収機構は改良され、拡張されつづけてきた。最盛期には約三平方キロにもおよび、第六空洞のその他の部分は、工業や研究活動など、都市部ではできない事業に使われた。いまでは、第七空洞の管理もここが引き受けている」

そのとき、ターミナルの向こうの峡谷の縁から、トラックが近づいてきた。乗っているのは四人で、全員が黄色い雨ガッパを着ている。トラックは数メートル先の、盛りあがった高架路の上でとまった。

「歓迎委員会のおでましだ」とラニアー。ふたりは階段の最上部に登っていった。吹き抜けには冷たい空気がたまっており、その一部が外の突風にあおられて流れてきて、パトリシアはぶるっと身震いした。頭上では雨の歌声がやさしく響いている。ガラスをつたう小流のあいまから、堀のような雲の裂け目を通して、北極点が見えた。いままでの極点は、事実上なにもなく、飾り気がまったくなかったが、ここの極点は、長方形の箱の列が、畔のような筋を形作っていた。箱と箱のあいだは等間隔で、ここからは急な階段のように見える。ひとつひとつの箱の表面には楕円形のなにかがあった。パトリシアの見るところ、その箱の幅は少なくとも一キロはあり、楕円の長軸の長さはその半分くらいのようだ。

階段を登ってきた四人のうち、先頭の者が帽子をとった。パトリシアはそこに、かつての指導教授の顔を見いだした。髭で縁どられた赤ら顔、長いあいだ苦痛に苛まれてきたかのように、懐疑の色を浮かべた小さな目。リムスカヤは記憶にあるとおりの姿でそこにいた。彼はパトリシアの凝視から身を守るように見かえしてから、ラニアーに会釈した。彼の背後では、背が高く、落ちつきはらったようすのブロンドの女性がひとりと、緑の帽子をかぶった中国人の男女がひとり

ずつ立っていた。三人とも雨具をぬいで、水を切った。

リムスカヤがパトリシアに近づいてきた。嫌悪の表情こそ浮かべていないが、しぐさのひとつひとつに、超然としたそぶりがうかがえる。「ミス・ヴァスケス」やおら、彼はいった。「きみがここに耐えられるといいのだがね。きみを選んだ者として、わが身の愚かさを嘆くようなまねはさせないでほしいものだ」

パトリシアは鯉のように口をぱくぱくさせ、それから大きすぎる声で笑った。「わたしもそう願いますわ、教授！」

「気にしないでいいのよ、この人のいうことは」横から、ブロンドの女性がいった。感じのいい、よく響く声の持ち主で、かすかにイギリスなまりが聞きとれた。「この四カ月間、彼があなたのことをほめない日はなかったんだから」彼女は帽子を脇にはさみ、片手をさしだした。パトリシアはその手を握った。力強く、暖かい握手だった。「わたしはカレン・ファーリー。こちらは呉葛墨、それから、張宜興」張と呼ばれた女性がにっこりとほほえんだ。まっすぐな黒髪を眉の上で切りそろえているのは、中国の最新ファッションだ。「わたしたち、北京工科大学からきました」

リムスカヤは、まだパトリシアを値踏みするように見つめていた。そのグレイの目がすがめられ、「きみは健康だな？　宇宙酔いにもかかっていないし、情緒的にもしっかりしているな？」

「だいじょうぶです、教授」

「よろしい、それではきみたち――」と、今度はファーリー、呉、張に向かって、「――この娘のめんどうを見てやってくれ。わたしはこれから第一空洞へ休養にいく。もどってくるのは一週

間後、ことによるともっと先かもしれん」リムスカヤはラニアーに手をさしのべ、力をこめて握りしめた。「わたしは疲れた。このすべてがなにを意味するのか、わたしには皆目見当がつかん。ただでさえ想像力があるほうではないのに、ここときたら……」ぶるっと体を震わせて、「たぶん、ここにはきみのほうが適任だろう、ミス・ヴァスケス」そういうと、彼はぎこちなく仲間たちに会釈し、カッパをとりあげ、地下鉄のプラットフォームにつづく傾斜路へ歩みさっていった。

「彼がうらやましいよ……ちょっぴりね」呉が完璧なカリフォルニアふうの英語でいった。呉は身長がパトリシアと同じくらいで、肥満体とまではいかないが、小太りの男だった。髪はきちんとクルーカットに刈っているが、顔は童顔だ。「最近、あなたの論文をいくつか拝読しましたよ、ミス・ヴァスケス」

「パトリシア、と呼んでください」

「残念ながら、ぼくの理解力を遠く超えていましたがね。張とぼくは、電気技師なんです。カレンは物理学者」

「理論物理学者よ。あなたに会えるのがとても待ちどおしかったわ」ファーリーがいった。

「待ち遠しい、だよ」ラニアーが訂正した。

「そうなのよ」と、怪訝そうな面持ちのパトリシアに、ファーリーはほほえみかけて、

「わたしは中国の人民でもあるの。たいていの場合、たいていの人には、アメリカ人で通じるんだけど。なまったときには、訂正してちょうだいね」

パトリシアはしかつめらしい顔で三人を見やった。初対面の人間を前にして、気軽に話すための心の準備ができておらず、少し緊張していたからである。

「パトリシア、これからみんなで第七空洞へいくつもりなんだが」とラニアーがいった。「きみがそうしたければ、ここでしばらく休憩してもいいんだよ」

「いいえ」パトリシアはきっぱりとかぶりをふった。「きょうは大作映画を見せてもらえるんでしょう」

「それでこそ女よ」とファーリー。「自殺的といっていいほどの強情さ。わたしは好きね、そういうの。張にもそれがあるわ。でも呉は――わたしたちは彼をラッキーって呼んでるんだけど――のんびり屋なの」

「ファーリーもリムスカヤ教授も、奴隷使いなのよ」と張がいった。彼女の英語の発音は、呉やファーリーよりもずっとへただった。彼女はコートの下のポーチから雨具をふたつとりだし、ラニアーとパトリシアにわたした。ふたりは手早くそれを着こみ、駅舎のシェルターの外に出た。

空気は清浄な雨と、オゾン、金属のにおいがした。やがて、雨足は衰えて霧雨となり、雪もやんだ。高架路の下の傾斜した金属壁面を、水がごうごうと流れ落ち、無数の溝に集まって、何メートルも下の集水口に流れこんでいく。パトリシアが集水口をのぞきこむと、なめらかな水の漏斗が闇のなかへつづいているのが見えた。

高架路を走るトラックは、第一空洞の横断に使ったのと同じタイプのものだった。運転手役のファーリーは、やはりパトリシアが助手席に乗るようにといった。ほかの者たちは、シートでくるまれた科学器材の箱を押しのけて、後部座席に乗りこんだ。ファーリーはゆっくりとトラックを発進させ、やがてスピードをあげた。

高架路は道幅が広くなって、平らなリボンとなり、急速に広がりゆく霧に包まれてよく見えな

いが、タンクや灰色をしたなにかのあいだをぬって、まっすぐに伸びていた。呉が前部のシートのあいだに身をのりだした。「この道路の素材はアスファルトみたいに見えるけど——そうじゃない。これは小惑星岩から金属成分をすべてぬきだして、粉にしてから、植物油を主成分とするオイルで練ったものなんだよ。きわめてじょうぶで、ひびもはいらない。こいつの特許はだれがとるんだろうっていってるんだ」

なんとなく、パトリシアはものうい気分に陥りはじめていた。霧は青みがかっていて、そのなかにいるとまるでサファイアに包まれているような気持ちになってくる。雨がふたたびふりだして、雨滴がトラックの屋根を打ちはじめた。その音は——ヒーターからそっと吹きだしてくる温風ともあいまって——なにもかもが弛緩した、モニターで映画を見ているのと変わらない、くつろいだ気分をもたらした。

パトリシアはすばやく、そんな気分をふりはらった。ラニアーがじっとこちらを見ている。彼女はラニアーをふりかえり、すぐに前へ向きなおった。どうしてわたしが、これほど重要視されているんだろう？　この大いなる謎の塊の前で、わたしになにができるというのだろう？

そのスケールだけでも、思考を麻痺させるにあまりあった。なにしろ、雲の蔽いの裂け目から見える反対側の床の眺めは、距離からいって、大気圏に再突入するシャトルの窓からの眺めと変わらないのだ。

トラックはゆるやかにカーブしたハイウェイを通り、二十分で第六空洞を横断した。おなじみのアーチとトンネルの入口が、前方にのしかかってきた。トンネルのなかにはいると、ファーリーがライトをつけた。ほどなくトラックは、第七空洞に出た。

天候が荒れぎみだった第六空洞のあとでは、なにものにもさえぎられず、冷えびえとして澄んだプラズマチューブの光が、心地よかった。
「小鳥のさえずりだって聞こえてきそう」パトリシアがいった。
「そうならいいんだけどね」とファーリー。車は傾斜路を降りていった。前方には、第六空洞のハイウェイと同じ材質で造られた、幅は半分ほどの道路がまっすぐにつづいていた。道路の両端には、そよとも動かない黄色い草を頂上に生やした砂色の小山が、何キロにもわたって点在している。道路からちょっとはいったところには、低くひょろひょろした木がまばらに生えていた。空洞の床の曲面を西に登ったところには、いくつか小さな池があり、南極の連絡孔のそばからは、川のようなものが流れだしているのが見えた。南極の周辺には、わずかばかり、ふわふわした雲がへばりついている。風景は、プラズマチューブの光にさえぎられて見えなくなるまで、東西にどこまでも変化がなく、穏やかにつづいていた。プラズマチューブ自身は、南極の中央から、さえぎられることなく、一直線のビーコンとなって伸びていた。
パトリシアは、自分のまわりに、車内の期待が高まりだすのを感じとった。みんな、彼女の反応を待っているらしい。
なんに対する反応？　どちらかといえば、この空洞は第一空洞よりもインパクトが弱いのに。パトリシアの肩に力がはいった。それなら、わたしのどんな発言を期待してるの？
ラニアーがシートのあいだから手を伸ばし、彼女の腕にふれ、「なにが見える？」ときいた。
「砂、草、池、木々。川。雲が少し」
「まっすぐ前を見てごらん」

パトリシアはいわれたとおりにした。空気は澄んでいる。透明度は少なくとも三十キロはあるだろう。北極はぼうっとかすんでいて、頭上にくっきりと見えていた南極と比べると、ずいぶん存在感が薄い。パトリシアは上を見あげて目をすがめ、プラズマチューブの先端を見きわめようとした。
プラズマチューブには、はてがなかった。それはどこまでも、三十キロなどよりずっと向こうまで、しだいに暗く、細くなりながら、はるかな地平線にほとんど接していた。
もちろん、非曲面においては——中心軸と平行方向に見えるなら、円筒も非曲面だ——地平線は曲面よりずっと高くなる。無限の距離が与えられれば、地平線は遠近法における真の焦点となるだろう……。
「この空洞は、ほかのより長いのね」とパトリシアはいった。
「そうなんだ」と、呉が慎重に同意した。張もうなずき、なにかのジョークのようににやにや笑いを浮かべ、おちつきはらったようすで両手を膝の上で組んでいる。
「まず、整理させてちょうだい。わたしたちは、〈ストーン〉の奥へ約二百二十キロメートル進んできた。いっぽう、〈ストーン〉の全長は二百九十キロメートル。とすれば、この空洞は、長さが五十キロメートルあってもおかしくはないわよね」彼女の両手は震えはじめていた。「でも、そうじゃない」
「よく見てみたまえ」とラニアーがいった。
「これは目の錯覚だわ。北極点が見えないもの」
「錯覚じゃないのよ」心から同情するような声で、ファーリーがいった。

「じゃあ?」パトリシアは車内を見まわした。ほかの者たちは、ただひとり謎めいた笑みを浮かべている張を除き、みんなまじめくさった顔をしている。「いったい、なにが見えるといえばいいのよ?」
「そいつは、きみの口から聞きたい」とラニアー。
パトリシアは、腹をたてながらも頭を働かせ、空洞の北極を見あげ、この巨大な円筒の異様な遠近感のなかで、そこまでの距離をはじきだそうとした。「トラックをとめて」
ファーリーが車をとめ、パトリシアはトラックから降りて、道路に立った。それから、梯子をつたってトラックの屋根に登り、まっすぐに伸びる道路を見やった。道路は消点までつづいていた。極点も見えない。柵も見えない。頭上の風景は、あいかわらず均一なままだ。
「大きいわ」とパトリシアはいった。ファーリーとラニアーはトラックのそばに立って、彼女を見上げている。呉と張も降りてきた。「この空洞は、小惑星よりも大きい。向こう側の端があるはずのところよりずっと向こうまでつづいている。あなたたちがわたしにいわせたがっているのは、これ?」
「われわれは、説明はしない」とラニアー。「ただ見せるだけだ。それしか方法がないんだよ」
「この空洞にははてがない。〈ストーン〉の端を越えてまだ向こうに伸びている、そういいたいのね?」自分の声に、パニックとともに、うっとりとした響きがにじみでてきているのがわかった。
六年前、スタンフォード大であの教授がいったことはまちがっていた。宇宙人と神のほかにも、彼女の研究を理解できる者が存在したのだ。いま彼女は、シャトルとOTVを乗り継ぎ、なぜ自

分がヴァンデンバーグからはるばる〈ストーン〉へ連れてこられたのかを理解した。
〈ストーン〉の内部は、外殻よりも長い。
第七空洞は、無限につづいていたのである。

5

パトリシアが目覚めたのは——時計を見ると——寝入ってから九時間後だった。彼女は簡易ベッドに横たわったまま、テントのカンバス地が風にはためくかすかな音に耳を傾けた。少なくとも、第七空洞のこのあたりでは、しっかりした壁のある建物を建てる必要はない。空気は乾燥していて天候も穏やかだし、気温も暖かい。彼女はアルミニウムのポールのあいだに張った天蓋を見あげ、布地を通してぼうっと光るプラズマチューブの輝きを見つめた。
わたしはここにいる。これは現実なんだわ。
「まぎれもなく、ね」とパトリシアはつぶやいた。彼女は大きなテントの天蓋の下で、ベッドに横たわっていた。側壁が巻きあげられているので、外がよく見える。テントの広さは百平方メートルくらいだろうか。床には防水布が敷かれ、複雑にパーティションで仕切られている。となりの区画では、ファーリーと張が声をひそめて、中国語で話をしていた。
第七空洞にきて最初の数時間、みんながテントの下に彼女の個室を作り、料理の準備をしているあいだに、パトリシアはさかんに動きまわり、蝶のようにひらひらととびまわって、ときにま

ったくわけのわからない質問をまじえながら、あれこれとたずねまわった。ラニアーはしばらく、むっつりとこちらを見つめていた。パトリシアはなんとなく、彼を失望させてしまったような気がした。が、しばらくするとラニアーもほかの者たちに加わって、パトリシアの質問を——彼女といっしょに——笑うようになり、やがて極上のシャンパンをとりだして、こういった。「生まれ変わったきみを、これで洗礼しよう」

第一ラウンドでは、彼らはなんとか、これまでみんなが単純に〝第七空洞〟、または〝通路〟と呼んでいたものに、もっと適切な名前をつけようという話になった。

「スパゲティ・ワールド、というのはどう？」ファーリーが提案した。いや、それはおかしい、と呉。なかが中空になっているんだから、むしろマカロニ・ワールドじゃないか。張はパイプ・ワールドの名をあげた。こまるのは、〝チューブ〟と〝トンネル〟が、すでに〈ストーン〉のほかの部分の呼称に使われていることだ。このふたつのことばと形状は、たがいに反響しあい、性的な色合いを帯びた、合わせ鏡のような混乱をもたらしていた。

シャンパンをグラスに二杯あけたころ、パトリシアはひどく眠くなってきた。そして、みんながテントの下に組み立ててくれた簡易ベッドに横たわったとたん、ぐっすり眠りこんでしまったのだった。

パトリシアは伸びをし、腕まくらをして、茂みや砂地を見わたし、靄のなかにどこまでも伸びていく、巨大な土の円筒を見やった。ファーリーが仕切りの向こうから出てきて、パトリシアのベッドのそばに腰をおろした。

「まだ夢うつつ？」

「いいえ――考えてたの」
「一年半前、ギャリーに〈ストーン〉めぐりの旅へ連れだされたときにはね、わたし、気が狂うかと思ったわ。このオリエンテーションのやりかた、どう思う？　つまり、あなたにははじまったばかりだけれど……」彼女はいいよどみ、パトリシアを鮮やかなブルーの目で見つめた。パトリシアは思った。たぶんファーリーは、わたしよりも十歳は年上だろう。口と目のふちには、笑い皺がある。しゃべりかたは単刀直入で――ラニアーの女性版といったところかしら。
「この目で〝一見〟してもまだ信じられないんだもの」とパトリシアは答えた。「百聞しただけじゃとてもむりだったでしょうね」
「もう少しすると、これがあたりまえに思えてくるわ」ファーリーはグレイ・グリーンの道を見やりながら、「それでたまに、心配になるの。新人がやってきて、わたしたちがすっかり見慣れた光景を見たときだけ、これがじつはとてつもなく奇妙なものであることを思いだすのよ。ときどき、自分が核融合プラントの上を這いまわるカブトムシみたいに思えることがあるわ。ある程度までは感じられる。ある程度までは理解できる。でも、全体を理解するのは、わたしには絶対にむり」ため息をつき、「ギャリーがいい顔するとは思わないけれど、わたし、ブージャムのことは警告しておくべきだと思うの」
「あの人もそんなことをいってたわ。なんなの、それは？」
「何人か、ブージャムを見た者がいるのよ。つまり、幽霊ね。わたしも、このグループのメンバーも、まだ見たことはないけれど。大半は、あれは心理的なもので、地下鉄の標識を見まちがえたんだろうという意見なの。はっきり目撃された例はないし、写真や記録にとられたこともない

しね。だから、目にふれるものには注意していなさい。そして、もっと注意しなければならないのは――〈ストーン〉や〈通路〉が完全に捨てられたものであるとは、まだだれも確認していないということよ。全空洞を充分に調査し、完全な警備体制を敷くには、とても手が足りないの。だから、もしなにかを見たら、報告するのよ。でも、それを信じてはだめ」にっこりとして、「これで意味が通じる？」

「いいえ」寝台の縁から足をぶらぶらさせながら、パトリシアがいった。「わたしの研究スケジュールはもうたててあるの？　なにを、いつするか、もう決まっているのかしら？」

「もう三十分もしたら、ギャリーが話してくれるでしょう。いまはまだ、眠ってるわ。くらくらなのよ。じゃない、くたくたなの。わかるでしょう、みんな少しばかり、彼の体が心配なのよ」

「あなたもほかの人たちも――グリーン・バッジをつけているけれど、第三レベルの通行権は持っているの？」

「とんでもない」ファーリーは笑って、長いブロンドの髪を肩のうしろへはねあげた。「わたしたちは中国人よ。ここまでこられただけでもラッキー。わたしたちがここにいられるのは、たまたま最近は中国政府が西側に友好的で、それに対する外交辞礼のためよ。それでも、かわいそうなロシア人よりはずっとましだわ。彼らは連絡孔とプラズマチューブの研究ばかりで、それ以外のものにはほとんどなにも近づけてもらえないの。だれもがプラズマチューブ物理はロシア人の専門だと考えてるから、自転軸付近に押しこめられてるのよ。アメリカ人には、彼らがどんなにすばらしい考古学者かわかっていないんだわ。それに、彼らの社会学についても……」ファーリーは残念そうにかぶりをふった。「わたしは生まれつきの、ガチガチのマルクス主義者なの。で

も、ストーン人が厳格なレーニン主義のドグマに合わせるとは思っていないわ」
「ギャリーは協定についてこまかいことは話してくれなかったわ。地球で説明を読んではきたけれど……なにもかも打ち明けられているわけでないことはわかっていたわ」
「最初に〈ストーン〉に到着して調査をはじめたのは、NATO＝ユーロスペースの船だったの。だから、ISCCOM協定によって、NATOが調査を監督する権利を得たのよ。そして、NATOを牛耳っているのは、もちろん合衆国でしょう。ソ連は、これは特例だとして抗議したけれど、いまのところたいして進展は見られないわね。中国は深宇宙にはそらほど――それほど――興味がないので、わたしたちは、許されたわずかのものを受けいれたというわけ。おとなしくへつらっているだけで、わたしたちはロシア人よりずっと深くまではいりこめたわ。黙っていても、いずれ気づいたでしょうけれど、第七空洞には、ロシア人がひとりもいないのよ」
「あなたは、中国人とは思えないわ」
ファーリーは笑った。「ありがとう。みんながわたしの発音はすばらしいといってくれるわ。でも、ときどき単語がね……まあ、それはいいわ。あなたがほんとうにいいたかったのは、わたしが中国人には見えない、ということでしょう。わたしは白人移民の二世なの。両親はチェコスロヴァキアから追放されたイギリス人。農業の専門家だったから、一九七八年に移民したときには、中国も諸手をあげて歓迎したそうよ。わたしはそこで生まれたの」
「わたし、カリフォルニアの外には一歩も出たことがなかったの」とパトリシアはいった。「あなたに比べると、わたし、過保護のような気がしてくるわ。実世界には全然触れたことがないんだもの」

「実世界って、複雑な国際政治のこと？　それはわたしもおんなじよ。わたしは生まれてからほとんどを河北省の農場で過ごしたんだもの。まわりとは隔絶されてね。それでもいま……わたしたちはふたりとも、ここにいる」ファーリーは目を伏せ、かぶりをふった。「いろいろな理由で、わたしたちが話しあうべきでないことはたくさんあるわ。ギャリーはわたしを信用してるし、彼の信用は尊重するつもりよ。わたしたちは、できるかぎり礼をつくし、誠実であるように努めてきたわ。わたしたちがこれまでやってこられたのは、そのおかげよ。だからね、わたしたちの研究に直接かかわりのある技術的問題についてはかまわない。でも、呉や張やわたしがオフリミットのことがらについては――口にしないで。いっさい」

「わかったわ」とパトリシアは答えた。

ファーリーは北に顔を向け、〈通路〉の口をまっすぐ見つめた。「これを造ったのはストーン人よ。彼らは人間だったわ――あなたやわたしと同じような。それ以上のことは、なにもわかっていない。でも、いつの日か、わたしたちは彼らに出会うでしょう。あるいは、人とはすっかり変わってしまった存在に」ファーリーはかすかに笑みを浮かべて、「この予言は、あなたに強烈すぎたかしら？」

パトリシアはうなずいた。「それ以上つっこんだことをいわれたら、震えがくるわ」

ファーリーはぽんとパトリシアの肩をたたいた。「もうもどらなきゃ。もうじきギャリーがくるからね」

彼女は仕切りの向こうにもどっていった。

パトリシアは立ちあがり、ジャンパーの皺を伸ばしてから、二、三メートルほど砂地を歩いて

いった。そこでかがみこみ、両手をひとむらの草のなかにすべらせた。
〈通路〉の奥行きははてしなく、思わず吸いこまれてしまいそうで、息をすることさえわすれそうになった。〈通路〉は広々として、効率的で、信じられないほど美しかった。照明は均一で、ずっと向こうのほうまで、細部がはっきりと見える。砂丘、茂み、無数の池、南極から流れだしているいく筋もの川……。
ファーリーにはあんなことをいわれたが、パトリシアは平気でもう十メートルほど西へ歩いていった。そこまでいってみると、走ればテントまであっというまの距離でもあることだし、さらに同じくらい遠くへいってみても、たいして心配はないように思えた。それから十分後、彼女は小さな林の縁にたどりついていた。そこでうしろをふりかえり、テントやトンネルから降りてくる傾斜路の位置を確認した。
林の木々は背の低い松といった趣きで、高さはせいぜい二メートルほど、ふしこぶだらけのねじくれた枝々がたがいにからみあい、通過不能の葉むらを形成していた。地球でこれとそっくり同じものを見たことはないが、その針のような葉は、アルミニウムのツリーに変える前、家族が毎年クリスマス・ツリー用に買っていた、ダグラスモミの葉にそっくりだ。
彼女は身をかがめ、低い葉の天蓋の下をのぞきこんだが、生き物のいるようすは見あたらなかった。
なんて奇妙な話だろう。ストーン人が生きている動物を全部連れていってしまったなんて。〈ストーン〉の動物を一匹残らず。彼らはどこにいったんだろう?
だが、いまならその行く先は明白だった。〈通路〉の奥を見るたびに、彼女は吸いこまれそう

な感覚を覚えた。彼らは北へ、無限の彼方へ去ったのだ。もしこの〈通路〉がほんとうに無限なら。

「パトリシア！」ラニアーがテントからどなった。パトリシアはとびあがり、ちょっとうしろめたい気持ちになったが、彼の声には、あわてているようすも怒っているようすもなかった。

「はあい？」

「仕事だ」

「いまいくわ」彼女はテントにもどった。

ふたりは、テントの下に置かれた、折りたたみテーブルにすわった。ラニアーがスレートをとりあげ、メモリー・ブロックをさしこみ、スレートをふたりのあいだに置いた。「なぜわれわれがきみを必要としたか、もういくぶん見当はついているだろう。ここにはふたつ、解明しなければならない謎がある。そしてあれは」——と彼は〈通路〉を指さして——「そのふたつのうち、まだやさしいほうかもしれない」

「とてもそうは思えないけど」

「もう、きみの当面のスケジュールはたててある。まず、第三空洞の都市にいき——そこの図書館に専念する。この都市には、〈ストーン〉そのものと同じく、〈冠毛〉という名前がつけられている。できたのはアレクサンドリアよりも二世紀新しい。その間、何度か第二空洞のあの図書館を訪ねる。腰をすえてとりかかるまで、一、二週間はかかるだろう」ラニアーはスレートに指を伸ばし、RUNのボタンを押した。スクリーンの上を指示がスクロールされはじめた。「地下鉄、スケジュール表、保安手段の利用法は、ここに書いてある。残念ながら、つきっきりどころ

か、ときどきでさえ、きみのガイド役は勤められそうにない。たえず仕事が山積みの状態でね。それに、しばらくのあいだ、地球にもどることになりそうなんだ。そのあいだ、報告はキャロルスンにしてくれ。保安体制のこともふくめ、きみが知らなくてはならない事実は、そのメモリー・ブロックにはいっている。話していい相手、いけない相手、行動基準、そういったようなことをね。ファーリーや呉や張相手のときは、話の内容には注意してくれ。きみと同じ特権を持っていない人間には、だれにでも注意が必要だ」
「あなたのほかに、話していい人はだれ？」
「キャロルスンだ。彼女にはなんでも話していい。ただし、図書館で読んだことだけは、だめだ。彼女にもその調査権がおりるよう、手配しているところなんだがね。いまはまだだめだ。ほかのメンバーには、二、三日うちに会えるだろう。なかには図書館の閲覧権を持つメンバーたちがいるから、彼らと協力し、データをつきあわせながら、研究にあたってほしい。いいね？　これからの二週間ほどは、ひたすら調査、調査、調査だぞ」
「キャンプからどのくらい遠くまでいっていいの？」
「歩いていける範囲ならどこまででもいいが、無線は携行すること。〈通路〉を五十キロいったところに監視哨があって、そこには〈通路〉内のいかなる動向をも数百キロの範囲で探知できるセンサーがとりつけられている。監視哨から戻れと指示があったら、できるだけ早く第六空洞との連絡トンネルにもどりたまえ」
「そんなことが起こる可能性は、どのくらいなの？」
「小さいよ」ラニアーは肩をすくめて、「たぶん、皆無だろう。いまのところ、いちどもそんな

ことは起こっていない。極端な安全処置に腹をたてないでもらえるといいんだがな。なにしろ、きみにもしものことがあったら、アドバイザーがかんかんになって、床の絨毯の毛をむしってしまう」

パトリシアはにんまりと笑った。「すると、わたしのお目つけ役はだれがするの？」

「キャロルスンがここへくるまでは、ファーリーだ。ほかに質問は？」

「まず、とりかからせて。質問はそれからにするわ」

「そいつはいい」ラニアーは彼女を残してテーブルをあとにした。パトリシアはスレートをとりあげ、最初のメモリー・ブロックを読みはじめた。

6

もう二日したら、つぎの段階を教育しにくるといって、ラニアーはべつの仕事をしに去った。数時間後、キャロルスンがやってきた。彼女は、メモリー・ブロックのはいった箱をひとつと、最近地球から送られてきたばかりの、より強力なプロセッサーを持ってきていた。「どこへいくにしても、少なくとも、仕事の一部はいっしょに持っていけるわけよ」とキャロルスンはいった。ファーリーと呉と張は、さっそく彼らの問題の一部を、新しいプロセッサーに処理させはじめた。

パトリシアは、〈通路〉に関する情報のはいったキューブを調べた。〈通路〉の長さは不明だが、連絡孔から送りだしたレーダー信号は、四ヵ月を経てまだもどってきていなかった。〈通

路〉の果てがないのか、それとも信号がいまだに説明のつかない方法で吸収されているかのどちらかだろう。

探険隊は、数次にわたって〈通路〉の遠征を試みているが、五百キロメートル以遠まで到達できたのは、つい最近になってからのことだった。その地点でも、〈通路〉は隣接する第七空洞とまったくようすが変わらないらしい。厚い地層でおおわれていて、気圧は〈ストーン〉の通常気圧と同じ六百五十ミリバール、プラズマチューブの螢光も通常の明るさだという。

だが〈通路〉には、ひとつだけ第七空洞とちがうところがあった。四百三十六キロ地点で〈通路〉内部は人工構造物でとりかこまれていた。四つの不動のキューポラが、地面の大きな窪みの上に、なにものにも支えられずに浮いていたのだ。おのおののキューポラは独立して存在し、同一円周上（サーキット）に、等間隔をおいて配置されていた。その材質はいまなお未知だが、固体であるという点をのぞいて、いかなる物質の特徴とも一致しない。八百七十二キロ地点にも同じサーキットがあり、新しい探険隊が、いまその一帯を調査しているところだった。

パトリシアはスレートの消去ボタンを歯で押し、小物入れに手をつっこんで、ステレオ・アタッチメントと、モーツァルトのコインをとりだした。アタッチメントは標準規格ソケットにするりとおさまり、『魔笛』を演奏しはじめた。彼女はそれを聴きながら、だれにもじゃまされずに、データを読みつづけた。

一時間半後、パトリシアは音楽を切り、休憩をとった。

わたしはあなたのお目付け役じゃないわ、とキャロルスンは抗議したものの、それでかえってパトリシアにはキャロルスンの役目がよくわかった。キャロルスンには第七空洞にさしせまった

用事などないし、その専門知識はパトリシアの研究を補うようなものではないのである。それでも、身近に年上の女性がいることは、心丈夫だった。パトリシアはリラックスし、キャロルスンとうまくやっていく自信を持った。質問するにはちょうどいい相手だったし、思いつきをあたってみるだけでも助かった。

そのいっぽうで、〈ストーン〉の規則と組織の複雑さは、なかなか憶えきれなかった。もっとも、ラニアーが残していったメモリー・ブロックの組織表には、それが明解に記されていた。ISCCOM調整委員会の監督のもとに、〈ストーン〉調査を統轄するのは、NATO＝ユーロスペース——ずばりいうなら、NASAと欧州宇宙機関だ。

調査の行なわれ方については、統合宇宙コマンドが多大な発言権を持っている。民間組織の手によるものであるにもかかわらず、この調査は大がかりな軍事作戦なのだ。名目上、サニーヴェイルとパサディナのオフィスで、民間組織と軍当局の仲介役をつとめているジュディス・ホフマンの存在も、その現実を少しも和らげてはいない。

〈ストーン〉駐屯部隊を構成するのは、アメリカ兵三百名（全体の約半数）、イギリス兵百五十名、ドイツ兵百名で、残りの五十名は、それぞれカナダ、オーストラリア、日本から派遣されてきていた。フランスはNATO＝ユーロスペースのメンバーではないので、〈ストーン〉への人員派遣の誘いを蹴った。その拒否に、NATOに対する抗議の意味がふくまれていたことは明らかだ。二十一世紀にはいって最初の二年間に、フランスはNATOから、大規模な軍備刷新に加わるようにとの圧力を受けていたのである。

〈ストーン〉駐屯部隊への命令は、各国指揮官を通じ、外部防衛隊指揮官である合衆国海軍大佐、

バートラム・D・カークナー、および、内部守備隊を預る、同陸軍准将、オリヴァー・ゲアハルトを通じて通達される。
六百名の兵員は、攻撃を受けた場合に民間人を守るため、〈ストーン〉じゅうに配置されている。何者が攻撃してくるのかはとくに言明されていないが、はじめのうちは明らかに、第七空洞から、もしくは未調査だった第二、第三空洞の各都市の、未知の要素からの攻撃が想定されていた。
ラニアーは〈ストーン〉における、ホフマンの声の直接の代弁者といえる。科学者、技師、通信の各チームの調整をとることもその役目のひとつだ。キャロルスンは科学者チームの責任者。ハイネマンは民間の技師の総責任者。民間の通信チームを統轄するのは、ロバータ・ピクニーという名の女性だ。
科学者チームの構成内訳の情報は、役にたった。数学者、考古学者、物理学者、(歴史家もふくむ) 社会学者、コンピューターと情報理論のスペシャリスト、医学/生物学の専門家。法律家も四人きていた。
技師チームは、軍の兵站部隊もふくむ補給班と、技師班で構成されていた。通信チームにも軍の補助がついていて、そちらは暗号通信を担当していた。〈ストーン〉内部の通信および、地球/宇宙ステーション/月面植民地のネットワークは、シルヴィア・リンクの補佐を受けて、ピクニーが責任を持つ。
パトリシアは、いちばん重要な名前でさえ憶えられないだろうなと思った。名前を憶えるのはどうも苦手だわ――顔と個性なら、もっとうまく憶えられるんだけど。

民間人研究者については、合衆国とユーロスペースのほかに、ソ連、インド、中国、ブラジル、日本、メキシコから、科学者チームへ代表が派遣されていた。オーストラリア人数名とラオス人一名も、まもなく到着する予定になっている。キャロルスンは、ロシア人とのトラブルが絶えないことをほのめかした。いくつかの制約事項をのんだ結果、ようやく、一年前から〈ストーン〉へくることを許されたのだという。その合意にもかかわらず、図書館もふくめ、〈ストーン〉の全情報を提供するようにと、彼らは要求しつづけている（むりもないわ、とパトリシアは思った）。キャロルスンの説明では、ホフマンと大統領の直接命令により、図書館はアメリカ人だけの占有物になっているのだそうだ。

「すべてを全員に開放すれば、ずいぶんトラブルが減ってくれるのにねえ」とキャロルスンはいった。「わたし、秘密主義はきらい」もっとも、彼女も命令は守っていたが。

「とすると、あなたがわたしとこうしているあいだ、だれが科学者チームを統轄しているの？」パトリシアがたずねた。

キャロルスンはにっこりして、「リムスカヤにまかせてきたわ。口うるさいけど、あの人はあれで能率のいい人だから。それに、相手が彼なら、苦情をいいにいく前に、みんなもういちど考えなおすでしょう。女が上司だと、甘く見られてね。それに、こんな骨休みがほしかったのよ」

ラニアーのメモリー・ブロックには、パトリシアの研究すべき内容について、話してよい相手といけない相手がことこまかに記してあった。図書館のことを話そうと思えば、相手はリムスカヤ、ラニアー、それからまだ会っていない科学者チームのメンバーのひとり、ルパート・タカハシしかいない。そのタカハシはいま、〈通路〉の探険に出ていた。

パトリシアは、キャロルスンと三人の中国人といっしょに昼食をとり、三十分ほどうたた寝をしてから、スレートと携帯椅子を持って平原を越え、例の林のそばまでいくと、すわって自分の考えを書きこみはじめた。一時間後、キャロルスンがアイス・ティーのポットとバナナを二本持ってやってきた。

「二、三、道具が必要だわ」とパトリシアはいった。「コンパス、定規、鉛筆何本か、それから……考えてたんだけど、技師か電子技術者のだれかに、ひとつ道具を作ってもらえないかしら？」

「どんなもの？」

「〈通路〉のπの値を知りたいの」

キャロルスンは口をすぼめた。「なぜ？」

「いままで読んだかぎりでは、〈通路〉を形作っているものは明らかに物質じゃないわ。なにかまったくべつのものよ。ゆうべ——ゆうべっていうのは、この前眠ったときっていう意味だけど——ファーリーと話していて、彼女が知っていることを説明してもらったの。けさは、わたしがくる前に、リムスカヤとタカハシがまとめていってくれた文書にも一部目を通したわ」

「超常空間数学の揺籃期にはね」とキャロルスンは意地の悪い声で、「リムスカヤはきっと、自分の専門知識にとらわれていたはずよ」

「そうかもしれない。けれど、彼はいくつか興味深い考えを述べているわ。あす、カレンに連絡孔へ連れていってもらうんだけど——」パトリシアはプラズマチューブと南極の自転軸を指して、「そのときまでにπメーターがあれば、いくつかわかることがあると思うの」

「作らせましょう」とキャロルスンは請け負った。「ほかにいるものは？」
「可能かどうかわからないけれど、πを測定する以上、斜体のhや重力定数、そのほかなんでも、宇宙の性質にかかわると考えられる定数を測れるものがほしいわ。一種の万能メーターね」
「ここの各種定数が、一定ではないと思うの？」
「少なくとも、いくつかはね」
「斜体のhや運動量が？　そうだとしたら、わたしたち、存在することさえできないわよ」
「比率にちがいがあるかもしれない。わたしはただ、知りたいだけ」
キャロルスンは立ちあがり、空になったポットとバナナの皮をとりあげ、テントにもどっていった。数分後、彼女は呉といっしょにトラックで出発し、第六空洞につづくトンネルにはいっていった。
パトリシアはかすかに眉をひそめ、〈通路〉を見つめた。
まだ限定されたものではあったが、彼女は身内から強い力が湧きあがってくるのを覚えていた。彼女はいま、ノーベル賞の栄冠に向けて、飛躍しはじめたのだ。
その人生のほとんどにおいて、パトリシアはもっとも重要な時を、頭のなかだけですごし、地球の大多数の人々には皆目わけのわからない世界に没頭してきた。いま、彼女は、小さな林のそばにすわって、モーツァルトの交響曲《ジュピター》を聴きながら、〈通路〉の奥を見つめていた。はじめのうちは、ただおちつかないだけだったが、なかなか瞑想状態にはいりこめないので、そのうちいらだちはじめた。

どこからとりかかるべきかはわかっている。〈通路〉が物質でできていないとすれば、それに替わるものはわずかしかない。超常空間のトリックを利用し、小惑星の端から抑制力場のチューブを伸びださせているのか、でなければ、超常空間のトリックそのものでできているかだ（〈通路〉が幻であるという可能性も考えはしたが――いまのところは――哲学的に無意味なものとして、切り捨てた）。

超常空間のトリックだとすれば、取り組むのは難しくなる。もしストーン人が第六空洞の機構を用い、時空を歪めているのだとしたら、それなりの影響が出ているだろう。万能メーターがとどいたら――それが彼女の要求したとおりのものならばだが――パラメーターを積んでいくことができる。〈通路〉ほどの規模の空間が歪んでいるとすれば、πの値には変動が生じているはずだ。円の直径というものは、ひどく歪んだ多岐管においては、その円周に応じて変化するからである。その他の定数も、より高次の幾何学における歪みによって変化する。

ややあって、パトリシアはなんとか没我状態にはいろうとするのをあきらめた。みずからを緊張させるには、事実が不足しているのだ。

いまのところ、リラックスしてデータを読む以外に、できることはなさそうだった。パトリシアはスレートに、べつのメモリー・ブロックをさしこんだ。

「夜のない生活に慣れるまで、どのくらいかかった？」とパトリシアがたずねた。ファーリーは自転軸に昇るエレベーターを待ちながら、指先でじれったそうにアーチの壁面をとんとんたたいている。ふたりはトンネルの傾斜路から東に五十メートルの位置にある、なめらかに磨きあげら

れたニッケル〃鉄の広場の上に立っていた。

「いまだに慣れたかどうか判然としないけれどね」とファーリーはいった。「ともかくもなんとか暮らしてはいるわ。星空が懐かしいけれど」

「これだけの技術があれば、ストーン人は空洞内を暗くする手段を講じられたはずじゃない?」

「プラズマチューブを遮蔽するのは、大きなエネルギーのむだづかいよ」ファーリーは考えこんで、「とくに、第七空洞ではね。なにしろ、ここでは空洞が無限につづいていると考えられてるんだから——そんなものを、どうやってさえぎられる?」

パトリシアはスレートをとりだして、タイプした。《第七空洞のプラズマチューブ——そのエネルギー源は? 保守は? ほかの空洞のチューブと同じなのか?》

エレベーターの扉が開き、ふたりは大きな円筒形の箱に乗りこんだ。ファーリーがボタンを押すと、扉が閉まった。ふたりは内壁に埋めこまれている把手をつかんだ。はじめのうちは、エレベーターの加速で、ふたりの体重は増加したが、高く昇るにつれて——自転軸に近づくにつれて——その増加分は打ち消されていった。やがて、シャフトを三分の一ほど昇ったところで、エレベーターの上昇速度は安定した。そのころまでには、ふたりの体重は著しく減少していた。ほどなく、エレベーターは減速をはじめ、あっという間に、ほぼ無重力に近い状態が訪れた。扉が開き、黒とグレイの制服を着た警備兵が敬礼した。

第七空洞の連絡孔をとりまく軸部コンパートメントは、与圧され、暖房もはいっていたが、おおむねその他の点では、何世紀も前、ストーン人が残していったままになっていた。新たに設置された照明の輪が、暗い足場に交錯している。

「特異線を見にいくところなの」とファーリーがいった。警備兵はカートに乗るように身ぶりで示した。ふたりは警備兵につづき、ロープをつたってシートにすわると、バックルをとめた。
「なんだか、とんでもないものを見に連れていかれてるような気がするんだけど」パトリシアが責めるようにいった。「わたしはまだ、ほかの驚異にだって慣れてないのよ」
「これは付随的な驚異なのよ」ファーリーが謎めかしていった。「ほかの驚異の結果というところね――もしリムスカヤやタカハシの理論についていけるなら。でも、あなたは〈ストーン〉きっての時空のエキスパートだから」
「それはどうかしら」そっけなくパトリシア。
「この〈通路〉が、歪んだ一般幾何学のマトリックスであるとすれば――歪曲した空間の筒であるとすれば――その中心にはなにがあると思う?」
「きのうの午後から、そのことを考えていたの」カートが足場の端に近づくと、パトリシアはちょっといいよどみ、「そこには中心というものがないはずよ。行き着く先では、すべての法則が喪失しているでしょう」
「そのとおり」
「それが特異線?」
「そこにいまからいくわけ」
警備兵は、岩壁に設置されたエアロックにカートをつけた。ファーリーが手すりをつかみ、パトリシアがベルトをはずすのに手を貸した。警備兵は敬礼して、ここでふたりを待つといった。
ふたりはエアロックにはいった。ファーリーが明かりをつけ、ラックから二着、しわくちゃに

なったフリーサイズの宇宙服を引きおろした。「このストラップで、腕と足の長さを少しは調節できるわ。運動性や体にフィットするかどうかは、ここでは二の次なの。要は気圧と温度と空気よ。〈ストーン〉でいちばん人がこないところだしね」
エアロックの奥の壁には、幅の広いはしごがあり、天井のハンドル式のハッチにつづいていた。部屋の隅やはしごの下には、さまざまな装備の一部が――なかにはひと目で、長いあいだほうりっぱなしにされていたとわかるものもある――積み重なっていた。
「足運びに気をつけて。つねにゆっくりと動くこと。慎重に動けば危険はないわ。その宇宙服になにか起こっても――まああありえないことだけど――二分でエアロックにもどれるから」
ファーリーはパトリシアの宇宙服がちゃんとシールされているかどうか調べてから、はしごのそばのパネルにある赤いボタンを押した。空気が静かにエアロックから吸いだされていき、やがてパトリシアに聞こえるのは、自分の呼吸の音だけとなった。ファーリーが宇宙服の無線のスイッチをいれた。
「はしごを登るわよ」
「宇宙服を着るのははじめてだわ」とパトリシアはいって、ファーリーのあとからはしごを登った。
「OTVの乗組員の報告では、あなたは宇宙酔いにかからなかったそうじゃない」
「無重力って、楽しいわ」
「ふうん。わたしは慣れるまでに、三日かかったけどな」
ファーリーはハッチのハンドルをまわし、押しあけた。ハッチはゆっくりと上に開いていった

が、途中でいったんとまったので、ファーリーがもう一段はしごを登って、もうひと押しした。ハッチが完全に開ききった。連絡孔には小型探照灯が設置されていた。もっとも、第七空洞の入口はほんの十メートルほど先で、プラズマチューブの乳白色の輝きがほのかにあたりに広がっていた。

パトリシアは南を向いた。連絡孔の壁面は——でこぼこで溝だらけだ——漆黒の闇に融けこんでいた。闇の奥には、腕を伸ばして持ったBB式空気銃の弾くらいに見える、光の円があった。できるだけ首をあげて見あげると、小惑星金属のなかに、黒っぽい岩が幅広くつきだしているのが見えた。

「プラズマチューブは空洞ごとに区切られているの」とファーリーがいった。「つまり、極点に接合して、チューブ自体がひどく薄い密封容器になっているわけ。これが空気を〈ストーン〉外に出さない働きもしているのよ——さもないと、空気がみんな侵入孔から燃え出てしまうから。あら、漏れる、だったかしら。あってる？」

「あってるわ、〝漏れる〟で」とパトリシア。「でも、〈ストーン〉の自転によって、空気は空洞の底にたまっているんじゃなかったの？」

「問題は高さの規模ね。プラズマチューブが空洞の空気を閉めだしていなければ、連絡孔での気圧は、それでも百八十水銀柱ミリメートルくらいにはなっていたでしょう」

「なるほどね」とパトリシアはいった。

「わたしたちは、チューブと接合する極の構造物に、荷電プレートが埋めこまれているんじゃないかと考えているの。まだ調査はしていないけれど。それから、〈通路〉のチューブはほかの空

洞のチューブとはまったくべつのものよ。あれについては、どうして機能しているのか、まるっきりわかっていないわ」
ふたりは、そこらじゅうにあるロープと支柱をつたって、連絡孔の壁面を進んでいった。穴の縁には、高さ五十メートルほどの足場が組み立てられていた。足場の下から頂上にかけては、長い円筒形の檻にかこまれて、はしごがかかっていた。
「あなたからどうぞ」とファーリーがいった。パトリシアは檻のなかにはいり、ファーリーがエアロックでやったのと同じように、足を使わず、手だけではしごを登りはじめた。「檻の上に出たら、ケーブルに宇宙服をつないで。ケーブルなしでもなんとか遊泳していけるんなら、先にいってもいいわ、わたしはつないでから追いかけるから」
足場の頂上に出ると——〈ストーン〉の自転軸が、いまはすぐ上に走っている——パトリシアは安全ケーブルをつかみ、体を引きあげて、ファーリーに道をあけた。足場の縁の四、五メートル向こうには、もう一本、円筒の檻が口を開いていた。ファーリーが合図をすると、ふたりは極点の傾斜した壁面を登りはじめた。
「見てのとおり、この角度からだと、プラズマチューブがとてもはっきり見えるでしょう」とファーリーがいった。〈通路〉は驚くべき景観を呈していた。パースペクティブが歪んでいるというはっきりした兆候はないのに、景観が巨大なボウルに描いたように湾曲して見えているのだ。プラズマチューブの光を通しているので、細部はかすかに白みを帯びている。プラズマチューブそのものは、はるか彼方の極点の中心に収斂して、まばゆい円となっている。
「ロシア人は、ここまでくることを許されてないの。ほかの連絡孔では作業してるんだけどね」

ふたつめの檻の向こうには、見ていると目が痛くなる、なにかがあった。近づいて見るようにと、ファーリーが身ぶりで示し、
「これがそうよ」といった。「ここから先、〈通路〉ではなにもかも歪んでしまっているの」
それは直径五十センチほどの、水銀でできたパイプに似ていた。消点に向かって、ずっと向こうまで伸びているが、まっすぐでもなく、といって曲がっているわけでもなく、動いているわけでもないが、じっとしているわけでもない。まわりのものを反射しているといえなくもないが、それは鏡のような反射のしかたではなく、その周囲のものを、かろうじてそれとわかる程度に模倣しているといった具合だ。
パトリシアはそれをじかに見ないようにしながら、特異線に近づいた。ここで、〈通路〉の諸法則は歪められ、細く引きのばされて、ひとつのこじんまりした結びめ——一種の空間的臍点を形作っているらしい。近づくと、それは意地悪をしてはしゃいでいるかのように、彼女の顔を歪めた。
「まっすぐには見えないけど、でもまっすぐなの。もちろん、手をつっこもうとすれば抵抗があるわ」ファーリーはいって、とらえどころのないその先端に手を伸ばそうとした。手はやんわりと脇へ押しのけられた。「これは〈通路〉内に、重力と同じような働きをする力を作りだしているらしいの。純作用としては逆自乗に働くもので、第七空洞の領域内では作用しないけれど、〈通路〉との接合点のすぐ向こうからは作用するらしいわ。移行はきわめてスムーズでね。〈通路〉内部では、特異線から遠ざかれば遠ざかるほど、押しのけられる力は強くなっていく。その力は〈通路〉の壁面で最大になるわ。つまり、まるで壁から引っぱられているような感じになる

の。すなわち——重さがかかるわけね」
「壁が引っぱる力と特異線が押す力には、ちがいがあるの？」
ファーリーはしばらく答えなかった。「それがわかればいいんだけど。特異線は〈通路〉の中央にそって、チューブのなかに伸びているの。特異線がそのプラズマの維持に関与しているという考えもあったんだけど……正直いって、わたしたちにはなにひとつわかっていないわ。あなたの前には、まっさらの研究分野が広がっているというわけ」
パトリシアは片手を伸ばした。歪んだ鏡面が、消点のぼけたなにかをこちらにさしだした。手ではない。手とその反射物が出会った。弱い抵抗を感じたが、もっと力をいれて押しつけた。
彼女の手は、押しつけた分だけそっと押しもどされ、その力は手を引っこめるまで感じられた。自分でも驚いたことに、パトリシアは瞬時に、その原理を理解した。
「当然の反応だわ」とパトリシアはいった。「時空の平方根に触れようとするようなものだもの。特異線に押しいろうとすれば、みずからをいずれかの空間座標ぞいに、一定の距離だけ移動させるに等しいでしょう」
「その結果、脇へ押しのけられる」とファーリー。
「そういうこと」
パトリシアは特異線のまるくなった始点に——それとも終点だろうか？——体を近づけ、それから抱きしめるように、両腕を特異線にまわした。指先が歪んだ表面をぎゅっとつかむと同時に、彼女の体はいったんそれに近づいたが、またはねもどされた。
「まず、これにふれるでしょう」とパトリシアは説明した。「すると、これはその圧力を、軸と

リングとケーブルのおかげで、体がはじきとばされるのはまぬがれた。「この角度でこれをつかむと、わたしは特異線にはねかえされ、北に向かう。逆の角度でやれば、南へ。ねじりモーメントはなし——垂直か水平のどちらかしかない。外へ垂直に押しやられるか、線に対して水平に押しやられるかのどちらかしかないのよ」

ファーリーはフェイスプレートを通して、うらやましげにほほえんだ。「早いのね、追いつくのが」

「そう思ってくれてうれしいわ」とパトリシアはいった。それから、ため息をついて、あとずさった。「オーケイ、もどりましょう。このことをじっくり考えてみなくっちゃ」

ファーリーがパトリシアの肩をつかんで、艦を通り、足場を降りて、エアロックへ連れていった。パトリシアはすでに、うつろな目をして考えこんでいた。エレベーターに乗せられたことにもほとんど気づかないほどだった。テントにもどると、彼女はスレートとキャロルスンのプロセッサーをそばに置いて、すわりこんだ。

ファーリーは食事をしに、少しのあいだ席をはずした。もどってきたときには、連結されたプロセッサーとスレートとが、つぎの指示を待ってまたたいていた。ヴァスケスはうたた寝していたらしい。ファーリーはスレートのディスプレイに目をやった。

《未来からきたのか？　特異線。小惑星よりも長い——内壁を貫いて、なお向こうへとつづいている。逆自乗に強くなっていく斥力。ストーン人はどこへいってしまったのか？　決まっている。〈通路〉の彼方へだ。

歪曲鏡の付近では、曲率が一定していない。それを確認するためには、万能メーターが必要だ——が、おそらく一定でないことはまちがいない。その構成が、あらかじめ設定されたテクノロジー——幾何学を操り、空間と一般幾何学を道具としてあつかうテクノロジーの産物と見なすならば、あの特異線は、おそらく無限につづいているのだろう。その始点は、ここ、空洞と〈通路〉が接する、ちょうど境目だ。
〈通路〉内のプラズマチューブを維持するエネルギー。〈通路〉が異なる宇宙であることは明白だが、そのエネルギーもその宇宙の機能のひとつと見ることができるだろうか？　あの物質は——あれだけの土、空気はどこからきたのか？　〈ストーン〉からではない。全部が〈ストーン〉からきたはずはない。それは明らかだ》
〈通路〉を吹きぬけてきた暖かい風がテントをはためかせ、キャンプ近くの草をゆらし、極点から吹きおろしてくる冷気といりまじって、つむじ風を巻き起こした。
張と呉は、テントの下でチェスをやっている。
しばらくして、ファーリーも眠りに落ちた。

7

ハイネマンはぶっきらぼうに、自分に語りかけた。組み立てエリアをとりまくマジックテープのパッドにそってゆっくりと歩きながら、スレートに積荷目録をスクロールさせていく。あの積

荷は――梱包をほどかれ、もう組みあがっている――半年前、技師チームがたてた仕様とすべて一致していた。あのときは泡をふいたものだ。技師チームのだれひとりとして理解できない仕事をさせるために、わけのわからない機能を持った機械を設計させられたのだから。しかし、そもそもあのころは、グリーン・バッジがかなり珍しいころだったのだ。

いまはもう、ハイネマンにグリーン・バッジを与えずにはすまない状況になっている。この装置をテストし、みんなにその使い方を教えられるのは、彼しかいない。

それはじつに美しい機械だった。長さ二十メートル、直径六メートルの、中空の円筒。それは中身をすっかりとりだした、巨大なジェット・エンジンのようにも見える。ハイネマンはその内部をのぞきこみ、等間隔にいくつもならぶ、鎌型の金属片を見やった。円筒が囲いこむ予定の、謎に満ちたなにかを、固定するためのものだ。かすがいは、いまはプラスティックの固定材にとめられている。円筒が所定の位置におさめられたら、この固定材ははずされるはずだ。

円筒は、チューブライダーと呼ばれていた。そのとなりにあるのは――後続のOTVで三つの梱包にわけて持ってこられたものである――徹底的に改良された、ボーイング〟ベル共同開発のプロペラ推進式垂直／短距離離着陸機、略してV／STOL、モデル・ナンバーNHV24Bだ。

これほど特殊な飛行機を見るのは、ハイネマンもはじめてだった。もともと、探索・救助任務用として、合衆国空軍向けに開発されたこの飛行機は、二機のプロペラ駆動エンジンを、百二十度の角度まで回転させることができる。エンジン一基に五枚ずつついた幅広のプロペラは、折りたたんでエンジン室に格納することが可能だ。尾翼には、中心線よりわずかに上の位置に、ケロシン／酸素を使うロケット・エンジンが装備されている。まぎれもなく、余分の推力をうるため

だが――しかし、どんな条件下で？
その翼は、いかにも軽快そうな前進翼で、胴体の後方四分の三の、ほとんどV字型の尾翼に触れそうな位置から伸びだしていた。最大積載量は、操縦者二名をべつにして十八名。もっと人員を少なくすれば、より多量の装備を運ぶこともできる。それは航空機であると同時に、ヘリコプターであり、ロケットでもあった。
そのスペックを見ただけで、ハイネマンはこの飛行機が好きになった。ループ・ゴールドバーグふうのガジェットには、彼はいつも目がないのだ。
V／STOLは、三つの方法でチューブライダーを運搬できるようになっている。ひとつは、丸太の一端からつきだした矢のように、機首と空中給油用のノズルをつきださせて、円筒内にすっぽりおさまっていくやりかた。ふたつめは、ハイネマン流にいうと、〝円筒のかまを掘る〟形で機体を挿入し、ロケット推進を用いて運搬していく方法。第一回の飛行では、この方法により、連絡孔をつぎつぎにくぐりぬけながら、プラズマチューブ内を通って、第七空洞までチューブライダーを運んでいく予定になっている。そして三つめは、機体下部に円筒を固定して運んでいくやりかただった。
第七空洞まで運ばれたあと、円筒がなんに使われるのかは、ハイネマンには見当もつかない。航空学的な、あるいは宇宙航空学的な見地からすれば、これは異常としかいえないしろものだ。V／STOLがドックいりしているあいだ、どうやってこの円筒を所定の位置に――それがどんなものかは知らないが――固定できるというのか？　円筒にはエンジンがついていない。この新案物には、ロケット推進で自転軸ぞいに運ばれていくだけの強度しかないのだが……。

なぜかと問うのはおれの仕事じゃなかったけっな――スレートに最終チェック状況を書きこみながら、ハイネマンはそう思った。はじめて見る姿に興奮してはいたものの、飛行機のほんとうの美しさがわかるのは、そいつを飛ばし――ぶじ生き延びてからのことだ。

梱包にはまた、禁制品もはいっていた。積荷目録には載っていないが――少なくとも、公式な積荷目録には載っていないが――ちょうど棺桶と同じくらいの形と大きさをした、ふたつの金属の箱がはいっていたのだ。ハイネマンにはそのなかになにがはいっているか、およその見当がついていた。高速レーダー制御式の、ガトリング砲だ。

それがどこに、なんの目的で設置されるかも見当がついている。所属は統合宇宙コマンド、これの到着を知っているはずの唯一の人間は、カークナー大佐。こんなものの持ちこみは、ISCCOM〈ストーン〉防衛協定違反もいいところだ。

ハイネマンはふたりの主人に仕えることに慣れている。カークナーとJSCに、協定を破るだけの理由があることも知っている。そして、そのときがきたら、ラニアーとホフマンが、彼らの動機を評価することもわかっていた。

ハイネマンは、棺桶が外部防衛エリアに配送されるよう手配してから、そのことを頭から消しさった。

それから、宙を飛んで組み立てエリアを通りすぎ、時計を見た。ギャリーのやつ、やけにおそいじゃないか。

ラニアーはロープをつたって、第三ドックのステージへ体を引きあげた。チューブライダーと

V／STOLは、観客の注意が向くのを待っている主演女優のように、中央ステージを占領していた。
近づいていく彼に、ハイネマンが関心のなさそうな目を向けた。「疲れてるようだな」とハイネマンはいって、検品するようにとスレートをさしだした。ラニアーはそれには目もくれず、ひとこともいわずにスレートをさしもどした。「そんな顔で空洞から出てきたら、みんなおっかながるぜ」
「しかたないんだよ」とラニアー。
ハイネマンはかぶりをふり、口をすぼめてため息をついた。かすかに聞こえる程度に、低い口笛が鳴った。「いったい奥には、なにがあるんだ？」
それには答えず、ラニアーがたずねた。「準備はできてるのか？」ハイネマンはうなずき、ベルトのサックからメモリー・ブロックのはいった箱を引っぱりだした。
「いまのところはな。来週、プラズマチューブのなかをおれが運んでいく予定だ。バッジさえ手にはいったら……」
ラニアーはふところに手をつっこみ、グリーン・バッジを一個とりだすと、ハイネマンの目の前で引っくりかえして見せた。「きみのだ。第2レベルだよ。いって自分の目でなにがあるのか見てくるといい。えらくご執心のようだから」
「こいつは性分でね」ハイネマンはいって、バッジを襟にとめた。「あの娘はどうしてる？　少しは役にたってるか？」
「わからん。元気はいいがね」眉をつりあげ、深々とため息をつき、「どうやらなじんではくれ

そうだ」話題を変えたいようすだった。「きみのフライト・クルーのために、臨時のグリーン・バッジを持ってこよう」
「いや、設置位置まで、ひとりで飛ばしていくつもりだ」とハイネマンはいった。意外にも、ラニアーはただうなずいただけだった。多少はいいあいがあるだろう、と思っていたのだが……。
「初飛行に同乗するのはだれだい？」
「ぼくだ。もし時間があればだが」
「もう何年も飛んじゃいまい」
ラニアーは笑って、「しばらく飛んでいないのはそっちも同じだろう。それに、操縦技術なんてものは、わすれようとしてもわすれられるものじゃない。それはきみもわかってるはずだ」
警備兵が一名——女性兵士だ——ステージの上をただよってきた。ラニアーはちらりと上目づかいに見やり、兵士から封印された封筒を受けとった。ひとことも口をきかぬまま、彼女は去っていった。
「くることがわかってたみたいだな」ハイネマンがいった。
「ああ」ラニアーは封を切り、なかの文章を読むと、さっきまでハイネマンのバッジがはいっていた内ポケットにつっこんだ。「地球へもどれとさ。ここでもう二日すごしたら、つぎのOTVに乗って帰ることにする。いいかラリー、チューブライダーを所定の位置につけて、飛行テストの準備をするまではいいが、そこから先は、ぼくがもどってくるまでいっさい手をつけるんじゃないぞ」
「アドバイザーのお呼びか？」

ラニアーは上着の内ポケットの上をぽんぽんとたたき、「なにより、あっちが優先だからな。ただし、ヴァスケスが確実に研究をつづけられるだけのお膳立てはしていかなけりゃならない」
ハッチのほうに向きなおる。
「わかった、待ってる」ハイネマンはその背に呼びかけた。そして、チューブライダーとV／STOLに、熱いまなざしを向けた。

8

ラニアーはトラックにキャロルスンを乗せて、第七空洞へ向かっていた。トンネルにはいると、キャロルスンが車内灯のスイッチをいれ、膝の上の箱からポーチをとりだして、いった。「今週は電子技術班に高い点をつけておいてね。パトリシアが制作をたのんだある機械を、二十四時間で造りあげてくれたんだから」
「なんだい、その機械っていうのは？」
「ほんとうにききたい？　頭がこんがらがるわよ？」
ラニアーはにやりと笑って、「頭をこんがらがらせるのがぼくの仕事さ」
「パトリシアがね、πやプランク定数や――斜体のhというべきかしら――重力定数などの、部分的数値をわりだす計測機を作ってくれといったの。電子技術班はそのうえに、光速、陽子質量と電子質量の比率、中性子崩壊時間を測る機能もつけ加えてくれたわ。パトリシアがそれを全部

使うかどうかわからないけれど、ともかくも希望の品を手にいれたというわけよ」
「ぼくにはかなりの高度技術に聞こえるな」
「それだけの計測機器を、どうやってこんな小さなサイズに押しこんだのかってきいてみたの。そうしたらにやにやして、何年間もCSOCの防衛衛星を造っていたから、それに比べれば万能メーターなんてへでもないんですって。回路は余剰の警備機器からかき集めたそうよ。どういうふうに動くのかは知らないけれど、きちんと作動はするわ。少なくとも、するように見える。見て」キャロルスンはギリシア文字でπと記されているボタンを押した。ディスプレイにぱっと字が輝き、〝3・14159 26 45——安定〟という文字が現われた。
「そんな計算なら、ぼくの電卓でもできるがね」
「でも、πの値が変化するとしたらむりでしょう」
「で、そいつの請求書はどこにまわす？」
「科学者チームよ、もちろん。ねえ、あなたには詩情というものがないの？　なんでもお金の次元に引きずりおろさなければ気がすまないの？」
「習い性でね。それはともかく、その請求は科学者チームから引きあげて、新しい特別な費目にまわしてくれ。〝ヴァスケス〟だ。この費目のことは内密にたのむ」
「はいはい」キャロルスンが万能メーターをフエルトのケースにもどしたとき、車はチューブの光のもとに出て、傾斜路を降りはじめた。「あの娘、経費がかかりそう？」
「わからない。ただ第六空洞までとこの第七空洞とでは、科学者チームの経費を分けておきたいんだ。ぼくは二日間地球に帰ってくるが、その二日のうちの一部は、上院議員や下院議員からの

金策に費やされるだろうな。こいつは複雑な問題でね」

「わたしの好奇心は知ってるでしょうに」とキャロルスン。「パトリシアがあれを解明すると思う?」

ラニアーはちらりといらだたしげな視線を向けた。「いわないでくれ。ぼくが出かけたら、パトリシアには望むものをなんでも与えて、やさしくして、わきめもふらず研究に専念させることだ。そうすれば、うまくやるだろう」

「アドバイザーがそういうから?」

ラニアーはテントのそばでトラックをとめた。「パトリシアはファーリーとうまくやっていけそうだ。なにか重要なことが起きてここを離れなければならなくなったら、ファーリーに付き添っていてもらうといいと思うが、どうだろう?　たとえ彼女が中国人だとしてもだ」

「それについては、なんの問題もなさそうだけど」

「同感だ。きみはヴァスケスを図書館に送り迎えしてやってほしい。エスコートには警備兵を一名つけて、ファーリーは同行させないこと。注意してほしいのはこの一点だけだ」

「わかったわ。さて、それでは、ほんとうにいやな問題に移りましょうか」

「くそ、連中には何ヵ月も前から、ファーリーが第七空洞の情報を与えてやっているはずだ。それでもまだ不足だというのか?」

「そうよ。ロシア人たちも基本的なことは知ってるわけだから」

「くたばっちまえ、やつらみんな」ラニアーはうめくようにいった。「こんな話はもうやめだ」

「はいはい」

「ともかく、話すべきでない相手とパトリシアが口をきかないよう、心がけてくれ」
「わかったわ」
「きみもふくめてだ」
キャロルスンは下唇をかみ、腕を組んで、大きくかぶりをふった。「もう、いやになるわね。わたしがレベル1に格上げ寸前というのは、本当なの？」
「今度帰ってくるときには、その知らせを持ってきたいね。ホフマンと話をしてみる。辛抱してくれ」
「辛抱してますよ」とキャロルスン。
ラニアーは厳しい目をキャロルスンに向け、その顔じゅうをじろじろと見つめていたが、やがてにっこりとほほえみ、彼女の肩をつかんだ。「そいつはぼくらの金言にしよう。ありがとう」
「どういたしまして、ボス」
キャロルスンとラニアーがトラックから降りると、呉が近づいてきた。「第二サーキットにいっていた探険隊がもどってきたよ。いま、〈通路〉の六十キロ地点付近にいるそうだ。監視哨が彼らを確認して、先にメッセージだけをとどけてきたんだ」
「そいつはいい」とラニアー。「じゃあ、彼らの歓迎準備をしよう」
第二次探険隊は、トラック四台、人員二十名で構成されていた。例の林のそばにすわっていたパトリシアは、トラックの列が土ぼこりをまきあげて近づいてくるのに気づき、スレートとプロセッサーをとりあげて、ゆっくりとキャンプにもどった。
さらに二台のトラックが第六空洞に通じるトンネルから現われ、うなりをあげて傾斜路を降り

てきた。二台はテントのそばにとまり、その一台から、ドイツ駐屯部隊の指揮官であり、いまは第七空洞の警備責任者でもあるベレンソン、もう一台からはリムスカヤとロバート・スミスが降りてきた。すれちがうとき、リムスカヤは親しみをこめてパトリシアに会釈した。ずいぶん人あたりがよくなったのね、とパトリシアは思った。

ラニアーとキャロルスンが、テントの下から現われた。

「探険隊は、どこまでいっていたの？」とパトリシアがラニアーにたずねた。

「九百五十三キロ地点さ。バッテリーで往復できる、ぎりぎりの距離だ」ラニアーはそういうと、フェルトの袋にはいった計器をさしだして、「ご注文の万能メーターだ。装備リストに加えておいたから、これはもうきみの所有物だよ。慎重にあつかってくれ。電子技師班も、こんなに早くは二台めを作れないだろうから」

「ありがとう」パトリシアは装置を受けとると、折りたたんだ紙に書いてある説明を読みはじめた。その肩の上から、キャロルスンがのぞきこみ、いった。

「測定範囲は約七センチですって。そうとうに局部的ね」

リムスカヤがうしろにやってきて、咳払いをした。「ミス・ヴァスケス」

「はい、先生？」あいかわらずね、このしゃべりかた。

「例の問題は気にいったかね？」

「驚くばかりですわ」とパトリシアは平静な声で、「解くのに時間がかかるでしょうね——もし解けるものなら」

「たしかに」とリムスカヤ。「われわれの仮説には気づいていると考えていいね？」

「はい。あれはとても役にたちました」ただし、はじめのうちは、だけどね、と彼女は思ったが、そこをあまり強調する気はなかった。
「それはよかった。特異線にはいってみたかね?」
パトリシアはうなずき、「あのとき、この万能メーターがあればよかったんですが」といって、リムスカヤに装置を手わたした。リムスカヤはかぶりをふりふり、しげしげとそれに見いった。
「すばらしいアイデアだ。なかなかはかどっているようだね。わたしなどよりもずっと。また、そうでなくてはならん。そういえば、もどってくる探険隊のなかには、もっときみの役にたてそうな人物がいるぞ。名前はタカハシ。探険隊の副隊長だよ。きわめて経験豊富な理論家だ。おそらく、きみもわれわれの連名の論文はいくつか見ただろう」
「はい、とても興味深いお仕事でした」
リムスカヤは例の厳しい視線を、不安になるほど長いあいだ——五秒から十秒ほども——彼女にすえ、それからうなずくと、「では、いますぐファーリーと話をしなければならないので」といって、去っていった。
探険隊のトラックが近づいてきて、キャンプから二十メートル離れたところに停車した。ラニアーは彼らを出迎えにいった。キャロルスンはパトリシアといっしょにテントに残った。「〈通路〉を進めるのは、今回いったところまでが限界なの」彼女はそう説明した。「探険隊からの送信内容によれば、たいした発見はなかったらしいわ」
探険隊の帰還は、なんの感慨もないものだった。だれもトラックから降りようとはせず、ラニアーの指示にしたがって、一台ずつキャンプの前を通りすぎると、傾斜路を登ってトンネルには

いり、第六空洞へと消えていった。

ラニアーは三つのメモリー・ブロックを持ってもどってきた。そのうちの一個ずつをキャロルスンとパトリシアにわたし、三つめを自分のポケットにしまった。「探険隊の報告だ。まだ未整理だが、とくに驚くようなことはない。ただし、タカハシの話では……」

ラニアーはうしろをふりかえり、〈通路〉の奥を見やった。

「なに?」キャロルスンが先をうながした。

「第二サーキットは、単なる浮かぶキューーポラ以上のものらしい。各キューポラの下には、開口部があるそうだ。一種の井戸のようにも見えるという。井戸がどこへつづいているのかは未確認だが、口があいていることはまちがいないそうだ」

「すると、〈通路〉には穴があるのね」とキャロルスン。「いいわ、パトリシア、そろそろ第一サーキットへの旅の計画を練ってもいいころよ。いつになったら時間がとれる?」

パトリシアは小さくため息をつくと、首をふった。「いつでもいいわ。どこにいても仕事はできるから」

「出発はあさって以降にしてくれ」ラニアーが口をはさんだ。「パトリシアには、しばらくぼくといっしょに図書館ですごしてもらわなけりゃならない」そこで彼は、慎重にキャロルスンに合図を送った。席をはずしてくれ、という意味だ。キャロルスンはちょっと用があるからといって、テントのなかにはいっていった。

「つぎの就業時間から、教化ツアーのパート2をはじめる」とラニアーはいった。「全過程のなかでもいちばんショックの大きい部分だ。心の準備はいいかい?」

「わからない」とパトリシアはいった。胸が圧迫されるようだった。「きっとだいじょうぶでしょう。ここまでもちこたえてきたんだから」
「その意気だ。十二時間後に、傾斜路でおちあおう」

9

アクシス・シティは、五世紀前に建設されて以来、〈通路〉の百万キロメートル奥にまで移動していた。オルミイとフラントは飛行艇を駆って、なめらかな螺旋を描きながらプラズマチューブのまわりを飛び、一週間たらずでそれだけの距離を踏破した。
〈冠毛〉と〈道〉の歴史において、かつて何者かが外部からこの小惑星に侵入した例はいちどもない。
オルミイとフラントは、すでに二週間にわたって〈冠毛〉の新しい住人たちを観察し、かなりの知識を得ていた。侵入者たちはまぎれもなく人間であり、コジェノフスキーその人でさえ、いまオルミイが知ったようなことは予想だにしていなかっただろう。
〈冠毛〉は完全な円環を描いてもどってきたのだ。ゲッシェルたちは異常が発生しているかもしれないと警告していたが、それがどんな異常であり、またどんな結果をもたらすものであるか、想像しえた者はひとりもいなかった。
ネクサスに対する本来の義務をはたしおえると、オルミイはデータ／任務レコーダーを切り、

第三空洞にある、かつてのわが家に向かった。三重家族で住んでいた円筒形の高層アパート――彼が子供時代の二年間を過ごしたその建物は、冠毛シティの最外縁、北極から一キロと離れていない場所に建っていた。かつてこの建物には、第六空洞プロジェクトに参画するゲッシェル、技術者、研究者たちを中心に、二万の人々が住んでいたものだ。そののちここは、ネクサスによってアレクサンドリアから追いたてられてきた何百人ものふつうのネイダー教徒たちの、一時居住地にわりあてられた。むろん、いまではだれも住んでいない。小惑星の新たな住人たちも足を踏みいれた形跡はない。

　オルミイはロビーを横切っていき、クレジット・カウンターの前に立って、当惑したように片方の眉をさげた。広い幻影窓に向きなおると、中庭にフラントがいるのが見えた。フラントは、いまは機能していない光彫刻の台座の上に、辛抱強く腰かけて待っている。この窓を通して見ると、フラントは陽光あふれる、みごとな地球の庭園にいるかのようだ。フラントもこれを見たら気にいるだろう、とオルミイは思った。

　クレジット・カウンターに図話（グラフィック・スピーク）で話しかけると、ほっとする答えが返ってきた。以前住んでいた部屋は、建物のほかのすべての部屋と同じく、閉鎖されているという。かつての封鎖命令が解除されるまで、なんぴとであれ、室内に住むことはおろか、なかをのぞくこともできないようになっているのだ。

　封鎖命令が発効されたのは、各都市からネイダー教徒の最後の家族たちが引きあげさせられたあとのことである。ただ、公共建築物だけは、最後に残った学者たちが大脱出の研究の総しあげに使うため、封鎖されずに残された。地球の人間たちは、すでにそんな施設の一部を利用してい

る。冠毛シティ図書館は、その最たるものだ。
オルミイはクレジット・カウンターに向かって、ネクサス・コードによるアイコンを図話で示し、声に出していった。「わたしは一時的に封鎖令を解除する権限を与えられている」
「権限を確認」カウンターが答えた。
「ユニット37975の封鎖を解き、装飾せよ」
「どのような装飾をお望みですか？」
「オルミイ／セカール／リアの三重家族が住んでいた当時の装飾だ」
「そのご家族の方ですか？」カウンターが丁重にたずねた。
「そうだ」
「検索中。装飾完了。上階へお上りください」
オルミイはエレベーターに乗った。指示した階に着き、扉が開くと、円筒形の明るい灰色をした廊下に出て、床の数インチ上を歩いていった。ふいに、まったくなじみのない、不快な感情の波が湧きあがってきた。わすれさられ、失われていた夢——政治的必然によって打ち砕かれた若い希望の、遠い遠い苦痛を思いだしたのだ。
あまりにも長いあいだ生きてきたので、記憶のなかには、さまざまな人々の考えや感情が収められているような気がする。だが、ある種の感情は、いまもほかの感情を超越しており、とりわけひとつの大望は厳然と生き残っていた。これまで何世紀にもわたって、支配階級であるゲッシェルやネイダー教徒のため働いてきたのは、彼らの歓心を得るためではない。いつの日か、こんな機会を手にするためだったのだ。

円形のドアの基部で、彼の部屋の部屋番号が赤く光っていた。廊下全体で光っているのは、その番号だけだ。彼は室内にはいり、しばし子供時代の装飾のなかに立ちつくして、つかのまのノスタルジアにひたった。家具も内装も、あのときそのままだ。いずれも、追いだされてきたアレクサンドリアのアパートの内装を再現しようとした、実の父の努力のたまものである。完成したばかりのアクシス・シティに移住できるかどうか、その裁定を待つあいだ、三重家族はここで二年を過ごしたのだ。

この種の建物に住んでいた家族は、彼らが最後だったので、若いオルミイには、共有メモリーをあさり、プログラミングの実験をする機会がたっぷりとあった。子供のころから、彼は技術的なことを好み、ごくふつうのネイダー教徒だった両親たちをがっかりさせたものだった。そして、五世紀前、まったくの偶然から、建物のメモリーのなかに発見したものにより、彼の一生は大きく変わってしまった……。

オルミイは、各部屋備えつけのデータピラーの前にある、父のスカイブルーの椅子に腰かけた。このようなピラーは、アクシス・シティではもうすっかり実用性をなくし、味わいのある骨董品としてしか使われていないが、子供のころ、この装置の前にすわって何百時間と過ごした経験から、その操作はいまも頭にしみついており、またこれで作業することが楽しくもあった。自身の符号化されたアイコン(ピクト)を図示して、まずピラーを作動させ、建物のメモリーにいたる、特別あつらえの回線を開いた。かつてこのメモリーは、何千人という住人の要求に応じるため、彼らの記録を保持し、組みあわせ可能な何百万という内装のバリエーションを保管する機能をはたしていたものである。だが、そのメモリーも、いまは事実上からっぽだった。オルミイは広大な暗黒の

虚空のなかを泳いでいるような印象を持った。
　スタックとレジスター番号を表示し、符号化された質問が表示されるのを待つ。質問が目の前に現われるたびに、彼は正確に答えていった。
　と、虚空のなかに、ひとつの存在が出現した。断片的で、悲しいほど不完全だが、それでもなお強力で、ひと目でそれと識別できる存在。
「セル〈技師〉」オルミイは声に出していった。
（わが友よ）声を使わずに送りこまれてきたことばは、抑揚こそ欠いていたが、平静で力強かった。不活性状態でさえ、コンラッド・コジェノフスキーの人格と存在には威厳があった。
「わたしたちはもどってきました」
（ほう？　最後にきみと話してから、どれくらいになる？）
「五百年です」
（わたしはまだ死んでいる……）
「そうです」オルミイは静かにいった。「まずは、聞いてください。知っておいていただかなければならないことがたくさんあります。わたしたちはもどってきましたが、ここにいるのはわたしたちだけではありません。〈冠毛〉にはふたたび人が住みついています。これからわたしとおいでねがえれば……」

10

パトリシアとラニアーはフェンスと警備チェックを通りぬけ、第二空洞の図書館にはいり、光の帯をたどって、ひとけのない床を横切り、階段をのぼった。四階に出ると、ふたりは例のコンソールのならぶ、暗い閲覧室にはいった。そのなかで、ぽつんと照明されたコンソールにパトリシアをすわらせると、ラニアーは書庫にはいっていった。ふたたび、ひとりとり残されたパトリシアは、ぞっとするような寒々しさと不気味さを味わった。これだけ奇妙な世界のただなかにあっても、ここには図書館特有のそらおそろしさがあるようだ。ほどなくもどってきたラニアーは、両手に四冊の分厚い本をかかえていた。
「これは、大量印刷された最後の本の一部だ――すべての情報サービスがソリッドステートに切り替えられる前のね。といっても、〈ストーン〉でのことじゃなく、地球でのことさ。彼らの地球でのことだよ。たぶん、この図書館がどのような性質のものか、もう想像がついているんじゃないかな」
「この古めかしさは――博物館ね」
「そうだ。むかしの図書館だ。われわれのようなむかしの人間には、このほうがぴったりくるじゃないか？　第三空洞の図書館にいったら、〈ストーン〉の発達水準に見あったシステムにお目にかかれるよ」
　ラニアーは一冊めをさしだした。それは、あのマーク・トウェインの本とそっくりの字体で印刷されていたが、表紙はもっと厚く、重くて、なかのプラスティック紙もずっとじょうぶだった。パトリシアは背表紙を読みあげた。「『〈破滅〉略史』――アブラム・デーモン・ファーマー著」

なかをひらいて、発表年を読む。「二一三五年。これは、わたしたちの暦法で?」
「そうだ」
「ここに〝破滅〟とあるのは、〈小破滅〉のこと?」祈るような思いでたずねる。
「ちがう」
「べつのなにかなのね」パトリシアはつぶやくようにいうと、第一章の、対象期間の見だしを読んだ。「一九九三年十二月より二〇〇五年五月」親指で、ぱたんと本を閉じる。「これ以上読む前に、ききたいことがあるの」
「いってみたまえ」ラニアーは待ったが、パトリシアが頭のなかで質問を適切な形にまとめるのには、しばらく時間がかかった。
「あなたが持ってきた歴史書があつかっているのは、ひとつの未来であって、かならずしもわたしたちの未来ではないのね?」
「そうとも」
「でも、この年表が……正しいとすれば……わたしたちの未来でもありうるとすれば……いまから一ヵ月たらずのうちに、大災厄が起こることになるわ」
ラニアーはうなずいた。
「それを防ぐのがわたしの仕事なの? どうやって? いったいどうすればそんなことができるの?」
「ぼくらのなかに、それをくいとめられる人間がいるかどうかはわからない。ぼくらはすでに、その角度からも検討を進めている。もしかすると……大きな〝もしかすると〟だが……まったく

そのとおりのことが起こるかもしれない。とにかく、この四冊を読めば、〈ストーン〉宇宙がわれわれの宇宙とまったく同じではないことがわかるはずだ。少なくとも、重要な局面ではね」
「たとえば……」
「〈ストーン〉の過去において、大型小惑星を利用した恒星船は、地球＝月系の付近にやってきたことがない」
「それでちがいが出る？」
「とは思わない。きみは？」
彼女はページをめくった。「わたしにはどのくらい時間の余裕があるの？」
「ぼくはあす地球に発つ。きみが第一サーキットにいくのは、あさってだ」
「二日間ね」
ラニアーがうなずく。
「そのあいだ、わたしはここにいるの？」
「きみがそのほうがいいと思うのなら。書庫の奥にオフィスがあって、仮眠室に使えるようにしてある。食料と調理器具もあるよ。二時間ごとに警備兵がチェックにやってくるが、なにを読んでいるか、彼らにいう必要はない。しかし、少しでも気になることがあれば、ただちに知らせたまえ。どんなことでもいい。気持ちが悪くなっただけでも連絡するんだ。わかったかい？」
「わかったわ」
「今回はぼくもつきあってここにいる」ラニアーはパトリシアの肩をそっとつかみ、「二時間したら休憩すること。いいね？」

「ええ」
パトリシアの見ている前で、ラニアーはコンソールのシートにすわった。ラニアーはポケットからスレートをとりだして、静かにタイプしはじめた。
パトリシアはページをめくって第一章を出し、読みはじめた。順番に読んでいくのではなく、大きな事件の要約やなんらかの結論がまとめられているページを追って、まんなかを読んでは最初にもどり、つぎに最後のほうという具合の、とばし読みだ。

（一五ページ）　一九八〇年代最後の数年間、ソビエト連邦とその衛星諸国にとって、西側世界がテクノロジーの戦いに勝ったことは――あるいは、いまにも勝とうとしていることは――明白となっていた。テクノロジーの戦いに負けることは、地球および宇宙におけるイデオロギーにおいて敗北することを意味する。そうなれば、彼らの国家およびその体制の未来は不透明なものとなる。彼らはいくつかの方法で、敵陣営の技術的優位に打ち勝とうともくろんだが、そのうちどれひとつとして、現実的な方法はなかった。一九八〇年代末、合衆国において最初の宇宙防衛システムが展開されはじめると、共産諸国はさらにその努力を高め、諜報活動および輸出禁制品――コンピューターやその他の高度技術製品――の輸入によって、技術の〝移転〟をはかったが、それだけではとうてい追いつかないことはすぐに明らかとなった。一九九一年、ソ連みずからも宇宙防衛システムを展開したが、やがて判明したように、それらは設計上も機能上も合衆国のシステムより劣ったものであり、ソビエトの指導者たちは、何年も前から予想されていたことがついに事実となったことを悟った。ソビエト連邦は、

テクノロジーではもはや自由世界に太刀打ちできなくなったのだ。
ソ連のコンピューター・システムは、大部分が中央集権化されたものだった。個人所有のシステムや中央とつながっていないシステムは非合法とされ（わずかながら、例外もあった——たとえば、Ａｇａｔｈａ（アガサ）の実験がそれである）、関係法規はきわめてきびしいものとなっていた。これでは、ソ連の若い市民たちが、西側諸国の若者の技術的〝知識〟と対抗しうるはずがない。ソ連はほどなく、みずからの圧政にあえぎだし、二十一世紀の世界のただなかで、なおも二十世紀的（もしくは十九世紀的）国家にとどまりつづけた。こうなっては、フットボール（ものの本を参照されたい）用語にいう〝特攻作戦（エンドラン）〟に出るしかない。すなわち、西側諸国の勇気と決意をためしてみることである。もし失敗すれば、二十一世紀のなかばまでに、共産諸国は西側諸国よりもはるかに弱体化しているだろう。かくして、〈小破滅〉は避けられないところとなった。

　パトリシアは深々とため息をついた。〈小破滅〉のことを、これほどつきはなして——これほど歴史的な視点で——記述した報告というものは、見たことがない。彼女は子供のころの悪夢を思いだした。信じられないほどの緊張と恐怖をくぐりぬけたあと、テレビで見たあの惨憺たる結果。そののち、彼女はその記憶を封じこめるすべを憶えたが、この冷たい、批評的な評価は——いまのような権威ある立場で見せられただけに——かつての恐怖をまざまざとよみがえらせた。

（二〇ページ）　比較すれば、一九九三年に起こった〈小破滅〉は、低級なテクノロジーに

よる混戦だった。それはちょっとした偶発事にはじまり、混乱と恐怖をもたらしたのち、子供のいつわりの約束にも似た、国際間の不実な協定によっておわった。最初の衝突において、みずからの兵器を恐れた西側・東側両陣営は、たえず〝手加減〟をしつづけ、過去数十年にわたって使われてきた戦術とテクノロジーのみにたよった。やがて戦況が核の応酬にまで発展すると――各国の指導者たちはみな、心のなかではいずれそうなることを承知していたのだが――宇宙防衛システムが、まだまだ未熟で未完成ではあったものの、驚くほどの効果を発揮した。とはいえ、西側の防衛システムは、沿岸に潜む敵潜水艦が発射したミサイルのうち、三発を射ちもらし、その結果、アトランタ、ブライトン、ブルターニュ湾岸の一部を破壊されるにいたった。ロシア側も、キエフの防衛に失敗した。このときの核の応酬は限定されたものであり、東側・西側両陣営は、ほぼ同時に講和を申しいれた。だが、すでにリハーサルは実行された。そして、ソ連側の被害は敵陣営より少ないという結果が出た。かくして彼らは、恐るべき結論に到達したのである――いかなる状況においても、ソ連が敗れることはありえないし、歴史が彼らの時代遅れのシステムに追いつくことはないだろう、と。

こうして起こった〈大破滅〉は、双方が全力を投入し、正面から戦われることとなった。ありとあらゆる兵器が、その製造目的のとおりに使用された。そこには悔恨も結果もないように思われた。

（三五ページ）　いまからふりかえってみれば、ひとたび武器が開発されたなら、それが使用されるのはごく当然のことのように思われよう。だがわれわれは、二十世紀後半から二十

一世紀初頭にかけての、当時の不見識と混乱を失念している。当時にあっては、もっとも破壊力の大きな兵器は戦争抑止力とみなされ、ハルマゲドンの恐怖の前に、正気の社会であれば戦争を思いとどまるだろうと考えられていたのである。だが、国家というものは正気ではない。合理的で、冷静で、冷めてはいるが、けっして正気ではありえない。各国の兵器庫には、潜在的な不信、さらには憎悪さえしまいこまれていたのである……。

（三ページ）〈小破滅〉は四百万の死傷者を出し、そのほとんどは西ヨーロッパおよびイギリスの市民だった。〈大破滅〉による死傷者は、約二十五億人に達した。しかもこの数字は、とうていたしかな数字とはいいがたい。なぜなら、死体を数える作業が〝完了〟するころには、数えられたのと同じ数の死体が腐敗していた可能性があるからである。そしてもちろん、やはり同数の人々が完全に蒸発してしまった可能性も。

パトリシアは両目をこすり、「ひどい……」とつぶやいた。
「休憩したければ、してもいいんだよ」ラニアーが気づかうようにいった。
「いいえ……まだいいわ」彼女は先に進んだりもどったりしながら、とばし読みをつづけた……。

（三四五ページ）　総括すると、海戦は、テクノロジーのいまわしいジョークといえる。〈小破滅〉においては、なるほど潜水艦は狩りたてられたし（なかには沈められた例もあった）、それは講和後でさえもつづいたが、大艦隊同士は小競り合いするのみにおわった。と

ころが、ひとたび総力戦がはじまり、大規模な海戦が行なわれるや、最初の敵対行動から二時間のうちに、東西両陣営の諸海軍は壊滅への道をつき進んだ。ペルシア湾、北西太平洋、北大西洋、地中海では(一九九七年、リビアはソ連に地中海基地を提供していた)、熾烈にして瞬時ともいえる戦闘が行なわれた。生き残ったものはほとんどなかった。〈大破滅〉における海戦は、平均して一時間半だったが、五分ともたなかった例は枚挙にいとまがない。海戦第一日め、まだ東西双方が相手の戦略的意図を探りあい、大規模戦争に踏みきらないうちに、東西陣営の諸海軍はさしちがえて壊滅してしまったのである。これらの海軍は、地球の海洋に存在を許された最後の大規模海軍であり、その残骸は、百三十年を経た今日もなお、放射能で海を汚染しつづけている。

(四〇〇ページ)　二十世紀後半に特有の現象は、〝選民主義者〟の増加である。選民主義者すなわち——五十人以下の集団であることがふつうだ——まわりと通行のないいなかの土地を領地として囲いこみ、大規模な災厄が文明を崩壊に導き、無政府状態をもたらすことを期待する人々である。その食料と武器の蓄え、および〝なにがなんでも生きのびる〟という態度によって——つまり、肉体的のみならず、モラルの面でも自分たちを外部から切りはなそうとする意志によって——彼らはオーソン・ハミルのいった〝二十世紀の保守的な病〟の最悪の側面を体現していた。ここではその病の——個人の力と生き残りが他のすべてのモラルに優先し、魂のいかなる高潔さよりも破壊の能力が強調される病の——原因を論じている余裕はないが、その結果は数多くの皮肉をともなうものであった。

選民主義者たちは正しかった——そして同時に、あやまってもいた。カタストロフィーはたしかに訪れたし、世界のほとんどは破壊されたが、破壊のあとにつづいた〈長い冬〉のあいだでさえ、文明は完全な無政府状態まで崩壊するにはいたらなかった。じっさい、一年のうちには、高度に協調的な社会が出現したほどである。ひとりの人間にとって、友人たちの命はまさにかけがえのないものとなった。そして、〈大破滅〉の生存者たちは、みな友人となった。また、となりあうグループ同士の愛と助けあいが不可欠となった。なぜなら、どのグループをとっても、援助なしに長く生き延びる手段を——あるいは体力を——持ったものは存在しなかったからである。領地にこもった選民主義者たちは——重武装し、領地を守るためには手段を選ばず、また近づく者を見境なく殺したがために——たちまち憎悪と恐怖の対象となり、この新たな兄弟愛の唯一の対象外となった。

かくして、〈大破滅〉の終結から五年のうちに、選民主義者の囲い領地はほとんどが一掃され、完全に正常とはいいがたいそのメンバーたちは、処刑され、投獄された。（不幸にして、孤立していた多くの〝隠遁者〟〔関係項目参照〕のコミュニティーも同じ憂き目にあっている。同じ傾向を持つこの両者の区別は、歴史的に見てはじめてなされるものであって、当時の権威筋には無視されていたのである）。選民主義者たちの多くは、人類に対する反逆の罪で——とりわけ、文明の復興に参与することを拒んだ罪で——裁かれた。やがて、この浄化の対象は、武器の所有を主張する者すべてに広がり、コミュニティーによっては、高度技術を肯定する者すべてにまで広がった。

生き残った軍人たちは、強制的に社会再適応教育を受けさせられた。

二〇一五年の記念碑的審判は――このとき、東西両陣営の政府および軍部の高官たちが、人類に対する反逆者として告訴されたのである――〈大破滅〉の恐怖に対する、容赦ない、しかし決して予想されなかったわけではない反応の、頂点をなすものであった。

とても事実とは思えなかった。彼女は本を閉じ、目をつむった。いま彼女は、一冊の本のなかに、まだ起こっていない――しかし、べつの宇宙ではすでに現実となっているできごとを読んだのだ。

ごくりとつばを飲みこむ。もしこれが事実なら、そしてもしこのとおりのことがじっさいに起こるのなら、なにか手を打たなくてはならない。彼女は付録のページをめくった。

五六七ページに、捜しているものが見つかった。そこから二百ページにわたって、ミサイル攻撃を受けた世界じゅうの都市、その死傷者の概数一覧が載っていたのである。ほどなく、カリフォルニア州が見つかった。二十五の都市が、二発から二十三発の弾頭を受けていた。ロサンジェルスは二週間のあいだに二十三発（アステリスクつきで、〝発作としかいえない〟との脚注があった）。サンタバーバラは二発。サンフランシスコは――オークランド、サンホセ、サニーヴェイルもふくむ――三日間で二十発。サンディエゴ、十五発。ロングビーチ、十発。サクラメントに一発、フレンズノーに一発。ヴァンデンバーグ宇宙軍事センターには、海岸線にそって等間隔に十二発。

さらに、都市内部や近郊の空軍基地、および軍事目的に使用しうる民間空港には、全部で五十三発。世界じゅうの宇宙センターもすべて破壊され、それは非戦闘国にあるものにまでおよんだ

（やはり、〝発作としかいえない〟との脚註あり）。
パトリシアの心は麻痺していた。本が遠くなったような感じだった。視野の縮小もなく、感覚も失われたわけではない。ただ、一種の孤独感に押しつつまれたのだ。わたしはパトリシア・ルイーサ・ヴァスケス、二十四歳。若いから、この先長いあいだ生きるだろう。父と母も、生まれたときからいっしょに暮らしていたのだから、わたしの心のなかに、長いあいだ生きつづけるだろう――いつまでも、いつまでも。そしてポールも――おたがい知りあったばかりだから、わたしのしていることを知ろうと努めてくれたただひとりの人だから――ポールも思い出から消えることはない。
だが現実には、カリフォルニアに住んでいるすべての人々が、蒸発して地球上から姿を（おそらく）消してしまうのだ。
すべきことはごく簡単だ。遠からず、おそらく数日後にでも〈ストーン〉を出るとき、この本を持っていく。そして、地球に持ち帰り、みんなに見せてやればいい（たぶん、すでにそのようなことをした者もいるはずだ）。
もしこのふたつの宇宙が、すぐ未来のことであれば同じように起こりうるほど似かよっているなら、人々は行動に出ざるをえない。核戦争の可能性を目前にすれば、人々は軍備を捨て、懺悔をするはずだ。神よ、ここまできてしまったわたしたちをお許しください――ここに悔い改め、祝福をたまわり――
「なにをばかなことを！」パトリシアは本を閉じ、立ちあがった。
そして、図書館をとびだし、隣接する荒れた公園に向かった。ラニアーがあとをついてきて、

歩きながらこちらを見まもっていた。パトリシアは五分ほどわめきちらしたあと、ようやく平静をとりもどした。聞きたいことをことばにまとめるのが、ひどく難しかった。それに、答えを知ったなら、発狂してしまうかもしれない……。
「だれか比較した人はいるの？　ここの歴史と、わたしたちの歴史とを」
「ああ」ラニアーが答えた。「ぼくもやったし、タカハシもやった」
「彼はわたしたちと同じだけのことを知ってるわけ？」
ラニアーはうなずいた。
「で、なにがわかったの？　ふたつの宇宙はそっくり同じなの？」
「歴史上の記録で見るかぎり、差異は小さい。じっさいにちがう事実があったと解釈できる記録はほんのわずかだ。大きな差異はない。〈ストーン〉が登場するまではね」
「それに、この本に書いてある世界情勢——これは、いまの地球の現実とそっくりじゃない？」
「たしかに」
「〈小破滅〉はだれにも、なんの教訓も残さなかったの？」
「たぶんね」
パトリシアは枯れた木の下の、コンクリートのプランターにすわった。「知ってるの、地球のおえらがたは？」
「知っているのは十一人だけだ。〈ストーン〉と地球両方をふくめて」
「その十一人は、なにをしようとしてるの？」
「自分にできるだけのことをさ」

「でも、〈ストーン〉は事態を変えうるわ。そこが決定的なちがいよ。じゃない？」
「われわれはそう期待している。あと数週間で、それについては手にはいるかぎりの解答が必要になるだろう。多元時間線、多元宇宙、〈ストーン〉がどこからやってきたか――そういった疑問への解答がね。力になってくれるかい？」
「なぜ〈ストーン〉がここにあるのか、ふたつの宇宙がどの程度まで似ているのか、それを知ることが、地球で戦争が起こるかどうかの判断材料になるのね？」
ラニアーはうなずいた。「とても重要な判断材料だ」
「どんなものになるにせよ、充分に詳細な結論を出せる自信はないわ」
「ホフマンは信じているよ――それをぼくらに教えられる者がいるとしたら、きみしかないと」
パトリシアはうなずき、視線をそらした。「わかったわ。そのかわり、条件を呑んでもらえる？」
「どんな条件だい？」
「家族を疎開させて。友人たちを何人かいなかに連れだして、保護下において。将軍や政治家たちがいるであろうところに連れていって」
「だめだ」ラニアーはゆっくりと、木のまわりを歩きまわりはじめた。「怒りはしないが、それは聞きいれられない。だれだってそれは考えただろうさ。だが、それを口にした者は、ひとりもいないんだ」
「あなた、家族はいるの？」
「兄と妹がいる。両親は死んだ」

「奥さんは？　いえ、独身だったわね。ガールフレンドかフィアンセは？」
「深い仲の者はいない」
「道理で、わたしより客観的になれるはずね」パトリシアが腹だたしげにいった。
「それが無関係なことくらい、きみにもわかっているはずだ」
「あなたたちのためにここで研究していろっていうの？——両親が、恋人が、姉が、愛してる人たちみんなが、すでに起こるとわかっている災厄で死んでいくのを待ちながら？」
　ラニアーは彼女の前にきて立った。「よく考えるんだ、パトリシア」
「わかってるわよ、わかってるわ。〈ストーン〉には何百人という人がいる。そのみんながみんな秘密を知って、こんなことをたのんだら、事態はめちゃくちゃになってしまう。だから図書館を立入禁止にしてあるんでしょう」
「それも理由のひとつだ」とラニアー。
「ロシア人に教えないのも、そのためね？」
「それもある」
「要領のいいこと」自分の感情とは正反対に、ひどく穏やかな声が出てきた。冷静ではないにせよ、論理的で、あまり動転してもいないような声だった。「家から手紙がきたらどうする？　わたしが返事を書かなかったらどうなると思う？」
「たいしたことにはならないさ。だろう？　どうせ二週間先のことだ」
「手紙を読んだときの、わたしの気持ちはどうなるのよ？　そんな気持ちで研究なんかできっこないわ？」

「できるさ」とラニアーはいった。「答えを知るのが早ければ早いほど、なにか手を打てる可能性が大きくなることを、きみは知ってるからね」
干からびた黄色い草でおおわれた地面を、パトリシアはじっと見つめた。「シャトルの発着場も破壊されたと書いてあったわね」
「ああ」
「もしそうなったら、わたしたち、ここに閉じこめられてしまうんでしょう?」
「そうだ。ここにいるほとんど全員がね。どのみち、すぐに地球にもどりたいと思う者はいまいが」
「だから農耕をはじめたのね。地球との連絡はいっさいなし。それがどのくらいつづくの?」
「戦争が起きるとすれば、そして本に書いてあるとおりになるとすれば、たぶん三十年だろう」
「わたし……わたし、いまは図書館にもどる気になれない。しばらく外に出ていてもいい?」
「もちろんさ。第一空洞にもどって、夕食でも食べよう。それから、わすれないでくれ——もうずいぶん前から、ぼくはこの知識を背負って生きてこなければならなかったんだ。きみにもできないはずはない」
パトリシアは黙ったまま、立ちあがった。足からも手からも、力はぬけていない。体も考えも、驚くほどしっかりしている。「いきましょう」と彼女はいった。

朝番がはじまって二時間後、探険隊のメンバーたちは、トラックのそばに集まった。そうしていると、これから山に出かける登山者たちの集団としか見えない。全員が乗りこむと、トラックの荷台はもういっぱいだった。

パトリシアはタカハシのとなりにすわった。反対側にすわっているのは、レナルズという、屈強なモホーク族の海兵隊員だ。レナルズはアップルと小型短機関銃を持っている。キャロルスンは助手席にすわっていた。運転するのは、ジェリー・レイクという名のアメリカ海軍大尉。いかにも屋外生活に向いていそうな、長身で砂色の髪の持ち主だ。レイクはシートからふりかえり、なにも問題がないことを確認すると、タカハシにうなずきかけ、パトリシアにほほえんでみせた。

「われわれは全力をつくしてミス・ヴァスケスを守りぬくように厳命されています。ですから、許可なくどこかへいったりしないでください」

「イエッサー」パトリシアは静かにいった。タカハシがレイクにうなずきかえした。タカハシは日本人とのハーフで、背は低いが体つきがよく、黒い髪を短く刈りこみ、自信に満ちた、大きな緑の目をした男だった。ひとりだけ、コットン・シャツにウインドブレーカー、ジーパンという、地球式の服を着ている。「体質なんだよ」テントにいるとき、彼はそう説明した。「ここのつなぎに使われている染料には、アレルギーが出るんだ」

レイクがトラックを発進させた。ファーリーがスレートのリストを読みあげ、キャロルスンが装備をチェックした。

トラックに乗っているのは総員八名。四名は軍人、残りの四名は、キャロルスンが科学者やパ

トリシアにいうときのことばを借りるなら、〝主演奏者〟だ。

パトリシアは、だれもすわっていない向かいのシートに、じっと目をそそいでいた。ポケットには、前のシフトのときに第一空洞でわたされた、ポールからの手紙がはいっている。

親愛なるパトリシア

ぼくのミステリー・ウーマン、きみがどこにいるにせよ、万事うまくいっているといいね。こっちは俗な暮らしを送っていて——とくに、きみがいるはずのところを思うと、なおさら俗っぽく思えてくるが——つつがなくやっている。ご家族ともちょくちょく会ってるよ。おかあさんはすてきな人だね。おかあさんとおとうさんと話をするのは、とても楽しい。きみのこと、いろいろ聞いたぞ。気を悪くしないでくれるといいけど。プレスターとミントン（どちらもソフトハウスだ）への就職話は順調にいっている。防衛プラットフォームの予算案が通るまではペンディングだそうだがね。ひとりうるさいやつがいて、何カ月か議事が混乱しそうだっていう話だ。

こんな話をしていてもしかたがないな。きみがいなくて、ほんとうにさびしい。おかあさんから、あなたたち、結婚するのときかれたけど、きみの望みどおり、黙っていた。ぼくだって結婚したいさ。それはよくわかってるはずだね。きみがどんなに変人だろうと、いまどこにいようと、かまわない。早くもどってきて、うんといってほしい。そして、新居をかまえるんだ。こんどばかりはつっぱらないでくれよ。やめよう、この話も。きみもほかに釣らなきゃならない魚があるんだろうし、あんまりぼくが土手ではねてると——もとはといえば、

きみに釣りあげられて土手にいるんだが——気が散るだろうからね。（さてと、それじゃあ、最後にちょっと気はずかしいことをいわせてもらうよ。そうしなきゃいられないんだ）愛してる。ニートなキスをこめて。

ポール

パトリシアは自責の念でいっぱいの長い手紙をタイプし、まずいことを書いていないかキャロルスンに見てもらってから、つぎのOTVで地球に送ってもらうよう、手配した。

驚いたことに、手紙を書くのは簡単だった。ポールが知りたがるだろうこと、そして、あと二週間でほんとうにポールが死んでしまうのなら、いまいっておかなくてはならないと思えることを、すべて書きつづったのだ。もちろん、戦争勃発の可能性を、すっかり信じていたわけではない。もしそうなら、これほど冷静ではいられなかっただろう。

いまごろラニアーは、地球に向かっているころだ。パトリシアは彼がうらやましかった。こんなところで、あんな知識を前にしているのなら、地球で死ぬのを待っていたほうがどんなにいいかしれない。

いいえ、それはうそよ。彼女は目を閉じ、自分をののしった。これはいままでに背負ったなかで、もっとも重い責任だ。気も狂いそうなほどのこの悲しみと恐怖をなんとかこらえ、戦争を防ぐためにできるだけの努力をつくさねばならない。

そして——彼女はそれゆえにみずからを憎んだ——わたしは事実、そうしているのだ。彼女の心は、とうとうスレートに引きもどされた。さまざまな解答が、求婚者のようにフォーマルな方

程式に身をつつんでやってきては、その不備が明らかになるとともに、はねつけられていった。タカハシは聡明で誠実な人物のようだったが、探険隊が集合しても、パトリシアは話をする気になれず、したがって彼のことはほとんど知らないままだった。これから先、タカハシとキャロルスンはほぼあらゆる点についてきみの補佐役となるのだ、とラニアーはいい残していったのだが――。

道はベースキャンプから五十キロいったところでおわっていた。トラックは浅い溝におり、ゴムタイヤと金属スポークでできた車輪を用いて、静かなエンジン音を響かせながら、地面の上を進みはじめた。どこまで進んでも、〈通路〉前方の眺めはいっこうに変化しなかった。南極はゆっくりと、徐々に徐々に、遠く、小さくなっていった。パトリシアは首をあげて景色を見あげているのがつらかったので、たまにちらちらと見あげるだけにとどめた。キャロルスンとファーリーとタカハシが、スレートでチェスをはじめた。パトリシアはたいして興味もなく、それを眺めていた。

「中間地点です」二時間後、レイクがいった。チェスにふけっていた三人は、それまでの盤面を記録してから、スレートの画面を消去した。トラックはゆっくりと減速し、静かに停止した。ドアがスライドして開き、海兵隊員たちはやれやれといいながら地面におりた。パトリシアもそのあとにつづいており、乾いた土の上に立って、伸びをし、あくびをした。トラックの反対側から、キャロルスンがポットを持ってやってきて、みんなのコップに冷水をそそいでまわった。「唯一の贅沢品よ」

「ビールはないんですか?」とレナルズ。

「科学のために、尊い犠牲になってもらったわ」とキャロルスン。「おなかのすいた人は？」
パトリシアはキットからサンドイッチをとりだし、タカハシといっしょに、トラックから数十メートル離れたところまで歩いていった。しばらくのあいだ、不安と吐き気につきまとわれたが、やがてそれもおさまった。虫さえいない、はてしなくつづく砂漠を、どうして恐れる必要がある？　完璧になにもない風景は、画面の消えたスレートのように心地よかった。
「〝海はうるおいのきわみ、砂はかわきの果て〟ね」
「まさしく」タカハシがうなずいた。パトリシアが地面にしゃがみこむと、タカハシもすぐそばに、あぐらをかいてすわった。「この調査隊にぼくが同行してきたのはなぜだか、わかっているかい？」
醜悪なほど単刀直入ないいかただった。パトリシアは顔をそむけて答えた。「わたしを監視するためでしょう」
「そうだ。ラニアーはきみをしっかり見はっていてくれといった。どんな具合だい、精神状態は」
「しっかりしたものよ」
「あの図書館……」彼は声をひくめ、南極のほうをふりかえって、「あれはショックだったろう」
「もうじき、従者にかしずかれた王家のお姫さまみたいに思えてくるわ」
タカハシはくすくす笑った。「そこまでひどくはならないだろう。ラニアーが心配している点には目をつけておくけれどね。ただし、ひとつだけだいじな質問をさせてくれ。きみは、ものを

考えられる状態にあるのか？」
パトリシアには、彼がなにをきこうとしているのか、はっきりとわかった。「わたしは解答を模索しているわ。いまこの瞬間もね」
「それならいい」この話題については、それ以上口にするべきことはなかった。
茂みはここにもまばらに生えていた。キャンプのそばの木と同じ種類かどうか調べようと、パトリシアはその茎を一本折ってみた。小さな光沢のある葉っぱ——同じ種類だ。ひからびた草まで変わりばえしない。「公園には向かない土地ね」とパトリシアはいった。「少なくとも、小さな林くらいならあるかと思っていたんだけど」
「だんだんひどくなるいっぽうさ」とタカハシがいった。
「この〈通路〉に持ちこまれた土の量がどれだけのものか、考えてみたことはある？」立ちあがりながら、彼女はたずねた。サンドイッチはふたくち三口しか食べていない。この二日間、ほとんど食欲がないのだ。「この土の深さが約四分の一キロだとすると——」
「音響の計測値から、われわれもその程度だと推定している」とタカハシ。
「そして、〈通路〉の長さが十億キロと仮定すると……」
「その数字は、どこから？」
「ただの想像よ。そうすると、土の量は約四百億キログラムになるわね」
「地球を砕いて——地殻もマグマも核もみんな——この〈通路〉に敷きつめたとしても、約三百億キロにしかならない」タカハシは砂に指をつっこんだ。
「ずっと奥に山脈でもできていたらどうする？　ずっとたくさんの土や岩が必要になるわ」

「ありえないことじゃない」とタカハシ。「しかし、最大の疑問は、彼らがそれをどこから運んできたか、ということだ。それに、空気の問題もわすれるわけにはいかない。大気の深さは約二十キロだから……空気の総量は一兆六千億立方キロになる。一リットルあたり一グラム強と試算して——」

「前にひととおり計算したことがあるのね」

「もちろんさ。何度もね。リムスカヤが手をつけて、統計学者たちが引きついだんだ。ぼくも足をつっこんでみた。補給と構造にはいろいろ疑問点があってね。たとえば、〈通路〉の空気はどうやって浄化されているのか？〈ストーン〉の再循環池だけではとても追いつかないし、この向こうに相当数の動物がいるとすればなおさらむりだ。とすると、ここの空気は、二、三千年ほどしかもたないのかもしれない」

「それはあたっていない気がするわ。だれにせよ——何者にせよ——ここの製造者は、永遠を意識して造ったふしがあるもの。ときどきね。といっても、根拠のある仮定じゃないが」

「ときどきね。といっても、根拠のある仮定じゃないが」

「それでも、なんらかの〈通路〉保守システムはあるはずよ」

タカハシはうなずいた。「リムスカヤは井戸が見つかる前から、〈通路〉には通気孔があるだろうといっていたよ」

キャロルスンがやってきて、声をかけた。「いままで、この〈通路〉のにおいに気づいたことがある？」

パトリシアとタカハシはかぶりをふった。

「嵐のときとちょうど同じにおいがするのよ。いつでもね。でも、オゾンのレベルはそんなに高くない。これもまた謎ね」
パトリシアは空気をかいでみた。新鮮ではあったが、吹き荒れる嵐のにおいはしなかった。
「わたしは嵐の多い国で育ったの」キャロルスンが自己弁護するようにいった。「たしかにこれは嵐のにおいよ」
三人はトラックにもどった。旅が再開されると、パトリシアはそれからの時間のほとんどを、プロセッサーで問題を解き、体積や質量の推定値を小さな表にまとめることに費やした。
一時間後、タカハシが第一サーキットを指さした。円周上の四点に、四つの井戸が等間隔にならんでいた。ひとつひとつの井戸は、直径約五百メートル、深さ二十メートルほどの、窪みの中央にあいていた。さらにその窪みの中心から八メートル上には、直径十五メートルほどの、ブロンズ色の皿をひっくりかえしたようなものが浮かんでいた。皿はなににものにもささえられず、中空に浮いていた。
トラックは床の窪みのそばに停止した。タカハシのたのみに応じて、トラックをとめる前に、レイクはその窪みのまわりを一周した。それから、一行はトラックをおり、その縁に近づいた。
「このサーキットには、もう二十回ほどもきたかな」とタカハシがいった。「もうほとんど、勝手知ったる道だよ」
パトリシアは万能メーターをさしだした。πの値に変化はない。彼女は膝をつき、計器を縁の向こうにつきだした。値はやはりそのままだ。
「さあ、窪みにはいってみるといい」タカハシがうながした。海兵隊員、ファーリー、キャロル

スン、そしてタカハシが、ひとかたまりになってうしろに立っている。彼女は眉をひそめていった。「また入会式？　まずあなたからはいったらどうなの？」

「それじゃあ楽しみがなくなるわ」とキャロルスン。「さ、おはいりなさいな」

パトリシアは片足をつきだし、おそるおそる、傾斜した砂地におろした。

「さあさあ、はいってはいって」レイクがあおる。

パトリシアはため息をつき、窪みにはいっていった。縁から十メートルほど進んだところで、ふと妙な感じがして、うしろをふりかえった。ほかの者たちと比べて、自分の体がかしいでいる。とまどって、まっすぐ立とうとしたとたん、ころびそうになった。曲面と垂直に立つことが、ここでは自然な姿勢らしい。まるで、〈通路〉の〝引力〟がボウル状の窪みにそって作用しているかのようだ。しかし、万能メーターによれば、局部的な空間の歪みはなさそうだった。ほかの者たちが、あとを追ってやってきた。

浮遊円盤の真下には、直径が円盤の半分くらいあるブロンズ色の栓が、地面からわずかにつきだしていた。それが安全であることを示すために、タカハシが栓の上にのぼった。パトリシアもそのあとにつづき、万能メーターをつきだした。やはり変化はない。

「どんな力がこの円盤を浮かばせているのか、仮説はあるの？」パトリシアがたずねた。ファーリーとキャロルスンは、肩をすくめただけだった。海兵隊員たちは、退屈そうな顔でまわりの砂地に立っている。

「それは適切な質問じゃないね」とタカハシがいった。「あの円盤と栓の材質を見てみたまえ——じっくりと。ぼくらにいえるかぎりでは、あれは〈通路〉の壁と同じ材質だよ」

パトリシアは膝をつき、栓の表面を手でなでてみた。色は均一にブロンズというわけでもない。赤や緑の縞、さらには無数の黒い点が、表面をミミズのようにはいまわり、からみあい、もつれあっている。
「すると、この材質も幾何学的産物なわけ?」パトリシアがたずねた。
「それは物質じゃないのよ」とキャロルスンがいった。「わたしたちは、井戸が発見されたすぐあとから、その可能性を除外したわ」
「空間を建築材料に使うという考えに慣れるには、みんなしばらく時間がかかったがね」とタカハシ。ファーリーもうんうんとうなずいた。
「それは意外でもなんでもないわ」パトリシアが冷たくいった。「四年前に、論文でその可能性を論じたことがあるの。もし重なりあう宇宙がなんらかの形で一定の明確な状態をとらずにすんでいるとしたら、貫通しようとする力がかかっても、反応方向へたえず空間的変形が生じて、障壁ができるでしょう」
タカハシはにやりとしたが、キャロルスンとファーリーは、ただ彼女を見つめるばかりだった。
「すると」とタカハシがいった。「あの皿をささえているものはなにもないわけだ。あれは実在の存在じゃない。単なる可能性の寄せ集めが形をとったものなんだ。それですっかり説明がつく」
「はあ」ファーリーがいった。
アップルを膝の上に乗せて、レイクが栓のまんなかに腰をおろした。「わたしはミシガンの小さな街の出ですがね——こいつは充分、固体って感じですよ。すべりもしないしね」

「いい点ね」とパトリシア。彼女は栓の表面を手の平でなで、「一見したところ、可能性の状態はすっかり分離しているわけではないわ。貫通に対する抵抗のほかに、物質とこの表面との相互作用が許容されているのよ」栓の表面に、じかに万能メーターを置いた。πの値がはげしく変動してから、安定した。3・141487233……。「πの値が小さくなってるわ」とパトリシアはいってから、ほかの定数もためしてみた。「重力定数は通常、電磁輻射速度も通常で安定している」

「斜体のhは?」キャロルスンがたずねた。

「通常どおりよ。この井戸は、なんのためのもの?」

「このサーキットには栓がしてあるから、どんな機能があるのか、つきとめようがないの」

「もしかすると、〈通路〉の外にあるなにかへいくためのものかもしれない」とタカハシがいった。「この先がどこに通じているかは、探らないことに決めたんだ。しかし、この井戸は完全にふさがれているわけじゃないし、中央の穴は、正体不明の弾力性のあるフィールドで包みこまれていて、砂がはいらないようになっている。ぼくらに見える唯一のものは、各井戸から出てくる赤い光だけだ。井戸のひとつには、小型無人ヘリコプターを送りこんだんだがね。もどってこなかったよ。こんなふうになっているから、見る角度が限定されて、十メートル以上もぐると、もう見えなくなるんだ。で、人をやるのはよそうということになったのさ」

「賢明だったわ」とキャロルスン。

まだすわったまま、レイクが簡潔にいった。「われわれには、いつでもどこまででも、みなさんの望むところにいく用意がありますよ」

「それはありがたいけれどね、大尉」とキャロルスンが、「充分な理由があって、この種の調査はゆっくり進めなくてはならないの」
「全環境スーツと武器、バックパックをふたつほどくれさえすれば……」そういって、レイクはにやりと笑った。
「ほんとうに降りても平気なの？」パトリシアは、信じられないといった面持ちで大尉に向きなおった。
レイクはしかめつらをして、「なにを見て、なにをしてくれればいいのか、基本的なところをはっきり教えてくれれば、いきます。われわれ全員がね」海兵隊員たちがいっせいにうなずいた。
「ここの任務はあまりエキサイティングなものじゃありません。見るものといっても、なにもないし」
「窪みの周囲をひととおり掘りかえしてはみたんだがね」タカハシが斜面をのぼって窪みの外に立ち、両手を伸ばしてほかの穴を指し示した。それから、砂をひとつかみすくいあげ、指のあいだからさらさらとこぼれ落ちるのを見ながら、いった。「どの井戸の砂も乾いている。微生物もいないし、大きな生命も、植物もいない」
「生きているものはなにひとつないのよ……わたしたちのほかには」ファーリーが口をはさんだ。
「それに、放射能もない」とタカハシがつづけた。「異質な化学物質の痕跡もない。となると、もしかして井戸は、ただの測量のためのマーカーかもしれない」
「神々の水準点よ」唱えるようにキャロルスン。
「どの井戸も同じなの？」パトリシアがきいた。

「わかっているかぎりではね」とタカハシが、「まだ調べたサーキットはふたつだけだから」
レナルズが立ちあがり、ジャンプスーツから砂を払い落としながらいった。「ヘイ、大尉。ブージャムはここから出てくるのかもしれないぜ」
レイクがぐるりと目をうわ向けた。
「あなたはブージャムを見たことがあるの？」レナルズに熱心な目を向けて、パトリシアがたずねた。
「ほんとに見た者がいるとは思えないけど」とキャロルスン。
「どうなの、レナルズさん？」
レナルズはレイクとパトリシアを交互に見やり、「ほんとに答えなきゃならないんですか？」ときいた。
「そうよ。答えてくださいな」海兵隊員がどれだけ重きを置いているかは知らないが、パトリシアは自分のグリーン・バッジをたたいて見せた。
「おれは見たことないです」とレナルズは認めた。「でも、見た連中のことはよく知ってます。みんな信頼できるやつらばかりです」
「噂はみんな聞いてるがね」ハックルという名の、べつの海兵隊員がいった。「なかには、やけにくわしいやつもいる」
「そして」と、こんどはレイクが、「見たという連中はみんな、存在しないものを見るような人間じゃないんです」
パトリシアはうなずいた。「井戸のなかに降りていく計画はあるの？」

「いまのところはない」タカハシがいった。「ほかに取り組むべき問題がたくさんあるのでね」
彼女は栓を見おろし、ブーツでその表面をこすった。「もどったら、調査の完全な報告が見たいわ」
ここにきてやっと――こうして話しているあいだにも――答えがひとりでに浮かびあがってくるのがわかった。それは選別の最初のレベルを切りぬけたのだ。彼女は微細に色彩のからみあった、さかさまの皿を見あげた。
「それじゃ、もどるとするかい？」タカハシがきいた。
「そうしてちょうだい」とパトリシアは答えた。

フラントは、テント内とその周辺の活動をカムフラージュするために、イメージ投影機(ピクター)を調整して、周囲に物体や風景を投影した。オルミイが大きな音をたてれば、黒い服を着たふたりの警備兵にも聞こえるかもしれないが、その姿を見ることはできない。オルミイはかたほうの警備兵の数十センチ横をすりぬけて、パトリシア・ルイーサ・ヴァスケスがデスクがわりに使っている、箱を調べにはいっていった。
オルミイはとりわけ、あの若い女性に関心を持っていた。これまで聞いたところでは、彼女はここのグループの研究者たちのなかで、中心人物になろうとしているようだ。そして、もし彼女が、立ち聞きしたあの技師の話のとおりの人物だとしたら……。
箱の上には、ぎっしりメモの書きこまれた五十枚ほどの書類が、一見したところでたらめな順番で重ねられていた。メモのほとんどは殴り書きされたもので、なかには少しも余白を残すこと

なく、こまかく書きこまれたものもあった。ところどころに、二、三平方センチほどのスペースをとって、方程式や図表も付されていたが、鉛筆で書きこんであるうえに筆圧が強いので、かなり読みとりにくかった。パトリシアの私的なメモを解読しながら、オルミイは静かに紙をめくっていった。

箱の隅には、スレートも置いてあった。銀灰色のスクリーンは消えている。小さなキーボードのすぐ上の、スレートの右横にあるスロットには、メモリー・ブロックがひとつ、さしこまれたままになっていた。オルミイはまわりを見まわし、警備兵の位置を確認してから、スレートのそばにひざまずき、スイッチをいれた。骨董品の使い方は、すぐにわかった。二、三分のうちに、彼はメモリー・ブロックの中身を高速でスクロールさせていた。あとで分析するために、一連のファイルを補助脳に記録していく。それには四分ほどかかった。

これまでその研究に目を通し、理解したかぎりでは、彼女はこの世紀の人間として、相当に進んでいるほうだ。

メモをもとの順番にもどしていると、警備兵のひとりがテントの角をまがってきて、まっすぐこちらを見た。投射されたカムフラージュがなおも有効であることを確信して、オルミイはゆっくりと立ちあがった。

「なにか聞こえなかったか、ノーマン?」ジャック・ティーグ軍曹が相棒に声をかけた。

「いいや」

「風かなにかかな?　まちがいなく、紙のこすれあう音が聞こえたんだが」

「また例のブージャムだろうさ」

ティーグは箱に近づき、メモの束を見おろして、小さく声を漏らした。「うへ——なんだ、このらくがき」身をかがめて、記号の羅列を指でなぞってみる。太くて黒い小文字のまじった、つづけ書きの文字だ。航空学校で習ったマトリックス・シンボルを思わせる二重の垂直の棒、積分記号、ドイツのゴジック文字やギリシア文字をまじえた指数、曲線や三角形や、まんなかにふたつの点のあるかたむいた円、ウムラウトのようにひとつまたはふたつの点のある文字……。

「わけがわからん」身を起こしながら、ティーグ軍曹はいった。そのとき、首筋の毛がさかだち、彼は空気の流れを感じて、すばやくふりかえった。

もちろん、そこにはだれもいなかった。だれがいると思ったんだ？

12

ＯＴＶで移動中の二日間のほとんどを、ラニアーは眠って過ごした。無重力で見た夢は、〈ストーン〉と地球が、過去と未来が渾然とまじりあい、地球に降りたいまも、まだ頭のなかで渦巻いていた。

腕時計を見てから、リムジンのとなりの席にすわっているシークレット・サービスのエージェントを見やる。ヴァンデンバーグに着陸してからジェット推進研究所のホフマンのオフィスに出頭する予定時刻まで、あと十八時間。スモーク色の車窓の外を、砂漠が走りすぎていく。気圧は高く、重力は強い。黒っぽい窓を通してさえ、太陽は熱く、黄色く見える。

〈ストーン〉が恋しかった。
「少し時間の余裕があるんだが」とラニアーはいった。
「はい」エージェントはまっすぐ前を見つめたまま、小気味よいほど無表情な顔で答えた。
「慎重だね、きみたちは」
「はい。そのように心がけておりますので」と運転手がいった。助手席にすわっているエージェントが、ラニアーをふりかえって、
「ミズ・ホフマンは、お好きなようにさせてさしあげろとおっしゃっていましたが、明朝八時までには、あなたをしらふの状態で無事パサディナに送りとどけなければなりませんので」
〝ミズ〟と呼ばれたらホフマンはどんな反応を示すだろうと、ラニアーは思った。「諸君。ぼくは、日にちを数えるのもいやになるくらい長いあいだ、禁欲生活をつづけてきた。地位にはそれなりの責任がともなう。だから、ロサンジェルスにはどこか安全な場所はないものかな、その……」そこで、〝ミズ〟と同じくらい古めかしいことばをさがし、「……旅のほこりを落とせるような？　いかがわしくなくて、楽しくて、清潔なところがいい」
「お連れします」と運転手がいった。
ラニアーは、〝ポロ・ラウンジ〟という名前の、凝った作りだが古めかしい感じの店に連れていかれ、二杯だけアルコールを飲むことを許された。まわりにあるのは、古き悪しき日々の、ネットワーク・テレビの古くさい遺物だった。午後三時に、彼はビヴァリー・ヒルズ・ホテルに運びこまれた。ホテルには、廊下をはさんで向かいあうように、ふたつのスイート・ルームがとってあった。ひとつは護衛用の泊り部屋だ。エージェントたちは手ぎわよくラニアーが泊る部屋を

調べ、目顔で安全を確認しあった。
ようやくラニアーは、名ばかりのプライバシーを手にいれた。シャワーを浴びてから、ベッドに寝ころがり、夢想にふけった。増えた重さに慣れるまで、どれくらいかかるだろう？　これからのお楽しみに、どういう影響が出るだろう？
五時にやってきた女性は驚くほど美しく、とても親しみやすかったが、少しも満足できなかった。べつに彼女の責任ではない。こっちはごくふつうにやったつもりなのに、肝心の行為がちっとも楽しめなかったのだ。女性は十時に帰っていった。
ラニアーが職業女を相手にしたのは、これがはじめてだ。ごくまれに、手がつけられないほど興奮することはあるが、彼の肉欲は、ほかの男ほど強くはなかったのである。
十時十五分、ドアを軽くノックする音がした。あけると、砂漠の着陸場からリムジンを運転してきたエージェントが、データのはいったメモリー・ブロックをふたつさしだした。「ミズ・ホフマンが、ご挨拶にといってこれをよこされました」とエージェントはいった。「わたしどもは向かいの部屋におります。ご用があったらお呼びください」
〈ストーン〉からラニアーが持ってきたメモリー・ブロックは――ラニアー自身より貴重なものだ――即刻パサディナへ、もっと安全な車両により、別便で慎重に輸送されていた。この時間になっても、アドバイザーはブロックを読みふけっているはずだった。
ラニアーは明かりを全部消して、ベッドに寝ころがり、天井を見つめながら、ポロ・ラウンジにきていた年配の管理者のうち、いまごろ何人がコールガールのサービスを受けているのだろうと思った。

いままで、あちらのほうはそんなに好きだったわけではない。今回も、欲望からではなく、肉体への義務として呼んでもらったようなものだ。さすがに何カ月も禁欲生活を送っていると――じっさいには、一年以上にもなる――もはや肉体は、意志とは関係なく捌け口をもとめるものらしい。

少なくともそれは、彼の体が正常であることを物語っていた。彼はいつも、自分のクールさに――これが適切なことばかどうかはわからないが――なんとなくうしろめたさを覚えていたのである。同時に、感謝してもいた。そのおかげで、目的からたえず注意をそらされることもなく、考えに多くの時間を割くことができたのだから。

また、そのクールさゆえに、彼はずっと独身を通してこられたのだ。恋人もいなかったわけではないが、仕事とその達成がつねに勝ちをおさめた。恋人たちはやがて友人となり――ほかの友人たちと結婚していった。

きわめて文明的な状況ではある。

いつしか彼は、眠りに落ち、強い重力のもとならではの、暗くて重苦しい夢を見た。彼は黒い海をゆく、大きな豪華客船の船長だった。吃水線を見ようと船腹をのぞきこむたびに、船は一、二メートル沈んでいた。夢のおわりごろには、彼はパニック状態に陥っていた。船を海中へ引きずりこもうとする、地球の重力。彼は船長であり、船はこれまで指揮したなかでもっとも美しい船だ。それがいま、失われようとしている。といって、目を覚ませばこの状況から逃れられるものでもない……。

翌朝八時、ラニアーはブリーフケース片手に、ふたりの新顔のエージェントにともなわれて、

ジェット推進研究所の中庭のコンクリートを歩いていた。そろそろ、明るい太陽と増えた重みが快適になってきており、きょう一日を、エアコンのきいた部屋でつぶすのが、なんとももったいなく思えた。ふたつみっつ予定されている会議のうち、最初のものは、VIP会議室で行なわれるはずだった。

鼻風邪を抑えておこうと、ラニアーは風邪薬をとりだし、新しく造成された庭園のブロンズの泉で呑みくだしてから、JPLの全プロジェクトを表示した大きな黒地のパネルの前をゆっくりと通りすぎた。火星開発の諸計画と競いあうようにならぶ、太陽帆船の報告、そして準備中のプロクシマ・ケンタウリ探査機のホログラム。

だが、二年前に開始された第二次ABE計画——小惑星帯探査計画(アステロイド・ベルト・エクスプロアー)——については、どこにも触れられていない。

グレイのスーツを着た影をふたりしたがえ、ラニアーは重力疲れのことを考慮して、ゆっくりと階段をのぼり、分厚いガラスの保安扉を通りぬけた。モニターにカードを提示すると、スチールのゲートが小気味よいうなりをあげて開いた。エージェントたちはいっしょにはいってこなかった。奥には通路がつづいており、陳列ケースがならんでいた。ケースのなかには、ジェット推進研究所の数々の成果が、精巧なミニチュアのレプリカとなって、きらめく透明なプラスティック・ボックスにおさめられていた。ボイジャー、ガリレオ、ドレイク、太陽帆船。OTVの模型や、恒星探査機のコンセプトを表わした図表も展示されていた。

ラニアーはもう古びてきたエレベーターに乗って六階のボタンを押し、輝くブルーの階番号を見あげた。

エレベーターのドアが開くと、またべつのエージェントが待っており、ふたたび身分証の提示をもとめた。ラニアーはポケットからカードをとりだし、バッジの横にならべた。エージェントが礼をいってほほえむと、ラニアーはひとりで会議室に歩いていった。

ホフマンは、長くて黒いテーブルの向こうにすわっていた。いくつもの書類の束、ふたつのスレート、ひとかたまりのメモリー・ブロックが、その目の前にならべられている。彼女の左には、大統領のISCOM担当責任者、ピーター・ヘイグ、右には、第二次ABE計画の航空宇宙安全措置顧問兼プロジェクト・マネジャーのアリス・クロンベリーがすわっていた。ラニアーはテーブルをまわって歩いていき、まず最初にホフマンの手を両手で暖かく握りしめてから、クロンベリー、ついでヘイグと握手した。

「統合宇宙コマンドと統合参謀本部の代表がきていないようだが」テーブルの手前にすわりながら、ラニアーはいった。

「それはあとで説明するわ」とホフマンが答えた。前に会ったときよりも、彼女は老けていた。髪にも白いものが多くなり、いっそう年配の婦人らしくなって、皺もより深く刻みこまれていた。

「重力にはなじんだようね、ギャリー」

「気持ちの上ではまだだがね」

「パトリシア・ヴァスケスはどう？」

「期待されていただけのことはあるようだ。もっとも、彼女の仕事ぶりを見る前に——彼女がなんらかの結論を出す前に呼びもどされたのでね」

「ということは」とホフマンは、「あなたは彼女に、一抹の不安をいだいているということね」

「そのとおり」とラニアー。「彼女が有能であることや、彼女がその専門分野で——それがどんなものであれ——最高の頭脳だということを、疑っているわけじゃない。ただ、なにぶんにも、彼女は若い。あの図書館は相当のショックだったようだよ」

ヘイグが右手をテーブルにつき、わずかに身をそらせていった。「わたしたちみんなにとって、あれはショックだったさ」

ホフマンが一枚の書類をさしだした。「あなたが持って帰った情報の分析はおわったわ。すでに大統領にも報告してあります」

「ヴァスケスがなにもいわないうちから？」

「わたしたちが聞きたいことをいってくれるとは思えないからね。本能と呼んでもいいけれど、わたしたちは大きなトラブルにまきこまれたような気がするの」ホフマンの目が、ラニアーの肩の上の虚空にすえられた。「じつは、図書館の情報の一部を照合してみたのよ」

ラニアーはじっと三人の顔をうかがった。みんな浮かない顔をしている。隠そうとしていても、思いははっきり顔に表われていた。

「で？」

「相違点はあったわ」

「神よ、感謝します」ほっとするラニアーを、ホフマンは片手で制して、

「大きな相違点ではないの。図書館の情報と、あれから発見したことによれば——第二次ＡＢＥ計画やその他の調査からよ——戦争勃発の確率はかなり高い、ということで意見が一致したわ。ワシーリエフ書記長に関する歴史的記述を引き比べてみたの。国防会議に対して、彼は図書館の

記録にあるとおりの指示を出しているわ。現在ソ連は、アメリカのシードラゴン計画に対抗するため、キエフ級空母、キーロフ級誘導ミサイル巡洋艦、そしてもちろん、タイフーンとデルタⅣ級超大型潜水艦に、SS45を配備しているところよ。向こうは、どうすればアメリカの広範囲スペクトル・レーザー通信システムを攪乱できるか心得ている。そしてそれは、一九九六年の軍備撤廃協定違反だわ……軍備が撤廃されたことはないのだから、それ自体は重要ではないけれど」

ラニアーはうなずいた。

「広範囲スペクトル・システムの情報を統合宇宙コマンドから引きだすのは、骨だったわ」とクロンベリーがいった。「DODと統合参謀本部の代表がきていないのは、ひとつにはそのためなの」

「もっとひどい話があるわ」ホフマンがつづけた。「議会が〈ストーン〉関係の予算について調査をはじめているの。金額的には、充分政府支出額の枠内だから問題はないけれど、図書館、〈ストーン〉、わたしたち全員についての信用を失墜するための調査だと考えれば、楽観してはいられない。大統領は――何人かの閣僚に吹きこまれて――いまでは〈ストーン〉調査が、インチキか見当はずれの計画だと信じこんでるのよ」

ラニアーは、頬が痛くなるほど強く歯をかみしめた。「なぜ？」

「たぶん、大統領にはあなたたちが〈ストーン〉で発見したことが理解できないのね。あの人はガチガチの中西部のリベラリストで、科学や技術にはとても弱いの。国を治めることはできても、想像力はないのよ。そもそも宇宙関係のことは苦手だし、〈ストーン〉にいたっては理解を超えているわ」

クロンベリーがブリーフケースからホワイトハウス専用便箋に書かれた手紙の写しをとりだして、ラニアーにさしだした。それには、〈ストーン〉の研究体制について大統領が調査団を派遣するという趣旨のことが書いてあった。「これが書かれたのはね、第二次ABE観測班の報告を提出し、図書館のデータを確認したあとのことなのよ」
「週末までには、副大統領に〈ストーン〉へいってもらおうと画策していたんだけれど、はねつけられたわ」とホフマン。
「〈ストーン〉における、ソ連人の立場はどうなる?」ラニアーがたずねた。
「ソ連は二年前に、ひそかに小惑星帯探査機を打ちあげていたのよ。そして、その探査機はABEより早く、おそくとも同じ時期に、確証をつかんでもどってきたの。だから、たしかに〈ストーン〉と大きさが一致する超大型小惑星があることを、ソ連は知っているわ」
「ジュノーか?」
「そう。溝を除けば、形状はぴたり一致するわ」
第二次ABEの確認結果を聞かされたのは、これがはじめてだった。「すると、ジュノーと〈ストーン〉はほんとうに同じものだったのか」
ホフマンがABEと地球付近からの観測写真のファイルをさしだした。ABEが撮った写真の一枚には、ジュノーが映っていた。クレーターと細い溝で覆われた、スイートポテト型の原始惑星のかけら。溝と連絡孔の窪みがあいている点を除けば、〈ストーン〉はこれとうりふたつだった。「神よ」ラニアーは嘆息した。
「責められるべきは、神ではないと思うわ」とホフマン。「おそらく、あなたのコンラッド・コ

ジェノフスキーよ」

「どちらにしろ」と今度はヘイグが、「ソ連は三週間以内、もしかするともっと早々に、ソ連チームを回収しようとしている。中国には第七空洞までいかせているのに、ソ連に完全通行権が与えられないのは心外だ――というのが彼らのいいぶんであり、正直いって、これはいかにももっともらしい口実だ。わたしだって腹をたてるさ。だが、それだけではすべてを説明できない」

「連中、各国チームの責任範囲を定めた一年前から、いまの役割分担を認めていたんだがね」眉をひそめて、ラニアー。

「ああ。だが、どうやらほかにリーク源があったようだ」ヘイグがいった。

「なんてこった」だれだ？

「そしてだ」とヘイグは語をついで、「今度は、図書館の内容について偽りの情報を流していると苦情をいってきた」

「事実だけれどね」かすかにほほえんで、ホフマン。

「ソ連人がいなくても、科学チームはやっていけるの？」クロンベリーがたずねた。

「だいじょうぶだ。彼らはおおむね、侵入孔に近いいくつかの空洞で、プラズマチューブやその動力供給の調査に携わっているだけだから。彼らなしでもやっていけなくはない。ただし、多数の重要な研究に遅れが出るだろうし、ストップしてしまうものもあるだろう。北京はどういっている？」

クロンベリーがメンバーの履歴書のフォルダーをめくった。ヘイグがホフマンの前から手を伸ばして、その一枚を受けとった。

「カレン・ファーリーは中国人民であり、理論物理学者としてきみの下で研究している。そうだな？」
「たしかに。彼女はいろいろな分野で役にたつ人物だが――」そんな、ファーリーが――呉や張が――どうか、ちがう人間であってくれ――
「ソ連が引きあげるなら、彼女とその仲間たちも引きあげさせるそうだ」
「なぜ歩調をあわす？」ラニアーが問いかえした。
「中国はネズミのにおいをかぎとったのよ」とホフマン。「あるいは、ひと波瀾のにおいをね。ソ連がにせの情報を与えられ、重要な決定からつまはじきにされたと思うのなら、中国にも同じ不満を表明するだけの理由はあるわ。中国の存在は、ソ連よりもこちら側にとって有益になるだろうし」
「どこのグループにせよ、なにがあろうと、〈ストーン〉に確保した足場を引きあげるとは信じられないな」
「そんなことはしないでしょう」とホフマンがいった。「わたしたちは、ソ連と中国がひそかに手を握っているという証拠をつかんでいるの。守備隊のなかにはその動きが顕著だし、科学者チームのあいだにさえそれが見られるわ。それからね、ソ連の割り当て軌道と月に、興味深い活動が見られるの。チュラタムやインド洋のシャトル発着場で活動が活発になっていることはいうにおよばずよ」
「地球と月から侵攻をかけてくると？」
ホフマンはかぶりをふった。「いいこと、そんなことは、これから話す大いなる疑問にくらべ

たら瑣末なことでしかないの。ヴァスケスはなにかを見いだしたか？　パラレルワールドについて、多元的な歴史について、彼女がどんな結論を出しうるか？　問題はこれよ」
「どんな結論を出せるだけの時間も、彼女にはまだない」ラニアーは静かにいった。「あと二、三週間で、答えはわかるだろう」
「わたしも大統領の視点はわかるわ。たしかにこれは、とても信じがたいことだもの」とクロンベリーが横から、「〈ストーン〉がわたしたちの未来からやってきた、というのは、あなたの意見？」
「ちがう」とラニアー。「〈ストーン〉は、われわれの宇宙とは必ずしも一致しない、べつの宇宙からやってきたものだ。そこまではまちがいない。ただし、ひとつだけ明白な差異がある」
「〈ストーン〉の過去には、〈ストーン〉が現われなかったことか」とヘイグ。
「そのとおり」
「そしてわれわれには、〈ストーン〉がどの程度までわれわれの歴史に干渉しうるものか、知るすべはない」
「おそらく、いろいろな変化をもたらすでしょう」とホフマンがいった。「少なくとも、〈ストーン〉は事態を悪化させてくれたわ」彼女は〝プラズマチューブの環境下における植物生理学の変化〟と記されたメモリー・ブロックをとりあげ、「この報告はあなたが作ったの？」といいながら、まずクロンベリーに、ついでヘイグにそれを見せた。
ラニアーはうなずいて、「Sコードに属するやつだな——ほとんどは最良の資料、つまり第三空洞の図書館からとった要約だ。もう二、三日で、ヴァスケスも第三空洞を訪れることになって

いる」
「なんの要約かね？」メモリー・ブロックを持ちあげながら、ヘイグがきいた。
「戦争の最初の二週間の要約だよ」
クロンベリーがたじろいだ。
ホフマンはスレートをとりあげ、Sコードで読みだすようプログラムしてから、メモリー・ブロックをさしこみ、内容をざっと読んだ。顔が蒼白になった。「これははじめて見たわ」
「それはおおむね、両陣営の軍が残した、歴史的写真記録だ。うしろのほうの記録は、〈長い冬〉をつづっている」
「するとこれは、もはや理論ではないわけだ」ヘイグがいった。
ラニアーはうなずいた。
「その〈冬〉は、どのくらいつづいたの……いいえ、つづくの？」ホフマンがさしだしたスレートから身を引いて、クロンベリーがきいた。
「主要な影響については、一、二年」
ヘイグがクロンベリーからスレートを受けとった。「ここに書いてあるのは、たしかに第三空洞の図書館からとったものなんだな？」
ラニアーはいらだち、答える前にひとつ深呼吸をした。「そんなもの、無からでっちあげられるはずがないじゃないか」
「もちろんよ」とホフマン。「もし図書館が正しければ――もしわたしたちの宇宙がその記録のとおりの道を歩むなら――わたしたちに残された日数は十六日しかないのね？」

「どちらになるか、そのときがくればわかるだろう」とラニアーは答えた。「もっとも、そういうことがあったという知識は、ほぼ確実にそのとおりの結果を招く。もし——もしそんなことが起こるとすればだが」

「明日の昼、ソ連との会談を予定しているの」とホフマンがいった。「きわめて非公式な会談よ。向こうは、あなたにもその会談に出てほしいといってきたわ。ミスター・ヘイグが、国務省とDODにこの会議を開くよう、強く要請してくれたの。もしその会議がうまくいけば、次官クラスの会議が何度か開かれることになるでしょう。そして、今週中に大統領を納得させることができれば、おそらく首脳会談にももちこめるわ」ホフマンはなおもラニアーの肩の上のどこかを見つめながら、ゆっくりと目をまたたいた。それは、戦いに疲れた猛者が遠くを見つめるまなざしとすっかり同じものではなかったが、かなりそれに近いものだった。

13

つぎの段階は、第三空洞だった。

第一サーキットの井戸への旅からもどり、アレクサンドリアの図書館でラニアーが彼女のために選んでくれた本からできるだけのことを吸収したあと、パトリシアは自分の研究テーマ全体に陶然となった。これはゲームであり、練習問題であり、彼女がティーンエイジャーのころやった、毛色の変わった数学の演習問題以上にリアルなものではないのだ。

この二週間、地下鉄に乗って冠毛シティの下をくぐったことは何度となくあったが、第三空洞は最初の五つよりずっと厳重に警備されていた。電車はいつも、ここをすどおりするだけだった——いまのいままでは。

ルパート・タカハシが、地下鉄の駅から地上の通りへと案内してくれた。

科学者チームに対するタカハシの貢献ぶりは、たいへんなものだった。数学者という彼の肩書きは、とうてい彼のすべてをいい表わしてはいない。きょうはこのグループ、あすはあのグループと、興味のおもむくままに研究に加わっているという。それも、単に万能選手なのではなく——科学者チーム内のさまざまなグループに対して、数学的・統計的精密さを保証するという、特定の目的を持った万能選手なのだ。それだからこそ、彼はリムスカヤとともに、〈通路〉の予備的理論に取り組んだのだ。タカハシはリムスカヤの人口理論を確認しながら、パトリシアとその予備的理論を論じあった。

冠毛シティは驚くべき都市で、アレクサンドリアより二世紀は新しかった。〈ストーン〉が出発してから建設されたためか、その住人が〈ストーン〉の環境に慣れてかなりたってからでなければ考えられないようなデザインが随所に織りこまれていた。〈ストーン〉の建築家たちは、ここにふんだんに自由な発想をもりこむことを許されたらしい。第三空洞を巨大な谷に見たてて、彼らは極から極へケーブルをさしわたし、そこから優美なカーブを描くよう、建物を吊りさげたのだ。床の上り勾配を利用した、長さ十キロにおよぶアーチ状の構造物は、スチールの帯と加工されたストーン岩の銀と白の模様に彩られつつ、下にぼんやりとした影を投げかけている。建物のいくつかは、空洞の大気圏ぎりぎりの高さまでそびえていた。いずれも、ゴルフのティ〜のよ

うに、基部よりも上層が太い形状だ。
住人がいないというのに、冠毛シティは生きているようだった。人の姿をちょっとちりばめてやるだけで、活気さえ出てきそうだ。建物から建物へいきから数百人の人々——カラフルで流れるようなデザインの奇抜な服は、曲面やアーチの多い街並みによく似あい、鮮やかな色彩は、街を彩る淡いクリーム色、白、メタリック・カラーなどによく映えるだろう。
中央図書館は、比較的小型のゴルフ・ティー構造物のひとつをとりまく付属施設の下に、ほとんど隠れるようにして建っていた。タカハシが充分歩いていける距離だというので、ふたりは広場を横切り、歩道橋をわたり、サービス道路をとおって、ゆっくりと図書館に向かった。この道路にも、かつては車が——そのほとんどはコンピューター制御の無人車両だ——はげしくいきかっていたのだろう。「車はすべて持っていかれたんだ」とタカハシが説明した。「その形状は、記録を通してしかわかっていない。きっと、大脱出に使われたんだろうな」
パトリシアは何千万というストーン人が——冠毛シティだけでも、ゆうにそれだけの人口を収容できただろう——ロボット・カーに乗って〈通路〉の奥へ消えていくところを想像してみようとした。
図書館の入口は、黒大理石に似た、切れめのない一枚壁でできていた。近づいていくと、増幅された声が、停止して身分証を示すようにいった。ようやく身元を確認され、通ってもよいといわれるまでには、まる二分間も待たされた。
黒い壁の一画に、幅の広い半楕円が開いた。その向こうには、どこにでもいける権利を与えられた、例のグレイと黒の警備兵が待っていて、さらにチェックをしたあと、ふたりをなかに通し

た。図書館の内部は、照明が煌々とともっていた。これなら、あとから光の帯をとりつける必要もない。「〈冠毛〉にはサーキット・ブレーカーがないんだ」とタカハシがいった。「この灯りがどうやって電力を得ているのかもわかっていない。電力源がどこにあるのかにいたっては、さっぱりだよ」
図書館は、全体の容積から見ると、そのアレクサンドリアのいとこ――あるいは先祖――よりも小さく、書架や記録らしいものも見あたらなかった。メインフロアーは、パステル・ブルーのカーペットを敷きつめた、広々としたホールだ。頭上には、なんの支えもなく浮かぶ、長さ百メートルはありそうな幕が、白い穏やかな光を放っている。ホールには、少なくとも千の、ライムグリーンのパッドを施された椅子があった。各椅子の前には、灰色の台座があり、その上には、銀色に光る涙滴型の装置があった。
図書館の繊維も材質も、すりきれたり古びたりしているようすはまったくない。
タカハシは、パトリシアを椅子のひとつに連れていった。その椅子のまわりには、記録装置や読み出し装置がならんでいた。その場ちがいな外観から、調査者たちがあとから設置したものであることがひとめでわかる。「われわれはふつう、この端末を使っている。どれを使うかは、きみの自由だ」
パトリシアはかぶりをふり、「こういうものは好きじゃないわ」といって、装置類を指さした。それから、椅子の列にそって歩いていき、通路の端から二十メートルほど離れたところにある椅子を選んだ。
タカハシもあとをついてきた。「ここで、きみは〈ストーン〉のすべてを見ることができる―

―むかしそのままの姿の〈ストーン〉をね。住人が住んでいたころの街のようすを見てみるかい?」タカハシは彼女の選んだ椅子の腕にある、布で蔽われたふたを脇に押し開き、その下のパネルの簡単な使い方を教えた。「これはほんの基礎にすぎない。ほかにも何百という使い方がある。自由にためしてみるといい。休暇だとでも思うことだよ。横から見ていてもおもしろくないし、きみに基礎を教えること以外、することもないから、ぼくは外で待っている。見おわったら出てきてくれ――一時間くらいでどうだい?」

この広いホールにひとりきりでいるのは心細かったし、アレクサンドリアの図書館でラニアーがずっとそばにいてくれたのは、とてもありがたかった。それでも、彼女はうなずいて、椅子にすわり、片手でコントロール装置を動かしはじめた。目の前に、単純な円形のイメージが浮かびあがった。実体がないとは思えないくらい、くっきりとして存在感がある。タカハシの指示にはひとつまちがいがあり、それで誤った操作をしたために、ガイドが作動した。ガイドは彼女のミスを――わずかになまりのあるアメリカ英語で――正し、装置の正しい動かし方を教えた。それから、ほかの種類の情報の呼びだし番号やコードも教えてくれた。

パトリシアは第二空洞の都市に関する、子供向けの初歩的な案内コースを呼びだした。つぎの瞬間、彼女はアレクサンドリアのただなかに立っていた。どうやら、〝メガ〟のひとつの低い階の一室にあるポーティコに立って、交通のはげしい通りを見おろしているところらしい。イメージは完璧で――〝彼女〟の部屋がどんなふうだったかという記憶までもたらした。そう望めば、うしろを向いて室内を見ることもできたし――ほんとうは自分がすわっているとわかってはいたが――室内を歩きまわることもできた。

両方の耳からは——または頭のまんなかのどこかからは——声が聞こえてきて、そのとき彼女が見ているものがなにかを説明してくれた。
彼女はアレクサンドリアに三十分をかけ、人々が着ている服や顔、ヘアスタイル、表情、歩き方などを観察した。衣裳のなかには奇抜なものもあったが、かなり地味な——ひと目を忍んでいるようなデザインのものも多かった。この映像が記録された時点で、女性に見られるいちばんポピュラーなスタイルは、不透明な——たいていはピンクかくすんだオレンジ色の——フードつきのローブで、頭の上にはなにかふわふわした素材でできた、真紅の小さな円盤がかぶせられていた。なかには、左の肩胛骨の上に、六角形の青いものをつけている女性もおり——
(?)
(あれは勤務先および階級を、積極的に、かつ無音で音声化する標識です。使用するコード列は……)
——また、右の肩に金のビーズをちりばめた赤いリボンを飾っている者もいた。男性のファッションは、女性よりもっとけばけばしいものだった。異性にアピールする側の性は、パトリシアの時代、パトリシアの世界と逆転しているらしい。
彼らの話し声が聞こえた。それは独特のことばで、ウェールズ語に似ていたが、ときおり英語やフランス語のように聞こえることもあった。
(あなたは——このユニットは——どのことばでわたしに話しかけているの？　どうやってそのことばを知ったの？)
(使用しているのは、二十一世紀末の英語です。特殊コードでアクセスできる、もっとも古い英

語がこれだからです。データにアクセスする前の会話から、このことばを選びました)
ガイドの話では、各民族が母国語の流れをくむことばを保持するいっぽうで、言語の多くは共通語に変容したという。もっとも、パトリシアはあらかじめ、言語の形態は比較的短い期間で大きく変化する傾向があることを知っていた。図書館にあるこのようなガイド装置によって修得期間が短くなった結果、その変化は急激なものとなりえただろう。なにしろ、新しい言語やその変形を、数時間、あるいは数分で修得できるのだから。
いっぽう、彼女に読みとれる書きことばについては、その字体の多くは単純化されるか、逆に――逆説的だが――複雑になっていた。はなやかな字体がはやっていた時期があったのだろうか?
(ここは有名な〈ネイダー・プラザ〉です。〈冠毛〉船が地球をあとにする前、その優美さから数々の建築賞を獲得した場所で……)
パトリシアは熱心に説明に耳をかたむけ、市内めぐりにすっかり没頭した。男性のなかには、キルトのようなスカートをはき、ヨークのない服を着ている者もいれば、二十一世紀のロサンジェルスにおいても違和感のないような、ビジネス・スーツを着ている者もいた。靴はすっかりすたれてしまったようだ。おそらく、自動化された公衆衛生設備によって、どこにも穴ぼこがなくなっているからだろう。
(貧富の差はどう? ゲットーや貧民街はあるの?)
場面がゆらりと変化した。
(アレクサンドリアおよび〈ストーン〉のその他の場所における社会的不安は、知られていませ

ん。ただ、都市内には、二十四時間保守態勢の対象外となっていた特別地域がありました。その地域に住む市民たちは、最新式のサービスをすべて断わり、二十一世紀以降に発明されたあらゆる機械を使わずに暮らしていたのです。彼らの願いはなにをおいても聞きいれられました。彼らは名誉市民であることが多く、テクノロジーは滅亡をもたらすものであり、神は人々が、ジェントル・ネイダーと〝山〟の使徒たちの著書に記述されていない手段は用いずに生きることを望んでいる、と信じる資格のある人々だったのです)

ネイダーという名前はすでに何度か耳にしていたが、〝脚注〟機能のべつのブランチに照会することを思いたったのは、しばらくたってからだった。そのついでに、彼女はどんなストーン人でも当然知っているようなことについて、いくつか説明をもとめた。その結果、子供向けに要約された〈ストーン〉史と、〈大破滅〉から冠毛シティ建設までの歴史が提示された。

ジェントル・ネイダーが、じつはラルフ・ネイダー——一九六〇年代から七〇年代にかけて、消費者擁護の先頭に立ち、独自の調査を行なって大きな波紋を投げかけた、あのネイダーのことであるとわかったときには、彼女も少なからず驚いた。地球では——つまり、彼女の時代の、彼女の地球では——ネイダーはまだ生きているが、図書館の記録では、その名は必ず敬意をもってあつかわれていた。呼び名はつねに、〝ジェントル・ネイダー〟もしくは〝よき人〟だった。彼の名前を戴いた人々——すなわち、ネイダー教徒は、強力な政治力を持ち、何世紀にもわたってその力をふるいつづけた。いや……ふるうのだろう。これから先は、物理学的時間概念を用いることにしよう——できごとを時間の流れにそって考え、過去、現在、未来の特定の視点に偏ることはやめよう、とパトリシアは誓った。

〈大破滅〉ののち、恐るべき〈長い冬〉と〈復活革命〉を経て、ディエゴ・ガルシア・デ・サンティリャーナという名のスペイン人が、〈生への回帰〉運動の旗印のもとに、西ヨーロッパの生存者のあいだで勢力を広げた。世界政府樹立の推進役となったのが、彼である。翌二〇一〇年（いまから五年後だわ——と、つい誓いを破って、彼女はそう思った）、北アメリカで最初のネイダー教徒の連合が成立した。ネイダーが選ばれたのは——本人は、〈大破滅〉において〝殉教〟していたが——核エネルギーおよび過剰なテクノロジーに反対しつづけたその姿勢のゆえである。こうして、その昇格が正しかったか正しくなかったかはともかくとして、ネイダーは聖者にまつりあげられ、荒野の——人類がみずからに加えた仕打ちに対する恐怖と怒りになおも満たされていた荒野の、英雄となった。二〇一一年、ネイダー教徒たちは、〈生への回帰〉主義者を吸収し、北アメリカと西ヨーロッパの両政府は、交易および協力に関して条約を結んだ。ネイダー教徒政府は、選挙で圧勝して政権を握ると、ただちに高度技術や核に関する研究を押さえつけにかかった。「自然にもどれ！」という叫びが、世界経済の三分の一を席捲し、なかでも伝道者（レイダース）たちは——やや秘教的な、エリート組織のことだ——世界じゅうにとびだしていき、しぶる各地の政府に、ネイダー教への改宗を〝説得〟してまわった。いっぽうソ連では、二〇一二年、ネイダー教のシンパによって革命が起き——すでにその権力の中心地である、ロシア・ソビエト連邦社会主義共和国内に押しこめられていた——USSR最後の社会主義政府が打倒された。かくして、東側ブロックの諸国はその主権をとりもどし、そのほとんどがネイダー教をとりいれた。

少なくともそれで、記録にネイダーの名前が頻出することの説明がつく。二〇一五年から二一〇〇年にかけて、〝よき人〟の信奉者たちは、世界の三分の二にその勢力を広げた。この期間に

おける唯一の頑強な抵抗は、アジアに見られた。アジアでは、日本、中国、（それほど積極的ではなかったが）南アジア、マレーシアからなる大アジア連盟が、ネイダー教を批判し、科学と核エネルギーもふくめた高度技術の研究を、熱心に再興させようとしていたのである。西洋世界における、ネイダー教に対する最初の本格的な抵抗は、二一〇〇年、統合ドイツの民族運動としてはじまった――

パトリシアは機械のスイッチを切り、目をこすりながら、椅子の背にもたれかかった。文字の形で表示される情報や、選択的な映像、そして選択的な音声。汎用メディアの文書がないときは、印刷物が提供されるが、それにもかすかながらはっきりした音声の説明がつく。これに比べれば、本を読むのは拷問であり、現在の形式の映像は、洞窟の壁画と同じくらい古くさい。

状況さえ許せば、パトリシアは残りの一生を喜んでここに捧げ、永遠の学究となって、彼女自身や彼女の先祖たちが生きたことのない、何世紀もの歴史の知識を渉猟しつづけただろう。

いま直面している難問を考えれば、それはとても魅力的な道だった。

ほどなく、一時間が過ぎさろうとしていた。

パトリシアは、〈通路〉や〈ストーン〉の大脱出、各都市の放棄についての情報を捜すため、つかのま、システムにもどった。が、それをたずねるたびに、アクセス不能を示す、きわめてリアルなとげのあるボールが宙に現われるばかりだった。

外に出ると、タカハシが静かに煙草をくゆらせていた。〈ストーン〉でだれかが煙草を吸っているのを見るのは、これがはじめてだった。パトリシアは腕と首筋を伸ばしながら、彼に声をかけた。「ここには、またこなくちゃならないわね」

「もちろんさ」

「つぎはどこ?」

「小旅行に出る。歩きだと、けっこう時間がかかるところだから、トラックを使おう」

第三空洞のトラックのガレージは、空洞にかかる巨大なアーチのひとつの基部にある、アーチとはおよそ不釣り合いな、薄い金属板の小屋だった。近くには地下鉄の入口があいていた。もっとも、かつて冠毛シティで使われた地下鉄網は、もはや稼働状態にはない。したがって、どれかの地下鉄駅から市内のべつの場所にいくためには、せまいサービス道路を通って、トラックを運転していかなければならなかった。

「大脱出に関することは、いっさいアクセスできなかったわ」トラックの一台を点検しているタカハシに、パトリシアは話しかけた。彼はかがみこんでシャーシの下をのぞきこみ、それから腰を伸ばして、両手をこすりあわせた。

「いま、考古学班がその解明にとりくんでいる。彼らの週間報告にまにあうように帰ってこなくちゃ。ということは、一一〇〇時だな」腕時計にちらりと目をやり、「いまは〇九〇〇時。トラックはだいじょうぶらしい。もう出発していいかい?」

彼はパトリシアが乗るようにと、運転席のドアをあけた。「トラックの動かし方は習った?」

パトリシアはかぶりをふった。

「それじゃあ、もうそろそろ憶えてもいいころだ。そう思わないかい?」

彼女は不安そうに肩をすくめた。

「ちっとも難しいことはないさ。とくにここではね。サービス道路なら道に迷うこともないし。

サービス機械が利用した壁面標識はもう解読ずみだ――地球のポール標識とそれほどちがわないよ。こいつは道路標識にかわるものでね。コーナー近くでペン・リーダーを標識に向けて光らせれば、現在地がわかる仕組みだ。曲がるときは……きみが曲がるときは、そう教える。サービス道路はすべて、壁面でとりかこまれていてね。見逃そうとしても、標識を見逃せるもんじゃない。いいかい？」

「いいわ」

タカハシは助手席に乗りこみ、彼女にスティック運転システムを説明した。「ある意味で、これは飛行機の操縦に似ている――スティックを前に倒せば、トラックは前に進むんだ。前に倒せば倒すほど、トラックのスピードは速くなる。最高速度は時速百クリック。減速するときは、スティックを引いてまっすぐに立てる。バックするときは、スティックを手前に倒せばいい。バック時の最高速度は十クリックというところかな。ギアチェンジはオートマチックだ。曲がるときには、この水平のバーのハンドルを握り、バーを曲がりたい方向に曲げる。前進や後進をせずに一回転したければ、スティックは中心に立てたまま、バーをめいっぱいひねる。トラックがその中心のまわりを回転してくれるから。ためしてみる？」

「もちろん」ガレージのなかで、パトリシアはトラックを前後進させてみた。スティックをブレーキとして使うには、少し慣れが必要だった。もう充分運転できると判断すると、彼女はタカハシにほほえみかけた。「じゃ、いきましょ」

「呑みこみが早いな、きみは」

「それをいうのは、まだ早いんじゃない」

「かもしれない。それじゃあ、車をあっちへ向けてくれ」タカハシはいちばん近いサービス道路への入口を指さした。

壁面でとりかこまれたサービス道路は、建物のあいだや下をぬって伸びており、基本的に、十度から十五度以上の勾配は避けるように作られていた。ただ、ある区画では、道がジェットコースターのレールのように激しく上下した。タカハシはパトリシアをなだめすかして、上り坂と下り坂を乗りきらせた。「いま通りすぎたのが、この一帯の主要鉛管設備さ」

サービス道路はところどころでトンネルとなっていたし、アーチその他の建造物でプラズマチューブの光がさえぎられるときもあったが、そういうところでは、大きな乳色のパネルが、やわらかな輝きを放っていた。都市には影と呼べるほどの暗がりがまったくなかった。なにもかもが、豊かで均質な光に照らされていた。

トラックがサービス道路の分岐点にさしかかると、タカハシがスピードを落とすようにいった。ついで、ポケットからペン・リーダーをとりだして、左手の壁の端付近にある、太さがまちまちの曲線群にその先端を向けた。ペンは彼のスレートにつながっており、スレートのディスプレイには地図といっしょに、座標値と手近の停車場の方向が表示された。「左だ」とタカハシ。「もうじき高層アパートのなかにはいる。いうなれば、裏口からはいるわけだ」

ほどなくサービス道路は、まばゆい金色に光り輝く円筒形の塔の、広場の下にもぐりこんだ。建物の地下にはいるとき、光が車に投げかけられたが、これといって自動的な反応はなにも起こらなかった。このトラックの形状、あるいはなかに乗っている人間は、ここの自動機構とは連動していないらしい。

「前方で開きっぱなしになっている扉のところでとめてくれ」とタカハシがいった。

そこから先は鎖が道をさえぎっていて、その上に標識がかけられていた。パトリシアはトラックをとめ、サイドブレーキをかけてから、標識の内容を読んだ。

考古学班責任者　Y・ヤコブの指示により

この停車場より奥には、トラックおよび歩行者の立ち入りを禁ず

「この指示は絶対でね」とタカハシはそっけなくいった。「この標識の向こうは未調査区域ということさ。こっちの建物の調査は完了しているから、はいるのは許されている——ただし、手を触れちゃいけない」

ふたりは高さ一メートルほどのでっぱりをよじのぼり、背をかがめてハッチをくぐった。最近とりつけられたらしい鍵や鎖で、たくさんのドアが開いたままに固定されている。壁や床、天井のそこここには、銀色のテープで覆われたものをはじめ、いくつもセンサーがとりつけられていた。

「運ばれてきた食料、装備、そのほか建物に必要なものは、機械がこの穴に押しこむ。すると、ロボット・カートが品物を適切なシュートへ運び、そこから建物のあちこちまで配達するんだ。もっとも、ぼくらは貨物じゃない。人間だからね」

もうひとつ開かれたままの入口をくぐると、広々とした一階ロビーに出た。少なくとも高さ二十メートルはありそうな、天井までとどく一枚ガラスの窓のそばには、一段低くなった談話スペ

ースがあり、明らかに天然木でできた、さまざまな形の椅子がならんでいる。窓の外には、よく手入れされた花咲く庭園。パトリシアはすっかりそれが本物だと思いこんだが、庭園に陽光が射し、木々を通して青空が見えていることから、それが幻であることに気づいた。足をとめて、しげしげとそれを眺める。その間、タカハシは両手を組んで、辛抱強く待っていた。

「すてきだわ」とパトリシア。

「あの庭園は本物だよ。にせものは、陽光と空のほうだ」こともなげにタカハシがいった。

「日の光も青空もなくて、ストーン人はどうして暮らしていけたんだろうと不思議に思ってたの」

「外に出てみれば、幻を作りだしているのは窓だということがわかるよ」

「本物そっくりね」

床は石を磨きあげたように見えるのに、絨毯を踏んでいるような感触もあった。ためしにパトリシアは、足を小刻みに踏みおろしてみたが、音はまったくしなかった。

「上に昇るには、少々意志の力を必要とするんだが」タカハシが警告した。ロビーのつきあたりに、二機のエレベーターが口を開いていた。「高所恐怖症の人には勧められないな」ふたりは左側のエレベーターにはいった。タカハシが床の赤い輪を指し示し、片足で軽く踏んだ。輪が輝いた。「七階だ——ふたりとも」

ふいに、床が遠ざかりだした。目に見える支えのないままに、ふたりはエレベーターのシャフト内を上へと上昇していた。目では昇っているのがわかるが、それ以外には動いている感覚がまったくない。パトリシアは目をまるくして、タカハシの腕にしがみついた。ロビーより上の階で

は、エレベーター・シャフトのなかにはなんの表示もなく、いま何回を昇っているのかもわからなかった。
「あっという間に着くよ」とタカハシ。「気にいったかい？　こんなものを何度小説で読んだことか。なのに、冠毛シティでは、それが現実に存在するんだ」タカハシがうれしそうに話すのを聞くのは、これがはじめてだった。どうやら、彼女の反応におおいに興味があるらしい。そのこと自体に、パトリシアは驚きを覚えた。いいわ、女の子がどんなふうに悲鳴をあげるのか、勝手に見てなさいよ。
目の前でシャフトの一部が透明になると、彼女はタカハシの腕を離した。ふたりはなめらかに、そっと向こうの床に押しだされた。
パトリシアはごくりとつばをのみこみ、「驚いたわ」と、やっとの思いでいった。「どうしてここではなにもかも完全に作動してるの？　第二空洞ではなにも動かなかったのに」
タカハシは、それが興味深い問題であると認めるかのようにうなずいたが、それには答えられないか、あるいは答えるつもりがないようだった。「さあ、ついてきてくれ」
廊下は左右に湾曲しながらつづいていた。断面はまるく、色彩は豊かなフォレスト・グリーンから暗い琥珀色へとなめらかに変化していた。ふたりが歩くところは、つねに暖かい光の輪に包まれているようだ。パトリシアは足もとを見おろし、足がふれているのは、廊下の床のわずかに上を覆う、目に見えない力場であることに気づいた。「わたしたち、宙を歩いているのね」声の震えを押さえようとしながら、パトリシアはいった。
「ストーン人はこういう幻が好きだったらしい。そのうちなんでもなくなるよ」タカハシがとま

り、右の壁のそばの床を指さした。かすかなリーフグリーンの線の下に、〝756〟という赤い発光文字が現われた。「これはドアだ。そして、たまたまわれわれのもとめるドアでもある。さあ、栄誉はきみのものだ。手で壁のどこでもいいから押してみたまえ」
いわれたとおりに、パトリシアは手を伸ばして壁に触れた。とたんに、高さ七フィートの卵型の口が開き、白い部屋が見えた。
「考古学者たちは、たまたまこの部屋を見つけたんだ。大脱出の前から、ここは空き部屋になっていたらしい。部屋を捜している人間は、こうやって空き部屋のようすを見たんだろう。この建物内のドアはすべて、パスワードがかかっているか、訪問者ははいれないようになっているかのどちらかだ。それに――もうやってみたのならわかっているだろうが――冠毛シティのプライベート・スペース内部に関する情報は、図書館では得られない。さあ、なかへどうぞ」
パトリシアはタカハシより先に、玄関の間へ足を踏みいれた。室内は素朴な白で統一されていて、どうやら長椅子や椅子やテーブルらしい、武骨な白いブロックが調度品としてならんでいた。
「つまらない部屋ね」パトリシアはそういいながら、窓のないリビングルームを見まわした。室内には卵型のドアがほかにふたつあって、そのどちらも、やはり白くて無骨な家具のならんだ、寝室になっていた。少なくとも、そこは寝室のように見えたが、もしかするとあのベッドは、長椅子なのかもしれない。
アパートのなかでただひとつ白くなかったものは、台座にのった、涙滴型の銀色の機械だけだった。パトリシアはそのそばで立ちどまった。「図書館で見たものと同じものみたいね」
タカハシがうなずき、「さわっちゃいけない」といって、台座の基部にとりつけられた、小さ

な箱を指さした。「ちょっとさわっただけでも、警備室で警報が鳴り響くようになっている」
「家庭用の端末ユニット？」
「われわれはそう考えている」
「動くの？」
「ぼくの知るかぎり、ためしてみた者はいない。ギャリーにきいてみるといいよ」
「窓がないのはなぜ？　ここは建物のまんなかのほうなの？」
「どの部屋にも、窓はひとつもない」
「それに、どうしてこう寒々しいの？」
「のっぺりしているという意味でいっているんなら、装飾が指定されていないからさ。ここにはだれも住んでいないから、装飾設定もなされていない。見てのとおり、がらんとしているだろう」
「なるほどね。部屋を装飾するにはどうすればいいの？」
「賃貸契約かなにか、結ぶんだと思う」とタカハシはいった。「そうすれば、ちゃんと反応してくれるんじゃないかな。この都市のすべての部屋がそうなんだと思う。声で命じれば、部屋が装飾してくれるんだ」
「すばらしいわ」とパトリシアはいった。「ほかの部屋には、だれもはいったことがないの？」
「第三空洞ではね。どの部屋も、厳重にロックされているから」
「それなら、どうしてこの部屋が見つかったの？　ただの偶然？」
「イツハク・ヤコブが一階ずつ建物のなかをしらべていたら、この部屋が見つかったんだ。部屋

番号が光っていたのは、ここだけだったそうだ」
「それなら、ほかの部屋の住人たちは、どうやって自分の部屋を見わけたのかしら」
「たぶん、近づいていくと部屋番号が光って、ドアが開いたんだろう。あるいはほかのやりかたがあったのかもしれない。こういう基礎的なことには、まだまだ理解が進んでないんだ」
基礎的なことさえわからないのに、どうしてわたしに高度な技術が理解できるはずがあるの、とパトリシアは思った。たとえば、第六空洞や、〈通路〉のような?
「それじゃあ、きた道をたどって引き返そうか」とタカハシがいった。「会議がはじまるまえにたどりつけるよう、がんばってみよう」

ふたりはかろうじて報告会にまにあった。科学者チーム第一コンパウンドのカフェテリアでは、テーブル席がかたづけられ、低い壇と演台がしつらえられて、椅子の列がならべられていた。壇のそばに立っているのは、リムスカヤだ。報告を聞きにきた科学者たちが、話をしたりいい席をとろうときょろきょろしたりしながら、つぎつぎにカフェテリアにはいってくる。
パトリシアとタカハシは、ぴたり一一〇〇時に到着した。ほぼ満席の状態だったので、ふたりはうしろのほうにすわった。カレン・ファーリーが席にすわったままふりかえり、手をふった。パトリシアが手をふりかえしたとき、リムスカヤが演壇の前に立った。
「淑女ならびに紳士、研究仲間のみなさん。けさは、〈ストーン〉からの大脱出についてご報告します。この問題については、多大な成果があがっており、いまその結論を、ここに自信をもって提示できると思います」リムスカヤはそこで、薄いライト・ブラウンの髪を持ち、繊細なアポ

ロン的顔だちをした、細身の男を紹介した。「結論を発表してくださるのは、オクラホマ大学のウォリス・レイナー博士。きょうの報告会は、三十分以上にはならないでしょう」
レイナーは部屋の奥を見やり、映写システム係の女性がうなずくのを確認すると、伸縮式の金属の指示棒をしごきながら、壇上に登った。「この報告は、考古学班全員と、社会学班の一部の方々の手になるものです。ヤコブ博士はきょうもご気分がすぐれないので、わたしが貧乏くじを引かされてしまいました」
くすくす笑いが聴衆のあいだにわき起こった。「ヤコブは、いちども壇上で報告をしたことがないんだ」とタカハシが教えてくれた。「ひどい恥かしがり屋でね。彼はひとけのない廃墟のほうがお好きらしい」
「かねてより、アレクサンドリアとして知られる第二空洞の都市、および、それよりはるかに進んだ冠毛シティとが〈ストーン〉内に共存していることについては、懸念事項とされてきました。われわれはみな、いちどはその疑問を口にしたことがあるはずです。なぜストーン人はアレクサンドリアを改装・近代化せずに、むかしのままの状態にとどめておいたのか？　われわれの時代と同じ気性の人間であれば、ちょっと都市を新たにするだけでもっと進んだ機能が使えるというのに、比較的原始的な環境のなかで生活するなんて、ばかばかしいと思うでしょう。
いまのわれわれは、アレクサンドリアの生活環境についてかなりのことを知っていますが、冠毛シティについてはほとんど知らない状態です。ごぞんじのように、冠毛シティの保安システムは——ストーン人の保安システムです——きわめて厳重で、ある程度の規模で建物を破壊して侵入しないかぎり、その生活環境にはいりこむことはできません。例外は、ただ一ヵ所のみです。

きわめて非人類学的判断をお許しいただけるなら、アレクサンドリアはより開放的で、いろいろな点でもっと親切です。

ここにいる者はみな、レベル2以上の通行権を持っています。そして、ストーン人が人間であり、われわれのものと驚くほどそっくりの文化からきた存在であることを知っています。すなわち、彼らは地球のひとつの未来からきたのです。われわれはまた、かつて〈ストーン〉の人々が、ふたつの社会的カテゴリーに大別されたことを知っています。ひとつはゲッシェル、すなわち技術科学を基盤に置く一派。そしてもう一派が、ネイダー教徒です。ところで、このことをラルフに話すのは、いったいだれなのかな?」

聴衆のあいだから、今度はおざなりな笑いが起こった。「使い古しのジョークさ」とタカハシがパトリシアにささやいた。

「われわれはいま、ストーン人大脱出前のアレクサンドリアには、おおむねネイダー正教徒が住んでいたことを知っています。彼らは二十一世紀以前の技術と生活様式に固執していたようです」

パトリシアはちょっとした驚きを覚えた。自分とタカハシとリムスカヤをのぞいて、ここにいる者たちは、都市の住みわけがなぜ重要であったのか、その理由をだれも知らないらしい。

「この点で、彼らはキリスト教のアマン派に似ていました。そしてアマン派のように、彼らは異端者の居留地を認めました——アレクサンドリアに散在する、メガやその他の革新的な建築物がそれです。しかし、その目的は明白でした。彼らはアレクサンドリア本来のスタイルを保持し、冠毛シティのさらに進んだスタイルを受け入れることを拒否したのです。このネイダー正教徒と、

よりリベラルなネイダー教徒およびゲッシェルとの住みわけがいつ行なわれたのかははっきりわかっていませんが、〈ストーン〉航海のそれほど早い時期ではないでしょう。
確実にわかっているのは、冠毛シティから人がいなくなったのは、アレクサンドリアより少なくとも一世紀は早かった——いいかえれば、第三空洞からの退去は、第二空洞からの退去が完了するよりも、約百年早く行なわれたということです。第二空洞の住民が、最終的には強制的に退去させられたことを示す、かなり信頼できる証拠もあります。
こうして〈ストーン〉内からは人がいなくなりました。その目的は、単に大規模な移民というわけではなく、ひとつの明確な計画を実行するためでした。計画の推進者たちは、より保守的な人々の説得に一世紀を費やし、それでもうんといわないことに業をにやして、とうとう住民の意志を無視して移動させてしまった。奇妙なことですが、ネイダー正教徒の一部が、何年間か、強制的に冠毛シティに住まわされていた証拠もあがっています。
われわれは、すべてのストーン人が〈通路〉を通って出ていったと仮定しています。それを裏づけるたしかな証拠はなく、またなぜ大脱出が行なわれたのか、大脱出を推進した勢力がなぜ〈ストーン〉をからっぽにしようとしたのか、それもわかっていません」
ひきつづき、アレクサンドリアの居住施設の内部や、各世紀ごとの第二・第三空洞における推定人口の表が映写されて、報告はおわった。まばらな拍手に送られて、レイナーは壇をおり、リムスカヤと交替した。
「人類学班・考古学班は、すばらしい仕事をしてくれました。そう思いませんか、みなさん？」
最前列にすわっている関係者をさして、リムスカヤが拍手を要請した。

ふたたび拍手が起こるなかで、パトリシアは立ちあがった。カフェテリアをあとにし、チューブの光の下に出た。そのあとを、タカハシが追ってきた。
「すばらしい報告だったわ」と彼女はいった。「それに、きょうの旅も有意義だった。あの人たちは、なにも知らされずに調査をしてるのね？」
タカハシは肩をすくめたが、それからうなずいた。「そうなんだ。社会学班と人類学班は、レベル3の通行権を持っていない。リムスカヤはできるかぎり保安規定にふれずに調査できるよう、懸命に誘導してるんだよ」
「この秘密主義には、うんざりしない？」
タカハシは大きくかぶりをふって、「いや。これは必要なことだ」
「かもね」パトリシアは疑わしげにいった。「ラニアーがもどってくる前に、しなければならないことがたくさんあるわ」
「だろうな。エスコートはいるかい？」
「いいえ。わたしはしばらく、アレクサンドリアにもどっているわ。なにかわたしに用ができたら、第七空洞に呼びもどして」
タカハシは両手をポケットにつっこんで、ちょっと考えてから、うなずき、カフェテリアにもどっていった。
そのすぐあとで、パトリシアがコンパウンドの外のガレージにはいると、ファーリーが追いかけてきた。「運転手はいいの？」
「ルパートに運転のしかたを教わったから。しばらく自分で運転していたほうが、リラックスで

きそう」
「そうね」とファーリーがいった。ふたりはトラックを選ぶと、乗りこんだ。

14

室内には、むっとする煙草のにおいや、空調と神経をはりつめたとき特有のにおいがたちこめていた。ラニアーとホフマンがはいっていったときには、すでに向こうの四人がきて待っていた。全員が男性のロシア人だ。ふたりは、銀鼠色のポリエステルのスーツを着ており、ごつくてはげ頭の、よく喜歌劇に出てくるロシア人そのままの風貌をしていた。ほかのふたりは、仕立てのいい純毛のウーステッドのスーツを着ていた。きちんと分けた頭髪といい、つきでた腹といい、ふたりともほとんど見分けがつかない。挨拶を交わしながら、ホフマンはひとりひとりにほほえみかけた。それがおわると、全員が楕円形の会議テーブルについた。ヘイグとクロンベリーの到着を待つあいだ、数分間の気まずい沈黙がおりた。
双方の人数が同じになると、ソ連側代表の責任者、グリゴーリイ・フョードロフスキーが、厚紙のフォルダーから一枚の書類をとりだし、テーブルの上に置いた。それから、メタルフレームの眼鏡をとりだすと、片手でつるを持ち、ごくさりげないしぐさで鼻の上にかけた。
「〈ストーン〉――われわれの呼び方でいえば〈ポテト〉についての会談開催に関し、わが政府にはいくつか条件があります」フョードロフスキーは、みごとな英語で切りだした。顔も落ちつ

きはらっていた。「すでにその条件はISCCOMに提出ずみです。今回は、そちらの回答を承らなくてはなりません。〈ストーン〉の主要調査権を、第一到達者に委ねる点については譲歩しましたが――」

こいつは二年も前の話じゃないか、とラニアーは思った。

「――われわれ、ソビエト連邦および同盟主権諸国は、本来の権利をだましとられたような気持ちをいだいています。

また、〈ストーン〉の調査を認められたにもかかわらず、ソビエトの科学者たちはたえず疎外され、しかるべき調査を許されていません。重要な情報からはいっさい遠ざけられている状況です。こういった不満は、現在貴国大統領および上院宇宙顧問委員会に通達してありますが、われわれの見るところ、ISCCOMは懐柔されており、ソビエト連邦および同盟主権諸国家は……」と、ここで協調するかのように咳払いをして――「きわめて悪意ある処置をこうむっていると考えざるをえません。わが同盟諸国には、合衆国およびNATO〝ユーロスペース主導による国際〈ストーン〉調査に参加することが、無意味であるとの助言を与えてあります。したがって、われわれは早急に、〈ストーン〉調査に派遣した人員および援助を撤収することになりましょう」

唇をきつくかみしめて、ホフマンはうなずいた。十秒ほどかけていまのことばを咀嚼してから、クロンベリーが答えた。「あなたがたの判断を残念に思います。わたしたちの見解では、ISCCOM、NATO〝ユーロスペースへの不満、および過去の〈ストーン〉調査員に対する仕打ちへの異議申し立てが事実無根であり、不幸な噂に基づくものでしかありません。あなたの上司の

決定は、最終的なものなのですか？」
　フョードロフスキーはうなずいた。「〈ストーン〉に関して締結されたＩＳＣＣＯＭ協定により、いま申しあげた問題が解決するまで、〈ストーン〉の全調査員を撤収せざるをえません」
「それはとても現実的とはいえませんわね」ホフマンがいった。
　フョードロフスキーは唇をかみ、肩をすくめた。「たとえそうであっても、協定にはそのように明記されています」
「ミスター・フョードロフスキー」ヘイグが手のひらを上にして、両手をテーブルの上に載せた。そのしぐさを、ラニアーはしげしげと見つめた。「あなたがたの人員引き揚げについては、いまだ言明されていない、ほかの理由があるとわれわれは確信しているのですがね。その件について話しあいませんか？」
　フョードロフスキーがうなずいた。「ここにいる者には、交渉権も、公式の発言権も与えられていないことをご承知おきのうえでなら」
「けっこう。それはこちらも同様です。わたしが思うに、見通しを明るくするためには、みんなすこしリラックスする必要がありそうですな……おたがい、正直に、率直にいきたいと思うのですが」ヘイグはフョードロフスキー以下の四人にうかがうようなまなざしを送った。四人とも、うなずいた。ヘイグは語をついで、「わが国の大統領は、このような情報を得ています。ＵＳＳＲは、〈ストーン〉において、技術的・軍事的性質を持つ、危険な情報が発見されたと信じている、と」
　丁重な態度はそのままに、フョードロフスキーの顔がすっと無表情になった。

ヘイグはつづけた。「NATO〝ユーロスペースが、第二、第三空洞について、いままで見すごされていた〈ストーン〉の一面の調査に着手したのは事実ですが――」
「当方の意図と抗議を無視して、ですな」フョードロフスキーがいった。
「そうです。しかし、最終的にはそちらも合意したことです」
「そちらの強制によって、です」
「かもしれません」ヘイグはいって、眉をつりあげ、デスクに目を落とした。「これは当方に認められた独自調査地域内のことではありますが、あえて申しあげれば、そのような危険な情報は、〈ストーン〉内では発見されていません」
事実、そのとおりだった。図書館には、武器に関する特別な情報はないのだ。
「それに、協定によって、そのような発見がなされた場合、ただちにジュネーヴの調停会議に報告されることになっています」
「それはそうかもしれないが」とフョードロフスキーがいった。ラニアーは、ほかの三人はなんのためにここにいるのだろうと思った。員数あわせか？　予備要員か？　フョードロフスキーのお目付け役か？　「しかし、そういった報告は、われわれのあずかり知るところではない。正直に申しあげましょう」今度は彼も、テーブルの上に手のひらを上にして両手を載せた。「わたしに公式な発言権がないことをおわすれなきよう。ただし、一私人として、この件に関するわたしの懸念を表明することをお許し願いたい」こまりはてたように、深くため息をつき、「ある意味で、われわれはおたがい、盟友です。多くの点で、われわれは利益を同じくしている。正直に申しあげて、新兵器技術に関する報告うんぬんは、重要な問題ではない。わが政府、および同盟主

権諸国の各政府は、〈ストーン〉の第二、第三空洞にある図書館についての報告に、ずっと大きな不安をいだいています。ありていにいえば、東西両陣営同士の未来戦に関する内容についてです」

ラニアーは愕然とした。〈ストーン〉の保安体制は——とりわけ図書館については——絶対だと思っていたのに。このとんでもない情報漏洩の責任はおれにあるのか、それともほかの情報源、たとえば大統領近辺やホフマンのオフィスにあるのか？

「これはきわめて異例の状況です」フォードロフスキーはつづけた。「正直いって、わが同志たちもわたしも、これが空想物語ではないことを、なかなか信じることができませんでした」ほかの三人も、多少のばらつきはあったが、うなずいた。「しかし、この報告はたしかに信用できます。これについて、お考えを承りたい」

「図書館の調査は慎重に行なわれてきました」とヘイグが答えた。「われわれはまだ、そこに記録されていた情報を処理しはじめたばかりです」

フォードロフスキーはむっとした顔で天井をふりあおいだ。「たったいま、たがいに正直であろうと誓いあったばかりではありませんか。わが国政府は、図書館にたしかにそのような情報があるという事実を押さえています。じっさい、この未来戦争が起こるかいなかは、すでに貴国大統領の腹にかかっているほどです」

フォードロフスキーはテーブルを見まわした。ラニアーはその視線をひるまずに受けとめ、彼の口のはたにかすかな笑みが浮かんでいることに気づいた。「さよう」フォードロフスキーは語をついで、「われわれはもちろん、何世紀かのちに、人間が〈ストーン〉を造ったことを、ある

いは造るであろうことを知っています。ジュノーという小惑星を基にして造られることも知っています。なぜ知っているかといえば、小惑星ジュノーと〈ストーン〉の特徴とが、あらゆる点で一致するからです。小惑星帯にいるわがほうの宇宙船によって、それは確認ずみです」

「ミスター・フォードロフスキー、わたしたちが直面しているのはきわめて異常な事態です」とホフマンがいった。「わたしたちは、〈ストーン〉がこの宇宙からではなく、平行宇宙からきたものであると確信しています。図書館の情報をあやまって解釈する可能性も大きいでしょう。少なくとも、その情報は、この世界の未来を予言するものではありません。科学的データは利用できるでしょうし、それについてはわたしたちも詳細に研究していますが、拙速に情報を公開することは破滅につながります」

「とはいえ、そこにはひとつの歴史があるはずだ」

クロンベリーが口をはさんだ。「もしあるとしても、それはわたしたちには明かされていません」

フォードロフスキーのとなりのロシア人——ユーリ・コルジンスキーが、フォードロフスキーの耳もとになにごとかをささやきかけた。フォードロフスキーはうなずいて、「ミスター・ラニアー」と、彼のほうに鋒先を向けてきた。「あなたはその情報の存在を否定しますか?」

「そのようなもののことはなにも知りません」ラニアーはよどみなく答えた。

「しかし、もしそのような情報が存在するのであれば、前もって戦争の勃発日時、さらには戦況、結果等を知ることによって、戦略的におおいに有利になるとは思いませんか? それに、そのような情報を知っていることは、個人的に多大な緊張をしいられる、とは思いませんか?」

「かもしれません」とラニアー。
ヘイグが口をはさんだ。「ラニアー氏を詰問するのはおかどちがいと——」
「これは失礼」フョードロフスキーが即座にいった。「ご無礼をお詫びします。しかし、われわれの関心は、個人的な礼節より大きいのです」
いきなり、コルジンスキーが立ちあがった。「諸君。あなたがたは、いまやわれわれ両国間のあいだに、きわめて深刻な、おそらく一九九〇年代以来最悪の緊張が高まっていることを認識しておられるはずだ。〈ストーン〉におけるトラブルは、世界平和を危険にさらしているとわれわれは思う。〈ストーン〉は——とりわけその図書館に関する問題は、その緊張をますます強いものにしている。このような会話をつづけていても、この難問を解決できないのは明らかだ。ゆえに、ここでこれ以上議論する意味は、もはや見いだせない」
「ミスター・コルジンスキー」とホフマンが、「わたしはここに、貴国党書記長がごらんになりたがるであろう書類を持ってきています。〈ストーン〉における全科学者の位置づけ、およびその協力関係を記した書類です。これをごらんになれば、貴国科学者の冷遇に関する噂は払拭されると思いますが」
コルジンスキーはかぶりをふり、人差し指でとんとんとテーブルをたたいた。「われわれはもはや、そのようなポーズに興味はない。科学者の冷遇など問題ではないのです。問題なのは図書館だ。会談は現在、形式的なレベルでしか進められていない。われわれとしては、よりよい結果を祈るのみです」四人は立ちあがり、ヘイグがドアまで彼らにつきそっていった。
ドアの外には、シークレット・サービスのエージェントがひとり待機していて、エスコートを

もね」

引き継いだ。ヘイグはドアを閉じると、三人のところへもどってきた。「あの調子さ——いつで
「気が滅入ってくるよ」ラニアーが小声でいった。
「気が滅入る？」椅子から立ちあがりながら、クロンベリーが、「それで、わたしたちにどうし
ろというの、ミスター・ラニアー？　責任はあなたにあるのよ。あなたが機密を守りきれなかっ
たおかげで、この騒ぎが……この外交的破綻が起こったのよ。そもそも、なぜ図書館を開放した
りしたの？　図書館がトラブルのタネになりそうなことくらい、勘でわからなかったの？　わた
しなら絶対にかぎわけられたでしょう。図書館全体が、トラブルの臭気でむんむんしていたはず
だから」
「お黙りなさい、アリス」ホフマンが静かにいった。「だだっ子みたいなまねはやめて」
クロンベリーは三人をねめまわしてから、すわって煙草に火をつけた。ライターをさぐるしぐ
さや、二本の指で煙草をはさむそのようすが、ラニアーには不快だった。おれたちは、背のとど
かないぬかるみにはまろうとしている、本物の銃と実弾をもてあそぶ子供なんだ。
「きのう、大統領が電話してきてね」とホフマンがいった。「図書館の件ではかんかんだったわ。
即刻閉鎖して、すべての調査を中止するようにですって。事態を収集のつかないものにしてしま
ったのはわたしたちだそうよ。わたしとしても、ちがうとはいいきれないし。どのみち、大統領
は国会〈ストーン〉監督委員会に、おって沙汰があるまですべての調査を中止するよう命令しよ
うとしているわ。ロシア人は思惑どおりのものを手にいれるわけよ」
「時間はどれくらいある？」とラニアー。

「命令が現場に降りてくるまで？　たぶん、一週間というところでしょう」
ラニアーはにやりと笑い、首を左右にふった。
「なにがおもしろいのよ」煙の雲につつまれて、クロンベリーがつっけんどんにきいた。
「記録によれば、戦争まではあと二週間しかないからさ」

その日の夕方、ホフマンは軽く一杯つきあわないかといって、ラニアーをオフィスへさそった。ジェット推進研究所のカフェテリアで手早く夕食をとり、ふたたびエージェントに入口でチェックを受けたあと、ラニアーは七時にオフィスに着いた。ホフマンのオフィスは、ニューヨークの自宅と同じように広々としており、機能的で、ただひとつの大きなちがいは、メモリー・ブロックの棚がもっと大きいことだった。
「やるだけのことは——」ラニアーに生のスコッチをわたしながら、ホフマンがいった。「——やったわね」デュボネットのオンザロックをかかげて、乾杯をする。
「たしかに」
「疲れているようね」
「疲れてるのさ」
「世界の重みがその肩にかかっているんだものね」ラニアーをじっと見つめながら、ホフマン。
「それも、ふたつの宇宙の重みがね。自分がどれだけ大馬鹿だったか、だんだんわかってきたよ」
「わたしもよ。さっき、大統領とまた話をしたの」

「ふうん？」
「そのとき、大統領をうすのろよばわりしてしまったのよ。あなたが軌道に昇るころには、わたしはクビか、強制的に辞職させられているわね」
「そのほうがいいじゃないか」
「まさか。ねえ、あそこの話をして。あそこがどんなふうか話して。わたしもあそこにいきたくてたまらないわ……」ホフマンはデスクの向こうから椅子を引っぱってくると、ラニアーと面と向かってすわった。
「どうして？　メモリー・ブロックで、情報は全部見ているじゃないか」
「愚問ね」
「だな」ラニアーも認めた。アルコールがまわるにはまだ間があるはずなのに、ふたりともすでにほろ酔い気分になっていた。ラニアーは前にもこんな状態があったことを思いだした。いずれも、ストレスがたまったときだ。
「たしかに、ソ連の不安はわかるわ」しばしの沈黙のあと、ホフマンがいった。「この十年間、西側はあらゆる分野で、ソ連をおびやかしつづけてきたでしょう――外交面でも、技術面でも。宇宙でも地球でも。亀を笑うウサギよ。向こうは恐竜と同じで、自分よりすばやくて適応力の高いものはきらう。だいたい、イワンの若者には、コンピューターの端末機とトラクターのハンドルの区別さえつかないんだもの。中国でさえ、ソ連を追いぬいてるわ」
「もう一、二世代たてば、中国はアメリカだって追いぬくかもしれない」
「すてきね。当然の報いだわ」とホフマンはいった。「まず〈ストーン〉が現われ、こちらが先

に到達し、その領有権を主張し、国際協調の名のもとに、東側にもわずかばかりの役にたたないおこぼれを与えた……〈ストーン〉にあるものがなんであれ、東側にしてみれば、それは墓標も同じに思えるでしょう。わたしたちが想像もつかない技術を手にいれたってね。むりもないわ。彼らとの交渉の席で、理を説けたなら……でも、向こうはひどく恐れているし、わたしたちの大統領はどうしようもない馬鹿ときてる」
「馬鹿というのは適切なことばじゃないね。〝戦闘神経症患者〟、というところかな」
「うちのオフィスに声をかければ、〈ストーン〉のことが少しはわかるのに」
「大統領も戦争が起こりそうだということは知っているさ」とラニアー。「ぼくらだって、それ以上のことはたいして知っているわけじゃない」
「ジョークもわからないような大統領はくそくらえよ」窓のシャッターを見つめながら、ホフマン。「以前、パイロットをしていたとき、あなた、不時着したことがあったでしょう。乗機が墜落する前、機内のどこにいたいと思った？」
「操縦席だね」ためらわずに、ラニアーは答えた。「機を救いたい一心だったから、脱出することさえ考えなかった。ぼくはそいつが――その飛行機が――とても美しいものだと思っていて、なんとかして救ってやりたかったんだ。それに、ほかの乗員たちを飛行機の道連れにしたくもなかった。だから、湖に着水したのさ」
「わたしにはそれほどの勇気はないわ」とホフマン。「地球が美しいとは思うし、地球を救いたいとも思う。全力をあげて救う努力もしてきたわ。でも、その結果がこのていたらくよ。あなたの愛機は、あなたをばかにしたりはしなかったでしょう？　最善をつくした仕事を、なじったり

はしなかったでしょう?」
ラニアーはうなずいた。
「ところがここでは、そのとおりのことが起こってるのよ。だからいま、わたしは自分にこういってるの、〝政府なんかくそくらえ〟ってね。戦争勃発時には、〈ストーン〉にいっていたいわ」
「地球上が地獄と化したら、〈ストーン〉からは何年ももどってくることができないぞ。月面植民地でさえ、ぼくらを援助してくれる余力はなくなるだろう」
「地球は生き延びるの?」
「かろうじてね。北半球全体では、零度以下の気温が一年間つづき、その間に疫病と飢餓と革命が進行する。図書館がわれわれの宇宙の現実を反映しているならば、全部で三十億から四十億の人々が死ぬだろう」
「でも、世界のおわりではない」
「そうだ。そもそも、戦争が起こらない可能性もある」
「起こらないと思う?」
ラニアーは長いあいだ黙っていた。まばたきすることすらわすれて、ホフマンは待った。「起こるだろうな。いまはそう思う。〈ストーン〉がやってこなかったなら、起こらないと思ったかもしれないが」
ホフマンは飲み物を置き、グラスの縁を指でこすりながら、「わかったわ。わたしも〈ストーン〉へいくよう努力する。方法はきかないで。うまくいったら、〈ストーン〉で会いましょう。

うまくいかなければ……。あなたはすばらしい仕事相手だったわ。もっといっしょに働けていれば、楽しかったでしょうね」ホフマンは手を伸ばし、ラニアーを引きよせ、額にキスをした。
「ありがとう」
三十分後、それぞれ三杯ずつグラスをあけてから、彼女はラニアーをドアまで送っていった。そこで折りたたんだ一枚の紙をとりだして、彼の手に押しつけた。
「これを持っていって、好きなように使ってちょうだい。その気ならゲアハルトにわたしてもいいし、処分してしまってもいいわ。いまとなっては、それほど重要なものじゃないかもしれないけど」
「なんだい、これは」
「〈ストーン〉のソ連側スパイの名前よ」
ラニアーはその紙をぎゅっと握りしめたが、開こうとはしなかった。
「大統領は、わたしが思ったより迅速に動いているわ。明日のいつか、あなたには図書館を閉鎖するようにとの命令がおりるはず。彼はソ連に、わたしたちが公平にやっていると思わせたいのよ」
「狂ってる」
「ともいいきれないわ。政治がからんでくるとね。大統領は大きな問題をたくさんかかえているの。そういわなかった？　そうよ。いまならわたしも、大統領の立場がわかるわ。なんだか、酔っぱらってしまったみたい。ともかく、それは役にたつ？」
「おおいにね」

「それなら、あなたのしたいようになさい。あなたをクビにする理由を見つけて、実行にとりかかるには、二週間はかかるわ」ホフマンはにんまりと笑った。「ヴァスケスが結論を出ししだい、なんとかしてわたしに知らせて。いい？　まだ持ち札を全部使いきったわけじゃないもの。味方は、まだ上院議員のなかにもいるし、統合参謀本部のメンバーにも二、三いるわ」

「やってみよう」ラニアーはそう答えると、紙をポケットにしまった。

ホフマンがドアをあけてくれた。「さよなら、ギャリー」

ドアから数歩離れたところに立っていたエージェントが、無表情な顔を向けた。おれはほんとうにスパイがだれだか知りたいのか？

知っておかねばならない。

どういう事態になろうとも対応できる態勢を、〈ストーン〉に築いておかなければ。

15

ハイネマンはひとりでV／STOLを操縦し、ロケット推進を使って、第一空洞の連絡孔からチューブライダーを押しだした。侵入孔でチューブライダーとV／STOLを結合してから、まだ四十分しかたっていない。上下左右を〝地面〟でとりかこまれているので、はじめのうちは、目眩に襲われた。これではどちらに進んでいいのかわからない。だが、その感覚にもすぐに慣れた。

各空洞に設置されている無線ビーコンをたよりに、V／STOLの誘導コンピューターで座標を割りだせば、現在地が数センチ単位のこまかさで把握できる。慎重に、いつくしむようにして、ハイネマンはチューブライダーとV／STOLの推進パックをこまぎれに点火し、V／STOLの特注品の誘導システムで位置を確認しながら、空洞から空洞へと、つぎつぎにわたっていった。

各連絡孔を通りぬけるときには、スリルで首筋の毛がさかだった。巨大な灰色の極中央にあいた、ちっぽけな穴——フットボールのコートよりは広いから、じっさいは通りぬけるのもそれほど難しいわけではないのだが、遠くからではほとんど見えない……。

いま、V／STOLは、雲と山とクレバスで覆われた第五空洞の荒涼とした景観のなかを、順調に飛行していた。第五空洞と第六空洞の連絡孔にさしかかると、第七空洞の特異線付近で待機していた部下の技師たちのひとりに、簡潔に指示を与えた。「解体をはじめろ。数分でそちらにつく」技師たちは指示にしたがい、調査用の足場の上部を撤去しはじめた。

ゆっくりと、しかし手ぎわよく、やりなおしをせずに針穴に糸を通そうというのが、ハイネマンの意図なのだ。

結合したチューブライダーとV／STOLは、航空力学的観点から見れば怪物じみたものだったし、どのような観点から見てもかさばるものではあるが、飛行自体は難しくなかった。〈ストーン〉の自転軸付近はほとんど真空に近いため、空気抵抗がないからだ。

輸送の最終段階に神経を集中しながらも、ハイネマンはこれからの飛行計画について、考えずにはいられなかった。

やりなおしとなるとやっかいなことになる。ともかく、まずはチューブライダーを特異線に通

して固定してしまうことだ。そうすれば、つぎはクランプを試験するため、自転軸にそって三十一キロ進むことになっている。そこまで通路の奥にいけば、降下はずっと楽になるだろう、と彼は説明されていた。自転している空洞内では、螺旋を描きながら降下せざるをえないが、通路にはいってからは、ほぼ直線的に降下できるそうだ。

V／STOLはその地点でチューブライダーから離れ、過酸化水素エンジンを小刻みに噴射して、軸から離れる。離れてしばらくはすみやかな降下がつづくが、大気層との境目、空洞の床から二十二キロ上、軸から三キロ離れたあたりで、抵抗を受けるらしい。ジェット噴射とコリオリの力、圧縮熱などがからみあって、空気の希薄な一キロほどの層では、操縦にてこずると考えられる。地球で憶えた常識の多くは、わすれなければならない。

設計者はV／STOLの燃料消費率から、上昇・降下だけなら二十回、空気中での航続距離は巡航速度で約四千キロと推定していた。それから先は、チューブライダーの燃料タンクに接続して、酸素・過酸化水素の補給を受ける必要がある。燃料をフルに積載した状態で、チューブライダーV／STOLに給油できる回数は、五回だ。チューブライダー自身は、いちど特異線に固定させてしまえば、空間変形効果を利用して、どこまでも進んでいけるという。

V／STOLもチューブライダーも、いまは身軽な状態で移動していた。特異線との結合がすめば、第七空洞連絡孔の足場から、燃料と酸素を補給できるからだ。

ハイネマンのまわりでは、第六空洞が回転しており、円筒状に周囲を包みこむ雲の絨毯の切れ目から、つい三日前にはじめて存在を知らされた機械群が顔をのぞかせていた。

それまで彼は、考古学者や物理学者が〈ストーン〉のもっとも興味深い部分を見せようとしな

いのは、悪意によるものだとなかば信じこんでいたのだ。「稼働部分がないでしょう」とキャロルスンはいったものだ。「だから、あなたが興味を持つとは思わなかったのよ」彼は歯がみし、ヒューッと音高く息を吐きだした。第六空洞の機械群の眺めは、壮観の一語につきた。いくら〈ストーン〉のなかとはいえ、これほどのものにお目にかかろうとは夢にも思わなかった。あまりのものすごさに、チューブライダーとV／STOLの操縦をあやまりかけたほどだ。

最後の連絡孔が急速に近づいてきた。彼はスピードを落とし、最後の調整を行なった。地球〃月系をめぐる〈ストーン〉軌道の不規則さによって、コースに多少のずれは出るが、連絡孔内で最終調整をすれば、そのずれを計算にいれても、問題なく特異線に機体をつけられそうだ。そしてクランプで固定すれば、いよいよチューブライダーのテストにとりかかれる。

「あれよ」とキャロルスンがいって、指さした。それまでフィルターをかけた偏光双眼鏡で、プラズマチューブが南極と合流するあたりを見つめていた彼女は、ファーリーに双眼鏡をわたした。ファーリーは目をすがめてそのあたりを捜し、合体したV／STOLとチューブライダーの姿をはっきりと認めた。結合物はなんの支えもなく、バランスをとっているらしい。この距離からでは、特異線を識別することは不可能だ。

「きょうからもう降下するつもりかしら？」

キャロルスンはうなずいた。「ハイネマンなら挑戦するわ。ラニアーがもどってくるまではここにいるでしょうし」

リムスカヤがふたりのうしろからやってきて、女性たちが双眼鏡をやったりとったりしている

あいだ、黙ってそこに立っていた。それから、「おふたりさん」と、ややあって声をかけた。
「しなければならない仕事があるんだがね」
「はいはい」とファーリー。リムスカヤの背中に、キャロルスンがにっとほほえみかけた。そしてふたりは、天幕にもどっていった。

16

パトリシアは図書館の探訪シミュレーションを使って、第三空洞の旅をつづけた。好きなルートを選んで、記録のなかを自在にさまよえることがわかったが、プライベート・スペースにだけは、はいることができなかった。
たいていの場合、彼女は長くハードな頭脳作業のあいまの息抜きとして、ツアーを利用した。自分の足で見てまわったりもした。ひとりで歩いていると、拘束から解きはなたれたような気がした。ポケット・マップやスレート、メモリー・ブロックなどを持って、〈ストーン〉のなかを——なにをしているかと問われることもなく——気ままに散策するのは、気分のいいものだった。もう少しで重苦しい思いをしめだせそうなほどだったが——やはり完璧とはいかなかった。
最低でも二十四時間に一回は、第六空洞で地下鉄に乗って第三空洞を訪ねた。ときには、第二空洞の図書館も訪れ、場合によってはとまりこみ、暗い閲覧室の簡易寝台の上で眠ることもあった。そんなところで眠るのは気がすすまなかったが——第七空洞のテントの下でみんなといっし

ょに眠るほうが、ずっとおちつくのだ――ここがいちばんプライバシーをたもてるのだからしかたなかった。タカハシでさえ、第二空洞にはめったにやってこない。
ふたつの図書館は、彼女の研究の焦点をなしていた。彼女の心のなかの回路を通って、問題がポイントからポイントへ移動するときには、必要以上の情報を集めることに没頭し、知的な贅沢さを楽しんだ。
いちど、〈ストーン〉の設計に関する参考資料をもとめたことがある。そのとき図書館は、手でふれられそうなほどリアルな、外につきだした棘で被われた黒い球を投影し、心地よい声でこう告げた。「現在、その資料にアクセスすることはできません。人間の司書におたずねください」
図書館に通いはじめてまもないうちから、パトリシアはこのパターンに出会い、強い不満をいだいた。事実上、第六空洞の理論と構造に関する資料は、すべてアクセス不能なのだ。第七空洞と通路についてはいっさい資料がなく、その件に関する質問にはすべて、黒い棒とともに、「記録にありません」という答えが返ってくるばかりだった。
こういった拒絶に憤っているうちに、彼女はふと、未来の自分に関する情報があるかもしれないことに気づき、記録を遡って自分自身に関する情報を問いあわせ、〈ストーン〉の宇宙に自分に相当する人間がいたかどうか、その人物は〈ストーン〉の宇宙になんらかの足跡を残しているかどうか、調べてみようと思いたった。
しかし、それを深くしらべることには、ほとんど迷信的ともいえる気おくれがあった。そのうちに、記録のなかに、偶然に自分の名前を見いだした。

第六空洞に関するほんとうの手がかりは、アレクサンドリアの図書館にあった。コレクターズ・エディションとして、あるいは引退者への記念品として、手先の器用な人間や技師のために印刷されたと思われる、全七十五巻の基礎構造マニュアル。

その第五十五巻――第六空洞初期の機構および慣性吸収の理論を収めた、全二千ページという大部の巻に、彼女の名前は脚注の形で載っていたのである。

明かりといえばデスクの照明と光の帯しかない、暗い閲覧室のなかで、彼女は身をこわばらせつつ、くいいるようにその資料を見つめた。

「パトリシア・ルイーサ・ヴァスケス」それが魔法の響きを持つことばであるかのように、彼女は声に出して読んだ。「『ニュートン物理学に適用したn次空間測地線理論と、ρシンプロン世界線の特殊論について』の著者」そんな題の論文は書いたことがない――ともかくも、いまはまだ。

同論文は、二〇二三年、《ポスト〈大破滅〉・既成物理学ジャーナル》の、ある号に発表されたことになっていた。

とすれば、わたしは〈大破滅〉を生き延びるのだ。

そして、少なくともささやかながら、〈ストーン〉の建設に貢献するのだ。

その論文そのものは、冠毛シティの図書館で見つかった。内容が古すぎて、アクセス禁止の対象にはならなかったのだろう。両手に汗をにじませながら、パトリシアはそれを読み、その大部分がきわめて難解であることを知った。見なれない記号や意味のはっきりしない用語の山をかいくぐりながら、いまから十八年後に自分が書くはずの――あるいは何世紀も前に書かれた――論

文の要旨をつかもうとするうちに、うすぼんやりとした説明が浮かんできた。〈ストーン〉建造当初の計画では、第六空洞の機械群の唯一の目的は、〈ストーン〉内の特定の物体の運動量を、おおむね自転軸と平行な方向に吸収することだった。川沿いに堤を設けたり、建物を特殊な構造にしたり、さらには空洞自体の形状をべつの形にせずにすんだのは、この機能のおかげだ。

〈ストーン〉建造当初、〈ストーン〉の加速・減速限界は、〇・〇三Gに設定されていた。ところが、第六空洞の機械群のおかげで、加速の上限を定める必要はまったくなくなった。〈ストーン〉の各空洞は、外部の影響から切り離され、制御された独立体系の一部となったのだ。

マニュアルは、何章をも費やして、慣性吸収システムが〈ストーン〉全域におよばないわけを説明していた。もし全体にその効果がおよんでいれば、〈ストーン〉の自転も無意味となり、空洞内のすべてのものは重さを失って宙にただよってしまうだろう。したがって、吸収は高度に選択的でなければならない。

そして、それこそは超科学だった。そこには驚くべきことが示唆されていた。第六空洞のしていることは、ひとことでいうと、〈ストーン〉のあらゆるものの質量＝時空特性を変えることだったのだ。

それをもう少し発展させれば、時空を操作して、〈通路〉を創りだすことができる。〈ストーン〉は光速より速くは飛べないし、人工重力も備えていない――少なくとも、最初の六つの空洞まではそうだ。しかし、慣性吸収理論に照らしてみれば、それらを達成することも可能だったろう。ではなぜ、〈ストーン〉の技師や物理学者たちは、この概念のループを閉じなかっ

たのか?
彼女はアレクサンドリアの図書館にもどり、マニュアルにざっと目を通したが、〈ストーン〉の特殊機械群の理論と保守に関するかぎり、解答は見つからなかった。
閲覧室の寝台にすわり、両手で顔を覆うと、彼女は鼻のつけねをつまんだり、目をマッサージしたりした。頭がぼーっとしている。集中しすぎだ。あまりにもわずかな時間に、山積みの問題に取り組み、スケジュールに先行して解答を出そうとしたために、むりがきたのだ。
休憩をとらなければ。彼女は立ちあがり、細い照明の列の下を通って下の階におりると、プラズマチューブの下に出て、木のないコンクリートのプランターをかこむベンチにすわった。
意識的な考えをすべてしめだし、平静な状態にもどろうとつとめたが、どうしてもできない。
ポールと家族への思いが、その前に立ちふさがるのだ。
「このままではだめ」首をふりながら、彼女はつぶやいた。いくら努力しても、脳の灰色の虚無のなかには、とりとめのない思考がつぎつぎにただようばかり。オーバーワークだ。
そのとき——その虚無のなかに、ぽっかりと突破口が開いた。
かつて彼女は、分数空間を研究したことがある。分数空間というのは、本来対応するべきものなくして成立する個々の次元——単位数より構成要素が少ない次元群のことだ。空間のない時間、幅をともなわない長さ、時間のない深さ。広がりのない確率。二分の一空間、四分の一空間、無理数の分数で構成される空間。すべては分数の変形とフラクタルの幾何学分析によって処理される。彼女はより高次の分数空間の作図にさえ着手していた。それらの測地線は、五元空間や四元空間にも射影できるかもしれない。

彼女は膝のあいだに顔を埋めた。考えがまとまらない。秩序もなにもない。
〈通路〉はもともと――慣性吸収のために造られた第六空洞機械群の延長にすぎなかったものだ。が、何世紀も旅をつづけるうちに、ストーン人は心変わりしたか。それとも当初の目的を見失ってしまったのか。閉じた世界として、〈ストーン〉の性質は代々の住人たちに刷りこまれていき、自転する円筒――小惑星をくりぬいた岩塊のなかに住むことが、ごくあたりまえのこととなった。やがて、小惑星そのものでさえ認識の対象から消え失せ、円筒内の生活だけがあとに残ったのだろう。
何世紀にもわたって圧迫され、幽閉され、〈ストーン〉の地殻に育てられているうちに、ストーン人たちの天才は一挙に花開いた。彼らは神にも近い存在となり、みずからの宇宙を創りだし、彼らにとってもっともなじみ深い世界の姿をかたどって創りあげた。
彼らが最終目的を達成することなく〈ストーン〉から出る道を発見したとき――。
彼らがその世界の果てしなき延長を創造する方法を発見したとき――。
ストーン人のなかに、その誘惑に抵抗できる者がいただろうか？（いた……ネイダー正教徒だ）
かくして第六空洞の技師たちは、コンラッド・コジェノフスキーなる謎めいた人物に率いられ、〈通路〉を創造し、特定の性質を付与し、その潜在的性質をもてあそんだ。そして、井戸を建設し、〈通路〉を空気と土で満たすなんらかの方法を発見して、彼らが日々の暮らしを送る〝谷〟の床にまさるとも劣らない景観を創りだしたのだ。
体がリラックスしてきた。彼女は背を伸ばした。まだ書かれていない自分の論文の記号も、い

まなら少しは理解できる。その意味を読み解いたのだ。心にかかった霧が晴れ、ガラス作りの摩天楼のなかの研究者のように、すべての問題がいちどに関連するのが見えた気がした。
ストーン人は閉塞状況——その空間的束縛はともかく、心の閉塞状況を打開するために〈通路〉を創造したのだろう（記録によれば、〈ストーン〉で人口が過剰になったことはいちどもない）。
しかし〈通路〉は——なんの前触れもなく、彼女はだしぬけにそれに思いあたった——予想外の負担をもたらす。その副作用は、はじめのうちは見逃されていたのかもしれない……。
いや、それとも、気づかれぬままにおわったのか。
〈通路〉を創造することによって、彼らは〈ストーン〉をみずからの属する連続体から追いだしてしまったのだ。彼女の心に、こんなイメージが浮かんだ——あまりにも特殊なイメージなので、それが正確なものかどうか自信がなかったが——長い鞭の全体が〈通路〉であり、その先端が〈ストーン〉というイメージだ。鞭を創造することによって、そしてその鞭が超常空間内で不可避的に巻きほどけることによって、その先端がひとつの宇宙へはじきとばされてきたのだ——すなわち、この宇宙へ。
四時間後、彼女は目を覚ました。体がこわばり、口のなかがからからにかわいていた。痛む背中を寝台から持ちあげ、チューブの光に目をしばたたく。頭がひどく痛い。
だが、こうしてはいられない。
みずから〈ストーン〉当初の計画を完遂不能としてしまったことに気づいたストーン人は、やがて残らず〈通路〉の奥に移民してしまったのだ。

彼女は立ちあがり、ジャンプスーツのほこりをはらった。早くもどって、自分が造りあげた空中楼閣の基盤を固めていかなければ。

そのまえに、アスピリンを飲んでおこう。

17

ラニアーは、シャトルに乗り、OTVに乗り換えてからも、あの紙に目を通さず、ポケットにいれっぱなしにしていた。そこに仲間の、もしかすると友人の名前を見いだしたときのことを思うと、なかなか読む気になれなかったのだ。

〈ストーン〉とのドッキングが完了すると、彼はOTVを降り、ロバータ・ピクニー以下の収容エリア通信班に簡潔に報告してから、カークナーにあてて〈ストーン〉の外部防衛態勢を厳重にしたほうがいいとのメッセージを送った。

そして、内部の警備態勢については――。

ほんとうは、これはおれの仕事ではないはずだ。ゲアハルトはすでに同じ情報を得て待機しているのではないか？　ホフマンはどうやってその名前を知ったのか、なぜそれをおれに託したのか？

メッセンジャーがつぎつぎにやってきて、スレートを置いていった。各チームのリーダーからの報告だ。収容エリアのとなりの小さな控えの間で浮遊しながら、自転軸付近の研究者が寝袋と

して使っているメッシュの筒にもぐって、報告を読み、消化する。やがて彼は悟った。自分が避けられないことを先送りにしているにすぎないことを。
寡黙な海兵隊の警備兵にともなわれて、ゼロ・エレベーターに乗りこむと、彼はポケットから紙をとりだし、開いた。

「なるべく早く、トラックで第二サーキットにいきたいの」とパトリシアはいった。タカハシがあげてくれたフラップをくぐって、テントのなかにはいる。キャロルスンとファーリーは、中央の部屋の片隅でうたた寝していた。呉と張はべつの部屋で、スレートとプロセッサーにとりくんでいる。タカハシがあとからはいってきて、きいた。
「気分転換かい?」闖入してきたふたりの話し声に、キャロルスンとファーリーは同時に目を覚まし、目をぱちくりさせた。
「時空の部分調査をする必要があるの」とパトリシアは答えた。その顔には疲労の色がありありと浮かんでおり、目の下にはうっすらと紫色の隈ができていた。「ハイネマンさんに協力をたのんでおいたわ。あの飛行機には指向性ビーコンがあるから、警備隊の装置でその信号をとらえて、周波数分析機にかけるのよ。そうすれば、上空を飛行機が通過するとき、数値を比較することで、わたしたちが時間的に速く動いているのか遅く動いているのかがわかるわ」
「なにか結論が出たの?」寝台の上に半身を起こして、キャロルスンがきいた。
「と思うわ」とパトリシア。「でも、裏づけがなければたしかなことはいえない。いくつか予測をたててみたから、それが実証されれば、仮説を組み立てられるわ」

「その予測を話してくれる気はないのかい？」キャロルスンの寝台の前にいき、そのとなりに腰をおろしながら、タカハシがいった。
パトリシアは肩をすくめた。「かまわないわ。〈通路〉には窪みがあるでしょう。窪みのひとつひとつは〈通路〉の時空を変動させたもので、べつの宇宙への潜在的入口じゃないかしら。だからあの窪みでは、πのような幾何学定数に微妙な変化が出るはずなの。たぶん、物理定数にもね。窪みがあるところでは――あるいは窪みの特性を持つところでは――時間の流れの変化も見つかると思う」
「というと、〈通路〉にはいっぱい潜在的井戸があるということかい？」
「わたしはそう思うわ。選ばれたのは――というより、調整されたのは、そのごく一部だけ」パトリシアはテントの屋根をふりあおぎ、自分の頭のなかにあるものをなんとかして説明しようと考えこんで、「窪みは相互に向かいあっているでしょう。その組みあわせは無数に存在しうるのかもしれない。そして、窪みのなかにあいた井戸は――潜在的なものであれ、すでに調整されているものであれ――べつの宇宙へ通じているのかもしれない」
タカハシがかぶりをふった。「なんだかおそろしく奇怪な話になりそうだ」
「そうね。これ以上の説明については、ギャリーがもどってくるまでさしひかえるわ」
「ギャリーならもうじきここへやってくるわ。二、三時間前に、〈ストーン〉にもどってきたそうだから」横から、キャロルスンがいった。それから、膝をぴしゃりとたたいて立ちあがり、「それで思いだしたわ。あす、第一空洞でダンス・パーティーがあるの。全員が招待されるわ。ギャリーの帰還とはちょっとずれたけど、ちょうど歓迎会になるわね。わたしたちみんな、少し

頭を休める必要があるでしょう」
「ぼくはダンスが得意でね」と呉がいった。「フォックストロット、ツイスト、スイム、なんでもござれだ」
「聞かないで、みんな！　わたしたちが三十年も時代遅れだって思われちゃう」と張。
「四十年さ」と呉が訂正した。
「それから、なんとかハイネマンをあのおもちゃから引きはがすことができたら――」とキャロルスンが、「あのメカかぶれに、少しホットなステップを教えてあげましょう」

ラニアーは科学者チームのコンパウンドのオフィスにおさまると、デスクの上にあの紙を置き、コムラインのボタンに手を伸ばした。ボタンを押す前に、ちょっとためらった。
なぜホフマンはこの名前をおれに託したのか。「アン――できるだけ早く、ルパート・タカハシにコンパウンドまできてもらいたい」
これがホフマンが期待しているとおりの行動であればいいのだが。爆弾と化した〈ストーン〉の信管を、これで抜くことができたなら……。

二十四歳のトーマス・オールドフィールド伍長勤務上等兵が〈ストーン〉に着任してから、もう半年になる。一生のうちでもっともエキサイティングな任務につけると思ってきたものの、じっさいには興奮らしい興奮とはほとんど縁がない。おおむね、彼は第二空洞の、第一空洞につづくトンネルのすぐ外で警備に立っていた。そのほとんどの時間は、道路を見つめたり、ゼロ・ブ

リッジやその向こうの都市を眺めたり、はるか反対側の谷底の曲面を眺めたりすることでつぶされる。ふつう、ここでは少なくともふたりで警備にたつのだが、きょうは特別命令がおりて、もうひとりが都市の地下鉄ターミナルからきたある科学者を第一空洞まで送っていっているため、いまは彼ひとりしかいなかった。なにも問題が起こるとは思っていない。〈ストーン〉にきてからこっち、異常はひとつとして起こっていないのだ。ブージャムを見たこともない。

そもそも、そんなものがいるとも思っていなかった。

オールドフィールドは口笛を吹きながら警備小屋をでると、橋の向こうを見わたした。荒涼としている。「いい天気だな」いもしない部下に敬礼して、彼はひとりで返事をした。「はい、上等兵どの、いい天気ですね。ここはいつでもいい天気です」

理屈の上では、着任して以来、ずっと同じ一日がつづいているということなのだろうか。夜にさえぎられることなく、長く引き伸ばされた一日。ときおり天気は変わる。雨も降るし、ときには川から霧もただよってくる。それが時間の区切りの役をはたしているのだろうか？

アップルを点検し、警備小屋の裏のセメントのブロックにならべた、糧食のパッケージを試射してみた。見えない光の牙が、ブロックの上からパッケージをひとつはじきとばした。それで安心して、つぎの当直が試射できるよう、穴だらけになったパッケージをならべなおした。これはすでに、儀式になっていた。

警備小屋をまわりこんでドアのほうへいきかけたとき——ふいに立ちどまり、ふりかえった。

そこに見たものを、形容することさえできなかった。

アップルのことさえ頭に浮かばない。思いだしたのはいままで読んだ報告のことだ。まさか……

…。
身の丈七フィートはあるだろうか、ひどく痩せたそいつは、細い顔からとびだした一対の目で、またたきもせず、冷静にこちらを見つめている。長い二本の腕は、肩があるべきはずのところよりずっと下についており、糧食のパッケージとよく似たなにかで覆われている。足は短く、力強そうだ。肌はなめらかで、光沢がある——ぴかぴか光るのではなく、古木を磨きあげたような艶だ。
それは彼の存在を認め、丁重にうなずいた。
彼もうなずきかえしたものの、過去のすべての訓練の圧力によって、アップルをかまえ、「何者だ」と誰何した。
が、そういったときには、すでにそれは消え失せていた。
オールドフィールドはそれがトンネルにはいっていったような印象を受けたが、確証はなかった。
怒りといらだちで、顔が紅潮した。くそっせっかくのチャンスを。ブージャムを見ていながら、ほかの者に知らせそこなうとは。これは、ブージャムを見たと——公式にせよ非公式にせよ——主張する者たち全員に共通するパターンだった。
おれはいつも、自分ならもっとうまくやれると思っていたのに。オールドフィールドは警備小屋をこぶしで殴りつけ、通信機の緊急ボタンをたたいた。

18

ラニアーは、コンパウンド二階の通路のつきあたりにある会議室で、タカハシと会った。ラニアーの意図を知らないキャロルスンが、護衛を連れてタカハシといっしょにはいってきた。キャロルスンがいても、問題はないだろう。いつもと変わらない態度さえとっていればいいのだから。ラニアーは昼食を持ってきてくれるようにたのみ、三人でもくもくと食べてから、新しい命令の概略を伝えた。話しおわると、キャロルスンがかぶりをふり、ため息をついた。
「あの子はつぎの調査隊に同行したがってるのよ。こんどは第二サーキットへ。おまけに図書館からしめだされたら、絶対におさまらないわ」
「だれも図書館にははいれない」とラニアーはいった。「厳重に立入禁止となる。それから、第二次調査隊も中止だ。〈ストーン〉での活動はすべて凍結する。考古学者たちにはコンパウンドにもどってもらいたい。連絡孔での研究も中止だ」
タカハシが、むっつりと見かえした。「どうしたというんだ、ホフマンは?」ラニアーは彼のほうを見ようとしなかった。昼食を食べながら、この男と親しく口をきくのはこれが最後になるだろうなと思っていたのだが——いまこそ、そのときだった。できるかぎりそつのないいいかたで、ラニアーはキャロルスンに席をはずしてくれるようにたのんだ。キャロルスンは怪訝な顔をしたが、いわれたとおりにした。ラニアーは彼女が外に出ていったことにさえ気づかなかった。全神経を、タカハシに集中していたからだ。
「これから、あるきわめて深刻な状況の解消に努めるつもりだ」ふたりきりになると、ラニアー

は切りだした。「その解決に、きみも力を貸してほしい。そして、きみのボスたちにそのことを報告してほしい」
「なんだって？」タカハシが問いかえした。それまで飲んでいたオレンジジュースのコップを持つ手が、かすかに震えた。
「どうやっていたのかは知らないが、きみの上司たちに、そのことを報告してほしい」
「わけがわからんね」
「わからないのはぼくも同じだ」椅子から立ちあがりながら、ラニアー。「きみのことをゲアハルトに知らせる気はない。本能はそうしろといっているがね。きみはいまのままの自由な身で、両国間で協定が結ばれるまで、われわれがすべての活動を中止するところを見ていてもらう。図書館に兵器関連の情報がないことも、自分でたしかめるがいい」
「ギャリー、いったいなんのことをいってるんだ？」
「きみがソ連のスパイだということはわかっているんだ」
タカハシは口を引き結び、眉根を寄せてラニアーを見つめた。
「今夜、ダンス・パーティーがある」ラニアーはいった。「キャロルスンは全員が出席すると思っている。ぼくらもそのつもりだ。ゲアハルトもくるだろう。だが、彼にはきみのことは黙っておく。知らせようものなら、きみは収容エリアの拘留センターにたたきこまれて、つぎのＯＴＶで送還されてしまうだろうからな——いわば、足枷をかけられて。それはぼくの本意じゃないからね」
「敬意のしるしか？」目をしばたたいて、タカハシ。

「ちがう。ゲアハルトによけいな負担をかけたくないからだ。きみは下劣な反逆者だ。どこではじまったのかは知らないが、それにはここでけりをつけたい。きれいさっぱりとだ。きみが地球に送った情報は、あわや戦争を引き起こすところだったんだぞ。きみのボスに、なにもかも鎮静化に向かっている、ぼくらは図書館から引きあげているし、最終的には〈ストーン〉から引きあげるだろうと伝えるんだ。引きあげて、不和の種をすっかりとりのぞくつもりだと。わかるか?」

タカハシは答えなかった。

「きみは地球でなにが起こっているのか知っているのか?」

「いや、くわしいことは」と真顔でタカハシ。「たぶん、東西とも、おたがい少し腹のうちを見せあうべきなんだろうな。きみのいうように、この状況を解消するために。彼らはこれに勝負をかけているんだ。こちらと同じようにね」

「こちら?」

「ぼくはアメリカ人だぞ、ギャリー。ぼくはアメリカを守るためにこんなまねをしたんだ」

ラニアーは吐き気を覚えた。歯をぎりぎりとかみしめて、椅子を回転させ、タカハシに背を向けた。大金がからんでいるのかどうかきいてやりたい衝動と、必死に戦う。どのみち、知りたくもないことだ。

「いいだろう。これが地球の現状だ」

そして彼は、地球で見聞きしてきたことをタカハシに話した。

これがホフマンの望んだとおりの行動であったならいいのだが。

その日の午後遅く、社会学班のべつのグループが、中央コンパウンドの講堂で報告を行なった。班のメンバーのうち、二十名ほどは聴衆にまじってすわっており、低い壇の上の、演台のうしろにも、ほぼそれに近いくらいの人数がならんでいた。リムスカヤがいっぽうに立って見まもるなかで、ウォリス・レイナーが四人の社会学者のうち、最初に発表する女性を紹介した。ラニアーはうしろのほうの席にどっかりとすわり、そのようすを見つめ、話に耳をかたむけた。はじまって十分ほどして、パトリシアがはいってきて、腕組みをしながらとなりにすわった。

最初の報告者は、〈ストーン〉の家族集団の仮説を要約していた。おもにネイダー教徒のあいだで見られる、三重家族構成については、少々掘りさげた説明があった。

パトリシアがこちらをちらりと見やり、「どうして図書館にはいれないの?」と、平板な声できいた。

「全員がはいれないんだよ。きょうからだ」

「それはいいけど、でもなぜ?」

「ちょっと複雑な事情があってね。あとで話す」

パトリシアは前に向きなおり、ため息をついた。「いいわ――図書館にたよらずに、できるだけのことはします。それなら、まだいいんでしょう」

ラニアーはうなずいたが、パトリシアに強い同情を覚えた。

つぎの発表者はタニア・スミスで――ロバート・スミスとはなんの関係もない――これまでに報告された〈ストーン〉大脱出に関する説を、ざっとまとめて報告した。

パトリシアはうわのそらで聞いているようだった。
「どうやら、移住委員会が〈通路〉への移住申請を処理し、移動を調整したのは明らかと思われ――」
パトリシアがふたたびこちらを見た。目と目があった。
それにしてもばかげた命令だ。地下鉄も使えないようでは、研究のしようがない。
このもっとも危険な時期における人類をたとえていうなら、四肢を縛られ、思考の麻痺した群盲というところだろうか。タカハシのことを、そして警備体制がまるっきり役たたずだったことを考えると、ふたたび胃がむかついてくる。
もちろん、ここの警備体制は、通行権の低い研究者たちに最善の仕事をさせるためのものだった。それを、ほぼ完璧な通行権を持つ上級のメンバーが監督する。研究者たちの発見は、その上級メンバーを通して濾過され、照合され、最終的な報告書にまとめられたうえで、図書館の対応する文書とつきあわせられる。そうしなければ、ことが運ばないのだ。図書館を調べる権利を与えられた人間がごくかぎられているのに対して、図書館の情報は膨大をきわめたから、全体を概観するだけでも、数十年を要していただろう。
少なくとも、それは理屈が通っているように見えた。ラニアーはやはり、いまだに軍人的な考えを引きずっていたので、ホフマンから上の命令系統に絶対的な信頼こそいだいていなかったが、ともかくしたがってきたのである。
そんなことはどうだっていい。
どのみち、すべては中止されてしまうのだ。全員が荷物をまとめ、地球に帰るのを見て、タカ

ハシは（万事こちらの思惑どおり運ぶならばだが）誠実な努力がなされていると報告し、不安に苛まれたソビエト首脳を安堵させるだろう。
だが、ロシア人を図書館にいれる許可だけは大統領もおろすまい。すっかり発狂したのでもないかぎり。パンドラの箱につっこむ手は、一度に一本が限度だ。
ストーン人のテクノロジーの進歩については、いくつか資料を見てきた。図書館で教育システムを体験したこともある。ストーン人が改悪した生物学と心理学に触れたこともある（改悪した――といえば、それに対する偏見を示すことになるだろうか？　たしかにそうだ。あれには魂のそこまで揺さぶられ、〝化石化〟するうえで最悪の影響力を与えられたものだ）。自分の愛する国でさえなにをするのかわからないのに、ましてソ連などに、このような力を見せるわけにはいかない。
パトリシアはもうしばらくすわっていたが、やがて出ていった。ラニアーは立ちあがり、そのあとを追って、女性宿舎の角近くで追いついた。
「ちょっと待ってくれ」パトリシアは立ちどまり、向きなおったが、その目は彼のほうではなく、ふたつの建物のあいだの広いスペースに置かれた、鉢植えのライムの木に向けられていた。「きみの仕事をやめさせるつもりはない。少しもだ」
「やめるもんですか」とパトリシア。
「そこをはっきりさせておきたかっただけさ」
「はっきりしたわよ」両手をポケットにすべりこませながら、今度はまっすぐにラニアーを見つめて、「さぞかし良心が痛むことでしょうね」

ラニアーは目をまるくして、のけぞるようにして彼女を見かえした。同時に、いまのひとことにこめられたさしでがましい推測に、急に怒りがこみあげてきた。
「痛むはずよ、なにもかも知りながら、わたしたちをここに閉じこめているんだから」
「きみたちを閉じこめたりしてはいない」
「わたしが見たあれを、あなたは話してくれなかった。わたしたちのだれにも話してくれなかった。ああしろこうしろとはいうけれど、わたしたちと話しあおうとはしない」
怒りはふいに消え、それと同時に、唐突にさびしさが襲ってきた。「責任者には特権がつきものなんだ」穏やかな声になって、彼はいった。
「わたしはそうは思わない」こちらをにらみつけながら、パトリシア。彼女は挑戦したいんだ。おれを怒らせたいんだ。「あなたはいったい、どういう人なの？　まるで……氷みたい。冷たくて。それがほんとうのあなたなの、それとも特権とやらのせい？」
ラニアーは指を一本立て、彼女に向かってゆっくりとふりながら、冷たい笑みを浮かべた。
「きみはきみの仕事をやりたまえ。ぼくはぼくの仕事をやる」
「どうあっても、話しあってはくれないのね」
「いったいどうしろというんだ？」ラニアーはふいに、ぞっとするような声でいうと、肩をいからせ、顎を引いて、彼女につめよった。突然の強硬な態度に、パトリシアは驚き顔になった。
「わたしはただ、だれかに思っていることをいってほしいの」
「そいつはできない」ラニアーは威嚇的な態度をおさめながら、「もしみんながなにかを考えはじめれば――」

「ともかく、働け、働けというわけ」嘲りのこもった口調で、パトリシアがあとを受けた。「いい、わたしは必死に働いているのよ、ギャリー。二六時中働きづめなのよ」パトリシアは涙があふれるのを覚えたが、もっと驚いたことに、ラニアーの目にも涙がにじんでいるのに気がついた。ラニアーは目をぬぐいかけたが、途中でその手をとめた。片方の目から涙が頬をつたいおち、口のはたの皺にたまった。

「わかったよ」とラニアーはいった。立ち去りたいのに、動けなかった。「結局、ふたりとも人間ってことだ。きみが知りたがっていたのは、そいつか?」

「わたしはずっと研究ばかりしているけどね――でも、心のなかは荒涼としているわ。たぶん、知りたかったのはそれかもしれない」

ラニアーはすばやく両目をぬぐうと、「ぼくだって雪だるまじゃない」と、弁解するようにいった。「それに、いま与えられている以上の情報をぼくから期待するのは、いまのところは、フェアじゃない。わかってくれるかい?」

「それほど特別なことなのね」パトリシアはラニアーのまねをするように、両手を自分の顔に持っていった。が、ほてった頬より上には、指がいかなかった。「ごめんなさい。でも、あなたはあとを追ってきてくれた」

「追ってきたさ……これでいいことにするかい?」

パトリシアは恥かしくなって、うなずいた。「あなたが冷たいなんて思ったこと、いちどもないのよ」

「ありがとう」ラニアトはそういうと、背を向け、足早にカフェテリアへもどっていった。

自室にはいると、いまはもう乾いている両目にこぶしを押しあて、パトリシアは子供のころ大好きだった歌の文句を口ずさもうとした。全部は思いだせなかった――それとも、ちゃんと憶えていなかったのかもしれない。「でも、あなたがどこにいこうとも」――ふしを追いながら、彼女はその詞を口にした――「あなたがなにをしようとも、わたしはずっと見まもってるわ……」

19

パトリシアは女性寮にはいると、最上階にいき、ディレクターズ・チェアにすわった。ダンスの参加者たちが科学者チームのコンパウンドに集まるのを眺めながら、腕時計に目をやる。戦争はあと七日ではじまる予定だ。

なにもかもが、あまりにも急速に押しよせてきた。みんなに自分の考えを話してもいいのだが、その考えが正しいのかどうか、自分でもわからない。たとえばラニアーに、こういうこともできるのだ。〈ストーン〉は当初存在した連続体からそれほど遠くまでずれてきたはずはない。とすれば、〈ストーン〉の歴史とこの宇宙の現実は、それほど大きくちがわないはずだ。たぶん、戦争をくいとめることはできないかもしれない。

あるいは、戦争が不可避ということを知ったために、ソビエトが鉾(ほこ)をおさめ、退き、かえって戦争が回避されるかもしれない……。

あるいは、〈ストーン〉の存在と、〈ストーン〉から西側諸国が得たはずの先進技術が、結局

はソビエトに一線を越えさせてしまうかもしれない……。
あるいは、〈ストーン〉はただひとつの影響を与えたあと、その影響を打ち消し、地球の未来にさざ波程度の波紋を残しただけで、立ち去ってしまうのかもしれない……。
キャロルスンとラニアーがコンパウンドにはいっていった。ほかの空洞からきたメンバーたちと、挨拶を交わしているのが見える。
すさみきった感情は消えていた。もう、怒りも感じないし、悲しくもない。生きている気持ちさえしなかった。いま得られる唯一の喜びは、その状態に埋没し、研究をつづけ、〈通路〉の叡知と偉大さにひたることだけだ。
とはいえ、パーティーに顔を出さないわけにもいかなかった。人との接触を避けたがる、内にこもった天才のまねだけは、つねづね避けてきたからだ。もちろん、内にこもらないということと、こもりたいけれど無理をして出ていくということは、同じではない。ほんとうは、いきたくないのだ。自室にこもって、研究をつづけたかった。消えることのないチューブの光のもとでダンスをし（ダンスは戸外で行なわれることになっていた）、たあいないおしゃべりをして——とりわけ、ほんの数時間とはいえ、〝交際名簿〟に参加するかと思うと、気がめいってくる。はたして平静をたもっていられるかどうか、自信がない。ちょっとバランスが崩れただけで、いまにも泣きだし、わめきちらすかもしれない。
彼女は階段をおりて、寮をあとにすると、両手をポケットにつっこみ、できるだけ顎を高くあげて、ごったがえす人込みに近づいていった。
パーティーには、バンドまでついていた。兵士、生物学者、技師、各ふたりずつからなるグル

ープが、廃棄された電子部品を利用して、シンセサイザーや電気ギターを作りあげたのだ。なんとか聞ける音を出すらしい――いや、けっこういけるらしいぞという噂は、何週間も前から流れていた。彼らが聴衆の面前で演奏するのは、これがはじめてだった。音合わせやアンプの調整をしているさまは、冷静で手慣れているように見える。
スピーカーは、考古学者たちが提供してくれた。日ごろのうるさい保護主義の償いに、一種の善意の犠牲として、アレクサンドリアから特殊なスピーカーをいくつか拝借してきてくれたのだ。それらは、将来コンパウンドの建物を建て増す予定であけておかれた、長方形のダンス会場の四隅に設置された。スピーカーには、一本も線がつながっていなかった。音楽は、低出力の送信機を介し、特殊な波長でスピーカーに送信されるのだ。そこから流れ出る音は、やや金属的だったが、充分任にたえた。ハイネマンがそのひとつをざっと調べて、いった。「ほんとうのところ、なんなのかね、こいつは。スピーカーじゃないぞ」
「でも、スピーカーの役をしてるでしょう?」彼のダンスのパートナーを務めることになっているキャロルスンが、すぐそばに引っついたままいった。
ハイネマンは、それがビーム信号を受けて音を発生するところまでは認めたが、それ以上は認めようとしなかった。結局この問題は、完全に解決されないままにおわった。
変化のないチューブの光のもとで、警備隊のメンバーたちは、交替ごうたいに科学者や技師たちとダンスを踊った。ソ連のグループは一ヵ所にかたまって、壁の花を演じていた。華凌や、呉、張、ファーリーたちは、すでに〈ストーン〉閉鎖のことを知らされているはずだが、元気よく踊りまわっていた。

バンドはつぎに、一部のリクエストに応えて、むかし懐かしいロックを演奏したが、その場の雰囲気にあわず、しぶしぶもっと現代的な音楽にもどした。
パトリシアはラニアーと、ここ数年流行している、日本のワルツを踊った。手を伸ばして握りあい、たがいのまわりをぐるぐるまわっているうちに、ラニアーが謎めいた表情でうなずき、パトリシアにほほえみかけた。彼女は首から上が真っ赤になるのを覚えた。ダンスがおわると、彼はパトリシアをぎゅっと抱きしめて、いった。「きみの責任じゃないさ、パトリシア。きみはよくやった。きみはほんとうの〈ストーン〉のメンバーだ」
ラニアーから離れると、パトリシアは端に引きさがった。混乱して、麻痺していた心がよみがえった。わたしは、ラニアーのほめことばを期待していたのかしら？　そうらしいわ。いまのひとことは、とってもうれしかったもの。
つぎに、呉が声をかけてきた。彼はなかなかすてきな踊り手だった。そのあとは、パーティーがおわるまで、パトリシアはずっとすわりっぱなしだった。休憩のとき、ファーリーや張もふくめ、それまでかなりの相手と精力的に踊っていたラニアーが、そばにやってきた。
「楽しんでる？」
パトリシアはうなずいた。が、すぐに本音をいった。「いえ、あんまり」
「ぼくもさ。ほんとのところね」
「でも、ダンスがじょうずだわ」
ラニアーは肩をすくめて、「たまには、なにも考えないときがなくっちゃね。だろう？」
それには同感できなかった。時間がほとんどないのだ。「いっておかなければならないことが

あるの」
「レクリエーションの時間にかい？」
「ここでもかまわない？」ラニアーのことばに押しかぶせるようにして、彼女はきいた。音楽がけたたましく鳴っているので、ここでならだれにも聞かれるおそれはない。
「最適の場所だと思うよ」とラニアーはいって、タカハシを捜した。タカハシはダンス会場の反対側にいた。ロシア人のそばには近づかないようにしているようだ。
彼女はうなずいた。ふたたび、涙があふれてきた。やさしいことばをかけてくれたおかえしに、最悪の恐怖を、もっとも恐ろしい推測を打ち明けるのかと思うと、ひとりでに涙がにじんできたのだ。「わたし、〈通路〉の創造によって、〈ストーン〉がもとの次元からどれだけはじきとばされてきたか、計算してみようとしたの」
「どれだけだった？」話が聞こえるくらい近くを人が通りかかるたびに目を配りながら、ラニアーがきいた。
「それほど大きくはなかったわ。これは複雑な問題なの。でも、少しも大きくはなかった」
「すると、戦争は起こる？」
パトリシアはうわずった声でいった。「その可能性はあるわ。わたしを〈ストーン〉に連れてきたのはそのためじゃないの？　ただそれをいわせるためじゃないの？」
ラニアーはかぶりをふった。「きみを連れてくるように望んだのはホフマンだ。きみのことは責任を持って面倒をみてくれといわれたから、ぼくはただ、いわれたとおりきみを仕事に導いただけだよ」ラニアーはポケットに手を入れ、封筒をとりだした。それを開けて、なかから二通の

手紙をとりだした。「いままでわたすチャンスがなくってね。いや、訂正しよう。いまのいままで、このことをわすれていたんだ。帰ってくるとき、いっしょに持ってきたんだよ」

パトリシアは彼の手から手紙を受けとり、じっと二通を見つめた。一通は両親から、もう一通はポールからだった。「返事を書いてもいい?」

「なんでも好きなことをかくといい」とラニアー。「ただ、分別をわきまえてね」

消印は、一週間前のものだった。

それから一週間。ハルマゲドンが起こるはずの日は過ぎた。

パトリシアは自室に閉じこもり、手もとに残された資料をもとに、以前にもまして研究に励んだ。

最初の意見はどうしても変えようがない。

だが現実に、自分がどれだけまちがっていたかを示される日々は、勝利の日々でもあった。

20

ラニアーはエレベーターを出ると、ケーブルにつかまって、カートに体を押しこんだ。きゃしゃな体格の運転手が——空軍の青いジャンプスーツを着た女性だ——カートを通常のルートからはずし、レールをたどってカークナー大佐の宿営・練兵場に向かった。ラニアーも、いままでに

二回しかここを訪れたことがない。いずれも、大佐に会いにきたときだ。カートの手すりにつかまったまま、彼は心のなかで、おそらく問われるであろう質問の答えを考えた。

ホフマンはこのまえの連絡で、あのとき伝えた情報がとうとう統合参謀本部の手にわたったと伝えてきた。ということは、いまはカークナーとゲアハルトもそれを知っているということだ。

カークナーの侵入孔防衛隊が改装して訓練につかっている、もと貨物倉庫前の短いトンネルで、カークナーの副官が出迎えた。その男の案内で、ラニアーはまにあわせのファイル・キャビネットがならぶ小部屋に通された。室内は岩肌がむきだしになっていたが、ニッケル＝鉄の壁面の一画が、かなりの幅で磨きあげられていた。映写スクリーンがわりにするためだ。副官がラニアーさんをお連れしましたと報告したとき、カークナーはハーネスのなかに浮かび、スレートのデータを眺めているところだった。ラニアーのあとから、通路をただよって、ゲアハルトもやってきた。

カークナーはふたりに会釈した。おもしろくなさそうな顔をしている。

「ミスター・ラニアー――きみは以前、海軍少佐だったな？」ゲアハルトがぶっきらぼうにきいた。彼はずんぐりとした、身だしなみのいい男で、こわい黒髪と、横に広がった鼻の持ち主だった。服装は、〈ストーン〉内の警備を担当する海兵隊員のそれとは若干ちがっていた。制服は緑で、黒いブーツの底は、体を固定するため、柔らかいラバー・ソールになっている。

「そうだが」とラニアーは答えて、相手の出方を待った。

「きみはタカハシがソ連の工作員であったことを教えてくれなかったね、ミスター・ラニアー」

今度はカークナーがいった。

「そう、教えなかった」
「二週間も前からこのことを知っていながら、警備隊の指揮官たちに教えなかったというのか？」
「それなりの理由はあるんだろう」カークナーがうながす。
ラニアーは黙っていた。
「そうだ」
「それを聞かせてもらえるかね」テノールの声をわずかに緊張させて、ゲアハルトがきいた。
「われわれの意図は、ソ連側に少し息をつく余裕を与えてやり、こちらが撤退するところを見せてやることだった。タカハシが拘禁されれば、それがぶちこわしになってしまう」
「たしかに、知っていたらそうしていただろう」ゲアハルトがいった。
ラニアーはうなずいた。
「きみのいうとおりだ。拘禁していたのはまちがいない。だが、きみの行動によって、われわれの作戦計画が危地に追いこまれかねないことが、きみにはわかっているのか？　タカハシは目撃したかもしれないのだぞ――ここでわれわれの訓練を、襲撃に対する準備を――」
「それはありえないな。メッセージを送信するとき以外、タカハシはコンパウンドから出ていないから」とラニアー。いつもどおり寡黙なカークナーは、叱責をもっぱらゲアハルトにまかせるつもりのようだった。
ゲアハルトは語をついで、「しかもタカハシは、われわれをだしぬいて、ＯＴＶのドッキングに使う直線ビームと平行に、メッセージを送りだしていたというではないか。タカハシはただち

に地球に送還し、反逆罪で裁判にかけることを要求する。まったくなんということだ、ギャリー」虫でも追いはらうかのように、勢いよく首をふって、「ホフマンがこうしろといったのか？」
「言外にね」
「彼女はきみにスパイの名前を教えた。で、その結果は？　ロシア人はもう交渉する気になったのか？」
「いや、それは聞いていない」
「聞いていないのも当然だ。やつらはわれわれがここになにを押さえているのか知っている。われわれがすんなり撤退して、すべてをみんなで分かちあうなどと、やつらが信じるとでも思っているのか？」
「ぼくは息つぎが必要だと思っただけだ。やりなおしのチャンスが」
「ホフマンはタカハシがどんな情報を洩らしていたのか、知っているのかね？」カークナーがたずねた。
「知っている。図書館に関する情報だ」
「なんたることだ、ギャリー、あの道化者は、カークナーもわしもいけない場所に出入りしておったのか。いわせてもらえば、きみはこの作戦を、じつに立派に管理しているぞ。タカハシが知っていることで、わしが知っておくべきことはないのか？　あるいは、きみの大事なあのお姫さまが発見したことで？」
「それはあるさ」ラニアーは冷静さをたもち、准将の怒りを受け流そうとして、「しかし、それ

を話すわけにはいかないことも知っているはずだ。それはそちらの上官にきいてもらわなければ」

ゲアハルトはにやりとして、「ふふん。一介の大統領には——これはオフレコだぞ、ギャリー——戦前のデモクラシーの夢のなかに住んでいる一介の大統領には、宇宙について話をすることはおろか、考えることさえできんからな。やっこさんの取り巻きどもと共和党員が牛耳る上院は、南部再配付法案を成立させようとしているくらいだ……」ゲアハルトがちらりと目を向けると、カークナー大佐はかぶりをふり、かすかに笑みを浮かべて、岩壁に目をそらした。「だれも〈ストーン〉に払うべき注意の半分ほども払っておらん——わしはまちがっているか?」

「正しくもあるし、まちがってもいる。いまこのとき、世界各国の政府にとって、〈ストーン〉以上に重要な話題はないはずだ。だれも彼もが頭をしぼっているだろう。ソビエトはわれわれが技術面で先行することを極度に恐れている。ただでさえ差が開いているのに、〈ストーン〉はそれを決定的なものにしてしまう。ちがうか?」

「では、カークナーとわしはなんのためにここにいる。なぜわれわれは、きみのようにたえず情報を与えられていない? 〈ストーン〉の防衛は大佐とわしにかかっているというのに、馬鹿どもはわれわれのまわりにカーテンを張りめぐらすばかりだ。図書館にもはいれない、文書も見られない……わしにはわからん……こんな異常な状態ははじめてだ。これでは頭がどうにかなってしまう。そろそろ、おたがい協力するころあいじゃないのかね?」

「上層部には上層部の考えがあるんだろうさ」とラニアー。

「わしはずっときみを見てきた、ラニアー。この一年、きみは憔悴するいっぽうだった。自分の

健康のためにも、きみの秘密を知りたくはない。だが、あえてきく。いったいここでは、なにが起こっているんだ？」
ラニアーはふたつめのハーネスにふわりとはいりこみ、ストラップをつかんだ。「オリヴァー、きみが地球で受けてきたのは、どんな命令だ？」
「〈ストーン〉に対する攻撃、および地球上での核戦争の可能性に備えることだ」
「ソ連に〈ストーン〉を奪取する力はあるか？」
「宇宙の全戦力をここに投入してくれれば、可能だ」カークナーがいった。
「連中がくると思うかい？」
「思う」とカークナー。「どうやってかはわからない。しかし、日々、情勢に応じた予想をたててはいる。このつぎに〈ストーン〉が地球に最接近するとき、ソ連は地球上で――海上かヨーロッパあたりだろう――小競り合いをしかけ、それを利用して、〈ストーン〉への注意をそらそうとするだろう。ついで、〈ストーン〉に奇襲をかけ、奪取する。あるいは、真っ先に〈ストーン〉を襲ってくるか。なんともいえない」
「奇襲は成功するだろうか？」
ゲアハルトは片手をあげて、ラニアーを制した。「〈ストーン〉の秘密をわしにも教えてくれるか？　あの裏切者をふんづかまえさせてくれるか？」
おそらくタカハシは、もう充分役目をはたしただろう。
「いいだろう」とラニアー。「なるべく早くあいつを〈ストーン〉から放りだしてくれ。フロリダについたら、あとの処置は国防省がやってくれる」

「図書館にもいれてくれるな？」ゲアハルトがきいた。
「それはだめだ。図書館は閉鎖中だ。そちらが知る必要のあることは、ぼくが教える」
「それなら、きみの質問に答えるとしよう」とカークナーがいった。「奇襲はおそらく成功する。ソ連は〈ストーン〉を制圧するだろう。向こうが全戦力を〈ストーン〉に集中してくれれば、侵入をくいとめるすべはない。侵入孔を封じればなんとかなるだろうが、それでは〈ストーン〉内にたてこもる形になる。それだけは絶対にやるなと厳命されている」
「当然さ」とラニアーはいった。そんなことをすれば、ソ連のいだいている疑惑をすべて裏づけることになる。
「きみと話せてよかったよ、ギャリー」ゲアハルトがことば鋭くいった。「それでは、さっそく行動に移るとしよう。まず、あの裏切者をふんじばってやる」
「つかまえるのはタカハシだけだぞ。ソ連人グループには手を触れるな」
「もちろんだとも」ゲアハルトはいった。「だれにでもそれとわかる事態になるまで、やつらには指一本触れないさ」

21

海上発射式の重輸送宇宙船の船底で、大隊長、パーヴェル・ミルスキー大佐は、第三軌道哨戒プラットフォームの技術者たちが、人でぎゅうぎゅうづめになった船尾船倉の周囲と下面をとり

まくタンク群へ、燃料を再補給する音に耳をかたむけた。彼らは、旅のつぎのステップの準備をしているのだ。
ミルスキーは無重力を楽しむことを憶えていた。それはスカイダイビングに似た感覚だった。モンゴリアやチュラタム付近では、かなりの時間を割いて降下訓練を受けていたし(急降下する飛行機を使って無重力を経験したこともある)、軌道上の訓練では本物を経験したこともあるので、重さのないことはごく自然なことに思えたのである。
しかし、そういう体験をしていない部下も多かった。部下のうち、ゆうに三分の一は、ひどい宇宙酔いに苦しんでいた。なにしろ、重輸送船の中心線に積み重ねられただけの、気密で息苦しい船倉のなかだ。居住性がいいようにはできていない。オレンジ色の内壁と、床や天井のほぼ全体に貼りつけられているダークグリーンのパッドを見ているだけでも、落ちつかない気分になってくる。
部隊がここにとじこめられて、すでに二十時間になろうとしていた。その間、離昇のストレスに耐え、今度はまた無重力だ。乗り物酔いの薬を飲もうにも、そんなものはとっくのむかしに薬局の棚から姿を消していて、いまはプラスティックの瓶にはいった薬剤師の骨董品でしかない。
ミルスキーは船倉内を巡回し、できるかぎり部下たちを激励してまわった。
「歴史をどう思う、ヴィクトル?」ミルスキーは、副官のヴィクトル・ガラベジャンにたずねた。
「歴史なぞ、知ったこっちゃありません」大儀そうに手をふって、ガラベジャン。「わたしを銃殺にして、さっさとこの苦しみをおわらせちまってください」
「じきになおるさ」

「健康なんぞ、くそくらえです」
「少し水を飲め。水もくそくらえなら、好きにしろ」
彼らは前部船倉の吊り寝袋（スリング）にはいっていた。あたりには、船酔いと緊張のにおい、それに音をたてまいとする部下たちがやむをえずたてる音で充満している。なかには、スリングにおさまって、パウチやチューブから糧食を食べている者もいるが、大半はそれどころではない。
カーペンター・リッジの南端よりやや沖で、インド洋からとびたつとき、地球付近の哨戒プラットフォームで再補給を受けることを予定して、彼らはスロットを利用した。彼らが乗っているのは、月から発進した一隻もふくめ、七隻ある重輸送船の、四隻めだった。七隻のそれぞれには、コードネームが付されている。〈ジル〉、〈チャイカ〉、〈ジグリ〉、〈ヴォルガ〉、〈ロールスロイス〉、〈シェヴィー〉、〈キャディラック〉だ。〈ヴォルガ〉と彼らの船、それにもう一隻には、それぞれひとりずつ将軍が乗りこんでいた。三人のコードネームは、人気者のコメディ・ダンス一座の名をとって、ゼフ、レフ、ネフだ。六隻が運ぶのは、それぞれ二百名の兵員と小火器、および作戦の第一段階が成功したのちに必要となる、補給物資。そして七隻めには――〈ジグリ〉だ――重火砲および予備補給物資と、五十名の工兵が積載されている。
もし奇襲に失敗すれば、今後の補給は必要なくなる。また、成功すれば、地球や月からの補給なしに、数年は生きていけるはずだ。情報機関の情報に基づいて、戦術家たちはそう主張していた。
ミルスキーは、作戦説明で触れられなかった細部について考えた。突入方法は、充分筋が通っているように思われる。〈ストーン〉のなかにはいるにも出るにも、方法はひとつしかない。重

輸送船はステルス処置が施されているから、探知はむずかしいだろう。巨大で真っ黒な、膨れた円錐形の船――その上部にはこぶが三つあり、操縦室や火砲がおさめられている。使い捨ての熱分散パネルを貼った外装の下には、ぶあつい装甲板があった。装甲板には対レーザー反射シールドが施されている。敵の喉もとにとびこむとき、それがどの程度役にたってくれるものか――そのことは考えないほうがいい。

彼は目を閉じ、突入後の行動を復習した。兵員はすべて、プラスティックのバッグに軽量の宇宙服を携行している。かさばるヘルメットは、コネクターとともに、バッグの横につながれていた。バックパックには二時間分の酸素とバッテリーがはいっている。もうひとつのバッグにおさめられているのは、パラシュートと、折りたたんだ空気力学シールドだ。どちらのバッグにも、小型蒸気推進ロケットのキットがはいっている。ロケットには、直径二、三センチのノズルが三つついていて、バックパックの底にとりつけると、放射状にガスを噴射する仕組みになっていた。向きの操作は、ボタンのほかに、グラブのすぐ下のポケットにつながった、柔軟なコードで行なう。ノズルはプラスティック・パッケージにおさめられていて、移動時に、そっとガスを噴射することになっている。

これだけの装置に加え、レーザー・ライフル、およびカラシニコフAKV297真空中弾丸発射小銃（名称はものものしくても、初速を向上させ、折りたたみ式の銃床を大きくし、空気がないところでも暴発しないように改良しただけの、自動小銃にすぎない）も携行していく。これらに身を固めて、彼らはソビエト連邦および悩める同盟諸国の名誉と歴史的地位をとりもどすのだ。むろん、作戦説明でこのようなことをいわれたわけではない――指導者の立場にある者は、名誉と

地位が失われていることをけっして認めようとしないのだから。

だが、ミルスキーは現実的な人間だった。

薄闇のなかで、またひとりが反吐を吐きはじめた。たぶん、一日かそこらでこの状態はおわるだろう。専門医たちは、そう教えてくれた。兵員輸送船では、最初の二、三日が最悪らしい。ロシア人がこれまで宇宙で過ごしてきた時間を考えれば、専門家がいったことには充分な根拠があるのだろう。

ミルスキーはスリングに身を引き寄せた。そのときがきたら、これは体を固定するストラップともなる。突撃隊は射出トロリーに乗せられて、ひとりずつ船から押しだされる。そこから先は、〈ポテト〉で――〈ストーン〉で再集結するまで、全員がフリーのエージェントとなる。

侵入孔の防衛態勢はどの程度のものなのか。その向こうには、なにがあるのか。ディテールはいやになるほどこまかく指示されているのに、全体像はいまだに表面的なことしかわかっていない。みずからの任務をはたすために、最低限必要なことしか教えられていないのだ。

かつて、軌道上の物体が軍事的襲撃を受けた例はない。

作戦が失敗におわるかどうか、推測のしようがないのだ。

といって、兵士のなかに、戦いを生き延びることを期待している者はひとりもいなかった。大祖国戦争では、ヒトラーの軍隊がブーク川最初の渡河を試みたとき、祖父が戦死した。そしてもちろん、キエフの例もある……。

ロシア人は、死に方を心得ているのだ。

22

ホフマンは、いちばん大切な品物だけを持っていくことにした。たぶん二千はある高密度メモリー・ブロックのなかから七つ、身のまわりのものを二、三、それに、十年前、いまはなき夫から送られた宝石ふたつ。ドアをあけっぱなしにしたまま、タウスの自宅をあとにする。浮浪者でもあがりこんで、二、三日はいい思いをしてくれればいい。

彼女にできることは、もうなにもなかった。貸しのある何人かに、手を貸してくれるようたのむのがせいいっぱいだ。これから四日のうちに、なにが起こるかわかりきっている。これほどの緊張の高まりを見たことのある人間は、知人にもひとりとしていない。

これまでつねに成功をもたらしてきた本能にしたがって、ジュディス・ホフマンは〈ストーン〉に向かおうとしていた。いまから出発して、手おくれでなければいいが。

彼女はめだたないセカンドカー——リースのビュイックにのり、何時間もかかって、砂丘や開けた郊外、いくつもの小さな街や中くらいの街を通りぬけた。うしろめたい思いは、なるべく意識に上らせないようにした。彼女にできることは、もうなにもないのだから。

激怒した愚かな大統領によって、彼女はすべての権限を剝奪されてしまった。閣僚のうち三人は、この混乱をもたらしたのがすべて彼女の責任だといって非難した。

「くそくらえだわ、あんなやつら」と彼女はつぶやいた。

ヴァンデンバーグ発射センターに向かう分かれ道のそばに、基地要員向けの小さな民間商店街

があり、ふと園芸店が目にとまった。ためらうことなく、彼女は車を駐車場にすべりこませた。
園芸店のなかには、リーフグリーンのエプロンをはめ、ロビンフッド帽をかぶった、細身の若い男の店員がいた。「いらっしゃい。野菜ですか、お花ですか?」
「両方よ」
「それなら、Hの棚にあります。道具の向かい、根おおいのとなりの」
「ありがとう」彼女はラックを見つけると、花の種を一パックずつ手あたりしだいにとり、野菜と果物の種もふたつみっつとりあげた。選びおわったときには、籠のなかが十ポンドほどの種のパックでいっぱいになっていた。店員はいぶかしげな顔でその山を見つめた。
ホフマンは百ドル札を二枚、カウンターに放り投げた。「それでたりる?」
「と思いますけど——」
「おつりはとっておいて。急いでるので、いちいち計算するのを待ってられないわ」
「店長を呼んできま——」
「時間がないのよ」彼女はくりかえし、もう百ドルとりだすと、前の二枚のとなりに置いた。
「これなら充分です」ごくりと唾をのみこみながら、急いで店員。
「ありがとう。じゃ、箱にいれてくれる」
ホフマンは箱をかつぎあげると、車にもどった。

コムラインが鳴ったとき、ラニアーは自室で眠っていた。手を伸ばして応答ボタンを押したが、なにも聞こえない。静寂があるのみだ。

目をこすって、まばたきをする。そこで、寮じゅうの部屋で、コムラインがいっせいに鳴っていることに気がついた。廊下で足音が駆けまわっている。
ある番号を押した。不安そうな声が応じた。「第一空洞通信室です」
「こちらギャリー・ラニアーだ。一級警報が出ているのか？」
「はい、ラニアーさん」
「なにがあった？」ラニアーは驚くほど我慢づよい声できいた。
「よくわかりません」
「すぐに外部通信センターと話したい」
「わかりました」
数秒後、女性の声が応答すると、彼はもういちど説明を要求した。
「ロンドンとモスクワがデフコン3にはいりました」と女性はいった。「レーダーに多数の反応が出ています。とくに軌道上で活発なようです。通信衛星と航行衛星に対して、なんらかの行動がとられています」
「フロリダかサニーヴェイルから連絡は？」
「ありません」
「月面植民地からは？」
「ここへはありません。いまは月面の反対側にありますから」
「すぐに自転軸にいく。リンクとピクニーに伝えてくれ、特別室に十五人分の椅子を用意しておくようにと」

ロバータ・ピクニーの声が割ってはいった。「ギャリー、あなたね？　準備はもうできてるわ、カークナーの指示で。科学者チームと警備隊の協力をたのみたいそうよ。すぐにここにきて」
エレベーターのなかで、警備兵やとまどい顔の技師たちにかこまれて——彼らはまだ、くわしい状況を聞いていないのだ——ラニアーはこれからするべきこと、講ずるべき策をひととおり考えようとした。顎をなでると、剃りわすれた髭が手にさわった。
いままで、あれはずっと仮説でしかなかった。長い悪夢でしかなかった。だが地球では、彼がほとんど生を送り、愛する人々のほとんどが——その数のなんと少ないことか！——住んでいる地球では、ついにあれがはじまったのだ。
いまこのとき、故郷の人々がどうしているか、思い描かずにはいられなかった。パイロットとしての戦争体験はあっても、民間人としての戦争体験は、彼にはない。ラジオやサイレンに耳をすます人々。要領を得ない市民防衛隊の指示。ケーブル通信でとなりからとなりへ伝えられる避難命令。恐れおののき、自動車に家財を放りこみ、バスや列車や市民防衛隊のトラックに乗ろうと群がる人々……。
そんな考えを、なんとか頭から閉めだそうとする。いまは自分の知恵が必要なのだ。
エレベーターの外では、優先順位に応じて、警備兵たちがトロッコに乗るグループを組分けしていた。ラニアーは三人の海兵隊員に群衆のなかからひっぱりだされ、ほとんど命令調で、特別車に乗るようにいわれた。
〈ストーン〉外部通信センターは、メインドック宿営地の一画にある、壁でかこまれた二十メートル四方ほどの部屋だった。ドアのそばには、海兵隊の伍長が六人、小銃をかまえて立っていた。

発砲する必要にせまられた場合、体を固定できるよう、ブーツを特殊な輪に引っかけている。室内には、十人の人間が集まっていた。彼らの注目を浴びながら、ラニアーはふわりと椅子にすわった。

壁の一面には、四つの大型ディスプレイが設置されていた。ほとんどのコンソールには、おびただしい数のケーブルがつながれている。大型ディスプレイのうち、ついているのはひとつだけで、そこにはデータの数値にとりかこまれた、〈ストーン〉のぼんやりとした映像が映しだされていた。どうやら〈ドレイク〉からのものらしい。四年前、はじめて〈ストーン〉を見たときの映像とそっくりだ。

ピクニーがマジックテープ式のオーバーシューズをわたしてくれた。「まだはじまってないの。でも、警報は流れたわ。なにかが警戒線に引っかかったのよ。正体は不明。これをつけて」彼女はイヤフォンとマイクをラニアーの頭にかぶせると、「この三十分で、対応態勢は整えたわ」

「命令は？」

「とくに出ていない。警報だけ」

指定されたところにすわると、キーボードとディスプレイが運ばれてきた。二、三分後、カークナー大佐とひとりの副官が――口髭をはやし、カーキ色の制服を着た、若い中尉だ――はいってきて、数メートル離れた、同じ設備のある座席にすわった。

いまや真の中心人物は、〈ストーン〉の対外防衛を預る、このカークナーだ。ゲアハルトは第一空洞にいて、〈ストーン〉内部の指揮をとっているが、いまのところ、各空洞でのできごとは二の次でしかない。「携帯探知システムを持たせて、十五名を侵入孔の外に配置しろ」とカーク

ナーがいった。「外から見えないように、ハニカム構造壁の裏に隠れさせておけ。熱は放射させるな。それから、あのいまいましいガトリング砲を配備しておくんだ」
静けさがおりた。短く髪を切ったピクニーは、イヤフォンに真剣に聞き耳を立てている。部屋の向こう端にあるスピーカーから、静電のノイズが流れた。
ラニアーの前にある最大のディスプレイ上に、映像が現われ、揺らいだのち安定して、くっきりとした画面になった。侵入孔のすぐ外の、ハニカム溝から送られてくる映像だ。カメラは地球に向けられていた。まだ闇につつまれた地球の輪郭に、焦点があった。エンハンサーがはたらいて、画像が二度、みだれた。それから、大陸や無数の雲や、夜に包まれた街の灯りなどが見わけられるようになった。〈ストーン〉はもう数分で、地球に最接近しようとしている——三千キロメートルと離れていないところを通過するのだ。
ノイズの多い声が、各イヤフォンから響いた。「ヘブンセント、ヘブンセント、こちらレッド・キューブ。第一級緊急態勢を告げる」
「くそ」カークナーがつぶやいた。
「熊どもは、ついさっきエンドランを宣言した。われわれは現在、対応策を検討中だ。そちらの状況は不明。報告を乞う」
「こちらは異常なし、現在緊急態勢をとっています」とカークナーがいった。
レッド・キューブ——コロラドにある統合宇宙コマンド西部司令部はそれに応えて、「これよりヘブンセントは、当方の作戦計画から切り離される。われわれは貴部隊が存在しないものとして事態に対処しなければならない。サウナの蒸気は濃い。どうやら地球近傍におけるわれわれの

作戦能力を奪取するつもりらしい。わかるな？」
「わかります。やつらをくいとめられることを祈ります、レッド・キューブ」
「ヘブンセントは、これより自力で防衛してもらうことになる、大佐」
「了解」
　通信はおわった。
「こちらのディスプレイに、接近してくるOTVが一機映っているが」とカークナーはいった。
「所属は確認ずみか？」
「OTV45号です」ピクニーが答えた。「補給物資および増強要員を積載。九時間前に、第十六ステーションから発進したものです。以来、ずっと軌道を追尾しています」
　カークナーの副官が、外部溝の海兵隊たちもスキャナーに光点（ブリップ）をとらえています、と報告した。
「収容しろ」とカークナー。「このまま事態が進めば、一日かそこらでもっとOTVがやってくるぞ」
「了解——すでに、さらに数機が発進しています」
　ラニアーの前のディスプレイが、侵孔入に近づいてくるOTVの映像を映しだした。と、そのときである。だしぬけに、OTVが爆発し、炎の球につつまれた。音もなく、急速に、炎の球は収束し、にぶいオレンジの塊となった。分散したガスの殻を背にして、破片のシルエットが飛びちった。
「大佐」カークナーの副官が報告した。「溝より報告、黒い影が星をさえぎって移動しているとのことです。OTVの背後です」

きたんだ」
「ＯＴＶはもういない」とラニアー。「大佐、やつらはＯＴＶのうしろからひそかにくっついて
「なんてこった」ノイズの音を圧して、スピーカーから声がいった。「なにかがＯＴＶをふっと
ばした。あれは――」
「動いている、動いている！　レーダー反応はない」
「こちらダーバン。黒い点が見えるが、あれは残像だろうか」
「そうじゃない。おれは爆発を見なかったが、四つ、五つ、六つの影が動いているのが見える。
でかいぞ」
「侵入孔につっこんでくる気だ」カークナーがいった。「ＯＴＶのタンクを放出して敵の進路を
ふさげ。Ａ班、ケーブル発射！」
　侵入孔内のカメラが、自転するメインドックの背後でうごめく、宇宙服姿の兵員たちをとらえ
た。赤外線で補正されているため、まるで幽鬼のように朦朧として見える。迫撃砲に似た大砲が、
先端にモリのついたスチールのケーブルを発射した。モリは直径百メートルの侵孔入の反対側の
壁につきささり、ケーブルを固定した。ケーブルはたてつづけに七本発射され、侵入孔内に雲の
巣を形成した。そこへ、周囲から廃棄になったＯＴＶのタンクが三つ運ばれてきて、さらにたく
さんのケーブルで固定された。これだけのことが完了するのに、十分とかからなかった。
「やつらは収容エリアには道草すまい」カークナーがきっぱりといった。「時間のむだだから
な。侵入孔につっこんでくるとすれば、まっすぐに空洞に向かうだろう。収容エリアの掃討はあ
とでやればいい。オリヴァーの隊の準備ができていればいいんだが」

騒ぎのあいだ、ラニアーは地球を映しだしたスクリーンから目をそらしていた。が、そこでふと、地球の状況が目にはいった。
オレンジ色の光点の群れが、日本の西、ソビエト沿岸に花咲いている。低軌道の衛星や戦闘ステーションを破壊するため、破片をばらまく亜軌道ミサイルの爆発だ。「まずはこてしらべか」とカークナーがいった。
侵入孔外の海兵隊のひとりが、なにごとか報告したが、ノイズで聞きとれなかった。ピクニーがゲインをあげると、声はつづけた。「大佐、敵艦が艤装をはずしています」
大型ディスプレイが、侵入孔の外の光景に切り替えられた。まばゆく光を放つ自転ドックと、侵入孔の外線の向こうに、星々がまたたいている。その星々をさえぎって、三つの影が動いていた。と、炎がその影のまわりを走ったかと思うと、黒い艤装壁が分断され、はがれ落ち、その下からちょっと見ただけでは識別しにくい形状が現われた。鏡面で被われた船首が、侵入孔の暗い内部とメインドックの正面を反射しているのだ。「識別完了」カークナーの副官がいった。「あれはソ連の海上発射式重輸送宇宙船です。一隻めが侵入してきています」
つぎつぎに侵入孔にはいってくるソ連船は、直径二十メートルほどで、クリスマスの飾りのようにきらめいていた。回転ドックの外に隠された火砲の目に見えないレーザー・ビームが、すでに先頭の重輸送船の各部をオレンジ色に輝かせている。ラニアーは事態の推移を追うことができなかった。彼の目はディスプレイからディスプレイへと移動した。カークナーはもう、ほとんど口をきかなくなっていた。全員、すでに手順は心得ている。彼の部下たちは、訓練されたとおりのことを、全力をつくして実行していた。

「ピクニー、第七空洞につないでくれ」とラニアーはいった。
「いまごろは、全員が第一か第四空洞に集まっているはずだけど」とピクニー。
「それなら、第四空洞につないでくれ。どの回線でもいい。ハイネマンと話したい」
「先頭船、応戦を開始」侵入孔のだれかが報告した。「タンクを狙っているようです。あるいは、ケーブルを」
「やつらにはケーブルは見えまい」べつの声が応じた。どちらの兵士の声も落ちついていて、なにかを待っているようだ。
　モニター上に、第十六ステーションを示す、ちっぽけな光点が映しだされた。高度一千キロの高さで地球を周回する、低軌道ステーションだ。ラニアーが見ているうちに、その光点は白い光の球となって膨れあがった。やがて、光は消滅した。
「五番にハイネマン」ピクニーが声をかけた。ラニアーは五番のボタンを押した。
「ローレンス、ギャリーだ」
「ドアから出ようとしたら、呼びもどされた。いま、第四空洞にいる。すぐそちらへ――」
「ローレンス、はじまったんだ――敵の襲撃が。ただちにV／STOLに乗って飛びあがれ。チューブライダーを連結して〈通路〉の奥まで持っていくんだ。呼びもどすまで、そこにとどまっていてくれ」
「わかった。すぐに出る」
　ボタンがとびだして、通信は切れた。
　日本と中国の上空で、さらにいくつか、まばゆい白色の光点が閃き、青白色の球に膨れあがっ

た。全部で四つ。軌道上の核爆発だ。強力な電波妨害を起こして、通信・電力供給網を断ち切るためのものである。スピーカーの空電はさらに増加した。〈ストーン〉が時計と逆まわりの軌道を進むにつれ、地球はべつの側面をさらけだし、ソビエト連邦とヨーロッパ上空にはやはり爆発が目撃された。全部で十四ある。本格的な核戦争の前哨戦だ。〈小破滅〉以来、両陣営は賭け金をつりあげている。まだ戦略核の応酬ははじまっていないが――シールドされていない電子・通信システムで、このダンスの予備段階を生き延びられるものは存在すまい。

小型のディスプレイには、まだ無事で送信をつづけている監視衛星からの映像が映っていた。北アメリカ沿岸や、バハ・カリフォルニアの突出部は、高空に輝く不気味な閃光で、夜明けが訪れたかのように照らしだされ、海や陸地に浮かびあがっていた。まるで立体地図をペンライトで照らしているようだ。殺戮はまだはじまっていない。これの目的はなんだ？　威嚇か？　陽動作戦か？

交渉はすでにはじまっているにちがいない。かつてなされたことは、こんどもなされるだろう。ただし……。いかにして全面戦争に発展するのをくいとめるか、いかにして緊張を緩和し、限定的衝突に押さえるか……どちらがどちらを威嚇しているのか、どこまでやるつもりなのか。

そして、降伏するのはどちらか。

23

ミルスキー大佐は、船のコックピットにはいるハッチの縁をつかんだ。侵入孔をじかに見ることはできない。対レーザー・シールドと外部装甲船殻が、前部の窓を覆っているからだ。ふたりのパイロットの前のディスプレイには、なにが表示されているのかよくわからない。からみあう不明瞭な線、回転する円、格子状パターンのなかを回転しながら移動する、イースター・エッグのようなもの。「突撃態勢をとってください」肩ごしにふりかえって、船長がいった。「第一空洞に突入するまでは、侵入孔の内壁付近にいることです。レーザー狙撃隊がいますからね。蜂のように刺しますよ」

そのとき、巨大なこぶしが船殻をたてつづけに乱打したようなショックがあった。警報が鳴り響いた。「汚いぞ。あれはガトリング砲じゃないか」副パイロットがいった。「レーザー・シールドを貫通。船殻に若干亀裂がはいりました」

ミルスキーはコックピットを出ると、ハッチを閉めた。船長のいった蜂のたとえが、まだ心のなかにこだましていた。ミルスキーはむかし、学生奉仕の一環として、レニングラードの市の生協で蜂の世話をしたことがあった。蜂の巣を襲えば、当然、蜂は刺そうとするだろう。

彼は第一船倉を浮遊していき、自分のヘルメットをとりあげると、簡潔に指示を与えた。おおぜいの軍曹たちが——第二、第三船倉の分隊指揮官たちだ——ハッチをくぐって、部下たちに出撃準備をさせにいった。もう数分で、作戦ははじまるのだ。

「なにを浮かない顔をしている、アレクセイ?」ミルスキーはヘルメットをしらべている部下を叱りつけた。「みんな、銃のエネルギー装填はすんだか?」

部下たちはバッテリー・ラックからライフルを引きぬき、LEDが明るく光っているのを確認

した。
「整列」とミルスキー。
第二、第三船倉からも、号令が轟いてくる。第一船倉にいた第一小隊指揮官、コンスタンティン・ウロポフは、すでにヘルメットをかぶり、ジャドフ迫撃手の手を借りて、宇宙服をあちこちひっぱらせ、接合や密封状態をしらべさせていた。これでオーケイが出れば、こんどはウロポフがミルスキーの装着を手伝う番だ。
レーザーや弾丸に対し、ちゃんとした防護措置を施されている者は、ひとりもいない。この種の戦いでは、AKV、それどころか拳銃でさえも——それも、真空用に改良されてはいるが、標準的な銃弾を発射するものだ——兵士にとっては、対人レーザーに劣らず効果的な武器となるからである。
ミルスキーは、〝ゼフ〟、すなわちソスニッキー少将をとりまく小集団に近づき、「大隊出撃準備完了しました、同志将軍」と報告した。
ソスニッキーのそばには、参謀を務める三人の将校たちが——そのそばには、政治将校のベロジェルスキー少佐も立っている——まるでニワトリのように、将軍の宇宙服を何度も何度も点検していた。ソスニッキーは興奮を押さえつつ、グラブをはめた手をミルスキーにさしだした。ミルスキーはしっかりとその手を握った。「元帥閣下は、きみときみの部下を誇りに思うだろう」とソスニッキーはいった。「きょうは——あるいは今度は、いや、いつであろうと——栄光が待っているぞ」
「おっしゃるとおりです」とミルスキーはいった。命令系統に対する彼の考えは、ややもすれば

シニカルになりがちだったが、その彼さえ動かすだけの力が、ソスニツキーのことばにはあった。
「ささやかながら、キエフのかたきをとらせてもらうのだ。そうだろう、同志？」
「そのとおりです、同志将軍」
ミルスキーはちらりとベロジェルスキーの顔を見た。政治将校の顔には、高揚と恐怖のまじりあった表情が浮かんでいる。目を大きく見開き、上唇は湿っていた。
ミルスキーは自分の上唇をぬぐった。濡れている。顔じゅうが汗ばんでいるのだ。彼は将軍の前から引きさがると、所定の位置についた。
三つならんだ円形のハッチのそばにランプがともり、それとともに船は蛇行運動を開始した。兵士たちが飛びだすとき、敵の狙撃兵の標的になりにくくするためだ。もっとも、それは逆に、兵員たちをもみがらのように侵入孔内にばらまいてしまうことにもなる。したがって、内壁にとりつくまで離ればなれにならないよう、兵員はふたりひと組でたがいのハーネスをつかみ、分隊単位で同時にとびださなければならない。
乱射はひかえる。敵よりも、味方にあたってしまう可能性が大きいからだ。射撃するときは、敵の姿を認めたときのみ。それも、できるだけ避けたほうが望ましい。時間をむだにしている余裕はないからだ。
すでに全員が、宇宙服を着て整列していた。二番ハッチをとりまいていた緊急脱出用エアロックは撤去され、いまは壁ぎわに寄せられている。シューシューという音をたてて、ポンプが船倉の空気を吸いだしはじめた。船倉同士をつなぐハッチが閉じられた。照明も消えた。ミルスキーの兵士たちに見えるのは、脱出ハッチの上にともる表示ランプと、ガイド・ロープのはなつ螢光

だけだ。

「無線機および方向指示機をチェックせよ」とミルスキーは命じた。ひとりひとりの兵士が、自分の通信装置と命綱ともいえるビーコン式方向指示機を、すばやくチェックした。

指示ランプが二分の一秒間隔で明滅しはじめた。全員が、ハッチまで自分たちを誘導し、引っぱっていくトロリーにつながっているかどうか、確認しあう。

ハッチ開放まで、あと十秒。左右上下に揺れる船の動きに、さすがのミルスキーも気持ちが悪くなってきた。

もうランプの音は聞こえない。船倉内は真空になったのだ。

だしぬけに、ハッチがスライドして開き、兵士の列は闇と静寂のなかへ吐きだされだした。

まっさきにとびだしたのは、第一空洞に突撃する予定の二分隊、二十名だ。

ミルスキーは列の三番めだった。先頭に立つのはウロポフ。太腿から伸びたストラップが、ミルスキーの体につながれている。ミルスキーはミルスキーで、レーザー・キャノンを背にかついだジャドフにつながれていた。三人はハッチの縁をつかみ、訓練のとおり、同時に船倉の床を蹴って、年季をつんだスカイダイビング・チームのように、みごとなスタートを切った。三人の姿は、広大な闇のなかに浮かんだ、六芒の小さな星のように見えた。

目はすぐ闇になれ、ミルスキーは方向指示機のスイッチをいれた。心臓のとまりそうな一瞬、すべてが水泡に帰したかと思った。声も信号も、まったくはいってこない。そのとき、高周波数のビーコンによるピッピッピッという音が聞こえてきた。だれだかわからないが、第二空洞前の連絡孔に潜入したスパイが――おそらく、すでにアメリカ人に殺されているのだろう――設置し

てくれたのだ。
ついで、ミルスキー自身も小さな光の点を認めた。第一空洞への入口だ。
あたりにはいろいろなものが浮遊している。それがつぎつぎに体にぶつかり、宇宙服をこすっていく。ヘルメットのライトを浴びて、巨大な金属の塊が浮かびあがった。裂けた隔壁、めくれあがった鋼板……船だ！
前方のなにか見えないものにからめとられて、重輸送船の一隻の残骸が、蜘蛛の巣につかまった蝿のように、重々しく揺れていた。そのまわりには、いくつもの死体がただよっている。ほとんどはヘルメットをつけていない。ばらばらになった手足や胴体も浮かんでいる。
ふいに、三人は目もくらむ光輝につつまれた。船や船から吐きだされた兵士たちを――生死を問わず――なめていた強烈な探照灯が、こちらに向けられたのだ。ジャドフがミルスキーのストラップを放したので、ミルスキーは本能的に部下の武器に手を伸ばした。が、手に触れたのは、ジャドフの腕だった。その手に、はげしいショックが伝わってきた。ジャドフの宇宙服がねじくれ、大きくはじける。反動で、ミルスキーはウロポフから引き離されそうになった。ジャドフの宇宙服には穴があいており、噴出する空気で、彼の体は風船のように勢いよくふっとんでいった。その寸前、ミルスキーはできるだけ手を伸ばし、レーザー・キャノンを引っつかんだ。それをウロポフにわたす。
(あのとき、草原のただなかに立って、おれはこの悪夢を夢想したものだ。あれは現実と同じように――いや、現実よりもずっとなまなましかった。おれは枯れ草の上からパラシュートをたぐりよせながら、かぶりをふって、自分の空想を苦笑したものだった)

侵入孔には何百という兵士が押しよせている。ミルスキーは本能的に、周囲のいたるところで、レーザー・ビームや弾丸が味方をなぎはらい、貫き、掃射するのを感じとった。

ミルスキーはウロポフを引きよせ、ヘルメットのライトであたりをないで、向かうべき内壁をさがした。どこにも見あたらない。ジャドフの死で、ふたりはコースをはずれてしまったらしい。

「ロケット・パックを使え」彼は少佐に命じた。「ここで別れる」

「――っちが〈ポテト〉になっちまいますよ」少佐がぼそりと答えた。声を感じて作動する方式のマイクなので、ことばを切るたびに、語句の頭が切れてしまうのだ。「――はオーブンより熱い。――ろ焦げになりそうだ。――ッドラック、大佐！」

ミルスキーはストラップを放し、スラスターを点火した。残骸や無残な死体の群れを避け、外に向かってスイングする。ついでスラスターを切り、ヘルメット内のディスプレイをつけた。目の前に小さく光るステージが現われ、ビーコンとそれに対する自分の位置関係が表示された。もういちどスラスターを点火して、何百人もの同志と同じように――どれだけ生き残っているかはわからないが――方向を修整する。

ふと彼は、いまやずっと後方に去った残骸の船体番号を思いだした。あれは月面基地からの船――つまり、低重力下での戦闘について、最新式の訓練をみっちり積んだ部隊を満載していた船だった。では、最良の部隊がやられたのか。

ビーコンの信号とスラスターだけをたよりに、いまやミルスキーはひとりきりで――いまのところは、どれだけの部下がどこにいるのか考慮することなく――小さな光の円に向かって、侵入孔内を飛びつづけた。

「はいられた」カークナーがいって、手をぴしゃりと椅子の腕にたたきつけた。「侵入孔には死体と残骸しか残っていない。たぶん、輸送船三隻は撃退できたろう。残りは大破したはずだ。しかし、撤退していく船はない――やつら、手ぶらでは帰れないんだ」

「パイロットたちは〈ストーン〉が陥落するのを待ってるんだよ」コムリンクから、ゲアハルトの声が弱々しく響いた。彼はいま、第四空洞から民間人が撤退するのを監督しているところだった。

「やけに弱気ないいかただな、オリヴァー」とカークナー。「こんどはそちらの番なんだぞ」

「ペルシア湾からの通信を傍受したわ」ピクニーがいった。「これなら解読できる。大佐、聞いてみる？」

「たのむ」

解読処理を通したため、ひどく機械的に聞こえる男の声がいった。「1Kのキル・セブン、1Kのキル・セブンが〈煙の輪〉を吐いた。くりかえす、〈煙の輪〉を吐いた。五十クリックの位置で、〈ツルゲーネフ〉級小甲板より、〈吸血鬼〉発進、その数十四。くりかえす、〈吸血鬼〉発進、その数十四。六機撃破。迎撃第二段階を開始する。〈誘導稚魚〉にて、〈煙の輪〉、累計九機撃破、さらに〈ナイフ〉にて、累計十一機撃破。〈吸血鬼〉三機、二十クリックに接近。〈司祭〉発射。〈司祭〉、〈吸血鬼〉と遭遇。〈サラマンダー〉のクルーに警報。〈ヒトデ〉発射。〈シードラゴン〉に警報。〈吸血鬼〉二機、六クリックに接近。迎撃第三段階を開始する。〈泡吹き〉開始。〈近視眼〉発射、〈剣〉発射、〈守護者〉発射、〈ナイフ〉発射」短い間。

「〈吸血鬼〉二機、三クリックに接近」また間があり、ついで、静かな口調で、「グッバイ、〈シャーリー〉」
「あれはハウスだ。巡洋艦の」目をこすりながら、カークナーが静かにいった。「やられたか」
「べつの通信を探知」ピクニーがいった。「オマーン沿岸からだわ」
「それも出してくれ」ラニアーをちらりと見やりながら、カークナー。
「――CVN96、所属〈毛球グループ〉」と、その信号ははじめた。「〈フェザー2〉を発進させた。くりかえす、〈フェザー2〉を発進させた。〈寄生虫〉作戦を開始。くりかえす、〈寄生虫〉作戦を開始。第四種特別郵便発送について、郵政当局の許可を乞う」
「空母フレッチャーが、沿岸攻撃のため、戦略爆撃機を中距離飛行に送りだしたということだ」とカークナーが翻訳した。
「こちらCVN85、コード：ゾロ・ドクター・ベティ、郵政当局は申請を却下した。〈寄生虫〉は〈鉤爪〉がつかむ。〈シードラゴン〉に警報が出た。〈壁〉を立て、〈七面鳥〉の羽をおろせ。くりかえす、〈壁〉を立て――」
「〈毛球グループ〉の〈先導者〉、〈花婿〉、〈アルファ・ベータ・ヴィクター〉……〈花婿付添人〉、〈寝室係〉に告ぐ。昼食は延期された――」
「こちらCVN96。ディープ・ブルーの〈ツルゲーネフ〉級小甲板より、三十八の〈吸血鬼〉発射を確認。距離十クリック、〈ナイフ〉発射、〈近視眼〉発射、〈シードラゴン〉に警報。〈司祭〉と〈吸血鬼〉は〈天使2〉にて遭遇。ジーザス・クライスト」――最後のことばは、明らかに隠語ではなく、ののしりことばだった――「〈吸血鬼〉、二クリックに接近――」

メッセージがとだえると同時に、カークナーは目をつぶった。「わたしも下にいるべきだった――あの竃のただなかに」
「第十六ステーションから脱出したOTVは何機だ?」ラニアーがきいた。
「OTV45号をのぞいて、五機だ。三機はこちらへ、二機は月に向かっている」
「その三機に、〈ストーン〉は襲撃を受けているから、収容できないと警告してくれ。月に進路を変えるようにと」
「できるものならね」とピクニーがいった。
すでに、低軌道をはじめとして、地球を周回するステーション群からの撤退がはじまっている。いまや、戦火は拡大するいっぽうだ。防衛用のビーム・ステーションだけでなく、いまは研究用や産業用のステーションまで標的となっている。
「牽制のつもりが」と、ピクニーが苦々しげにいった。「収拾がつかなくなってきたようね」
「もちろん、これは牽制にきまっとる」コムラインから、ゲアハルトの声がいった。「そう思わないやつは、阿呆かよほどのいかれ者だ。ギャリー、きみがそこでできることはもうない。いますぐ第一空洞にきてもらいたい。わたしもこれから第一空洞へもどる」

24

パトリシアは、七時間ぶっつづけで研究をつづけたあと、疲れはてて、テントの下の寝台で眠

っていた。テントの床と寝台のまわりには、スレートがふたつ、プロセッサーがひとつ、数十枚の紙が散乱している。
　パトリシア、キャロルスン、ファーリー、呉、張――そしてもちろん、V／STOLのハイネマン。第一および第四空洞から出ることを許されているのは、この六人だけだった。ラニアーが、すっかり中止してしまうには、パトリシアの研究があまりにも重要すぎると判断したためだ。
　彼女は地球のドラッグストアの夢を見ていた。ちょうど、アイスクリーム・コーンは売れないとつっぱねられたところだった。つぎに、夢の舞台は変わって、彼女は大きな教室の黒板のそばに立ち、手に負えない学生の群れに、難解な問題を説明しようとしていた。と、学生たちがチョークを投げつけはじめた。黒板の方程式にチョークがぶつかるところは、まさしく現実としか思えなかった。やめて、と彼女は叫んだ。やめなさい！　教室の騒ぎはぴたりと静まった。彼女はチョークのかけらを床から拾いあげ、チョークのあとだらけになっている方程式のまわりを円でかこった。もちろん、と彼女はいった。これで示されるのは――。
　キャロルスンが彼女の肩をつかみ、揺り起こそうとした。パトリシアはほつれた黒髪をはらいのけ、ねぼけまなこでキャロルスンを見あげた。
「すぐに第四空洞へいくのよ」とキャロルスン。
「どうして？　わたし、研究が――」
「研究はおしまいよ、ハニー。トラックが待ってるわ。中国グループもいっしょよ。みんないっしょ。さ、急いで！」その声には、さしせまった響きがあった。パトリシアは鞄をとりあげ、スレート、メモリー・ブロック、万能メーター、プロセッサーをつめこんだ。

キャロルスンは彼女の手から鞄をとりあげようとしたが、途中で思いとどまり、その手で自分の肩を抱きしめた。「もうそんなものはいらないの――ほんとうに、いらないのよ」

キャロルスンの頬を涙が流れ落ち、ジャンプスーツの胸にぽたりと落ちた。「みんながそういってるの――わたしはまだ見てないけれど、とびこんでくる無線が――あの衛星放送の違法受信機に――」

パトリシアは鞄をぎゅっと胸に抱きしめ、ののしりながら、キャロルスンより先にトラックに駆けよった。

なんてぶざまなふるまいかしら――まだ現実が浸透してきていない心の一画で、パトリシアはそう思った。なんてヒステリック。彼女だって知っていたのに。心の準備をしておくべきだったのに。

パトリシアのあとから、キャロルスン、呉、張がトラックに乗りこんできた。ファーリーはトラックを発進させ、傾斜路を昇ってトンネルに乗りいれた。

25

ミルスキーは恐ろしかった。ときおり、あっという間に拡散する薄い過酸化水素の雲を吐きながら、ビーコンめがけて、彼は蒸気スラスターの圧力で前進していた。まわりのどちらを見ても、地面が広がっている。胃の感覚は、自分があらゆる方向へ落下していると告げていた。前方には、

灰黒色の広がりが見える。上下前後の湾曲した地面の上には、雲がただよっている。といって、目を閉じるわけにもいかなかった。ヘルメットのディスプレイ中央にビーコンの信号がくるよう、気をつけていなければならないからだ。

数人の同志の姿を見つけた。彼らのスラスターの噴射は、ジェット機が湿った空気につっこんだり出たりするときにできる飛行機雲に似ていた。何人残った？　アメリカ人はどんな防衛策を講じたのだ？

まず、この美しい恐怖の空間、上下のない空間を通りぬけ、第二空洞への連絡孔にたどりつかなければならない。自転軸付近からはなれ、翼兼シールドを折りたたみ、ヘルメットのディスプレイに映しだされている簡単な地図をたどっていくのは、第二空洞にはいってからだ。

ゆっくりと、彼の恐怖は爽快感に変わっていった。地球で行なったジャンプのなかには、六分におよぶものもあった。それだけで、セックスよりも、翼をもらった日よりもすばらしかった。だがここでは、スラスターをふかして加速しながら、十分、十五分と、安定して飛んでいられるのだ。

たとえ着地に失敗して死んだとしても、これなら飛びつづけるだけの価値はある。空に大地があり、どの方向へ向かっても地面に着地できる世界。それだけの価値はある。侵入孔の悪夢をくぐりぬけ、ただよう仲間たちの引き裂かれた死体を——真空のなかで膨満し、蒼黒く変色した顔、まつげよりもとびだし、ぶきみな白濁したあの目——かきわけてきただけの価値はある。

「——ルスキー大佐、大佐ですか？」

「そうだ！　そちらは？」

「——ロボフです。同じ船の仲間たちもいますし——ほかにも何百といます！——るで天使ですよ、あの白さは。——いっしょの部隊はすでに降下をはじめています。——しろを見てください、大佐」

ミルスキーはビーコンの位置表示を片目で見ながら、慎重に首をかたむけ、うしろと下を見た。空洞の床の上にただよう青みがかった靄のなかに、小さな白い点が無数に見える。パラシュートだ。彼はしなやかに身をひねり、べつの四分円を見やった。計画どおり、第一空洞南壁にあるエレベーター入口を確保するため、兵員が降下していく。彼のなかで、誇りが膨れあがった。ほかのだれが、ここまで突破してこられよう？　歴史だ！

前方の壁の中心に、ひときわ暗い穴が見えた。全員の宇宙服には、二時間分の空気しかはいっていない。降下できるまで、あとどれだけかかるだろう？

第四空洞のコンパウンドで、キャロルスンは科学者チームのメンバーをまとめることをあきらめた。警備隊のほとんどは配置につき、コンパウンドやカフェテリアは、避難者たちにあけわたされている。

パトリシアは鼻水をたらしたまま、呆然としてカフェテリアにすわり、カフェテリアのスピーカーから思いだしたように流れ出る通信に、ぼんやりと耳をかたむけていた。通信衛星からの電波は、いまも侵入孔を通じ、各空洞入口の中継機に送られてくる。みずからをこともなげに犠牲にして、軌道上の前哨点や戦闘ステーションをさがしもとめるロボットたちの、電子のおしゃべりが聞こえてくる。ときにその声がふっととぎれるのは、さらに数百万人の人間を道連れにする

ため、大気圏に再突入するときだ。抑止政策は、いまやますます多くの死をもたらしている。
収拾がつかなくなっているんだわ、とパトリシアは思った。
発作だわ。断末魔の人間の動き、死体の痙攣。サンディエゴ、ロングビーチ、ロサンジェルス、サンタバーバラ。発作だわ。
ファーリーと張は抱きあって泣いていた。呉は黙念として、彫像のようにテーブルの前にすわっている。リムスカヤは、明らかに密輸品のスコッチを抱いてカフェテリアの一画にすわりこみ、数秒ごとにあおっていたが、やがて酔いつぶれて寝てしまった。
以前、防衛システムの建設に携わった何人かが、むかしにもどり、かつての評価や推測を持ちだして、冷静な分析を試みていた。勝っているのはどちらか、まだ戦闘能力を持っているのはどちらか、つぎにどの兵器を持ちだすか。
「氷冠の下の潜水艦かな?」
「いや——それはどちらの陣営も、あとあとのために温存しておくだろう」
「あとって、いつ?」
「さあな」
「あのトラックはどうなったろう——そら、逆ホバー効果がはたらいて、ショックウェーブが襲ってくると地面にしがみつくという、あれ」
「なにもかも、くそくらえだ」
発作だわ。
パトリシアは目を閉じた——そうすれば、恐ろしいイメージを締めだせると思っているかのよ

うに。家が突然の光と放射能の爆発に呑みこまれ、炭化した壁と屋根のまがいものとなるイメージ。

そしてなかでは、家の陰で申しわけ程度に守られ、生きながら蒸し焼きになり、しかし完全に炭化するところまではいかず——つづいて襲ってくるショックウェーブで、こまかな灰に吹きとばされてしまう——

かあさん、とうさん。

ファーリーが近づいてきて、パトリシアの肩をぽんとたたき、彼女の夢想を破った。「もう、もどれないわ」とファーリーはいった。「技師たちが、もう宇宙港はひとつも残っていないだろうって。ヴァンデンバーグ、宇宙港——別名ケネディ宇宙センター、そしてエドワーズまでもがなくなったでしょう。それに、月にもいけないわ。船も燃料もたりないから。十年、たぶん二十年は、だれもやってこられない。技師たちはそういってるわ。中国では、いくつかちゃんとした飛行場が残るかもしれないけれど、たとえ地球のそばまでいったとしても、OTVと軌道でランデブーするシャトルが一機もないんだもの」

呉もそばにやってきた。「もう中国はなんの攻撃行動もとっていない。ソ連はまだミサイルを発射している。いまごろは、ぼくの住んだすべての都市が消滅してしまっているだろう。ぼくらは学校で、民間防衛の教練を受けた。そのとき、ミサイルが落ちるとしたら、どこになるかも習ったんだ。ソ連のミサイルと、おそらくはアメリカのミサイルがね。どの都市にもミサイルは落ちたはずだ」

「葬式はいつだ?」だれかがいった。だれも笑わず、室内はしんと静まりかえった。ひどく無神

経なジョークだった。無神経なジョークであることを除けば、ジョークとさえいえない。たしかに、人が死ねば葬式は出す。

だが、何十億もの人々が死んだときは？　あるいは、死にかけているときは？

キャロルスンがパトリシアのとなりに腰をおろし、「残ったのは〝オフィスのインク〟だけだわ」と、ぼそりといった。「ウェインは逝ってしまった。わたしたちの息子も。ふたりとも、いまごろはもういないわ、きっと。もうちょっとしたら、それがどうしようもなくつらくなってくる。ふたりがいないことが心にしみこむまでは……」彼女の頬が痙攣し、全力疾走してきたあとのように、紅潮した。「リムスカヤったら、もうひと瓶あけてしまったわ、あのろくでなし」

「わたし、図書館へいくわ」とパトリシアはいった。

「むりよ」とキャロルスン。「立入禁止だもの」

「しなければならないことがあるの」

「そう」そういったきり、キャロルスンはもう、なにもいわなかった。

「おい、外部カメラから、また映像がはいったぞ！」だれかが叫んだ。車輪つきの大型モニターがころがされていって、中央カフェテリアの中継機に接続された。

パトリシアはモニターの画面を見ようとはしなかった。冠毛シティの図書館で、衛星望遠鏡や月面望遠鏡がとらえたその場面の写真をすでに見ていたからだ。その写真の写しは、地球のどこか――ワシントンかパサディナのホフマンのオフィスかで、みずからの描く破壊――破滅の龍によって、灰と化しているだろう。

だが、キャロルスンは目をすがめ、唇をかみしめて、その光景を見つめていた。

ひとつ、またひとつ、都市に炎の花が咲いていく。爆発が起こるたびに、池に巨大な鋼鉄の球を投げこんだときのように、大気に波紋が走る。
大西洋の彼方、西側の各地を、夜明けより明るい光が被いはじめた。いまは黄色、いまは紫、いまは緑。
いまや世界じゅうがひとつの業火に呑みこまれていた。木から木に飛び火するように、都市から都市へ、大陸から大陸へと、とびかう炎。
もはや人間は、松の葉よりもはかないものでしかなかった。

26

ゲアハルトとラニアーは、ゼロ・エレベーターを守る数個分隊のそばに立っていた。ゲアハルトが双眼鏡をのぞいて、いった。「小さな点がたくさん見える。カトンボどもめ。ほとんどはこの第一空洞に降下しているぞ。だが、ごく一部は、降下する気配がない」双眼鏡をラニアーにわたした。
「第二空洞に向かうつもりだな」極から吹きおろしてきた冷たい風が、ラニアーの髪をもてあそんだ。ラニアーは自転軸にそってたなびく飛行機雲をたどって、焦点のうちのふたつを双眼鏡で追った。ラニアーは双眼鏡の向きをさげ、科学者チームのふたつのコンパウンドの防衛態勢を検分した。

「らしいな。向こうは、われわれが第一空洞に主戦力を置いていると判断しているようだ。じっさい、そのとおりだが」
ラニアーはふたたび、さっきよりずっと低い角度で双眼鏡をあげた。南極付近に、やや大きめの白い点が見える。「パラシュートだ」とラニアーはいった。「一部はもう、大気圏に降下している」
「くそっ、なんと鮮やかな手並だ」賛嘆のこもった声で、ゲアハルトがいった。それから、無線機をとりあげ、「南部ゼロ・トンネル、そちらにも攻撃隊がいくぞ。連絡孔、しっかり目をあけて見ていろ」
ラニアーは集中することができなかった。陽動作戦の意味が気にかかる。ソ連は、ここでの作戦を有利に展開するために、地球で戦端を開いたのだろうか？　交渉しだいで事態を収拾し、死傷者の数を〈小破滅〉程度に抑えられると期待して？　ふいに、政府代表や、軍人、愛国者、反逆者、闘士たちのさまざまな行動パターンに、ラニアーはすっかりいやけがさした。
できることなら、いざっていって、眠りたかった。
ホフマンはどうしただろう。あの狂気の世界から——墜落しかけた飛行機から脱出し、ここにこようとして、ヴァンデンバーグの道路にリムジンを駆っているホフマンの姿がいやでも目に浮かんできた。だが、ここにも狂気はおよんでいる。それに、ヴァンデンバーグ上空の爆発を見たいまとなっては、もはや明らかに手おくれだ。
「彼らは知っているんだろうか？」とラニアーは問いかけた。
「なにを？」とゲアハルト。

「ソ連は、〈大破滅〉が訪れることを知っているんだろうか?」
図書館にはいったこともなく、ラニアーのように予備知識もないゲアハルトは、顔をしかめた。
「なにをいってるんだ、ギャリー?」
ラニアーは要点をしぼった。「突撃隊はまさに攻撃を開始しようとしている。だが、彼らは知っているんだろうか——もうどちらの陣営にも、最高指揮官たちが存在していないことを?」
「一部は生き延びるだろうさ」とゲアハルト。
「オリヴァー、そんなことに意味があるのか?」
「ええい、あるにきまっとるだろうがっ!」ゲアハルトがどなった。つばがとんで、自分の顎にかかった。ゲアハルトはそれを袖でぬぐいながら、かぶりをふりふり、そっぽを向いた。顔が真っ赤になっている。「負け犬じみたいいかたはよせ、ギャリー。われわれには戦力になるもの全員の力が必要なんだぞ」
「戦うつもりはある」とラニアー。
「戦いがはじめてではなかろう?」緊張ではりつめた声で、ゲアハルトがきいた。
「地上で戦うのは、はじめてだ」行動パターン。破滅のあとでさえ、休みなく、おわりなくせまってくる行動パターン。「武器はどこだ?」
第二空洞手前の連絡孔に陣どる敵部隊から散発的な銃撃を受けながらも、彼らは突破に成功した。また味方が死んだが、多くはない……。
この飛行が終わることはないのか?

ミルスキーは体を回転させ、都市を見わたした――。
こんな都市を見るのははじめてだ！
――そのあいだにも、スラスターの噴射で、体はどんどん連絡孔から離れていく。百メートル、二百メートル、三百メートル。やがて、もとめていた目標を発見し――空洞内を軸と垂直に一周する川にかかったゼロ・ブリッジだ――〈ポテト〉の自転軸を離れ、プラズマチューブのほのかな光に向かって降下をはじめた。
すでにおおぜいの兵士が、大気圏の障壁とプラズマチューブを通過している。通報者によれば、長くとどまっていないかぎり、プラズマチューブを通りぬけても無害ということだったが――ミルスキーは経験しか信用しなかった。同志たちが生きているか死んでいるかはわからない――姿は見えても、小さすぎてこまかいところまでわからないからだ。このあまりにも矮小な部隊――わずか数百の兵員で、祖国の一共和国くらいの広さがある物体を、どうやって占領できるというのだろう？
自転軸から離れるにつれ、パースペクティブが徐々に徐々に変化しはじめた。
自分のいまの気持ちがいかに利己的なものか、自分がいかに憎悪に満ちているか、それに気づいても、ミルスキーは驚かなかった。訓練のとき、恐ろしい耐性テストのとき、これは何度も感じた感情なのだ。それは戦場の兵士特有の、ハードでほろ苦い感情だった。多少の恐怖もまじってはいるが、その大半は利己的な感情だ。
国家や祖国や革命のことなど、これっぱかりも念頭にない。それでも、恥かしいとは思わなかった。

ただ、降下するのみだ。軸に対して螺旋を描くように降下しているため、空洞の巨大な円筒がまわりで回転しているように見えた。スラスターをふかして、目標からはずれないように気をつける。静かだった。風の音さえ聞こえない。ミルスキーは空気橇の用意をし、翼を開いて各部を固定した。

そこで、橋から数度離れていることに気がついた。もういちどスラスターをふかして、位置を修整する。自分が発狂したと思われる兆候はまるでない……だが、わずか一分ほどの降下が、こうもゆっくり感じられるとは……。

突然、軽いショックを感じた気がして——おそらく気のせいだろう——彼はプラズマチューブを通過したことを知った。このつぎは、ほんの数百メートル下で抑制障壁に押さえられている、大気の最上層部に突入する番だ。彼は空気橇の上にしっかりしがみつき、窪みに手足を固定した。どんな角度で大気に突入するにしても、橇は即座に、いちばん抵抗の少ない姿勢をとってくれるはずだ。空気を切り裂く音が聞こえるまで大気中を降下したら、そこで橇を捨て、十五、六キロ下の目標めがけて降下を開始し、空洞の床からわずか二、三キロメートル上空でパラシュートを開く。途中で装備を捨てるので、体はいまよりも身軽になっているだろう。着地の衝撃はそれほど強くないはずだ。

兵士がひとり、手をふるのが見えるくらいそばまで近づいてきた——だれかはわからないが、第六大隊の記章をつけている。〈ロールスロイス〉の兵だ。ミルスキーは手をふりかえし、手ぶりで橇の準備をするよう伝えた。向こうは折りたたまれたままの橇をかかげて見せ——銃弾を受けたのだろう、ぼろぼろになっている——それから肩をすくめて、放り投げた。無線の使用は禁

じられているため、その兵士はスラスターをふかし、口の動きが読める距離まで近づいてきた。橇がなくてもだいじょうぶだろうか?
――わからない。体をまるめて、背中から突入するようにしろ……もしできるなら。
口の動きだけでそれを伝えるのは難しかったので、ミルスキーは膝を折りまげ、両腕を体にまきつけて、シールドの下でできるかぎり小さくなってみせた。
兵士はうなずき、親指と人差し指で了解のしぐさをした。ほどなく、ふたりの距離が開いた。ミルスキーに接近するのにスラスターを使ったため、向こうの降下速度が遅くなったのだ。ミルスキーはその兵士がふたたびスラスターをふかし、目標に向かってさらに連絡孔から遠ざかっていくのを見まもったあと、自分の突入準備をはじめた。
まず、橋に対する自分の位置を確認し、もういちどスラスターで調整する。すでに橇を押しあげようとする圧力が感じられるようになっていた。振動にまじって、弱いつきあげがきた。
さらにスラスターをふかしてから、ベルトをはずしてロケット・パックを捨てた。自分の上に落ちてこないかぎり、どこに落ちようと知ったことではない。
一瞬、準備のあいだ、怒りに近い予感にとらわれながら、ふたたび都市を見おろして、いったい〈ポテト〉の秘密とはなんなのだろうと思った。なぜわれわれは戦っているんだ? これでなにが得られるというんだ?
このうえなく大切な宝物を横どりしようとする行為に対して、西側はどう反応する? その軌道プラットフォームやスパイ衛星を奪取しようとする試みに対して(そういう計画の噂は聞いたことがある)、西側はどう反応する?

同じ状況下にあった場合、ロシア人ならどう反応するだろう?
ミルスキーは身ぶるいした。
そのとき、橇が激しくあおられ、勢いよく回転した。一瞬、ブラックアウトを起こしたが、すさまじい衝撃とかんだかい風の悲鳴で意識をとりもどした。
突入したんだ。
橇はふたたびあおられてはねあがったが、進行方向は定まったらしい。体が風圧で橇の内側に押しつけられる。骨が折れていないことを祈りながら、パッドのついた膝と肘をふんばった。訓練では三メートルの高さからとびおりたが、あんなものの比ではなかった。口のなかに血の味が広がった。頬の内側をざっくりかんでしまったようだ。舌にちぎれかけた肉片がさわる。彼は目を閉じ、苦痛をこらえ——
(黄金の草原のただなかで、パラシュートをまとめ、ぎらつく太陽にほほえみかけ、同志たちを捜し、手を目の上にかざして、彼方の点となった輸送機を見送り——)
——降下をつづけた。急いで体を橇にとめているバックルをはずす。空気がまわりじゅうで咆哮をあげている。両手にゆるくストラップを握った。ついで、橇をひっくり返した。とたんに、指からストラップがもぎとられた。
やった!
ここから先は、ただの自由落下とパラシュート降下のおさらいだ。彼は下向きになり、手足を伸ばして体を平たくし、安定のいい姿勢をとった。橋はまだブルーブラックの川にかかった白い線でしかない。あれはほんとうに目的の橋なのか——ゼロ・ブリッジなのか? まちがいない—

—あのちいさな点は警備詰所だ。砂嚢を積み重ねた防衛線も識別できる。それに、空洞の弧の三分の一ほども大きくずれているはずはない……じっさい、正確すぎるほどだ。少し目標からそれなくては。
ヘルメットをかすめる風の音が、ずっと穏やかになってきた。ミルスキーはレーザーとカラシニコフを点検し、ざっと装備ベルトに目をやった。
パラシュートを開くタイミングは、純粋に肉眼だけで判断しなければならない。ひとりひとりの降下速度がまちまちなため、自転軸から数を数えても意味がないのだ。ミルスキーは親指をさしだした。ちょうど橋と同じくらいの長さだ。
引きひもを引っぱった。パラシュートがとき放たれ、はためき、しぼみ、またはためいて、小さなソーセージのパッケージの形に開いた。
ミルスキーは体をひねり、体重を預け、ガイドラインを両手で持って、それを交互にひっぱりながら、パラシュートの両方の縁から交替に空気を逃れさせて、進行方向をあやつった。
降下地点が目標から五キロは離れていそうなことがわかり、彼はほっとした。敵の数が報告よりもずっと多くないかぎり——それに、通報者の報告どおり、レーダー照準の自動機銃が空洞に配備されていないかぎり——降下を妨げられることはない。
側面と上を見やると、同志たちが降下してくるのが見えた。下にもわずかばかり同志の姿が見える。全部で数百はいるだろう。
ミルスキーは感涙を押さえようとしたが、こらえきれなかった。

27

「パトリシアはどこ?」ごったがえす人々を見わまして、キャロルスンがいった。
「知らないわ」とファーリー。「ほんの二、三分前までここにいたんだけど――捜しにいかなきゃ」
「わたしがいくわ」とキャロルスンはいった。どのみち、外に出るつもりだったのだ。これ以上カフェテリアにいたら、この光景に耐えられるかどうかわからない。
キャロルスンはチューブの光の下に出ると、コンパウンドのまわりを見まわした。とたんに、ぎょっとする光景を目にした。
ダークグレイの南極を背にして、小さな白い点が――何十も、何百も――雪のように降っている。二挺のアップルを抱えた海兵隊員が、駆け足でそばを通りすぎた。「見て!」とキャロルスンは身をひねり、白い点を指さして叫んだ。が、兵士は彼女に見向きもせずに走っていって、兵員を満載したトラックの一台のうしろにとびのった。何台ものトラックが、うなりをあげてつぎつぎにコンパウンドからとびだしていく。
キャロルスンは考えをはっきりさせようと頭をふった。哀しみと怒りで心が泥酔状態にあり、なにかを考えようとしても、受けつけずに吐きだしてしまいそうだった。だが、そんなダメージを許しておける状況ではない。頭をしゃっきりさせなければ。パトリシアを見つけなければ。
コンパウンドの反対側で、高架駅から電車が動きだすのが見えた。キャロルスンは腕時計を見

た。一四〇〇時、第四空洞に電車がとまる予定時刻だ。プラットフォームにはだれもいない。兵隊たちは、トラックしか使わない。自動装置によって、電車はいつもとまったく同じように機能している。
「あれだわ」はっと気がついて、キャロルスンはいった。パトリシアは図書館にもどりたがっていた。でも、どっちの図書館へ？
ファーリーがうしろから駆けよってきて、呆然とした顔でいった。「敵襲よ――パラシュート部隊……ソ連兵……コスモノート……ともかくそれが、第一空洞と第二空洞に降下したそうよ。ここにもやってくるわ」
「それなら、もう見たわ」とキャロルスン。「パトリシアが図書館に向かったの。見つけなければ――」
「どうやって？　電車は出発してしまったわ。もう三十分しないと、つぎのがこない。といって、トラックも使えないし――みんな出はらっているから」
キャロルスンはかつてなかったほど、自分の無力さを、場ちがいさを痛感した。彼女はこぶしを握りしめたまま、南極をにらんで立ちつくした。降下兵のほとんどは、すでにふたりの視界の下にまで降下していた。
パトリシアは下唇をかみながら、前のシートを見つめていた。電車を警備している兵はひとりもいなかった。手落ちでなければ、神の助けだ。
地球をあとにしてから、わたしはずっと夢を見ているのかもしれない。夢のなかに閉じこめら

れてしまうなんていうことがあるんだろうか？
　夢のなかでは、なんでも思いどおりになる。制御したり形づくったり、命令したりする方法さえ知ってしまえば。
　そして、チョークのあたったあの方程式……。
　あの方程式のなかに見たものが正しければ、〈通路〉のすぐそばに、いまこの瞬間、とうさんがいつもの椅子にすわって、ティエンポス・デ・ロサンジェルス紙を読んでいる場所が――曲線が――あるはずだ。わたしは正しいドアを、〈通路〉の適切な位置を捜しあてるだけでいい。そうしたら、そこにはとうさんとかあさんが、ポールとジュリアがいる。
　ラニアーがもどってくるのを待ってはいられなかった。ラニアーは喜んでくれるだろう。リムスカヤはわたしを推薦したことを誇りに思うだろう。わたしは〈通路〉の秘密を解き明かしたのだ。パズルの最後の一片が、夢のなかでしかるべき場所におさまったのだ。
　わたしはみんなを、もういちど故郷に連れ帰ってやれる。
　電車は第三空洞の駅についた。彼女は外に出ると、地上に出る階段をのぼった。
「ヴァスケスさん？」
　ふいに声をかけられ、パトリシアがふりむくと、そこには見たことのない男がいた。男は、地下鉄の入口のコンクリートの縁にすわっていた。髪は黒くて短く、体にぴったりとフィットした、黒い服を着ている。
「ごめんなさい」男の姿をほとんど見もせずに、彼女はいった。心は図書館にとんでいるのだ。
「どなたか知らないけど、ここでぐずぐずしている暇はないの」

「それはこちらも同じです。いっしょにきていただかなくてはなりません」
そのとき、屋根の向こうから、背の高い生物がひょいと立ちあがった。頭が板きれのように細く、両目がとびだしている。その両肩が、銀色の布でおおわれていた。それ以外には、なにも身につけていない。肌はなめらかで、皮革のようにきめこまかく、色も茶色をしていた。
せいていた心が麻痺したようになって、彼女はしげしげとその生き物を見つめた。
「事態はここでも風雲急を告げている。そうでしょう?」と男がいった。パトリシアは、男に鼻はあるが、鼻孔がないことに気がついた。瞳は淡いブルーで、ほとんど生気がなく、耳は大きくてまるい。
「失礼だけど」パトリシアは前より穏やかにいった。「どなただったかしら」
「わたしの名はオルミイ。こっちはパートナーのフラント。彼らには名前がありません。どうか、わたしたちの潜入を許してください。わたしたちは、みなさんを克明に観察させてもらっていたんです」
「あなた、何者?」パトリシアはたずねた。
「わたしは何世紀も前、ここに住んでいたんですよ」とオルミイはいった。「それに、わたしの祖先たちもね。それをいうなら、あなただってわたしの祖先かもしれない。さあ、おねがいです。おしゃべりをしている余裕はない。いかなくてはなりません」
「どこへ?」
「〈通路〉の奥へ」
「本気?」

「わたしの家があるのもそこです。フラントの一族はまたべつのところに住んでいます。彼らは……ひとくちには説明できない理由で、わたしたちのために働いてくれているんです」

フラントがしかつめらしく首を左右にふり、「どうぞ、おびえないでください」といった。大型の鳥類に似た、低くさえずるような声だった。

北極から吹きおろしてくる風が、都市の外縁を吹きぬけ、近くの木々を揺らしていった。その風につづいて、長さ十メートルほどの、円錐形を平たくして、先端を切ったような形の、スマートな乗り物が舞いおりてきた。それは塔のひとつのまわりを優雅に旋回してくると、中央パイロンの先端をついて、ふわりと着地した。

「あなたは驚嘆に値する仕事をなしとげられた」とオルミイはいった。「わたしの住んでいるところには、あなたの研究成果に非常に興味を持つ人々がいます」

「わたしは家に帰ろうとしているの」とパトリシア。そういってから、彼女はそれが、迷子の子供が警官と話しているときのようないいかたであることに気づいた。「あなたは警察官？　この都市を守っているの？」

「いつもとはかぎりませんが」とオルミイ。

「どうか、いっしょにきてください」長くて奇妙な曲がり方をする足で進み出ながら、フラントがいった。

「わたしを誘拐する気？」

オルミイは片手をあげた。懇願してるのか、自分の意志ではどうにもならないというつもりなのか、パトリシアにはわからなかった。「もし自分からいかなかったら、有無をいわせず連れて

いくつもり？」

「有無をいわせず？」オルミイは怪訝そうな顔をしたが、それから、「強制的に、という意味ですか？」と問いかえした。ついで、フラントと顔を見あわせて、「そうです」

「とすると、進んでいったほうがいいということね？」自分のことばなのに、冷静で、悪夢の分析に熟達した見ず知らずのパトリシアが、どこか遠くでしゃべっているようだった。

「おねがいします」とフラントがいった。「ここの事態が好転するまでのあいだのことですから」

「事態が好転することなんかありえないわ、ここではね」とパトリシアは答えた。オルミイが丁寧におじぎをして、彼女の手をとり、飛行艇の平らな機首にある、卵型のハッチまで彼女を連れていった。

飛行艇の内部はせまく、後方でT字型に広がっており、内壁は磨きあげた大理石のような、白い線の渦巻く抽象的な模様でおおわれていた。オルミイはやわらかい隔壁をつかみ、それを引っぱりだして、カウチを作った。「ここに寝ていてください」彼女はそのやわらかいものの上に横になった。カウチの材質はひとりでに彼女の体の線にあい、ぴったりとフィットした。

頭が細く、膝の関節が逆に曲がる茶色のフラントは、白い内壁のさらに奥へのぼっていって、自分のカウチに横たわった。オルミイは通路を隔てて反対側の壁からカウチを引きだし、そこにすわって、首環に触れた。

それから、目の前につきでたものをなでた。とたんに、湾曲した曲面が変化して、黒い線と赤い輪の沈み彫りとなった。彼女のそばでも、壁の一部の白い色がうすれて、透明になり、長い楕

円形の窓を形作った。窓の縁は、すりガラスのような乳白色のままだ。
「さあ、出発しますよ」
第三空洞の都市が、下を勢いよくすべっていった。飛行艇がバンクすると、窓じゅうに、北極の寒々しい灰色が広がった。
「これからいくところでは、心から楽しい思いができるはずです」とオルミイはいった。「いつのまにか、わたしはあなたを賞賛するようになっていました。あなたはたいへんな頭脳をお持ちだ。ヘクサモンも必ず感銘を受けるでしょう」
「どうしてあなたには、鼻がないの？」
超然として、パトリシアがたずねた。
ふたりの背後で、フラントが象の歯ぎしりのような音をたてた。

28

第二空洞に割りあてられたソ連軍部隊は、川と南極を隔てる、幅二百メートルの公園地帯に降下していた。各分隊の集合地点は二カ所。ゼロ・ブリッジと、そこから第一空洞へのトンネルにつづく道路をはさんで、東西に三キロずつの地点だ。橋の反対側の部隊との通信状態は良好だった。
ミルスキーの部隊は、ねじくれた松が密生する森の陰に隠れていた。橋は厳重に警備されてい

るようだし、増援もすぐにやってくるだろう。攻撃するのはいましかない。七隻めの重輪送船、〈ジグリ〉が運んでいた重火器はまだとどいていないし、集結した三十個分隊のうち、ゆうに四分の三は兵力をそがれている。侵入孔での損耗がはなはだしいうえに、無事銃火をくぐりぬけてきた者も、二十人にひとりは途中で狙撃されたり、空気橇での降下に失敗していた。

分隊の構成は、柔軟にできていた。生き残った軍曹たちが、指揮官を失った分隊を吸収し、新しい分隊を作るのだ。いまのミルスキーには二百十名の手勢しかいなかったし、もちろん、これ以上兵が増える望みもなかった。ほかの空洞の降下で、どれだけの兵が生き延びたかは、だれにもわからない。

ミルスキーの大隊に配属された、二十名の特殊部隊(スペツナズ)は、泳いでひそかに川をわたり、無線で連絡をとりつつ、都市内に監視哨を設けることに成功していた。

部隊がこの空洞に降下して、二時間になる。その間、橋のNATO軍はいっこうに攻撃してこようとしない。それがミルスキーには気がかりだった。防御側としては、迅速に敵の出鼻をくじいておくことこそ、最良の戦術ではないか。こちらが自転軸から降下してくるところを狙って、攻撃することもできたはずだ。もしかすると、混乱していて、攻撃に出られるだけの戦力がそろっていないのかもしれない。

ミルスキーの部隊と目標のあいだには、森のほかに、用途不明の幅の広いコンクリートの基礎がいくつかあった。当面、部隊の格好の掩体となりそうだが、へたをすればつぎつぎに釘づけされて、全滅してしまう恐れもある。

〝ゼフ〟将軍——I・ソスニツキー少将——は、第二空洞への降下をやりとげはしたものの、高

度百メートルでパラシュートが破れ、着地のさいに両足を骨折していた。いまは後方の雑木林の陰に寝かせられ、ミルスキーがこれなら割いてもいいと判断して選びだした、四人の兵士に守られている。政治将校のベロジェルスキーも――もちろん――生き残り、あさましいハゲタカのように、将軍のすぐそばに残っていた。

ミルスキーは、モスクワで数週間、ソスニツキーとともに訓練をしたことがあった。少将は尊敬に値する人物だった。年は五十五歳ほどだが、訓練連隊中、三十歳のどの兵士と比べてもひけをとらないほど頑健で、ミルスキーにとくに目にかけてくれた。彼が月であれだけとんとん拍子に昇進したのも、まちがいなく少将の力添えによるものだ。

この〝ゼフ〟をのぞけば、第二空洞に降下した兵で、大佐以上の階級の者はひとりもいなかった。したがって、指揮はミルスキーがとらざるをえない。ミルスキーにとって心強かったのは、ガラベジャンが降下を生き延びたことだった。あれ以上の副官は、とうてい望めまい。

ミルスキーは三個分隊を、橋から一キロ離れたコンクリート構造物に進ませた。構造物の頂上は平らで、広さは三百平方メートルほどだろうか。その上に出てしまえば、身を隠せるところはない。コンクリートの高さは二メートルはあるから、その陰にさえはいっていれば、立って歩けるくらいだ。もっとも、それでも万全とはいいがたかった。心配なのは、空洞の湾曲のため、いくらもの陰に隠れても、敵の位置しだいで、まるみえになる可能性があることだ。敵は空気中で二、三キロの射程を持つ、レーザーや小火器を備えているだろうか？　もし備えているなら、どこに隠れようと、部下たちはたやすく狙撃の的にされてしまう。

ミルスキーは無線機を南極に向け、中継機のシグナルをさがした。シグナルが見つかると、第

一空洞に降下したポゴージン中佐あてにメッセージを送り、兵力はどれだけあるのか、状況はどんな具合かとたずねた。ポゴージンは、〝ネフ〟とともに、〈チャイカ〉でやってきた士官だ。「兵力は四百」と、ポゴージンから応答があった。「ネフは行方不明。スミルジン大佐は重傷を負っています。たぶん、助からないでしょう。ふたつのコンパウンドは占領し、十名の捕虜を得ました。ゼロ・エレベーターは掌握しています」
第四空洞からは、ロゴフ少佐が報告してきた。百名が配置についているが、トンネルの防備が固いため、まだ目標は陥せない。レクリエーション施設の戦利品であるゴムボートを使って、島まで何隊か派遣しようかと思う。〝レフ〟は、〈シェヴィー〉が侵入孔で障害物と衝突したさいに死亡。ユージン大佐も戦死し、大隊長であるニコラーエフ中佐の姿はどこにも見あたらない。
命令系統はズタズタだった。
ミルスキーのなかに、ふたたび憎悪が頭をもたげてきた。喉がひきつり、胃に熱いものが宿った。「散開して目標を攻撃」片手で左右をさし、彼は端に近いほうにいる分隊長に命じた。彼自身は、他の分隊を指揮するため、コンクリートのうしろに残っていなくてはならない。
先鋒隊が、分隊ごとに二十名単位で掩体の両側からとびだし、木々や他のコンクリート構造物めがけて走りだすと、たちまち敵の小火器がタタタタと火を吹いた。レーザー銃がどれだけ使われているかは確認しようがない。レーザーは音がしないし、霧やほこりが濃密にただよっているところでないかぎり、その軌跡が見えないからだ。ミルスキーは無線機のスイッチをいれ、防衛線の向こう側に集結した部隊を指揮する大尉に命じた。
「十字砲火をかける。突撃して牽制をかけろ」

ついで、もう三個分隊に、べつのパターンをとって川岸までつっぱしるように命じた。そこまでいけば、木立ちや円形の基礎構造物に隠れて、銃撃を加えられるからだ。
双眼鏡を使えば、プラスティック・シールドをかぶった防御側兵士ひとりひとりの顔までが、はっきり見わけられた。こちら側には、あんなシールドはない。せいぜい、彼の双眼鏡に、対目つぶしレーザーの防護処置が施されている程度だ。敵がそんな武器を持っているかどうかはわからないが、レーザー・キャノンを改造して目つぶしレーザーの弾幕を発射させるのは簡単なことだ。NATO軍が持っているかもしれない――そして使うかもしれない武器は無数にある。だが、こちらには……。
防御側は橋を通る道路と平行に、何列も土嚢を積みあげていた。すべての部署に兵が配置されているわけではないらしい。敵の増援がくる前に、あの土嚢の列まで部隊を前進させることができたら、橋まではほとんど無抵抗だ。
ミルスキーはふたたびさっと頭をつきだし、双眼鏡で敵の配置をひととおり見わたしてから、すばやくひっこんで、橋の向こうの部隊に指示を与えた。そのとき、ガリガリというすさまじい音があたりに響きわたった。ミルスキーは大きく目を見開き、無意識のうちに死を覚悟した。承知していてしかるべきだったのだ、いざというときに備えて、アメリカ人がなにか進んだ恐ろしい兵器を隠していることを。やつらは意表をつくことが得意な、兵器の悪魔なのだから――
ふたたびガリガリという音が響き、つづいてすさまじく大きな声が轟いた。その声はロシア語を話し、強いドイツなまりはあったが、ことばははっきりとしていた。
「戦う必要はない。くりかえす、戦う必要はない。きみたちはしばらくその位置にとどまってい

ていいが、それ以上前進してはならない。なによりもたいせつなのは、この話に耳をかたむけることだ。地球では、破滅的な核兵器の応酬が行なわれている」
ミルスキーはかぶりをふり、ふたたび無線のスイッチをいれた。こんなことを聞いている暇は——。
「わがほうにはきみたちを殲滅させられるだけの兵器と兵力がある。戦う必要はない。すでにきみたちの同胞もわれわれのもとへ集まっている——ソ連の科学者グループだ。それに、重輸送船の同志たちもわれわれのいったことを裏づけている。きみたちの通信は彼らに中継する。彼らは侵入孔の外で待っているぞ」
ミルスキーは通信ボタンを押し、攻撃を命じた。それから残っている部下たちに、川岸まで前進し、橋の下の迫台で、向こう側の部隊と合流するように命じた。あそこまでは、手ごろな掩体が連なっているようだ——それに、いったん橋の下にはいってしまえば、アメリカ人の土嚢の列にそって銃撃し、増援が配置につくのを防ぐことができる。
「戦いは無意味だ。双方の最高指揮官たちはもう死んでいるだろう。少なくとも、連絡はとれない。おそらくは、何年間も。きみたちの死は無意味なだけだ。現在地にいるのはかまわないが、承諾したのであればそう合図したまえ。さもなければ、攻撃を開始する」
ついで、べつの声がいった。ゆがんではいるが、ミルスキーにはなじみのある声——重輸送船団指揮官、プレトネフの声だった。捕虜になったのでなければ、彼はまだ侵入孔の外にいるはずだ。いや、捕虜になったはずはない。侵入孔突入のさい死ぬことはあっても、生きてつかまることはありえない。

「同志諸君。わが祖国をはじめとする各国は、地球で戦争を開始した。ソビエト連邦でも合衆国でも、すさまじい破壊がつづけられている。われわれの計画はもはや無意味と……」

ねごとはよせ。ミルスキーは部隊を両翼から突撃させた。ともかく、この目標を陥し、つぎの目標を陥すことだ。話しあいに応じるのはそれからでいい――。

「――ルスキー大佐」無線が報告した。「敵増援部隊が橋をわたってきます」

銃火がふたたびとびかうなか、ミルスキーは生まれてはじめて、死にゆく者たちの悲鳴を耳にした。

29

ハイネマンは、ロシア語、英語、ドイツ語の会話を聞きながら、V／STOLの操縦席で身をよじった。各連絡孔の中継機が、空洞から空洞へ、そしてこの〈通路〉の奥へと、自動的に無線信号を送ってくる。なぜ中継機を切らない？　いや、切ったのだろう――ここにとどくのは、ロシア人の中継機を経由した信号かもしれない。

ハイネマンはチューブライダーを、どんな危険もおよぼさないところまで持ってきていた。ここは〈通路〉の奥、一千キロの地点だ。特異線の上で静止しているのは、手もちぶさたでしかたがなかった。そこで、通信プロセッサーをプログラムし、各周波数を広域にキャッチして、あらゆるメッセージをとらえ、同時に記録したうえで、個別に再生できるようにしておいたのだ。リ

ングサイド席にいるも同然だった。連絡孔を通して、映像さえはいっていることもあった。
地球が業火に呑みこまれるところも、目のあたりにした。その直後に、映像はとぎれた。
やがて、偶然に、ひょいと肩ごしにふりかえったとき——ふと、移動する白い光が目にはいった。それはあっという間に頭上をかすめ、機の下に消えた。なんであるかはわからないが、それはプラズマチューブのすぐ内側を、螺旋状に進んでいるらしい。輝くプラズマチューブの筒を背景に、その航跡が影となって残っている。〝ストーン〟のなかには、ほかに飛行機はないはずだ——少なくとも、聞きおよんだかぎり、一機もないはずだ。といって、ロシア人にここまで追ってくるほど高度な機械を作る技術があるとは思えない。
では、なんだ?
ブージャムか。この混乱のただなかで、おれははじめてブージャムを見たのか。ものごというものは、つねにそういうものかもしれん。彼はV/STOLの追跡システムのスイッチをいれた。
つかのま、スクリーンにはっきりと光点が映り、コンピューター補整によって、その飛行体の輪郭の拡大図までもとらえることができた。ほっそりとして、先のまるくなった鏃(やじり)のような形だ。が、その情報を記録しはじめてから五秒後、追跡システムがいきなりピッと鳴って、目標を見失った。
飛行艇のなかは、ひどく寒かった。パトリシアは側面の透明な窓から外を眺め、変化のない黄褐色と薄いグレイの景色が下を流れさっていくのを見まもった。彼女のなかでは、ふたつの人格

が戦っていた。ひとつは、いかなる行動も外的反応も禁じようとする人格で、これまでのところ、優勢に立っている。もうひとつは、ごくふつうの人格で、このなりゆきに魅了され、少々おもしろがってさえいた。もし口をきけば、この二番めの、超然としたパトリシアが、いま起こっていることを楽しみ、軽んじようとしていることがわかっただろう。だが、すでに第一の人格が心を掌握していたので、彼女はひとこともしゃべろうとしなかった。頭を動かすことさえしなかった。ただ、回転しつつ後方に流れさっていく、〈通路〉の壁面を見つめるばかりだった。
「おなかはへっていませんか？　のどがかわいていませんか？」オルミイがたずねた。彼女は答えない。「疲れていませんか？　眠くはないですか？」
　やはり、返事はない。
「しばらく時間がかかります。数日、といったところです。アクシス・シティは〈道〉――つまり〈通路〉にそって、ここから百万キロメートルにありますからね。なにかご要望があれば、どうぞいってください……」
　オルミイはフラントをふりかえったが、フラントはただ片方の目をぎょろりと外に向けただけだった。なにもいうことはないというしぐさだ。
　パトリシアは、すべてがばらばらになるのを感じていた。しっかりつなぎとめられた望みと希望も、この必然的な崩壊をくいとめることはできなかった。パトリシアの肩がふるえはじめた。彼女はオルミイを見やり、すぐさま顔をそむけた。目の前がぼうっとにじんできた。かぶりをふると、あふれていた涙がこぼれ、まわりにちらばった。彼女はゆっくりと両手をあげ、顔を覆った。指先に涙がふれ、指と手のひらに広がっていった。

なにもかもばらばらになってしまう――つなぎとめていたものがすべて――
胸が波打った。「おねがいよ」と彼女はつぶやいた。
みんな、死んでしまった。ほんとうに、いなくなってしまった。みんなを助けることができなかった。
「おねがい」
「ヴァスケスさん――」オルミイは彼女に手を伸ばしかけたが、彼女が身を引いたので、その手を引っこめた。
「ああ、マリアさま」パトリシアは身悶えし、嗚咽を漏らした。反動で、足ががくがくふるえた。ひと声漏れるたびに、胸のうちでなにかが引き裂かれ、閉じたまぶたの裏に、赤い亀裂が走った。彼女は両手で肩を抱きしめ、寝台の上で前後に体をゆすり、歯をかみしめ、唇をかんで、うしろにのけぞった。
意志に反して、背中が前傾し、彼女は両膝をかかえてまるくなった。――こうしていれば、楽だというの？
苦痛だわ。
これは喪失のため。これは意識的な行為。けっして自分をあざむいているわけじゃない。
オルミイは彼女をなだめようとはしなかった。彼にとっては――ありがたいことに――十三世紀前に滅んだ世界を想って、泣いている女性を見つめた。古代の女性、古代の悲しみ。
パトリシア・ルイーサ・ヴァスケスは、何十億もの死者と、終焉を迎えた、彼には未知の生き方のために、嘆き悲しんでいるのだ。

「彼女はとても傷ついている」寝台のそばにやってきて、オルミイの肩に顔を近づけながら、フラントがいった。「助けてあげたいが、助けられない」
「だれにも助けることはできないさ」とオルミイ。千三百年を経た彼らの時代でさえ、当時の人間の苦しみが〈大破滅〉は人々の心に傷跡を残しているのだ。パトリシアを見ているだけで、当時の人間の苦しみがいかばかりのものか、痛いほどわかった。ネクサスは〈大破滅〉のなかで醸成され、その結果としてネイダー教徒が覇権を握った……パトリシアの苦しみの残響のなかから、どれだけの特権が、どれだけの強情な盲目性が生まれてきたことか。
「彼女を助けてやりたいのに助けてやれない。とてもつらい」とフラントはいった。

30

ゲアハルトは、急造の戦闘指揮所から、巻いた地図を持ちだしてきた。
「敵は第一空洞南端と――これには、科学者チームのコンパウンドもふくまれる――南極側連絡孔に通じるエレベーターを制圧した。第二空洞ではまだ戦闘がつづいているが、どうやら戦況は膠着したようだ――警報発令と同時に、ベレンソンが第四空洞の部隊半数を急派したからな。ソ連軍は、猛火をかいくぐって、橋をわたったらしい。第三空洞では、まだなんの行動も起こしていない。第四空洞では兵力が分散しているから、効果的な作戦能力はないだろう」ゲアハルトは片手でひとなでして地図を巻きほどき、「こちらには敵を駆逐できるだけの戦力はないが、むこ

うもいま以上に制圧地域を広げる余力はない。それから、いまのところ、講和の申し入れにはなんの反応もなしだ」
「収容エリアには、また要員が詰めているな?」とラニアーはきいた。
「詰めている。それに、何カ月だろうが籠城していられる——最後に着いた食料と補給品はまだあそこに置きっぱなしだからな。第四空洞は自給自足でいけるし、ベレンソンの部隊は完全にあそこを押さえているから、問題なのは第一と第二空洞だ。あそこの部隊には、二週間分の補給物資しかない。自転軸から補給品を投下しないかぎり——その方法はいま検討しているところだ——第一、第二空洞は陥落する」
「外の重輸送船はどうする?」
「まだなかには入れていない。一隻、重火器を積んでいそうなやつがいるんだ。自転軸から、第二空洞に投下するつもりだったんだろう。連中にバリケードを破られてはこまる。ずいぶん意気消沈しているようだが、あと二、三日外で頭を冷やしてもらっていても、問題はあるまい」
「降伏は申し出てきたか?」
ゲアハルトはかぶりをふった。「いいや。プレトネフは仲間に停戦の呼びかけをしたが、まだ船をあけわたそうとはしない。ただ、話しあいをして、戦いをやめる努力はしているようだ。重輸送船のクルーたちは、同志と合流したがっている。もう地球に帰れないことはわかっているし、どうやら、侵入孔の殺戮で、突撃部隊の戦力が大きく削がれていることも知っているらしい」
「まったく、なんでこんなめちゃくちゃなまねを……」
「結局、失敗におわったがな……ここだけでなく」ゲアハルトは陰鬱にいった。「しかし、おか

げでわれわれはおもしろくない立場に追いこまれた。われわれから見るかぎり、〈ストーン〉は栓をされた瓶も同然だ。外へ出る気もないが、たとえあったとしても、どこにも出ることはできん。とくに心配なのは、敵のスペッナズだよ。いまごろやつらは、暗殺者となり、工兵となって、第二空洞じゅうにちらばっているだろう。二、三日もすれば、ここへやってくる道を見つけだしかねん。こちらには、やつらを第三ないし第四空洞から一掃するだけの戦力はない。やつらは始末におえない相手だぞ、ギャリー。忠誠心も、練度も高い。待てば待つほど、われわれの受けるダメージは大きくなっていく」

「第二空洞の戦闘は膠着しているといったな？」地図に不安そうに目を走らせながら、ラニアーがきいた。

「どこでもそうだ。だれも動こうとしていない。変わっていくのは、死傷者の数だけだ」

「向こうはそれを知っているんだろうか？　つまり、事態をちゃんと把握しているんだろうか？」

「必要な訓練を積んで、わざわざここまでやってきた連中だ。やつらの指揮官がばかでないことはたしかだろうさ」

「不満分子はどうだ？」

「たぶんそんな者はいないだろう、こっちと同じように」

「向こうが道理に耳を貸すまで、どれくらいかかる？」

「わからん。いまこうしているあいだにも、道理に気づきはじめているかもしれん。ただ、いっこうにそんなようすは見せない。こちらが頭をつきだせば向こうが撃つ、向こうが頭をつきだせ

ばこちらが撃つ、そのくりかえしだ」
上官たちの前に立った軍曹は、困惑した表情を浮かべていた。森の下生えのあいだを這い進んできたために、顔がかき傷だらけになっている。軍曹は敬礼すると、ミルスキーに一礼していった。
「大佐どの、敵は連絡孔の中継機を発見しました。もう、ほかの空洞と通信することはできません」
「それではきくが」とミルスキー。「それが銃をさげ、狼を羊の群れに迎えいれようとするサインだと思うか?」ガラベジャンが双眼鏡をあげ、彼らと橋のあいだにある――橋はここから一キロ先だ――森や原野を見わたした。ついで、銃弾とレーザーであばただらけになってはいるが、それでも十二分に機能している橋を見つめてから、双眼鏡をおろし、「パーヴェル」と声をかけた。「あの橋を破壊するべきだと思いますが、どうです?」
ミルスキーは感心しない顔で副官を見やり、「それなら、どこを通って川をわたるというんだ? となりの橋までの五十キロを行軍していくとでもいうのか? それとも、泳いでわたるのか?」
「橋を壊せば、この空洞内の増援部隊は合流できません――」
「だが、第一空洞からの増援はこられる。第一空洞にどれだけ敵兵力が残っているかは未知数だ」
「やつらは豚のように身動きも――」

「橋は残す」と、ミルスキーはきっぱりいった。「向こう見ずな行動に出てこれ以上将兵を失う余裕はない。それに、川を泳いで狙撃される危険も冒せん！」
「それも一案ではありますがね」とガラベジャン。
「作戦がないわけではないぞ、ヴィクトル。ないのはレーザー・キャノンと火砲だ。おそらく、全火砲と補給物資を乗せた〈ジグリ〉は、侵入孔を突破しきれなかったのだろう。そして、連絡孔の中継機を見つけだすほど敵の態勢が整ったいま、もはや突破は不可能だ。また、われわれのスパイはつかまり、ソビエトの科学者チームも、自発的な意志によるものか虜囚となっているのかはわからんが、あてにできないと考えていい。それに、われわれがここで全滅したなら、重輸送船のパイロットやクルーたちは、何週間も外にとどまってはいまい」
「なにをいってるんです、パーヴェル？　弱気は禁物ですよ」ガラベジャンがほほえんだ。下顎のつきでたその顔を見ていると、ミルスキーはいつも、チョウザメを思いだす。
「必要な支援は得られないということだ」
「あの話、信じますか？　戦争が起こって――地球が滅びてしまったというあれを？」
ミルスキーはかぶりをふって、「わが軍の攻撃によって、敵の軌道作戦能力はもぎとられたはずだ。それはさぞかし壮観な眺めだろうから――」
「パーヴェル、いくらなんでも、連中が軌道上の交戦と全面戦争を見あやまるわけはありませんよ」
ミルスキーは口を引きむすび、頑固にかぶりをふった。「われわれは、戦い、目標を攻略するためにここへ派遣されてきたのだ。なにか理由があるにちがいない」

「政治将校にいわせればこうですよ。〝われわれは、この地に社会主義を広め、わが祖国とわが同盟諸国の未来を保障するためにやってきたのだ〟ってね」

「よせっ」ミルスキーはいってから、過激なほどの自分の反応に驚いた。彼は政治将校が大きらいだった。いままで仕えた政治将校は、どいつもこいつもいやなやつばかりだった。そして、いつものように、この部隊の政治将校——ベロジェルスキー少佐も、後方に隠れていながら、ときどきミルスキーの命令とくいちがう命令を出しては、部隊を混乱させている。「よかろう、地球がまる焦げになってしまったとしよう。だからといって、どうする？　戦闘をやめて——なにができる？　灰となった祖国にもどるか？　こんどばかりは、校庭で英雄とお山の大将のまねをしているだけではすまん。北半球じゅうに、炎につつまれた骸骨とぶっちがいの骨のマークがまきちらされることになるんだぞ！」

「しかし、アメリカはそのとおりのことが起こったといっているじゃありませんか。プレトネフもそれを裏づけています。敵の軌道防衛システムを掃討し、一方的に打撃を加え、泣きわめかせ、慈悲をこわせる——そのもくろみがみごとにはずれたのはまちがいありません」

「やつらは腐敗している」とミルスキー。「脆弱で、臆病者だ」

「パーヴェル、アメリカの真実の声をもてあそぶのは感心しませんね。部隊のなかでも、だれよりあなたには、事実と彼らのほのめかすものを見きわめてもらわなければ。敵を過小評価してはいけません。脆弱で頽廃した連中が、ほとんどあらゆる分野でこちらの先をいったりしますか？」

「いいかげんに黙れ、しゃべることもできん」両手で頭をかかえて、ミルスキーはいった。それ

から、上目づかいに軍曹を見やって、「もういってもいいぞ」と、弱々しげにいった。「いい知らせでなければ、なにがあっても知らせるな」
「わかりました」と軍曹はいって、立ち去った。
「残念ですね、尊い犠牲として先鋒にあたらせる、犯罪者の大隊がいないのは」とガラベジャンがいった。「われわれはそうやって、過去の戦いを勝ちぬいてきたんですから」
「ベロジェルスキーの前でそんなことをいうんじゃないぞ。ただでさえあいつにはこまらされているんだ——それに、おまえにもだ。ともかく、橋は壊さずにおく。これは最終決定だ。それから、一時間後に、攻撃を開始する」
ミルスキーがこういう口調でいったときに、反論する者はいない。ガラベジャンはちょっぴり蒼ざめたが、固いガムのスティックをとりだすと、口にいれ、糖分を補給した。
ミルスキーの無線機が穏やかに鳴った。彼はレシーバーをとりあげ、ミルスキーだ、と応じた。
「同志大隊長、こちらベロジェルスキー。〝ゼフ〟があなたと話したがっている……個人的にだ」
ミルスキーは毒づくと、すぐにいくと応えた。「きっとまた、やっかいごとだぞ、ガラベジャン」
ゲアハルトの急造戦闘指揮所に偵察の報告がとどいたのは、膠着状態にはいってから二十六時間後のことだった。偵察隊を指揮した、細面で目の奥まった中尉は、アパラチア山脈出身者特有ののろくさいしゃべりかたで、偵察結果を報告した。

「われわれは遠くから――つまり、連絡孔や谷のカーブのずっと上の位置から、敵の集結地を全部覗き、数を数えました。まだ戦闘可能な兵員は約六百ほどです。そのほかに、はっきり把握できなかった兵力が、五十から百はいるでしょうか。敵上級将校の損害は大きく――将軍一名、および数名の大佐が負傷するか死亡するかしています。したがって、残っているのは第二空洞の大佐一名、第一空洞の大佐一名、中佐二名だけです。ただ、将軍はまだいるかもしれません。無線で、〝ゼフ〟、〝ネフ〟、〝レフ〟といっているところを傍受しましたので。これは三人の将軍のことを指していると考える者もおります」

「どれがだれのことかわかるか？」とラニアーがきいた。

「わかりません。ネームプレートをつけているわけではありませんので。しかし、ソ連の科学者のなかには、何人か識別できる者がいるかもしれないと思われます。敵突撃隊はきわめて練度が高く、コスモノート経験者も多数いますから、宇宙関係者の科学者のなかには、顔見知りもいるはずです」

「将校の写真は撮ってきたか？」ゲアハルトがいった。

「撮ってきました。かなり鮮明なものがほとんどです。なかには、履歴書の写真に使えるくらいのものもあります」

「そいつをソ連科学者に見せろ。識別できる者がいるかどうか、確認するんだ。ギャリー、きみには敵との交渉にあたってもらいたい。ソ連科学者チームのプリチーキンに相談を持ちかけるんだ――あれは率直な人間だからな。それから、重輸送船の一隻もドックにつけさせる。プレトネフの乗ったやつだ。プレトネフかプリチーキンが無線で突撃隊の指揮官と連絡をつけられれば、

そして話しあいの場を設けることができれば、突撃隊も道理に耳をかたむけようとするだろう」

「ぼくが交渉にあたるのはいいが、まずロシア語を学ばないとだめだ」とラニアー。

「だれか役にたつ者がいるだろう。リムスカヤでもいいし、ルドルフだかイェーガーだかという名の、あのドイツ軍中尉でもいい」

「リムスカヤはたしかにロシア語を話せるが、外交的ニュアンスを表現できるほどじゃない。イェーガーのほうが適任だろう。しかし、通訳ぬきで、じかにロシア人と交渉するのでないかぎり、この役はおろさせてもらう。もうすぐ九〇度線に電車がくるから、ぼくはそれに乗って第三空洞にいく。そのあいだに、そっちはプレトネフを収容する手配をしてくれ」

「われわれには何週間も時間があるわけじゃないんだぞ、ギャリー」

ラニアーは首をふって、「そんなにはかからないさ、せいぜい、数時間でいい」といった。それから深くため息をつき、前に身を乗りだして、「もうなにも秘密にしておく必要はないと思うが、機密の公開について、なにか支障があると思うか？」

ゲアハルトはちょっと考えてから、「内部的にか？　なんともいえん」と答えた。

「われわれがなんのためにここにいるのか、ソ連がなんのために攻撃してきたか、知りたくはないか？」

「いうまでもない。わしが気にしているのは、機密を公開する権限がだれにあるか、ということだ」

「カークナーは地球からこういわれたぞ。きみたちはもう、地球の軍事戦略の一環としてはあつかわれない、と。われわれは独立の組織なんだ。とすれば、政治的にも同じことがいえないか

？」
「われわれがみずからの主人だということか」
「そうだ」とラニアー。
「時が時だ、そういうややこしい問題は考える気になれん」
「少なくとも、ひとつの行動に関してはぼくが責任を持つ。図書館の封鎖は解除する。図書館の情報は、だれでも自由に見られるものとする」
「ロシア人でもか？」
「ロシア人でもだ――向こうが平和交渉に応じるならな」とラニアー。「ぼくはロシア語を学びにいく。きみは交渉準備を進めてくれ。それから、ここに残っている物はすべて共有することを申しいれる」
「敵船をドックにつけるとなると、カークナーがいい顔をせんぞ。それに、譲歩することには絶対に承知すまい」
「内部守備の責任者はだれだ？」ラニアーは鋭くいった。「それに、ほかに選択の余地があるのか？」

パトリシアが目をさましたとき、キャビンは薄闇に閉ざされていた。彼女は寝返りをうって窓のほうを向いた。二十キロ以上下方に、黒々として傷だらけの、〈通路〉の表面が見えた。巨大な裂け目がまだらの大地に縦横に走り、その角がにぶく光っている。
また寝返りをうって、キャビンの内側を向いた。謎の男は、またたくブルーとグリーンの光の

網にくるまって横になっていた。網を形作る光のあいだに、スパークがほとばしっている。網の内側では、彼の体は透明な緑の霧に包まれていた。
艇内には、上下がわかる程度に重さの感覚があった。体にぴったりあった寝台からおりて、彼女は手を伸ばし、光の網が本物かどうか、さわってみようとした。が、その指が触れる前に、声がとめた。
「どうぞ、邪魔をしないでください」キャビンの前のほうに、オルミイが立っていた。パトリシアは、寝台の上のオルミイと、いま自分に話しかけているオルミイを交互に見やった。「わたしは部分人格——分岐影体(ゴースト)です。オルミイは休息をとり、タルシット瞑想にはいっています。オルミイになにかご用があるのでしたら、わたしにいってください」
「あなたは、なに?」パトリシアはたずねた。
「分岐影体です。オルミイが休んでいるあいだ、肉体的活動をともなわない義務については、すべてわたしが代行します。わたしには実体はありません。投影イメージです」
「まあ」パトリシアはイメージに向かって眉をひそめ、「彼……なにをしてるの? 彼の体に、なにが起こってるの?」
「タルシット瞑想とは、タルシット・データの搬送網にとりまかれるプロセスのことです。オルミイの体からは不純物がとりのぞかれ、心からは、明晰な思考の妨げとなる障害物が除去されます。タルシット・データは情報を与え、精神を再編成し、その働きを評価するのです。一種の夢のようなものです」
「あなたは、ただの記録?」

「ちがいます。わたしはオルミイの休息を阻害しない方法で、オルミイの思考と連動していま
す」
「どこにいるの、あの――」といいかけて、彼女はいいよどんだ。あやうく、〝ブージャム〟と
いってしまうところだったのだ。彼女はキャビンの後方を見やり、頭が細く、関節が逆についた
茶色の生物が、自分の寝台の上にまるまっているのに気がついた。生物はゆっくりとまばたきを
しながら、落ちつきはらってこっちを見つめていた。
「こんにちは」と、それは音楽的な声でいった。
パトリシアはごくりと唾をのみ、うなずいた。「もういちど、あなたの名前を教えてくれる
？」
「わたしに名前はありません。わたしはフラントです」
「操縦しているのは、だれ？」
「いまは自動操縦になっています。あなたがたにも、そういうことのできる飛行機があるはずで
しょう」諭すような口調で、フラントがいう。
「どうして〈通路〉のようすが変わってしまったの？」
「え、ええ。もちろんあるわ」とフラントにいってから、パトリシアはイメージに向きなおり、
「何世紀も前、ここで戦争があったのです。そのさい、〈道〉の――〈通路〉のことです――表
面物質は、ひどく傷つけられました。ところどころ、〈道〉そのものが見えるほどです」
「戦争？」パトリシアは、まだらの地表を見おろした。
「このあたりは、ジャルトの制圧下にあったところです。彼らはここから何十万キロも離れたゲ

ートから旅してきました。それ以来、この一帯のゲートは封鎖されたり、厳重に規制されたりしています。アクシス・シティが通過し、〈道〉のコントロールをとりもどそうとしたとき、ジャルトが抵抗したのです。その結果、彼らは駆逐され、〈道〉のこの一帯、〈冠毛〉にいたるまでの全域が、封鎖され、放棄されることになったのです」
「……」彼女はふたたび横になり、オルミイのまわりにきらめく光を見つめた。彼女は疲れきっていた。目がしょぼしょぼするし、のどもざらついている。胸が痛かったし、手足の筋肉はこわばって痛かった。「わたし、泣いていたのね」と彼女はいった。
「この十二時間、あなたはずっと寝ていました」とフラントがいった。「眠っているあいだは、幸せそうでした。だから、起こさないようにしていました」
「ありがとう」とパトリシア。「そのアクシス・シティとかいうところ——そこが、これからいこうとしているところなの？」
「そうです」とフラント。
「そこにいったら、わたしはどうなるの？」
「歓待されますよ」とオルミイのイメージが答えた。「なんといっても、あなたはわたしたちの過去からこられたのだし、とても聡明な方だから」
「わたしはいやだわ……大騒ぎされるのは」パトリシアは静かにいった。「それに、もどって友だちに手を貸したい。みんなはわたしを必要としているもの」
「あそこでは、あなたは必ずしも不可欠の存在ではありません。それに、あそこにいては危ないとわたしたちは判断しました」

「それでも、もどりたいの。いいこと、あなたたちはわたしをむりやり連れてきたのよ」
「それは後悔しています。これからは、失礼なあつかいをすることはありません」
パトリシアは、分岐体であれなんであれ、幽霊(ゴースト)といいあいをしてもしかたがないと思った。そして、両腕で肩をくるみこみ、はるか下方の、えぐられ、どす黒くなった地形を見つめた。過去のできごとについて、この飛行艇に乗る前のできごとについて、なにかを感じるのは難しかった。わたしはほんとうに帰りたいんだろうか？　わたしにとって、どこかにそれほど大事なものがあるんだろうか？
あるわ。ラニアーよ。彼はわたしの助けをあてにしている。わたしは彼のチームの一員だもの。でも、ポールは、そして、とうさん、かあさん、ねえさんは——みんな、もういない。彼女はポケットにいれておいた手紙を探り、それから、万能メーター、スレート、プロセッサーのはいった鞄に手を伸ばした。いじったあとは、どこにもなかった。
ソスニツキーは死にかけていた。大隊所属の五名の衛生兵のうち、第二空洞に降下した者は二名いたが、どちらも将軍にその事実を隠そうとはしていなかった。ミルスキーが近づいていくと、顔の半分に銃創を負った、小柄で痩せぎすの、頭のはげかけたほうの衛生兵が、彼を木々の陰に引っぱっていった。
「将軍は内臓破裂を起こしています。いちばん軽いので、脾臓破裂という状態です。必要な血液も血漿もここにはないし、手術を行なえるだけの態勢も整っていません。将軍は、おそらく一時間、よくても二時間のうちには息を引きとられるでしょう……お強い方ですが、スーパーマンで

はありませんから」

ソスニツキーは、バックパックの布地と木の枝で作った寝台の上に、横向きに横たわり、二、三秒おきに、たてつづけに二度ずつ、まばたきをしていた。顔面は蒼白で、脂汗をじっとりにじませている。ミルスキーがそばにひざまずくと、ソスニツキーはその手を握った。この状態でなお、その手には驚くほどの力がこもっていた。

「自分の骨が榴散弾になってしまったよ、同志大隊長」と将軍はいった。「〝レフ〟も〝ネフ〟も、降下に失敗したことは知っている」顔をしかめたのか、にやりと笑ったのか、どちらともつかない表情を作ってから、彼は咳こんだ。「これからきみに、とんでもない名誉を与えようと思う、ミルスキー大佐。われわれは師団長を必要としている。きみのほかに大佐で生き残っているのは、ヴェルゴルスキーだけだが、わが師団の指揮官を、政治将校などにまかせたくはない。だから同志よ、いまきみに、とてつもなく大きな戦場昇進をプレゼントしよう。上層部には、噴飯ものだろうがな。しかし、あの放送によれば、いまの地球には気にするものなどひとりもおるまいよ。証人は――ここにいるベロジェルスキーだ。ほかの大隊長にも無線でこの昇進を伝えておく。まだ命のあるうちに。だから、急がねばならん。これよりきみは、中将だ。わたしの記章を、きみに譲ろう」彼は右手で、記章をミルスキーにわたした。その顔が、苦痛にゆがんだ。「もしや、トラブルが起こるかもしれん……ほかの大隊長たちと。だが、これはわたしの意志だ。わたしはきみを信用している、ミルスキー将軍。わが輸送船団の指揮官のいうことが事実なら――たしかに、ありえないことではない――きみは和平交渉をしなければならん。われわれは最後のロシア人かもしれんのだ……ほかの者はみな、燃えてしまう。炎のなかで」ふたたび、咳こんだ。

「交渉がはじまるまで、戦闘態勢は固めておきたまえ。いや、わたしにはもう、きみに指示する権限はなかったな。いまはきみが将軍だ。ベロジェルスキーに、無線機を持ってくるようにいってくれんか」

ベロジェルスキーは、むすっとしてそばを通ったが、その顔には、べつの表情も読みとれた。おもねっているような表情だ。おれをどうあつかっていいのか、まだ決めかねているんだな、とミルスキーは思った。将軍は生き残りの将官たちに向けて、放送を行なった。ベロジェルスキーがやんわりと、連絡孔の中継機は機能していませんと報告したが、ソスニツキーは、ともかくもメッセージを送れといいはった。

「そうすればアメリカ人にも、われわれに指揮官がいることがわかるだろうからな」というのが、そのいいぶんだった。数分後、ソスニツキーは昏睡状態に陥った。

ミルスキーはなかなか、事態の変化を理解できなかった。ともかく、これまでどおりに行動したほうがいいと思い、コンクリートの土台のところにもどって、ガラベジャンに相談した。

自分で攻撃時間のリミットを切ったにもかかわらず、ミルスキーは予定の一時間が過ぎても、なんの行動も命じなかった。攻撃が自殺行為であることはわかっている。さっきまでは、重輸送船がいきなり突入してきて、火砲を投下してくれないかという淡い期待をいだいていたのだが、その期待も、いまや完全についえた。それなくしては、どんな作戦も継続しえない。

もちろん、ソスニツキー将軍は正しかった。

そもそものはじめから、これはきわめて危険な賭けだったのだ。あの放送がほんとうなら（船団指揮官のプレトニフが、自分の命惜しさに、仲間に嘘をつくはずはない）――あれがすべてほ

んとうなら、戦ったところで、どちらも勝利は得られない。

糧食のチューブを持って、ガラベジャンが近づいてきた。ミルスキーは手をひとふりして、部下を追いやろうとした。「食わなくちゃはじまりませんよ――」とガラベジャン。「――同志将軍」

ミルスキーは顔をしかめて、彼を見あげた。「なんのために？　食べたところで、なんの役にたつ？　やつらは、われわれが飢え死にするか、やけくそで突撃するまで、ここを一歩も動かすまい。われわれは釘づけにされているんだぞ」

ガラベジャンは肩をすくめた。「それならいいんですがね」

ミルスキーはかつての副官から顔をそむけ、だしぬけに片手をつきだし、ものをつかむようなしぐさをした。「そいつを置いていけ、このまぬけ、おまえなんかに、そいつを食わせるわけにはいかん」

ガラベジャンはにやりと笑い、チューブを手わたした。

「ひどい味だ」フィッシュペーストを口にしぼりこみながら、ミルスキーはいった。「まるでクソだ」

「うちの街では、クソをソーセージと呼んでとりあったもんです」とガラベジャン。「で、なにをそんなに落ちこんでるんです？」

「おれはソスニツキーが好きだった」とミルスキーはいった。「それなのに、彼は死にかけていて、しかもおれを将軍に任命したんだぞ」

31

ラニアーは緊張の面持ちで、広々として清潔な感じの、明るい図書館のなかに立っていた。最後にこの輝く涙滴型機械の前にすわってから、もう何カ月にもなる。この状況にあっても、彼はこれを使いたくなかった。肉体的に不快な経験ではない。だが、いま抱えているトラブルのすべては、みんなこのシートのひとつから——いまは動いていない装置で飾りたてられているやつから——出てきた気がするのだ。

アップルとウージーで武装した海兵隊員が三人、うしろで不安そうに立っていた。ソ連のスペツナズがここまで潜入している可能性があるので、絶対に護衛を連れていけとゲアハルトがいいはったのだ。

ラニアーはシートのあいだを歩いていった。パトリシアと同じように、科学者たちが機械をとりつけたシートは避けた。ほどなく、立ちどまり、室内を見まわしてから、椅子にすわり、コントロール・ボックスをあけた。指を押しあてると、目の前にガイドのパターンが浮かびあがった。図書館は今度も、二十一世紀の英語で語りかけてきた。きっと、おれを憶えているのだろう。もしかすると、われわれが何者であり、なんのためにここにいるかということさえ知っているのかもしれない。

「二十一世紀のロシア語を憶えなくてはならない」とラニアーは切りだした。「二十一世紀初頭のロシア語だ。〈大破滅〉前の。憶えるまで、どのくらいかかる?」

「憶えるのは、書きことばですか、話しことばですか、日常会話ですか、その全部ですか?」図書館のナレーターがきいた。
「とりあえず、話しことばと日常会話が必要だ。あまり時間がかからないようなら、ほかのものも憶えたい」
「ロシア語の日常会話と専門用語だけでしたら、二時間で憶えられます。読み書きと通訳ができるようになるには、もう一時間かかります」
「それなら、全部憶えさせてくれ」
「承知しました。お気を楽にしてください。少々緊張しておいでです。まず、キリル文字のアルファベットからはじめます……」
なんだか、どんどんリラックスしてきたぞ——多少の驚きとともに、彼はそれに気がついた。レッスンが進むにつれて、彼は深い精神的ため息をつきながら、知識の泉に没入していった。——おれはこいつが楽しいらしい。
ラニアーには言語の才があるといわれたことがいちども ない。にもかかわらず、彼は三時間のうちに、生粋のロシア人と同じように、みごとなロシア語を話せるようになっていた。

筋骨たくましく、頭の薄くなりかけた、赤ら顔の輸送船団指揮官、セルゲイ・アレクセイヴィッチ・プレトネフ中佐は、四名のクルーをしたがえて、傷だらけになった重輸送船の船尾ハッチから出てくると、メインドックの気閘に案内された。数時間前に結ばれた協定によって、残りの重輸送船は、侵入孔の外で待機している。

ロシア人たちは宇宙服をぬぐと、アップルをかまえた七人の海兵隊員に付き添われて、足場を横切り、通信センターにはいった。イェーガー中尉を通訳にたてて、カークナーがプレトネフを迎え入れ、事態を説明した。
「〈ストーン〉に突入した貴国部隊の総指揮官は、第二空洞にいる。ソス――ソス――」
「ソスニツキーです」イェーガーが通訳しながら、教えた。
「ソスニツキー将軍のメッセージによれば、将軍はミルスキーという名の将校を中将に昇進させたらしい。となると、その人物と交渉するためには、第一空洞を横断しなければならなくなる。われわれは、きみの同志たちに封じこめをくらっている。代案として、自転軸にそって飛んでいくという方法もあるが、それはおたがい、ぞっとするまい」
プレトネフはイェーガー中尉のことばに耳をかたむけ、それから熱心にうなずいて、「みなにはもういちど話をしよう」といった。「こんどはじかにな」
「しかし、きみは突撃隊と命令系統がちがう。それに、兵たちはきみのことを裏切者と思っているかもしれない」
「やってみるまでさ」とプレトネフ。「わたしひとり、あるいは二、三人だけ部下を連れておりていき、突撃隊の説得に……」
「きみの説得に耳を貸す気配はなさそうだぞ。きみの放送は全突撃隊に流したが、それでも彼らは戦闘を続行したからな」
「だからどうだというんだ?」プレトネフが語気を荒らげた。ただでさえ赤い顔が、いっそう赤くなった。「もういちどやるしかなかろうが」

「たしかに、もういちどやるしかない」カークナーも認めた。「まずはじめに、諸君を第一空洞までお送りする。そこですべてを打ち明けてくれたまえ。ここでのわれわれの状況、今後の行動計画、地球で起こったことなどを」
「わかっている、わたしもばかではない。ありのままを伝えるつもりだ」中佐はカークナーをぐっとにらみつけてから、ふたたび手をさしだして、いった。「さんざんな目にあわされたよ」
カークナーはためらったが、それからその手をしっかりと握りしめた。「きみたちの戦いぶりも、勇敢だった」
「では、どこにいけばいいのか教えてくれ」ピクニーが、通信施設の前にくるよう手招きした。彼らが近づくと、彼女は中佐の襟にマイクロフォンをつけ、ソ連軍が使っている周波数に通信機をセットした。
プレトネフは、第一空洞のI・S・ポゴージン中佐と話をかわした。早口の会話のほとんどは、イェーガー中尉によってカークナーに伝えられた。
「――わすれたとはいわせんぞ、ポゴージン。ノヴォシビルスクでは、おまえに講義をしたこともあるおれだ」
「うむ、たしかに、プレトネフのように聞こえるが――」
「びくつくのはやめろ、ポゴージン！　戦いはおわったんだ。おれはこれから、おまえの制圧地を越えて、ミルスキー大佐に――いまではミルスキー中将だな――話をしにいかねばならん。交渉使節として――」彼はカークナーをちらりと見やった。
「きみときみの部下一名、こちらの海兵隊員四名だ」とカークナー。

「──われわれ二名、アメリカ兵四名を通してくれるか?」
しばらく、応答がなかった。「第二空洞とも、ほかの空洞とも、連絡がつかない。われわれの大隊長、ラクサーコフ大佐は死んだ。この空洞の先任将校は、わたしではない──ヴェルゴルスキー大佐だ」
「では、ヴェルゴルスキーと相談して、どうするか決めろ、ポゴージン」
数分の間があって、ヴェルゴルスキーが無線に出た。
「通ってもいいが、武器は捨ててこい。きみと個人的に話がしたい」
プレトネフはうかがうような目をカークナーに向けた。「武器は持ってくるなといっているが。それでもいいか?」
カークナーはうなずいた。
「で、下におりたら──」
「ゼロ・エレベーターを使って、科学者チームのコンパウンドにいくんだ」カークナーが指示を出し、ドイツ人が通訳した。「空洞を横断するには、コンパウンドのトラックがいる」
プレトネフは要求を伝えた。ヴェルゴルスキーは、第二空洞にいくなら、部下一名をトラックに同乗させるという条件を出してきた。しばらく考えてから、カークナーはその条件も呑んだ。それから、ゲアハルトと相談して、計画を確認した。
「第二空洞の指揮官と話がつきしだい、ラニアーほか二名が橋の反対側に出ていく」とゲアハルトはいった。「ラニアーはロシア語を覚えてきた。だれも異存がないようなら、ソ連の科学者もひとり同行させるべきだと思うが」

プレトネフは唇をかみ、ドイツ人にはわからないなにごとかをつぶやいた。それから、まずまずの英語で、こうきいた。「すまんが、体を洗わしてもらえるか？　この一週間、ずっと宇宙服を着ていたのでな」

敵陣地のラウドスピーカーから、撃ち方やめ、の命令が轟くと、ベロジェルスキーは、ミルスキーのそばにしゃがみこみ、

「これはなにかの罠のようです」と、首をふりながらいった。「やつらがどんないいかげんな情報を持ってくるか、わかったもんじゃない」

ミルスキーはなにもいわなかった。真剣にその放送に耳をかたむけてから、ガラベジャンを通じて、麾下の大隊に指示を待つよう命じた。「あと一時間で、プレトネフがここにくる」ガラベジャンのさしだした煙草をとりながら、ミルスキーはいった。「彼がきたら、気のすむまで質問すればいい。彼のいうことがほんとうに事実なら、われわれは話しあいに応じる」

「理想から後退することは許されません」ベロジェルスキーが陰気にいった。

「だれが後退するなどといった？」ミルスキーがいいかえした。引きつった口もとといい、神経質そうなしぐさといい、このこうるさい男にはどうにもがまんがならない。

「プレトネフのいうことが事実なら」ベロジェルスキーは食いさがった。「むしろわれわれは、この地に、この〈ポテト〉に、革命の拠点を樹立しなければならないでしょう」

「あちらさんにいわせれば、〈ストーン〉ですな」とガラベジャン。

「〈ポテト〉だ」ガラベジャンをにらみつけて、ベロジェルスキーはくりかえした。

「だれも〈ストーン〉といえと強制はしていない」じぶんでも意外なほど辛抱強く、ミルスキーはいった。
「ソビエトとアメリカは、今後の事業において、対等のパートナーとならなければならない」
「女はみんな、あっちにいるんだぞ」ミルスキーがいった。ベロジェルスキーはたちの悪いジョークをいわれたような顔で、ミルスキーを見つめた。
「いまなんといいました？　同志将軍、わたしには――」
「われわれは故郷には帰れない――もしプレトネフが正しければな。革命の理想を実行するためには……女が必要だ。あたりまえのことに思えるがね」
ベロジェルスキーはなにも答えなかった。
「もしかすると、こっちの科学者のなかに……」ガラベジャンがほのめかした。
「ほとんどは男だよ」とミルスキー。「作戦説明をわすれたか？　〈ポテト〉に派遣されたのは、名のある科学者ばかりだ。上級アカデミー会員とその助手にかぎってだからな。女は十五人ほどだろう。七百の将兵には焼け石に水だ」ミルスキーは笑い、煙のたつ煙草の吸いさしを、すばやくコンクリートでもみけした。
ベロジェルスキーはコンクリートにもたれかかり、膝をかかえてすわったたまま、その上でぎゅっと握りしめた手を見おろして、「ロシアのすべてが失われたはずはない」と、つぶやくようにいった。「砦だって、要塞だってあるんだ。あなたもあれのことは聞いているはずです、同志将軍」
「知る必要のない者には、上層部はなにひとつ教えはせんよ」とミルスキー。「噂が事実とはか

ぎらない」
「しかし、ポドリップキには――秘密基地があって、ヘリコプターや航空機が待機していると……そこにはきっと、党書記長も、国防会議も――」
「もしかするとな」賛成するというよりは、黙らせるために、ミルスキーはいった。
「そうなれば、彼らは連絡してくるはずだ」目を輝かせて、ベロジェルスキーは顔をあげた。
「そのためには、われわれ専用の外部通信回線を確保しなくては。話しあいをするなら、それを条件に――」
「そのことはもう考えてある」とミルスキー。「さあ、もう黙っていてくれ。プレトネフが着く前に、いろいろ考えなくてはならんのだから」

トラックは、たこつぼの列や、科学者コンパウンドからかき集めて作った、鉄条網のフェンスを通りぬけた。場ちがいの寒冷地迷彩を着たソ連兵たちが、たこつぼから顔をのぞかせる。なかには宇宙服のヘルメットをかぶっている者もいた。宇宙服自体はとっくのむかしに捨て去られ――パラシュートや不幸な兵士たちの死体とともに、第一空洞の降下地帯にちらばっていた。
「こんなことは、もう二度とさせん」降下地帯を通るとき、プレトネフは感情のない声でぽつりといった。「もう二度とな」
第一空洞ソ連軍代表、アンネンコフスキー少佐は、悲しげにトラックの窓から外を見やり、煉瓦色の髪を両手でかきあげた。「生きていることに感謝しますよ」
そのことばを、ルドルフ・イェーガー中尉が、低い声でふたりの海兵隊員に通訳した。トラッ

クは破壊された警備詰所そばのチェックポイントを通過し、北に向かった。
ゼロ・ブリッジの北端で、ラニアーは腕時計に目をやった。一四〇〇時だ。海兵隊員たちは顔を見あわせてうなずくと、打ちあわせどおり、歩いて橋をわたりはじめた。
「あの狂犬どもに、聞く耳があればいいんだが」アレクサンドリアをふりかえりながら、若い軍曹がいった。

第一空洞南側連絡孔のカメラを通して、カークナーはトラックを見まもっていた。いま彼が見ているディスプレイは、つい三十時間前、地球の断末魔の光景が映しだされていたものだ。と、カークナーのうしろで、リンクがシートにすわったまま身じろぎし、すばやく計器を調整した。
「接近してくるOTVがあります」外部溝へ監視に出ている兵士のひとりが報告してきた。「ソ連のものではありません。われわれのです」
リンクは片手で上官に合図しながら、もういっぽうの手でたてつづけにボタンをたたいた。
「カークナー大佐、第十六ステーションからのOTVが近づいてきます。損傷を受けていて、月植民地にはいけないそうです……それから、ジュディス・ホフマンを乗せているといっています」
カークナーは椅子を回転させ、くるりと向きなおると、「驚きはせんよ」と、簡潔にいった。
「収容しろ。ミス・ピクニー、わたしはどこに上着をぬいだかな？」

32

ミルスキーはゆっくりと、平原を歩いていった。自分の威厳を示すために、また味方の損害の度合いを見るために、わざとさりげないふうを装っている。ラニアー、イェーガー中尉、アンネンコフスキー少佐、プレトネフの四人は、もっと早足で近づいてきた。たがいの距離が数ヤードにまで縮まると、双方は立ちどまった。プレトネフが進み出てきて、ミルスキーの手と二の腕をぐっと握りしめてから、うしろにさがり、ひとりだけ離れて立った。

ミルスキーは、点々ところがる死体に目をやった。未完成のたこつぼから、半分体を出して倒れている者がふたり、軍服の裂け目から、焼け焦げた小さな穴や傷をのぞかせて倒れている者が数名。ここまで数えてきただけでも、死体は二十八あった。平原全体では、少なくともこの倍はいるだろう。ミルスキーの心は、戦術的な見地から離れ、同胞が死んだという重苦しい事実に満たされた。

第二空洞の負傷兵四十一名を診るのに、衛生兵はわずかふたり。きのうは、意識をとりもどさないまま、ソスニツキーが死んだ。負傷者も、毎日、ふたり、三人、四人と死んでいく。

ミルスキーはプレトネフに問いかけた。「彼らが放送したことは――そして、きみが伝えた情報は――あれは事実なのか?」

「そうです」とプレトネフ。

「地球からなにか指示は?」

「なにも」
「戦禍は？」
「最悪です」頬をかきながら、プレトネフは穏やかにいった。「勝者はいないでしょう」
「どこからも、なんの指示もないのか？　要塞の国防会議からも、党からも、プラットフォームからも、生き残った将校からも？」
プレトネフはかぶりをふった。「なにひとつ。われわれのことを案じている余裕はないでしょうな」
「交戦のようすは目撃したのか？」顔をこわばらせて、ミルスキー。
「夜のロシアは閃光に包まれていました。ヨーロッパ全域が炎に呑まれていました」
「ロシア語を話すのはどちらだ？」ラニアーとイェーガーに向きなおって、ミルスキーは鋭くきいた。
「どちらも話す」とラニアー。
「では、勝ったのはそちら側か？」
「ちがう」
「われわれはみな、豚だ」とミルスキーはいった。
プレトネフが首をふりふり、「われわれは務めをはたしただけです、同志将軍。あなたは驚くべき戦巧を――」
「残った船は何隻だ？」ミルスキーがプレトネフをさえぎっていった。
「四隻です」とプレトネフ。「で、突撃隊員は？」

ラニアー、イェーガー、アンネンコフスキー少佐は、ミルスキーが答えるのを待った。
「二百名——いや、約百八十名だ。この空洞ではな」ミルスキーはラニアーに顔をしかめてみせ、
「ほかの空洞でどれだけの兵が生き残ったかは聞いていない。たぶん、全部で七百ほどだろう。ソスニッキー将軍は、きのう亡くなられた」
「すると、あなたが最上級将校ですか」プレトネフがいった。
「すぐに話しあいをはじめるべきだ」ラニアーが口をはさんだ。「戦いを再開する理由は、どこにもない」
「たしかに」ミルスキーはいって、ゆっくりとかぶりをふりながら、平原を見わたした。「もし生き残ったのがわれわれだけならば……戦う意味はない」
「地球はまだ死んではいないぞ、大佐」とラニアー。「ひどく傷ついてはいるが、まだ死んではいない」
「ずいぶんきっぱりというな」ミルスキーがいった。「なぜそれほどはっきりいいきれる？」
「もっともだ」と、プレトネフが英語でいった。「ということは、そちらの上層部と連絡がついているということか？」
「ちがう」ラニアーは言下に否定した。「わたしは戦争が起こることを本で読み、写真を見て知っていた。話せば長くなるが、ミルスキー将軍、いまこそ、みなに機密を公開するべきときがきたと思う」
死体がまだちらばっているなかで、ソ連軍は第四空洞までの通行権を与えられた。そのかわり、

西側要員は第一空洞のコンパウンドとゼロ・エレベーターへの出入りを認められた。移動ルートの警備は、両軍の部隊で行なうとの取り決めもかわされた。それと同時に、第一空洞南極と侵入孔から破片や死体もかたづけられ、外に待機していた残りの重輸送船のドック入りが許された。

交渉は第一空洞の、科学者用第一コンパウンドのカフェテリアで行なわれた。第二コンパウンドの半分は、一時的にソ連兵の居住用に提供された。コンパウンドを半分に分ける白ペンキの線の両側では、片方に海兵隊員、片方に疲れきった顔の宇宙強襲機兵が五人ずつ、警備に立った。

ソ連側は最終的に、第一空洞の兵のほとんどを移動させるから、そのかわりに、第四空洞のかなりの領域を譲渡してほしい旨申し入れた。

ゲアハルトはラニアーとイェーガーを通じて、ミルスキーと会談した。ヴェルゴルスキー大佐は――色浅黒く、漆黒の髪と緑の目を持つ、顔だちの整った中年の人物だ――政治的立場について、横からミルスキーに助言を与えた。そのそばには、つねにベロジェルスキー少佐がつきしたがっている。三人めの政治将校、ヤズィコフ少佐は、ソ連軍監視チームの一員として、第四空洞に派遣されていた。

休戦二日めの午後も、交渉はつづけられていた。やがて、昼休みにはいり、食後のコーヒーを飲んでいるとき、カークナーがひとりの客とふたりの警備兵を連れて、カフェテリアを訪ねてきた。ラニアーは一行の顔ぶれを見たとたん、ゆっくりとカップを下に置いた。

「あんまり助けはいらないようね」そういったのは、ジュディス・ホフマンだった。顔は蒼ざめていて、彼女らしくもなく、髪がくしゃくしゃになっている。だぶだぶのジャンプスーツを着て、片手には綳帯がまいてある。もういっぽうの手には、シャトルから持ってきた大きな箱を持って

いた。ラニアーはひとこともいわず、椅子を押しやると、カフェテリアを横切って、思いきり彼女を抱きしめた。ロシア人たちは、ややいらだった顔で、闖入者を見つめていた。ついで、ヴェルゴルスキーに耳打ちされて、ミルスキーがうなずき、いずまいを正した。
「神さま」ラニアーは静かにいった。「絶対に助からないと思っていた。きみに会えてどんなにうれしいか、ことばではいいつくせない」
「ここにいられることが、それほどうれしいことだったならいいんだけど。四日前……四日前、大統領はわたしと〈ストーン〉計画のすべてを切り捨てたの。わたしはつてをたよりに、翌日、VIPルートで第十六ステーションに移ったわ。そこで、OTVに乗ろうとしたんだけど——これはなかなかたいへんだったわね。わたしが政治家クラスの人間じゃなかったので、管理者も二の足を踏んだのよ。でも、ふたりのOTVのパイロットが、喜んで密航させるといってくれたわ。そして、燃料補給もおわって、ちょうど出発しようとしていた矢先に……戦争がはじまったの。そのあと、六人の民間人の避難者を乗せて、発進した直後に——」彼女はいいよどんだ。「もうくたくただわ、ギャリー。でも、わたしがここにきていることを、ともかくあなたに知らせておこうと思って。あなたのボスとしてではなく、ただ、ここにきていることをね。ほかにも九人の避難者がいるわ。女性四名、男性二名、OTVのクルー三名。ひとまず眠らせてちょうだい。それから、なんの役にたてるかいって」
「命令系統はまだ整備されていないんだ。ここが前哨点なのか、領土なのか、ひとつの国家なのか、それさえ判断がつきかねている」とラニアー。「きみにしてもらうことは、たっぷりあるよ」ラニアーの目には、涙がにじんでいた。彼は手の甲でそれをぬぐうと、ホフマンにほほえみ

かけ、それから交渉テーブルを指さした。「いま、話しあいをしているところなんだ。戦闘はもうない――いまのところはね。そして、たぶん永久に」
「あなたが優秀な管理者であることは、ずっと前からわかっていたわよ」とホフマン。「ともかく、まず眠らせて。ステーションを出てから、ろくろく眠ってないの。待って……おみやげがあったんだわ」
彼女は箱をテーブルの上に置き、金属の止め金をはずした。それから、箱のふたをあけて、なかにはいっていた種の袋をテーブルの上にざっとあけた。袋のいくつかは、ロシア人のそばにもすべっていった。ミルスキーとヴェルゴルスキーは、あっけにとられた顔でそれを見ている。やがてミルスキーが、袋のひとつをとりあげた。マリーゴールドの種だった。
「どうぞ、ほしいものをとってください」ホフマンはロシア人にいうと、ラニアーに向きなおった。「これはもう、みんなのものなんだから」
カークナーが彼女の肘を支えるようにして、外へ連れだしていった。
ラニアーはテーブルにもどると、格段に高揚した気分で、席についた。ヴェルゴルスキーとミルスキーのうしろに立って、ベロジェルスキーは露骨に不快な表情を浮かべ、種の山を見おろしていた。
「わたしの先任政治将校は、そちらがなんらかの生き残った政府組織から指示を受けたかどうか知りたがっている」とミルスキーがいった。イェーガーがそれをゲアハルトに通訳した。
「そんなものはない」とラニアー。「われわれは、いまも自身の判断で活動している」
「きみが話していた女性には、見覚えがある」ヴェルゴルスキーがよどみなくいった。「彼女は

そちらの政府のエージェントであり、この小惑星に関するアメリカの方針を方向づけた張本人だ」
「そう、そのとおりだ」とラニアー。「そして、充分に休養したら、この交渉に加わることになる。だが、彼女は……」ラニアーはことばを捜した。「〈大破滅〉の前、解任されたそうだよ」
未来ではなく、過去についてのことなら、なんと容易にことばが出てくるのだろう、とラニアーは思った。
「彼女が着いたのはいつだ?」ミルスキーがきいた。
「わからない。それほど前ではないだろう」
「われわれとしても」と、ベロジェルスキーが口をはさんで、「ワルシャワ条約軍の生存者がやってくれば、だれであれ、同じようにこの小惑星に受けいれることを主張する。軍人であろうと、民間人であろうとだ」
「もちろんだとも」とラニアー。ゲアハルトもうなずいた。
「さて、それでは」と、ラニアーは語をついで、「いちばん重要な問題にはいりたい。武装解除と、領有権に関する問題だ……」
「それについては、この席で原案をまとめたうえで、のちに正式な文書の形で批准したい」ミルスキーがいった。
「われわれはこの小惑星における、全ワルシャワ条約軍人民の主権を主張する」ベロジェルスキーがいった。ヴェルゴルスキーが唇をかんだ。ミルスキーは荒々しいしぐさで立ちあがると、ベロジェルスキーを隅に引っぱっていった。そこでふたりは、声は低いが激しい調子で口論をかわ

した。その間ずっと、ベロジェルスキーはラニアーとゲアハルトに憎悪の目をそそいでいた。

ミルスキーはひとりでもどってくると、「ソビエト軍人および人民は、わたしの統轄下にある」といった。「交渉の総責任者は、このわたしだ」

ソ連軍に占領されていたあいだ、ラニアーのオフィスと寝室は荒らされていたが、それほどひどく痛めつけられてはいなかった。ラニアーは五時間眠ってから、カフェテリアの自動給仕機から、配給制となった食事をとった。

女性寮の前で、ばったりカークナーと会った。「わたしはこれから侵入孔にもどる」とカークナーはいった。「あそこはまだ悲惨な状態だからな。死体だけはいまおろしているところだ――敵のも、味方のも。礼拝の予定はどうなっている?」

「二十四時間のうちに、いちど礼拝をやるようにいっておいた。ここで死んだ者たちだけのためでなく……」

カークナーは唇をかんだ。「あの狂犬どもと交渉するのは、楽じゃあるまい」

「どこかからはじめなくてはな。ホフマンはどうだ? よく眠れたか?」

「話を聞くかぎりでは、元気らしい。女性の天文学者ふたりが彼女を部屋に連れていって、わたしと警備兵は追いだされたよ」カークナーは目をすがめ、カフェテリアのほうにうなずいた。

「そちらがかたづいたら、わたしはなにをすればいい?」

「たぶん、合衆国海軍大佐として、外部守備の責任者にとどまってもらうだろう。連中にのしをつけて〈ストーン〉をあけわたすつもりはないよ」

「武装解除には同意したか?」
ラニアーはかぶりをふった。「まだだ。むこうは、まず第四空洞に宿営地を確保したうえで武装解除の話しあいに応じたいといっている。きょうの午後は、個人的にミルスキーを〈ストーン〉めぐりに連れていくつもりだ……図書館やら、都市やらへ」
「それなら、わたしもついていきたいくらいだ」
「すぐにきみの番もまわってくるさ。ゲアハルトとわたしの方針として、図書館は完全に開放しておきたい。独占はしない」
「第七空洞もか?」
「折りを見てそうする。まだ第七空洞のことは切りだしてこないんでね」
カークナーは両の眉をつりあげてみせ、「連中、聞かされてないんだろうか?」
「あっちの上層部がどこまで軍人に機密を話すものか……。ただし、もうじき知ることはたしかだ。いまのところ、ソ連科学者は、軍人たちと距離を置いている。どうやら軍人側が、彼らをうとんじているらしい。だが、すぐに噂は伝わるだろう」長いあいだ黙りこんでから、ラニアーはきいた。「地球から、なにか連絡は?」
「まったくない。北極海に若干レーダー活動が見られるが——たぶん、何隻か海上船舶がいるんだろう。地表はほとんど見えない。ヨーロッパ、アジア、合衆国上の大部分は、雲に覆いつくされているんでね。こちらの心配どころではなかろう。ではまた、ギャリー」
カークナーはコンパウンドの敷地内を歩み去っていき、トラックに乗ると、ゼロ・エレベーターの入口に向かった。ラニアーは女性寮のドアをノックした。ジャニス・ポークが顔を出した。

「はいってもいいわよ」とポーク。「もう目を覚ましてるわ。何分か前に、食べ物を持っていったところなの」
ホフマンは、小さなラウンジで、長椅子の上にすわっていた。ベリル・ウォリスと、前コンパウンド警備隊長だったドリーン・カニンガム中尉が、ホフマンの向かいの椅子に腰かけていた。カニンガムの頭には繃帯が巻いてあった。第一コンパウンド降伏の前に、レーザーで射たれて火傷したあとだ。
ラニアーがはいっていくと、三人は立ちあがった。カニンガムは敬礼をしかけたが、途中で恥かしそうに笑みをうかべ、頭をさげた。
「ふたりとも、悪いんだけど、わたしはミスター・ラニアーと、相談しなければならないことがあるの」半分オレンジジュースの残ったグラスをバッフル板のテーブルに置いて、ホフマンがいった。ふたりきりになると、ラニアーはすわって、椅子をホフマンのそばへ引きよせた。
「説明を聞く準備はできていると思うわ」とホフマンはいった。「地球を発って以来、なにも聞いていないの。あれは図書館の記録にあるとおりだった？」
「ああ」とラニアーは答えた。「それに、〈長い冬〉もはじまった」
「なるほどね」彼女は二本の指で鼻筋をつまみ、強くマッサージした。「世界の終焉。わたしたちにはずっとわかっていたわ」ため息をついた。いまにもすすり泣きに変じそうなため息だった。
「もう。まずかたづけるべきことをかたづけなきゃ」
ラニアーは手を伸ばしたが、ホフマンはその手を押しのけた。
「みんなに恋人同士だと思われるじゃないの」

「純粋にドラッカー的な関係なのにな」
彼女は笑い、ハンカチで目をぬぐった。
「あなた自身はどうだったの、ギャリー？」
ラニアーは長いあいだ答えなかった。「ぼくは愛機を失ったんだ、ジュディス。ぼくはここをとりしきって――」
「ボス、ね」
「ぼくはここをとりしきっていたし、戦争をくいとめるためにできるだけのことはした。だから、いまの自分がどういう状態にあるか、なんともいえない――いまはまだ。たぶん、それほどいい状態じゃないだろう。わからない。交渉の席では、丁々発止の連続でね。もうくたくただ」
ホフマンはラニアーの目をまっすぐ見つめながら、指先で彼の手をとんとんとたたき、ゆっくりとうなずいた。「オーケイ。わたしはまだ、あなたに全幅の信頼を置いているわ。それはわかっているわね、ギャリー？」
「ああ」
「事態が落ちついたら、いっしょに頭をシジュフォスの壁画の穴につっこまなければならなくなるわ。それじゃあ、ソ連軍突入のようすと、あれから起こったことを全部話してちょうだい」
ラニアーはなんとなしに、ミルスキーとふたりきりで――それがむりでも、せいぜい双方に護衛一名ずつつけただけで、図書館をまわるつもりでいた。が、カフェテリアの交渉テーブルについてみると、ミルスキー、ガラベジャン、生き残った三人の政治将校のうちのふたり――ベロジ

ェルスキーとヤズィコフ――さらには、四人の武装した宇宙強襲機兵[SST]が彼を待っていた。ラニアーはとっさに、ゲアハルトとイェーガーに同行を依頼し、人数のバランスをとるために、四人の海兵隊員も同行させることにした。

一行は黙りこくったまま、第一空洞を横切って、第二空洞のゼロ・ブリッジをわたった。短い旅の前半は、ミルスキーの奇襲部隊のひとりがトラックを運転した。都市を通過するあいだ、ミルスキーはちらちらとラニアーを見ていた。値踏みしているな、とラニアーは思った。ラニアーから見て、このソ連軍中将は、得体の知れない人物に思えた。いままでミルスキーはわずかたりとも、素顔をのぞかせたことがない。それでもラニアーは、ベロジェルスキーなどよりずっと高くミルスキーを評価していた。ミルスキーなら道理に耳をかたむけるかもしれない。ベロジェルスキーには道理がなにかということすらわからないだろう。

橋を半分ほど越えたところで、トラックは停止し、海兵隊員が運転を交替した。一行は、パトリシアが〝古風だ〟といった商店街を通りぬけ、図書館前の広場で車をおりた。トラック警備のため、海兵隊、SST一名ずつがあとに残った。ふたりはひとことも口をきかず、トラックをはさんでたがいの反対側に立った。

ゲアハルトはイェーガーを通じて、しきりにベロジェルスキーに話しかけていた。その隙に、ラニアーはミルスキーに予備知識を与え、これから見るものについて、心の準備をさせようとした。

「そちらの上官たちが、〈ストーン〉についてなんといったかは知らないが」とラニアーははじめた。「すべてを知っているわけではないんだろう」

ミルスキーは頑固に前を見つめたまま、「〈ストーン〉のほうが〈ポテト〉よりはよい名前だな」と、眉をつりあげて認めた。「これを〈ポテト〉と呼べば、われわれはそれに巣くう虫ということになってしまう。ちがうかね？　ともかく、〈ストーン〉が人間の手で造られたということまでは聞いている」

「それでは、半分も知っていることにはならない」

「では、残りを聞かせてもらいたいものだ」

館内にはいり、二階への階段をのぼるあいだ、ラニアーはかいつまんで概要を話して聞かせた。閲覧室にはいると、ラニアーは書架にいき、ロシア語の本がならんでいる一画から三冊をぬきだしてきて、一冊をミルスキーにわたし——『〈破滅〉略史』のロシア語訳だ——ベロジェルスキーとヤズィコフにも一冊ずつわたした。

ベロジェルスキーは立ったまま、両手でしっかりとその本を握りしめ、侮辱されたとでも思っているかのように、ラニアーをにらみつけて、「いったいこれは、なんの冗談だ？」といった。ヤズィコフのほうは、ためらいがちに本をぱらぱらめくっている。

「まあ、自分で読んでみたまえ」とラニアー。

「これはドストエフスキーだぞ」とベロジェルスキー。ヤズィコフと本を交換して、「それにこっちは、アクサーコフだ。こんなものにわれわれが興味を持つとでも思うのか？」

「出版年月を見たら、持つと思うね」ラニアーは静かに答えた。ふたりは本を開き、奥付に目を通し、ほとんど同時に、ぱっと本を閉じた。

「ここの書架を、徹底的に調べなければならない」とベロジェルスキー。ここの本のことを、あ

まりよく思っていないようすだった。
　ミルスキーは両手で本を持って、ときどき発行年月日を見かえしながら、ぱらぱらとめくりつづけていた。いちどなど、発行年月日を指でなぞったほどだ。やがて、彼は本を閉じあわせ、その背表紙で閲覧机をこんこんとたたくと、ラニアーを見あげた。第二空洞の図書館が、いっそう暗く、陰気くさくなったように思われた。
「ここには戦争の歴史が書いてある」なかば問いかけるように、なかば述懐するように、ミルスキーはいった。「これは英語版の正確な翻訳なのか？」
「そう思う」
「諸君、わたしはミスター・ラニアーと、しばらくふたりきりで話をしなければならん。同志将校諸君、きみたちはゲアハルト将軍や部下といっしょに待っていたまえ。SST隊員もいっしょに連れていってくれ」
　ベロジェルスキーがなにも載っていない閲覧机の上に本を置き、ヤズィコフもすぐにそのまねをした。「長くはこまりますよ、同志将軍」とベロジェルスキー。
「それはわからん」とミルスキーは答えた。
　ラニアーは、こんな機会のために半分残しておいた、ブランディーの携帯容器をとりだして、中身をふたつのカップについだ。
「これは気がきいたことだ」カップをとりながら、ミルスキー。
「特別サービスだよ」
「政治将校たちは、わたしを酔わせて情報を引きだそうとしたといって――引きだす、でいいん

だな？——きみを非難するだろう」

「酔わせられるほどたくさん残ってはいないよ」とラニアー。

「そいつは残念だ。わたしはあまり強くないのでね、つまり……ここに対して」からになったカップを二度、大きく宙にふって、ミルスキーは図書館を指さし、「きみは平気かもしれんが、わたしには刺激が強すぎる。驚きで、心臓がとまりそうだ」

「しばらくすれば、なんでもなくなるさ」とラニアー。「ここは驚異の場所だが、それと同じくらい魅力的な場所でもある」

「ここの存在を知ってから、どのくらいになる？」

「二年だ」

「わたしとしては、ほかの者たちにもここの魅力を分け与えたい。わたしの部下たちは、だれでもここにはいれるようにしたい。すべてを、隠しだてせず、兵卒にでも将校にでも、だれにでもだ」

「そういう取り決めだからね」

「どこでロシア語を憶えた？　学校でか？」

「第三空洞の図書館でだよ」とラニアーは答えた。「三時間強で習得できた」

「まるで生粋のロシア人のようなしゃべりかただ。海外生活が二、三十年つづいたような感じはあるが、それでも……ロシア人の発音だ。わたしも、同じように短時間で英語を憶えられるだろうか？」

「たぶん」

ラニアーがブランディーをつぎきってしまうと、ふたりは乾杯をした。
「きみは奇妙な男だな、ギャリー・ラニアー」ミルスキーがしかつめらしい顔でいった。
「そうかな?」
「そうとも。きみは外に背を向けている。きみはほかの者を見ぬくが、自分を見せようとはしない」
ラニアーは黙っていた。
「そうら、な?」にやりとして、ミルスキー。「そんなぐあいさ」そこで、ふたたびすっと目に鋭い光をたたえてラニアーを見つめ、「なぜはじめから、ここのことを世界に公表しようとしなかった?」
「ここと第三空洞でしばらくすごしたあと、自分ならどうするか自問してみるといい」
今度は、ミルスキーが黙りこむ番だった。「きみたちとわれわれのあいだには、深い不信が横たわっている」どすんと音をたてて本を机の上に落としながら、ミルスキー。「おたがい、なかなか気を許そうとはすまい。そのいっぽうで、わたしはここがどういうところか理解していない。ここでのわれわれの立場も、きみたちの立場も理解していない。わたしの無知は危険につながりうる。だから、ミスター・ラニアー、時間の許すかぎり、わたしもここへ、あるいは第三空洞へ赴き、みずからを教育しようと思う。可能であれば、きみがやったのと同じ方法で、英語を憶えよう。だが、混乱を避けるために、ここへの出入りをわたしの部下全員に認めるのは、ひとまず延期にしたい。きみたちも、同じように制限したほうが賢明ではないかね?」
ほんとうは、そういう本人がそれには反対なのではないかと思いながら、ラニアーはかぶりを

ふった。「われわれはこの地で、因習を打ち破らなくてはならない。因習を引きついではだめだ。わたしとしては、図書館は万人に開いておきたい」

ミルスキーは気づまりなほど長いあいだラニアーを見つめていたが、やがて立ちあがった。

「たぶん」と彼は口を開いて、「そういうのは、わたしよりきみのほうがずっと簡単だろう。ソ連人は充分に情報を与えられることに慣れていない。将校のなかには、恐ろしいことだと思う者も出てくる。なかには、ここの情報をいっさい信用しないやつも出るかもしれん……これはアメリカのトリックにちがいないといってな。そのほうがずっとなじみやすいからだ」

「だが、きみはそうでないことを知っている」

ミルスキーは手を伸ばして、本にふれた。「危険な真実があるとすれば」と彼はいった。「それはたぶん、その真実性が充分ではないからだ」

ミルスキーの大隊が降下した第二空洞の草原地帯は、いまや死体の埋葬所となっていた。米、英、独、全部で百六人の戦死者は、アルミ張りの袋にいれられて、人類学班の掘削機で掘りあげた、長い溝のひとつに横たえられていた。ほかの四つの溝には、同じようにして、ソ連兵三百六十二人の死体が横たえられている。そのほか、行方不明、もしくは死亡したと見なされる兵が、ソ連側で九十八名、西側に十二名いた。〈ストーン〉突入時の戦いでばらばらに吹っとんだか、侵入孔から外へただよい出し、瞬間凍結のミイラとなって、〈ストーン〉のまわりをまわっているのだろう。OTV45号の犠牲者と、破壊された重輸送船のクルーについては、別個に墓標が立てられた。

溝のまわりには、二千三百人の人員が集まっていた。ミルスキーとゲアハルトは、それぞれロシア語と英語で、簡潔に、要点を押さえて、みなに語りかけた。ここに埋葬するのは、〈ストーン〉で死んだ人々ばかりではない。地球の死者たちの墓標はまだないが、われわれははるかな家族の者たちを、友を、彼方の文化を、歴史を、夢を、ここに埋めるのだ。

そして、過去を、離別してもやっていける過去の大半を埋めるのだ。ソ連兵たちは、きちんと整列していた。そのなかで、科学者たちだけが、ぽつんと離れてかたまっていた。黙々と立ちつくすソ連人たちの前で、従軍牧師のクックが最後の祈りを捧げ、代理ラビのイッハク・ヤコブが、頌栄(カディッシュ)をとり行なった。ウズベク共和国のイスラム教徒のひとりが、前に進み出て祈りを捧げた。

ソ連兵の墓の上に、ミルスキーが最初の土をかけた。NATOの墓の上には、ゲアハルトがかけた。それから、予定にはなかったことだが、ゲアハルトがふいに、NATO兵士の骸にかけるはずだった山からスコップで土をひとすくいすると、ソ連軍の墓の、ひとつめの溝にかけた。ミルスキーもためらわず、同じことをした。

ベロジェルスキーはそのようすを、苦虫をかみつぶしたような表情をはりつかせたまま、見つめていた。ヴェルゴルスキーはもったいぶった態度で押しだまっている。ヤズィコフはよそに思いを馳せているらしく、両目がうっすらと濡れていた。

ホフマンとファーリーが前に進み出て、それぞれの墓に花束を捧げた。

参列者たちが立ち去りはじめると、考古学班がただちに埋葬にとりかかった。ソ連軍は二隊に別れ、第一、第四空洞にもどっていった。ファーリーとキャロルスンとホフマンは、ゼロ・ブリッジでラニアーとハイネマンと合流した。五人はしばらく、地下鉄のターミナルに向かっていく

人々を見まもった。やがて、キャロルスンがラニアーに歩みより、その腕をそっとつかんだ。
「ギャリー、話しておかなければならないことがあるの」
「どういうことだい？」
「ここではだめ。コンパウンドのなかで」ホフマンを見やりながら、キャロルスン。一行はトラックに乗りこみ、第一空洞を横切って、コンパウンドにもどった。
みんなはラニアーのあとについて、いまはがらんとした管理棟にはいり、一階のアン・ブレイクリーのデスクのまわりに集まった。
「どうやら、悪い知らせのようだな」とラニアーはいった。そこで、はっと気づいて目をむいた。
「まさか……いったい彼女は——」
キャロルスンがラニアーをさえぎって、「あなたはとてもそんな状況じゃなかったでしょう。だから、黙っていたんだけど。パトリシアがどこにもいないの。わたしたちにもなにがあったのかわからない。姿を見たという報告は二件あったわ。でも、ひとつはロシア人の報告だから、あてにはならないかもしれない。ソ連の科学者チームと話していて、リムスカヤが聞きこんできたのよ。もう一件は、ここにいるラリーの報告。たぶん、パトリシアはどこかに隠れているだけで、そのうち見つかるだろうと思っていたんだけれど——」
ハイネマンがうなずいた。「おまけにおれは、ますます謎が深まるようなものを見ちまった」
「パトリシアが第四空洞を出たのは、水曜日だったわ」とファーリーがいった。「出ていくところはだれも見なかったけど、ラノアはパトリシアが電車に乗って第三空洞にいったのはまちがいないというの」

「あの娘は図書館にいくといってたのよ。あのときはみんな、少しおかしくなっていたけれど、それにしてもやけに強くいいはっていたわ」とキャロルスン。
「ソ連チームがいうには、ソ連兵のひとりが、冠毛シティの地下鉄駅のひとつそばに、飛行機が着陸するところを見たそうよ」と、今度はファーリー。「そのなかに、ふたりの人間と――ソ連兵のいう〝悪魔〟が乗っていったそうなの。その……人間は男女ひとりずつで、女性のほうの人相風体は、パトリシアにそっくり。飛びあがったその飛行機は、先のまるくなった鏃型をしていて、音は少しも立てなかったそうよ」
ハイネマンが前に進み出て、「〈通路〉の奥に待機しているとき、おれもブージャムが通過するのを見たんだ。やはり先のまるくなった鏃型だった。そいつはプラズマチューブのまわりを螺旋状に旋回しながら、北に向かっていった」
「ついさっき、やっとそのことがひとつにつながったのよ」とキャロルスン。「遅くなって、ごめんなさい」
「筋が通らないぞ」かぶりをふりながら、ラニアー。「もしかすると、パトリシアはソ連軍に捕まっただけなのかもしれない。あるいは――」
「リムスカヤがあちこち聞いてまわったの。捕まったとは考えられない、といってるわ」とキャロルスン。
「冠毛シティには、コースをはずれたソ連の降下兵を除いて、だれもいなかったわ。敵部隊も、こちらの部隊も――その当時はひとりもね。いたのはただ、パトリシアひとり」
「それと、ブージャムだ」ハイネマンが口をはさんだ。「偶然の一致にしては、つじつまがあい

すぎる」
ラニアーはかぶりをふりつづけた。「もういい。たのむ。これ以上いわれても、もう処理できない。ジュディス、みんなにいってやってくれ。いまのところは、もう手いっぱいだと。交渉もつづけなければならないし――」
「それはそうね」ラニアーの肩を力強くつかんで、ホフマンがいった。「みんな、少し休んだほうがいいわ」
口のまわりに刻まれた苦悩の皺をぬぐいさろうとするように、ラニアーは顔をなでた。「ぼくは彼女をまかされていた。彼女はかけがえのない存在なのに。ジュディス、きみにも彼女の面倒を見るようにいわれていたっけな」
「もういいのよ。もうあなたには――」
「もうこんなところはたくさんだ、ジュディス！」両手のこぶしをふりあげ、それを力なくふって、「こんなくそいまいましい岩の塊なんか！」
キャロルスンが泣きだした。「あなたのせいじゃないわ。あの娘のことは、わたしがあなたからまかされていたんだもの」
「もうやめなさい」ホフマンが目をそむけ、静かにいった。ハイネマンは当惑し、どうしていいのかわからず、うしろに立っていた。
「パトリシアを見捨てるわけにはいかない」手をおろし、握ったり開いたりしながら、ラニアー。「このまま放ってはおけない。ラリー、チューブライダーに燃料を補給して、すぐに飛びたてるか？」

「いわれれば、いつでも」
「ジュディス、ここの責任者の人選をあやまったな」
「そうは思わないわ。でも、どういうこと？」
「あとさき考えてはいられない。愚行とはわかっているが、これからパトリシアの救出に向かう。ここに残って、ソ連兵どもと交渉などしてはいられない。ぼくのことは、よく知っているはずだ。いくといったらなにがなんでも救出にくいことが、きみにはわかっているはずだ」
「そうね」とホフマン。「いいわ、おいきなさい。ほかにもそうするべき理由はあるんだし」
「ほかにも？」
「わたしたち、ここで生きていかなくてはならないでしょう？」とホフマン。「とすれば、どのみち〈通路〉の奥になにがあるか、探らなくてはならないわ。ラリー、V／STOLは使えるの？　チューブライダーは？」
「完璧だよ」ハイネマンが答えた。
「それじゃあ、計画を立てましょう。でも、慎重にあたらなくてはね。それでいい、ギャリー？　いますぐとはいかないけれど、早急に出発するということで？」
「わかった」ラニアーはおとなしくうなずいた。
「ともかく、みんなリラックスして、なにか食べて、休んだほうがいいと思うわ」とファーリーがいって、同意をうながすように全員を見まわした。
彼らはだまって立ちつくしていた——ラニアーがどれだけ崖っぷちに立たされているか、そしてみんながどれだけ限界に近づいているかに気がついたのだ。

やがて、キャロルスンがいった。「わたしもいくわ」

33

（するとおまえは、なにもかも放りだしていくというのか。〈ストーン〉の現状に目もくれず）
——そうだ。
（彼女を追って、〈通路〉へはいってくのか。なんのために？）
——自分の魂を救うためだ。
（おまえはよくやっているじゃないか）
——地球は滅亡し、〈ストーン〉の半分は無愛想なロシア人に占領されたうえ、守るようにと厳命されていた女性まで失ってしまったんだぞ。
（だが、〈ストーン〉はまだ健在だ。そして、事態は安定に向かいつつある——）
——ベロジェルスキーがいる。ヤズィコフが、ヴェルゴルスキーが。
（保守主義者、強行主義者たちか。たしかに連中は火種だ。だが、彼らの策謀を防ぐためにも、おまえはここにとどまっているべきじゃないか？）
——だめだ。
（ホフマンにすべての問題を押しつけて——）
——彼女はおれをいかせてくれる。おれがもうその気になっていることを知っているからだ。

彼女にとっても、〈ストーン〉にとっても、おれはもう役にたたない……パトリシアを助けにいくこと以外には。
ラニアーは目をあけ、腕時計を見た。〇七五〇時だ。なんだかぼうっとしている。頭のなかで、いきつもどりつ、会話がくりかえされている。彼の心が、いきづまった状況に対処し——新しい状況のなかに、自分の居場所を見いだそうとしているのだ。
地球のことや人々のことが、すぐに頭に浮かんでくる。瓦礫のなかを這いまわる、友人たち、仕事仲間たち、ほんの数週間前に顔を会わせたばかりの人々。それどころか、地球にはもう、個人的な知りあいがひとりもいないことだって考えられる。とても耐えられない考えだが、その確率はたしかに高い。彼が接したことのある人々は、ほとんどが都市の住人や、軍の本部で働いていた者たちなのだから。
例外は、妹婿で、潜水艦の艦長をしている、ロバート・タイマーだけだ。二年前、ラニアーが〈ストーン〉へ派遣される前に、妹は卒中で死んでしまい、以来タイマーとは、一年前にいちど会っただけだった。きっとタイマーは生き延びて、氷の下で待機しているのだろう。もしまだ世界の破壊に手を貸していないとすれば、だいじに弾頭を抱いて、待っているのだろう……つぎの交戦を。最後の一撃を与えるときを。
「おまえのせいだ」ラニアーは声に出していうと、ふたたび目を閉じた。おまえとはだれのことか、自分でもよくわからない。彼の頭のなかでは、三人の精神分析医が集まって、議論をかわしていた。ひとりは、おきまりのフロイト学派——いつもいつも、たえず流れつづける思考のきらめきのなかから、最悪で最低の解釈をひねりだす、あいつだ。ふんふん……で、あなたのおかあ

さんは……そのときあなたはなんといいましたか？　本心からそういったんですね？
もうひとりは、ほほえみを浮かべながら、黙ってすわったまま、彼がみずからの混乱のなかにからめとられていくのを眺めている。
そして、三人めは――
三人めは、うなずきながら、行動療法を勧めた。三人めは、父親にそっくりだった。
ラニアーは寝返りをうち、ふたたび目をあけた。眠れない、体が休まらない。〈ストーン〉で分裂が起こるまで、あとどれくらいだろう？　どれくらいが騒ぎに加担し、どれくらい深刻なものになるだろう？　その問題と戦うのは、おれか、ホフマンか？
そこに、ひとりめが興味を持った。
だが、もう決断はなされてしまっている。ホフマンにはもう、〈ストーン〉をひととおり見せたし――第三空洞の図書館では、涙滴型機械の前にすわっている、ミルスキーとも出くわした。ソ連軍中将は三人の護衛をともなっているだけで、図書館にはほかにだれもいなかった。そして疲れた顔をして、こちらには目もくれなかった。
ロシア人たちから少し離れたところで、ホフマンに椅子にすわるようにうながし、ラニアーはその使い方を教えた。いろいろなキーを教えると、ホフマンは喜んでそれを使いはじめた。
ラニアーは半身を起こし、コムラインのマイクをあげた。アン・ブレイクリーはすでにデスクにもどっており、いまも中央交換機を受けもっている。「眠れないんだ」とラニアーはいった。
「ハイネマンはいま、どうしている？」
「起きています。それをお知りになりたいのでしたら」

「けっこう。すると、第七空洞だな」
「いえ、予定表によれば、南連絡孔のステージに――」
「では、彼に伝言してくれないか」
「はい」
「明早朝、〇八〇〇時に出発したいといってくれ」
「わかりました」
V／STOLのクルーはもう選んである。おれと、ハイネマンと、キャロルスン――彼女だけは、つれていくとホフマンがいやがるかもしれない――それに、カレン・ファーリーだ。任務は単純明解。最大百万キロの距離まで〈通路〉を進み――〈通路〉がそこまで伸びているとしてだが――途中何カ所かでとまって、地面に降下する。それだけ北にいけば、〈通路〉の特性がどうなっているのか、だれにもわからない。そこまでいったら、パトリシアが見つかろうと見つかるまいと、どこにいるかの手がかりがあろうとあるまいと、もどってくる。
不安定な要素はたくさんあったが、それはラニアーの望むところだった。これだけ長いあいだつかみどころのない恐怖に対処してきたんだ。明白ではっきりした危険は、天国にさえ思える。
彼は服を着ると、身のまわり品を小さな黒い鞄につめこんだ。ハブラシ、カミソリ、下着の替え、スレートとメモリー・ブロックのパッケージ。
ハブラシか。
ラニアーは笑いだした。むりやり絞りだしたような笑いだったが、それは波状的に訪れ、とうとう押さえきれなくなった。ラニアーは寝台に横たわり、身をふたつに折って、苦痛に顔をしか

めながら笑いころげた。やっと発作がおさまり、あえいでいると、飛行機の小さなトイレと、ちっぽけなシャワー室のことを思いだした。特異線にそって飛ぶのにこまごました日用品をもっていくかと思ったとたん、ふたたび笑いの発作がはじまった。数分後、ようやく発作がおさまってくると、彼は寝台の端に腰かけ、深呼吸をしながら、だるくなった顎や頬の筋肉をなでさすった。「笑っちまうね」彼はため息をつくと、小さな黒い鞄に、ハブラシをつっこんだ。

第七空洞連絡孔の観測ステージから二十メートル離れたところに、ソ連兵の死体がひとつ、ふわふわと浮かんでいた。どうやってここまでこられたのかは、だれにもわからない。どこにも怪我はしていないようだ。きっと、降下が恐くなり、自転軸付近にぐずぐずしているうちに、空気がなくなってしまったのだろう。死体はゆっくりと、連絡孔に向かってただよってきていた。だが、死体をとめ、引きおろしている暇はなかった。彼らの出発に、その死体は不吉な影を投げかけていた。フェイスプレートの向こうの青白い顔は、目を大きく見開き、興味津々のようすで、こちらを見まもっている。

ホフマンはまずラニアーを抱きしめ、ついでキャロルスンとファーリーを抱きしめた。かさばる宇宙服に妨げられて、想いはこもっていても、ぎゅっと抱きしめることができなかった。すでにハイネマンは、チューブライダーに小判ざめのようにくっついたV／STOLに乗りこんでいる。

しばらく彼らは、黙ったまま、特異線の不明瞭な先端のそばに立ちつくしていたが、やがて、ホフマンが口を開いた。「ギャリー、これは雁射ちとはちがうのよ。わかってるわね。わたしした

ちには、あの小さな切り札が必要なの。彼女を連れさったのが何者であれ、わたしたちがどれだけ彼女を必要としているかは、よく知っているはずだわ。もちろん、わたしは疑い深いたちだけれどね。ともかく、あなたたちはこれから、とても重要な任務に出かけるのよ。成功を祈ってるわ」

ファーリーがホフマンに向きなおった。「夕べ、結論を出したんです、わたしたち──華凌以下、中国人全員で。それが発表されるのは、きょうの夕方になってからのことだけれど、いま話しても、だれも文句はいいませんわ。わたしたちは、西側と行動をともにします。ソ連の科学者たちも交渉を申しいれてきたけど、わたしたちはあなたがたを支援することに決めました。ソ連の科学者たちだって、わたしたちに倣うことができたらいいと思っているんじゃないかしら。でも、出発前に、あなたにだけは知っておいてほしくて」

「ありがとう」とホフマンはいって、グラブをはめたファーリーの手を握った。「みんな、関心を持つわ。いうまでもないことね。できるかぎりのものを見ていらっしゃい。いっしょにいきたいと思う者は、何百人もいるのよ」

「だからわたしは、まっさきに志願したんですよ」とキャロルスン。

「時間のむだだぞ」ハイネマンがいつもののろくさいしゃべりかたでいった。「さっさと乗っちまってくれんかね」

「黙ってなさい、せっかく感傷的に盛りあがってるのに」キャロルスンが叱りつける。

「なにもかも、うまくいくわ」ホフマンはふたたびラニアーを抱きしめ、たがいのフェイスプレートごしに見つめあいながら、いった。

「さあ、いこう」ラニアーがいった。三人は、V／STOLの近くまで伸びだしているポールに命綱をかけ、ひとりずつ足場を蹴って、ハッチにはいっていった。エアロックにはいれるのは、いちどにふたりまでだ。ラニアーはふたりを先にいかせ、自分は最後にエアロックにはいった。背後でハッチが閉まり、空気が満たされると、彼は宇宙服をぬぎ、折りたたんで、エアロックの操作盤の下のコンパートメントに押しこんだ。

乗員は四人だけなので、機内は広々として見えた。キャビンの前部は、科学機器の箱で占められている。体を固定する前に、キャロルスンとファーリーは機器のチェックにかかった。ラニアーはコックピットにいって、ハイネマンのとなりにすわった。

「燃料および酸素ケーブル、すべて異常なし」計器を見ながら、ハイネマンが報告する。「チューブライダーももうチェックずみ、万事異常なしだ」

期待するように、ラニアーを見やった。

「では、出発だ」とラニアー。

ハイネマンはチューブライダーの制御装置を収めたパイロンをせりださせ、目の前で固定すると、「しっかりつかまっててくれ」とラニアーにいい、今度はインターカムに向かって、「おふたりさん、目の前にあるシートのポーチに、汚物袋がはいってる。覚悟しといてくれよ」といった。

それから、ハイネマンはクランプの作動スイッチを押した。ゆっくりと、なめらかに、チューブライダーは特異線の細い銀色のパイプにそってすべりだした。「もう少し加速するぞ」とハイネマン。ラニアーは、体がシートに押しつけられるのを感じた。「また少し加速だ」

彼らの体はいっそう重くなり、背中がぐっとシートに押しつけられた。だしぬけに、部屋が横転した。「最後のひと押し」ハイネマンがいったとたん、彼らの体には、地球にいるときの一・五倍の重さがかかった。「だれかがバスルームにいきたくなったときに備えて、通路に縄梯子をたらしてやってもいいぞ」ラニアーに向かって、にやりと笑い、「この状態じゃ、トイレはお勧めできかねる。居住性のいい設計をするだけのデータがなくてな。だれかがほんとにがまんできなくなったら、クランプをはなしてやるから」

「あてにしてるわ」キャビンから、キャロルスンがいった。

ラニアーは〈通路〉がゆっくりと動いていく、壮大な光景を眺めていた。風防から見ると、〈通路〉の床は、その中央を貫くプラズマチューブの真珠色の輝きに、はるか彼方で合流しているように見えた。もしかすると、これはどこまでも無限につづいているのかもしれない。

「究極の脱出ってわけかい？」心を見すかしたかのように、ハイネマンがいった。「なんだか、若がえったような気持ちになってきたぞ」

バベル－17
S・R・ディレイニー
岡部宏之訳
〈ネビュラ賞受賞〉謎の言語"バベル－17"の解読に挑む美貌の詩人の活躍を華麗に描く

ノヴァ
S・R・ディレイニー
伊藤典夫訳
無限の富を約束する資源イリュリオンを求めて、復讐に憑かれた男は宇宙に飛び立った！

愛はさだめ、さだめは死
J・ティプトリーJr.
伊藤・浅倉訳
〈ヒューゴー賞／ネビュラ賞受賞〉「接続された女」等、天才作家の傑作中短篇を結集！

たったひとつの冴えたやりかた
J・ティプトリーJr.
浅倉久志訳
念願の宇宙船を手に入れ、あこがれの宇宙へ飛び出した元気少女の愛と勇気と友情の物語

ノーストリリア
C・スミス
浅倉久志訳
〈人類補完機構〉銀河で巨満の富を誇る惑星ノーストリリアの少年が地球を買い取った！

鼠と竜のゲーム
C・スミス
伊藤・浅倉訳
〈人類補完機構〉SF界きっての詩人が壮大な未来史を背景に綴りあげた珠玉の作品集！

九百人のお祖母さん
R・A・ラファティ
浅倉久志訳
そもそもの始まりを知る種族の秘密とは？ホラ吹きおじさんが語る奇想天外マッドSF

地球の長い午後
B・W・オールディス
伊藤典夫訳
〈ヒューゴー賞受賞〉永遠に片面を太陽に向ける地球を英SFの巨匠が想像力豊かに描く

夜の大海の中で　G・ベンフォード　山高昭訳
一九九七年、突如軌道を変えた小惑星イカルスの異変を調査に赴いたナイジェルだったが

星々の海をこえて　G・ベンフォード　山高昭訳
宇宙からの謎の通信の発信源めざして亜光速で飛びつづけるランサー号を待つ驚異とは？

アレフの彼方　G・ベンフォード　山高昭訳
木星の衛星ガニメデに建設された植民地に現われる神秘の存在アレフ。迫真のハードSF

彗星の核へ（上・下）　ベンフォード&ブリン　山高昭訳
ハレー彗星着陸に成功した調査隊は、地下に研究施設を建造して、調査を開始したが……

サンダイバー　D・ブリン　酒井昭伸訳
燃えさかる太陽の中に知的生物が？　人類・異星人合同の探険隊が太陽表面で見たものは

スタータイド・ライジング（上・下）　D・ブリン　酒井昭伸訳
海洋惑星キスラップにからくも逃れた人類の宇宙船……だが敵対する異星人の魔手が迫る

プラクティス・エフェクト　D・ブリン　友枝康子訳
ジーヴァトロン装置が故障して、奇妙な異世界に置き去りにされたデニスの運命やいかに

ポストマン　D・ブリン　大西憲訳
核戦争で荒廃したアメリカを再建するため、ゴードンは立ち上がった！　新鋭の傑作長篇

ニューロマンサー　W・ギブスン　黒丸尚訳
ハイテクと汚濁の都千葉シティでケイスがもちかけられた仕事とは？　新感覚SFの傑作

カウント・ゼロ　W・ギブスン　黒丸尚訳
新米ハッカーのボビイが電脳空間で体験した驚くべき事件とは!?　ファン待望の第二長篇

クローム襲撃　W・ギブスン　浅倉久志・他訳
データの砦を切り崩し、大金を奪うスーパーハッカーの活躍！　傑作中短篇を一堂に結集

ブラッド・ミュージック　G・ベア　小川隆訳
知能をもつ生体素子の誕生は、人類に何をもたらすのか？　80年代版『幼年期の終り』！

永劫（上・下）　G・ベア　酒井昭伸訳
地球上空に忽然と現れた小惑星内部に、無限に続く超空間回廊が発見された！　SF大作

スキズマトリックス　B・スターリング　小川隆訳
〈生体工作者〉と〈機械主義者〉の相剋を背景に、人類の超進化を描破する俊英の大作！

ミラーシェード　B・スターリング編　小川隆・他訳
現代SFを揺るがすサイバーパンク運動。その全貌を紹介する最先端SFアンソロジー！

緑の瞳　L・シェパード　友枝康子訳
死から蘇った男は、生前とは別の人格になっていた！　異能作家が描く傑作SFゴシック

プレイヤー・ピアノ　K・ヴォネガット・Jr　浅倉久志訳
すべての生産手段が自動化された世界を舞台に、現代文明の行方をつづった傑作処女長篇

タイタンの妖女　K・ヴォネガット・Jr　浅倉久志訳
富を失い、記憶を奪われ、太陽系を流浪する破目になったコンスタントの運命は……!?

スローターハウス5　K・ヴォネガット・Jr　伊藤典夫訳
主人公ビリーが経験する、けいれん的時間旅行を軸に、明らかにされる歴史のアイロニー

猫のゆりかご　K・ヴォネガット・Jr　伊藤典夫訳
シニカルなユーモアにみちた文章で描かれる奇妙な登場人物たちが綾なす世界の終末劇。

ローズウォーターさん、あなたに神のお恵みを　K・ヴォネガット・Jr　浅倉久志訳
隣人愛にとり憑かれた一人の大富豪があなたに贈る、暖かくもほろ苦い愛のメッセージ！

母なる夜　K・ヴォネガット・Jr　飛田茂雄訳
鬼才が自伝の名を借りて描く第二次大戦中ヒトラーを擁護した一人の知識人の内なる肖像

スラップスティック　K・ヴォネガット　浅倉久志訳
マンハッタンの廃墟で史上最後の大統領が書きつづる、人間たちのドタバタ喜劇の顛末。

ジェイルバード　K・ヴォネガット　浅倉久志訳
ウォーターゲート事件で囚人となったスターバックが回想する、愛と怒りの八十年の物語

ミクロの決死圏　I・アシモフ　高橋泰邦訳
超空間投影法によって縮小され、人体に潜入した医療部隊。彼らは無事帰還できるのか?!

宇宙気流　I・アシモフ　平井イサク訳
高価な資源を産出する惑星フロリナが消滅する?!　全銀河はこの予言に震憾するが……。

永遠の終り　I・アシモフ　深町眞理子訳
美女ノイエスとの出会いが、過去を矯正する資格をもつ〈永遠人〉の運命を大きく変えた

鋼鉄都市　I・アシモフ　福島正実訳
宇宙人惨殺事件の謎に果敢に挑むベイリと、ロボット刑事オリヴォーの名推理を描く傑作

はだかの太陽　I・アシモフ　冬川亘訳
ロボットに管理される惑星で殺人?　『鋼鉄都市』のコンビの推理が冴えるSFミステリ

ファウンデーション　I・アシモフ　岡部宏之訳
〈銀河帝国興亡史①〉天才科学者ハリ・セルダンが予見した第一銀河帝国の命運とは?!

ファウンデーション対帝国　I・アシモフ　岡部宏之訳
〈銀河帝国興亡史②〉セルダンが設立したファウンデーションに怖るべき敵が出現した!

第二ファウンデーション　I・アシモフ　岡部宏之訳
〈銀河帝国興亡史③〉銀河帝国樹立の野望に燃えるミュールは、目標達成に邁進するが?!

ハヤカワ文庫SF

銀河市民 R・A・ハインライン 野田昌宏訳

身許不明の奴隷少年ソービーを待ち受けていたものは大銀河文明の陰に潜む陰謀だった！

メトセラの子ら R・A・ハインライン 矢野 徹訳

不死の遺伝子を持つ〝長命族〟の存在が普通人に知られた時、妬みと憎悪が世界を覆った

月は無慈悲な夜の女王 R・A・ハインライン 矢野 徹訳

二〇七六年——流刑地として地球に搾取されてきた月世界の住民が独立戦争を開始した！

人形つかい R・A・ハインライン 福島正実訳

アイオワに着陸した未確認飛行物体には人間を自由に操るナメクジ状生物が潜んでいた。

宇宙の戦士 R・A・ハインライン 矢野 徹訳

敵惑星の地表に次々と降下する機動戦士たち——彼らの活躍に地球の運命がかかっている

悪徳なんかこわくない（上・下） R・A・ハインライン 矢野 徹訳

死期の迫った大富豪が脳移植の結果手に入れた肉体は、なんと若く美しい女性の体だった

宇宙の孤児 R・A・ハインライン 矢野 徹訳

巨大な〈船〉を世界そのものと信じる住民達——だが一人の青年がそれに疑問を呈した！

栄光の道 R・A・ハインライン 矢野 徹訳

新聞広告に応募したオスカー・ゴードンは、右手に剣、左手に美女を伴い冒険の旅へ……

雄大なる宇宙絵巻《デューン・シリーズ》

デューン 砂の惑星 1
F・ハーバート
矢野 徹訳
皇帝の勅命を受け、砂の惑星アラキスに乗りこんだアトレイデ公爵家を待つものは……?

デューン 砂の惑星 2
F・ハーバート
矢野 徹訳
公爵レトは宿敵ハルコンネン男爵の手に落ち息子ポウルは母とかろうじて砂漠に逃れる!

デューン 砂の惑星 3
F・ハーバート
矢野 徹訳
砂漠の民、フレーメンの中に身を隠そうとするポウルとジェシカは砂漠の奥深くへと進む

デューン 砂の惑星 4
F・ハーバート
矢野 徹訳
フレーメンの指導者となったポウルは、ハルコンネンへ、皇帝へと反撃を開始した……!

デューン 砂漠の救世主
F・ハーバート
矢野 徹訳
ポウルが皇帝となって十二年——いま、旧勢力が糾合して皇帝への陰謀を企て始めていた

デューン 砂丘の子供たち 1
F・ハーバート
矢野 徹訳
ポウルが砂漠に消えて十年、残された双子の遺児をめぐってコリノ家の暗躍が始まる……

デューン 砂丘の子供たち 2
F・ハーバート
矢野 徹訳
かつてポウルにより皇位を追われたコリノ家は、双子の遺児を暗殺する機会を窺っていた

ハヤカワ文庫SF

デューン 砂丘の子供たち 3
F・ハーバート 矢野 徹訳
多量のメランジを注射されたレト・アトレイデは、全人類救済の道を見いだすのだが……

デューン 砂漠の神皇帝 1
F・ハーバート 矢野 徹訳
三千五百年にわたって帝国を支配してきた神皇帝レト二世に、今、反乱の火の手があがる

デューン 砂漠の神皇帝 2
F・ハーバート 矢野 徹訳
予定どおり行なわれた十年祭祝典だったが、祭りの蔭で、陰謀がその全貌を現わしてゆく

デューン 砂漠の神皇帝 3
F・ハーバート 矢野 徹訳
神皇帝とイックス大使フウイ・ノレエとの婚約は、帝国全土に驚愕の波を走らせた……！

デューン 砂漠の異端者 1
F・ハーバート 矢野 徹訳
神皇帝崩御後千五百年、恒星間帝国は大離散と大飢饉の時代を過ぎ、収斂の途上にあった

デューン 砂漠の異端者 2
F・ハーバート 矢野 徹訳
帝国の覇権を得るべく、ベネ・ゲセリット、ベネ・トライラックスなどの勢力がぶつかる

デューン 砂漠の異端者 3
F・ハーバート 矢野 徹訳
二つの惑星を舞台に、千五百年の時を越え、神皇帝の壮大な意志がついに明かされる!?

デューン 砂丘の大聖堂 1
F・ハーバート 矢野 徹訳
大離散からの帰還者〝誇りある女たち〟に、次々と惑星を奪われるベネ・ゲセリット……

訳者略歴　昭和31年生，昭和55年早稲田大学政治経済学部卒，英米文学翻訳家　主訳書「プロテウスの啓示」シェフィールド「禅銃」ベイリー「スタータイド・ライジング」「サンダイバー」ブリン（以上早川書房刊）他多数

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
Jr=Junior
FT=Fantasy
YR=Young Romance
GB=Game Book

永　劫
〔上〕

〈SF726〉

一九八七年七月三十一日　発行
一九九〇年四月　三十　日　七刷

（定価はカバーに表示してあります）

著　者　グレッグ・ベア
訳　者　酒井昭伸
発行者　早川　浩
発行所　株式会社　早川書房
郵便番号　一〇一
東京都千代田区神田多町二ノ二
電話東京(二五二)三一一一(大代表)
振替口座番号　東京六‐四七七九九

印刷・信毎書籍印刷株式会社　製本・大口製本印刷株式会社
Printed and bound in Japan
ISBN4-15-010726-2 C0197

SF
726

永

劫

上

グレッグ・ベア

SF
へ
2
2

ハヤカワ文庫
定価
560

地球上空に忽然と謎の小惑星が出現した。直径100キロ、長さ300キロにもおよぶこの物体は〈ストーン〉と名づけられ、アメリカを中心とする調査隊が派遣された。調査隊の報告は驚くべきものだった——〈ストーン〉は巨大な宇宙船であり、しかも内部に保存されていた資料から見て、〝未来の地球人〟の手になることが明らかになったのだ！　しかもその資料には、これから起こる熱核戦争の結果までもが詳細にしるされているという。だが、〈ストーン〉が秘める謎は、それだけにとどまらなかった……『ブラッド・ミュージック』で話題の著者が壮大なアイデアで描く力作ＳＦ巨篇

ISBN4-15-010726-2 C0197 P560E 定価560円
(本体544円)

グレッグ・ベアの作品

—既刊—

ブラッド・ミュージック
永劫